THE CENTRAL REVIEW

中央公論

6-1917

六月號

第三十二年第六號　第三百四十四號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



バーミンガム大學總長 ロッヂ博士著
高橋五郎先生譯

新刊

死後の生存

バーミンガム大學總長ロッヂ博士が無線電信可能の原理を發見せる【其後數年にして伊多利マルコム氏の發明あり】最初の學者なることは、科學界周知の事實なるが、又**心靈學者**として現今世界を通じての**第一人者**たる事も萬人の知る所也。博士は科學界の泰斗にして兼て哲學宗教の造詣深く、心靈に關する**其最新の學說は奇蹟の復興**を科學的に立證せるものと稱せらる。本書は博士の代表的名著にして、其識見遙かに尋常科學者流の見地を拔くは勿論、洵に**新時代の豫言者**たる觀あり。玆に高橋先生の忠實明快なる全譯成る。今や**死後の生存**即ち肉體の死後**個體靈魂の生存**は明確に立證せられたり。尙**附錄**として有名なるワルレス博士の「**靈怪實在論**」を添ふ。新人の一讀を望む。

四六判總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百拾餘頁
正價壹圓五十錢
郵稅十二錢

五版出來

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

四六判總洋布製
全一冊
正價壹圓貳拾錢
郵稅十錢

東京本郷西片町 **玄黄社** 電話下谷一三九番 振替東京七九五五番

赤木桁平氏新著

評傳 夏目漱石

―寫眞挿畫コロタイプ版八葉―

布表紙特製
大版三百八十頁
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

明治大正の文壇に高照した巨星夏目漱石先生の、生涯、人物、思想、作品等の各方面に亘つて、詳密なる記述と論評とをなせるもの、即ち此の書である。漱石先生の偉大はこゝに説くを須ゐない。先生を閑却して、明治大正の文壇を語る可からざるは、また今更云ふまでも無きことである。而も、藝術家として偉大なる才能の人であつた先生は、人間としてまた稀世の高士であつた。先生の藝術を解せざるものと雖も、先生の人物からは敎へらるゝ事頗る多からう。著者は評壇の新鋭を以て鳴るの士、本年一月以來、門を閉ぢ客を謝して此の書の記述に沒頭し、實に慘澹の苦心を重ねて、こゝに漸く公刊するの運に至つた。近時最も光彩ある人物論傳として、敢へてあらゆる方面の熱讀を勸める。

第六版出來

夏目漱石傑作選集 色鳥

製函入美本
價壹圓參拾錢
送料八錢

曾て如何なる集にも収められざる『倫敦消息』及び『我輩は猫』等より著者十數年間の全著作に亘り、其の代表的傑作を選び、短きは總てを採り、長きは要所切所とすべき部分を抜きて其の前後を解說し之を歷史的に排列せるもの。一巻以て漱石先生の全面容を知る可き也。

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番
新潮社
電話番町八〇九番
電話番町八九九番

代表的 名作選集

第二十五編

小川未明氏作

物言はぬ顔

夙に新浪漫主義の旗幟を飜して、文壇の新機運に魁し、その白熱の主觀と、その强烈の色彩とを以て、文壇に無二の作風をなせる未明氏の幾十百篇の作中より、最も代表的なるものを求めて、「物言はぬ顔」及び附錄として添へた「紫のダリヤ」の二篇を得た。此の二篇は、暗きに戰く神經と、涯無く翔る憧憬との、作者の作風の全面目を、最も鮮かに露呈せるものである。新人競ひ起つて、文壇まさに一轉機を劃せんとする時にあつても、その閲歷の古さを以ての故に毫もその本眞獨自の新味を失はざる、生れながらの新人、永久の新人の姿は、本書に於いて明かに見る事が出來るであらう。

羽二重表紙 ▼一册三十五錢
特製極美本 ▽郵送料四錢

第一編 牛肉と馬鈴薯（二十版） 國木田獨歩
第二編 坊っちやん（廿七版） 夏目漱石
第三編 蒲團（廿一版） 田山花袋
第四編 透谷選集（第九版） 北村透谷
第五・第六編 春 全二册（十四版） 島崎藤村
第七編 わが袖の記 たけくらべ（十六版） 高山樗牛 樋口一葉
第八編 爛れ（十一版） 德田秋聲
第九編 平凡（十三版） 二葉亭四迷
第十編 高野聖 第十版 泉鏡花
十一編 何處へ（第九版） 正宗白鳥
十二編 今戸心中（第八版） 廣津柳浪
十三編 耽溺（第七版） 岩野泡鳴
十四編 明治詩歌選（十一版） 詩壇六家
十五編 戀ざめ（第十版） 小栗風葉
十六編 別れた妻（第十版） 近松秋江
十七編 はつ姿（第六版） 小杉天外
十八編 お艶殺し（第八版） 谷崎潤一郎
十九編 俳諧師（第五版） 高濱虚子
二十・廿一編 煤煙 全二册（第六版） 森田草平
廿二編 花枕（第五版） 正岡子規
廿三編 その妹（第三版） 武者小路實篤
廿四編 旅役者（第四版） 長田幹彦

東京牛込矢來町中の丸
振替（東京）一七四二
新潮社
電話番町八〇九番
電話番町八九九番

快樂の母 成功の父「力の素」

△田中博士の名著△無代で進呈す▽

●能く讀んで御覽なさい—ソーで有つたかと初ゆて驚く自分の病●

▼ドナタも能く考へて御覽なさい

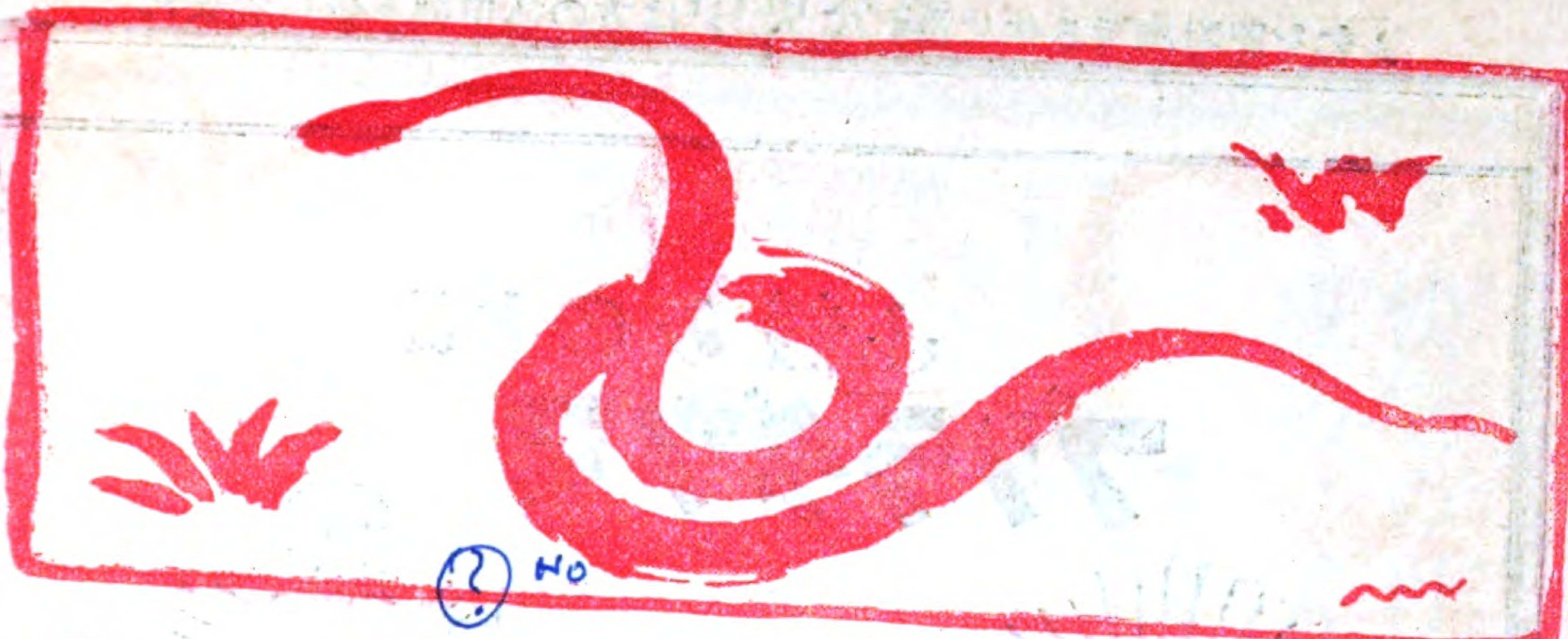
アナタ方は自分では至極健全だと思つて居られ乍ら大變な流行病に罹されて居られる方が非常に多い事實を御存じでしやらか。若し此病が肺とか、コレラとか云ふ樣に徵候の明らかな物ならば醫者で無くても誰でもすぐ分かりますが、此流行病たるや專門家でさへも時とすると氣が付かぬ事があります。夫故尙恐ろしいのであります。而も氣の付かぬ樣にアナタ方の健康を冒して往く——それも肉體よりは精神を冒す、目に見えぬ恐ろしい敵とは此病の事です。繰返してドナタも自らよく考へて御覽なさい、斯う云ふ感じはしませんか——簡易の仕事に疲易くて疲勞が容易に回復しない、物事に倦易い、失念する事多く、字を認めるに誤字多し。注意力を失ひ、決斷力衰へ。頭重く、痛み、時々痺る〻事あり。頭腦透明ならず、眩暈、耳鳴を惹起し、視力充分ならざる事あり。夜寢られずトロ〳〵とすれば惡夢に襲はる。食欲は減じ、欠伸が頻りに出て、手や瞼に震へを覺える(田中博士治療書の一節)——能く考へて斯う云ふ感じのする方は一刻も猶豫すべからず。是恐るべき腦神經衰弱に罹されてゐるのです。

▼更に悲しむ可き生殖器の障害と衰弱

が如何に不自然不愉快であるか!! 然るに多くの人は、早漏、陰萎、快味不充分、不感、不能に罹され乍ら天性の體質であらう位に思つて不自然不快樂で滿足して居られる！　僞に人生の成功と快樂とを充分に知る事が出來無いのは悲慘の極みです——左れば少しでも斯う云ふ感じや疑のある方は最早一刻も猶豫無く治療して仕まはねばなりません。捨て〻置たら遂も男女一生の幸福は得られぬ。と云つて什うすれば安心して秘密に治療が出來ませうか。問題は是です。

▼有名な前東京帝大教授醫學博士田中先生の最新治療法を御讀みなさい。何人も本書一讀必らず無限の光を得て喜ばれます。既に幾百千の人々が全治を喜んで居られます。而も私は博士の此大福音を人助けの爲めとするためハガキ一本投じて御申込みの方には直ちに無代で進呈致します。既に全國の信用ある新聞雜誌から湧くが如き大賞讃を受けて居る本治療法は決して世上有觸れたる誇大的廣告に非ず、速に申込みて一冊を得、永く幸福の基を得給へ。

東京芝區田村町百番地愛宕下電車際
電話特長一六一四番
橋本德次郎



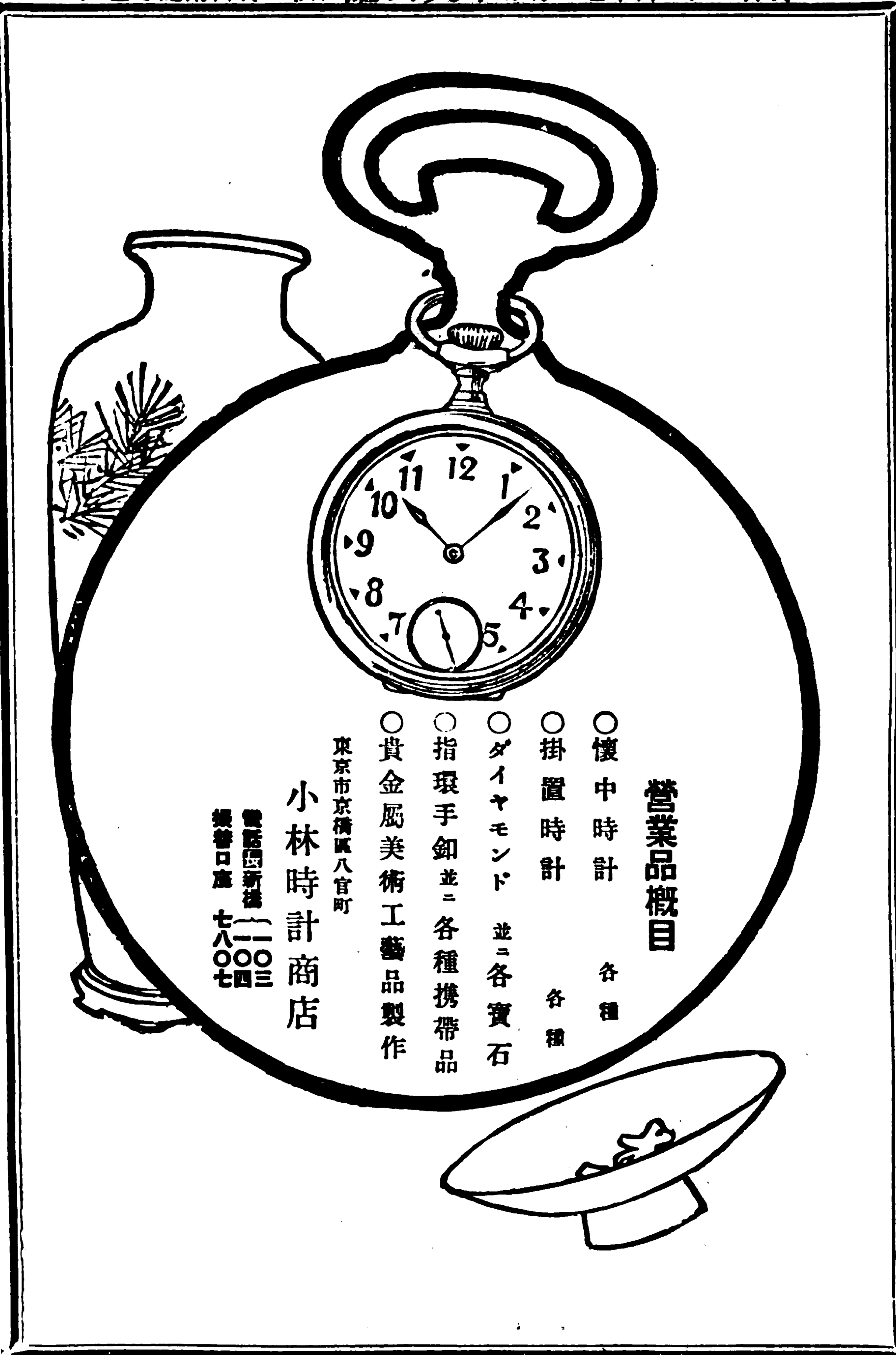
中央公論第卅二年六月號目次

▼公論

▼説苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



PETER PAUL RUBENS

PORTRAIT OF ISABELLA BRANT.



アメリカ式洗濯可能ネクタイ

染色不變洗濯保證

弊店は卒先してアメリカ式洗濯可能ネクタイを製造發賣しました今から四年前でございますアメリカ式洗濯可能ネクタイといふは其時分からの評判で其後毎年怠たらず新らしい縞柄を織出し紳士方の御嗜考に適するやう特に其染色に注意し絶對に褪色せぬ最高染料を用ひ製造致します、でアメリカ式洗濯可能ネクタイの名は今日では紳士社會に聞へてをります

本年も亦斬新なるリボン式筒織式の外に一九一七年の新製品として是れまで洗濯不能でございました織生地類にも研究の結果洗濯可能として高雅優秀なる逸品を賣出す事を得年來の宿望を達した次第でございますこれで夏季用として發賣致します赤帽印製品は全部アメリカ式洗濯可能ネクタイと呼事が出來我ネクタイ界の誇りとする處でございます

登錄商標
BEST MADE
RED HAT
WEAR GUARANTEED

赤帽印ネクタイ
赤帽印飾ボタン
赤帽式スカーフ
ショールマフラー
製造發賣元

南文藏商業部

本店 東京日本橋區通鹽町一五
電話浪花二一〇四番振替口座東京九七四三番

支店 大阪市東區安土町四丁目三七
電話本局九三七番振替口座大阪一九一九番

中央公論



六月號
第卅二年第六號
第三百四十四號

臨時議會を前にして

小山東助

一

臨時議會を前にして、政界極めて安閑たり、今は休養瞑想の時、又準備計劃の時。政界の領袖は必ずしも安閑たるを得ず、或は寧ろ苦心作戰しつゝあらんも知る可からず。只吾等將來を夢むる者に在りては、擅に耽思し、恣に横議する、亦不可無きのみ。

臨時議會を想望して、何人も直ちに寺内内閣不信任案の提出せらる可きや否やを問はんとす。第三十八議會に於ける國民黨の政府不信任案提出は、憲政會打破の魂膽に出づと稱せらる。總選擧の結果は、

百九十八名の多數を擁せる憲政會をして、百二十三名の少數黨たらしめたり、國民黨首領は果して吾事成れりとして滿足したる可きか、素より吾等の與り知らざる所、假令如是の隱れたる魂膽を藏したりとしても、天下の公黨、而かも閥族打破を以て殆んど唯一の標幟と爲し來りし國民黨は、今に至りて不信任案再提出の手續を盡す事なしに、政策是非の態度に出でんとは論理上思惟し得可きにあらず、況んや憲政會に於てをや。總裁加藤子の胸底は、吾等の模索する限りにあらざれど、加藤子は既に一たび打算を排斥し、主義の前に殉死するの覺悟を抱いて、寺內內閣と衝突したり。臨時議會に對する國民黨の作戰如何に拘らず、憲政會が進んで不信任案提出のイニシエーチブを取るは既定の事實なるべし。

世間或は論じて曰く、過般の總選擧は寺內內閣に對する信任不信任を以て中心問題とせり、而して政府黨たる政友會既に大捷を獲たり、天下の輿論は自ら明了せりと謂ふべし、今更不信任案を繰り返すが如きは輿論を尊重する所以にあらず、徒らに黨爭を醸すものとして寧政黨の信用を害し、良民の厭忌を招かんのみと。憲政會國民黨の中にすら往々此種の異說ありと傳ふ、吾等の意外とする所なり。更に又或は論じて曰く、寺內內閣は既に超然主義を棄てゝ、政友會と協力し基礎を衆議院に得たり、復た何の非立憲か之あらんやと。更に又或は論じて曰く、不信任案提出の結果は火を睹るよりも明けし、政府黨の勝利は必ず三四十票の上に出でん、是れ偶々不信任案の名を以て故らに政府信任案を提出すると同じ、迂愚の極みならずやと。而かも吾等は聊か見解を異にし、不信任案の提出は斷じて理義の當然と信ず。

寺內內閣不信任案は、前議會に於て啻に採決せられざる而已ならず、討議をすらも盡すに及ばずして政府の蹂躙する所となれり。而して不信任案提出の理由は、今猶ほ昨の如く、加ふる所多きも減ずる所

あるを見ず、即ち不信任案は手續の上に於ては全く新に提出せらる可き者なれども、其精神に於ては前議會より今議會への繼續的意義を有する者なり。新選議員を以て滿さるゝ臨時議會は、此繼續的大問題を正式に始末して、國民の耳目を新たにするこそ、當然の且つ最初の義務と認めざる可からず。蓋し正式の討議採決を經ざる限り、寺内内閣、政友會及び無所屬組の眞相は猶ほ不明に屬すと言ふべく、之を明白にせざれば、政爭の意義も、政界の分野も、雲烟模糊の間に埋沒し了る可ければ也。若し寺内内閣の秉公持平主義を信ずれば、そは舊態依然たる超然内閣なりと爲さゞる可からず。而かも寺内内閣の所爲を見れば、政友會と苟合して隱に内通する所あるが如し。寺内内閣の標榜にして眞實ならば、政友會との提携は虚僞に外ならざる乎、政友會との提携にして眞實ならば、寺内内閣の標榜は虚僞に外ならざる乎、寺内内閣の實相正體は、今日猶ほ一個の疑問にして、殆んど是れ狐狸の幻術に類す。臨時議會は先づ此幻術を曝露すべく、結果の望ましきと否とに拘らず、須らく總選擧の中心問題をして其歸趨を明かならしめよ、是れ不信任案提出の止む可からざる根本理由なり。

或は政友會の捷利に照して、天下の輿論は明了せりと云ふ者あるも、政友會の捷利が若し政府の選擧干渉に原因すとせば、是れ却つて寺内内閣不信任の一大新理由を加へたる者と認むべく、憲政會若くは國民黨の立場として、政友會を直ちに輿論の代表者とは認め得可からず、不信任案提出を以て輿論を尊重する所以にあらずと論ずるが如きは、素より爲めにする者の立言のみ。選擧干渉の摘發を以て、敗者の泣言なりと冷語する者あれど、個々の場合は知らず、大局より觀て、干渉の非違は大に之を匡さゞる可からず、是れ單に一黨一派の利害問題に止らずして、政治道德上の重大問題なれば也、斷じて冷眼

冷視し去る可きにあらず。況んや後藤内相の訓示を始めとして、選擧干渉の事實は到底掩ふ可からざるに於てをや。且つ今日の儘に在りては、政友會夫自身が果して仝黨を提げて政府黨たるを甘んずる者なりや否や、是亦一個重大の疑問たるを失はず。前議會に於て若し不信任案採決の一幕に逢着せば、政友會中には必ず棄權し若くは賛票を投ずる若干議員ありしならんとは一般の承認したる所なり。政友會は黨議として所謂政策是非主義に一致したるやの觀あるも、五六の議員が前議會に於てすら自由行動を揚言したるを見れば、今議會に於て必ずしも默せる牛羊の如くなるを欲せざる者あるべし。少くとも不信任案に對する政友會一部の態度は逆睹し難き者無しと言ふ可からず。殊に政友會は必ずしも飽くまで寺内内閣の忠僕たるを期する者とは覺えず、寧ろ威力を政府に示して、政權獲得の機會を速かに馴致せんとするの政略も、多少は加味せらるゝに至らん。人或は總選擧に於て結ばれたる惡因緣の故を以て政友會員の能く爲す無きを豫想するも、是れ餘りに黨人を蔑視するの嫌無しとせんや。由來政府政黨地位を異にすれば、同志の間と雖意思の疏通を缺く者多しとす、政友會員の漸く政府に慊焉たるの情は遠からずして簇生するならんも、必ずしも他日と言はず、選擧其者の利害に依りて、政府當路の態度を喜ばざりし者、政友會中其人無しと言ふ可からず、不信任案に對して政友會が果して一絲亂れざるの態度を採るや否や、猶ほ多少疑問の餘地ある也。有體に言へば吾等は此點に於て不信任案の成功に關し、何等の期待をも政友會に對して有する者にあらざれど、只此の如き罅隙の多少存する者あるを暫く指摘し置くのみ。而かも原政友會總裁は、過般の總選擧に當り、專ら憲政會打破を當面の目的と爲し、超然内閣是非論は努めて之を廻避す可く黨員仝體に警告したりと自白せり。果して然らば是れ總選擧の中心問題

に關する選擧民の判斷を瞞著したるの嫌無しと言ふ可からず、從つて政友會の捷利が政府干渉の結果なると否とに拘らず、論理上之をどて超然内閣是認論乃至看過論の勝利とは見做し難き者あらんとす。即ち今回の總選擧は政友會の勝利と認め得可きも、未だ必ずしも政府の勝利とは斷じ難き理由あつて存す。是れ不信任案再提出の論據を一層强うせしむる者と言つて可也。更に彼の不信任案の提出は、却つて政府に對する信任投票を與ふるに過ぎずと言ふが如きは、殆んど論議の價値ある可しとも覺えず、若し此種の論理にして正當ならば、より確かなる論理に依り、政府不信任案を提出せざる限り、憲政會及國民黨は政府を信任する者と認めらるべし。理義を徹底せんが爲めに、戰は既に宣せられたる也、最早勝敗の打算を試むる迄も無く、只理義の徹底を期すれば即ち足る、憲政會及國民黨は如何なる魂膽情僞あるにせよ、不信任案再提出の一事に至つては、當然同伴せざる可からざる、若くは孤軍單騎を以てしも突進せざる可からざる當然的運命を有す。

二

只問題は不信任案の内容如何に在り。臨時議會に現はるべき不信任案は、第三十八議會の夫れを繰り返すに過ぎざる乎。或は何等かの新理由、少くとも選擧干渉の彈劾をも包含せしむ可きか。國民黨が選擧干渉の事實を承認しつゝあるか、或は寧ろ之を冷眼視しつゝあるかは、吾等の未だ與り聞かざる所なるも、之を包含せしむると否とに依り、憲政會及國民黨の連鎖に多少の變化を與へずとも言ふ可からず。されど憲政會及國民黨の最高幹部にして器度廓濶大局を達觀せんには、素より附加理由の如何は問題と爲すにも足らざるなり。先づ總選擧の中心問題たりし前議會の提案に關して、議會の採決を求むるを最

も穩當の順序とすべし。而して後ち選擧干涉の一新事實を別に大に糺彈する、寧ろ作戰の宜しきに適へりと謂ふべし。蓋し前議會に於ける不信任案は寺內內閣の非立憲と無能力との二重理由を論據とし、國民黨の首領は其演說に於て專ら「無能力」を高調力說したるも、吾等の理解に依れば、問題の中心は寧ろ此に在らずして彼に在り、卽ち寺內內閣の「非立憲」、換言すれば內閣組織の體制其宜しきを得ざるを以て根本理由と爲す。從つて總選擧の中心問題は、寺內內閣が國民輿論の府たる帝國議會に基礎を有せずと云ふの一義に存すと信ず。內閣制に關する此大問題大疑義を明白に正式に解釋せんが爲めの不信任案也、選擧干涉問題は先づ此根本問題の解決を俟つて而して後ち新に提出するも遲しと言ふ可からず、事の輕重寧ろ斯くするを當然と爲す。而かも前議會同樣の不信任案に對して、政友會も無所屬組の多數も直ちに反對する者とせば、憲政會及國民黨は餘儀無き結果として其儘默從し終る可きか。

吾等は解散を賭して爭へる今日、內閣制の問題に關して何等の結果をも痕跡をすらも殘さずして止むの悲痛を憤る者なり。政友會も超然內閣に對して主義としては反對すと言ふにあらずや、若し寺內內閣不信任案にして豫定の如く不成立に終るとせば、せめて內閣制其者に關する主義の問題丈けにても、此場合に於て解決す可きにあらずや。戰つて勝てる政友會中亦必ず之を想ふ者あるべし。勝利に醉ふも愚、敗北して拱手無爲なるも愚、共に靜かに考へ深く慮り、政黨共通の問題として、內閣組織に關し衆議院の權威を確立する所以の大道を講ず可きにあらずや。政黨政派自ら識者あるあり、果して黨爭以上に出でゝ、此懸案を解決するの新路を開拓する雅量無き歟。

三

吾等は内閣制の問題を以て、寺内内閣不信任案の根本義と言へり。此根本義に關連して、江湖の學者論客往々にして憲政會の眞意を疑ふ者ありと傳へらる。蓋し憲政會の幹部は、總選擧の當初に際し、憲政會は未だ嘗つて政黨内閣論を主張したる事無しと言明したるやの噂あるが爲めに、憲政會の首尾一貫を危ぶむ者ならむ。吾等は憲政會の幹部が果して政黨内閣論を主張したる事無しと言明せるや否やを知らず、又二三子が斯く言明したる事實ありとしても之を以て憲政會の主義主張を代表する者なりとは信ずる能はず。憲政會の名を以て公表せられたる寺内首相の訓示辯妄書中に、「吾人は必ずしも政黨員にあらずんば、内閣員たるを得ずと主張する者にあらず」との句あり、又「我邦政治の現狀に於ては内閣組織に當り貴族院の勢力を度外視することを得ず、唯之と同時に内閣組織の基礎として、國民輿論の府たる衆議院に重きを置くべく、民意の代表たる政黨に重きを置かざる可からず、又衆議院に重きを置くと言ふも何れの時何れの場合に於ても、必ず多數黨を基礎とせざる可からずと云ふことなし」とあり。學者論客の疑問は此種言句の解釋に基く者なりや或は他に根據ありや吾等は與り聽く所なきも、憲政會の眞精神は、大體上記拔萃の言句に盡きたりと謂ふを得可し。政黨内閣は政黨共通の理想たるに相違無からんも、日本の政情に在りては、政黨内閣てふ名目の往々誤解を伴ふ者無しとせず、誤解の窮る處、寺内首相の所謂大權干犯論となり兩院制度無視論となり、特に貴族院の地位を沒却し、若くは陸海軍大臣を軍人に採るの習慣を全然破壞する者と猜せらる。玆に於てか憲政會幹部の中には、所謂政黨内閣論の名目を喜ばずして、無用有害の攻擊を廻避せんとの用意を爲したる人も或は絕無を保し難けん、只その眞意知り難きにあらず、必ずしも目するに卑怯を以てし不徹底を以てす可きにあらず。

本來政治は勢なり、力なり、理想を勢力化するを以て政治家の最高本領と爲す。而して理想を勢力化するの事業は孰れの時代に於ても容易にあらざるが故に、實際政治上の標榜は、理想を顯彰し得て而して誤解の少きを善しとす可し。政黨内閣と言ふが如き吾等に取つては何等の故障も無けれど、時の政情に鑑むれば、議院政治と言ふの一層明白にして且つ穩當なるやを想はずんばあらず。最も議院政治の語すら、之を喜ばざる頑冥者流無きにあらず、議院政治といへば、議院以外より内閣員を採る可らずと理解せらるゝ者の如し、若し果して斯くの如くんば政黨内閣といひ議院政治といふ、五十步百步の差に過ぎざるも、識者は須く明辨すべし、英國の聯立内閣に見佛國の内閣制に徴すれば、如是の疑問は忽ち氷釋せん。吾等の議院政治論は簡單明瞭なり、國民的勢力の結晶たる議院をして政治の中心たらしめよ、是れ第一の要求なり、衆議院に重きを置かしめよ、是れ第二の要求なり、貴衆兩院の調攝を圓滑ならしめよ、是れ第三の要求なり。吾等が非政府黨の不信任案を論理上にも實際上にも贊同せざる能はざるは、畢竟此理想に出づ。多數國民は此一義を理解せずして、議院政治の神殿を建設の中途にして破壞し了んぬ、嗟嘆し又悲憤す、而かも吾等は更に奮つて一步をだも進むるの努力無かる可からず、選擧法改正は吾等を光明の一路に導く。

四

不信任案に尋いて、臨時議會の重大問題たる可き者は、選擧法の改正ならん。思ふに政府は自ら進んで此改正案を提出する丈けの準備も熱心も有せざるべし。而かも各政黨は果して總選擧の痛切なる敎訓と多年の宿題とを閑却し去るべきか、吾等は政黨を信ずるが故に、政黨を愛するが故に、此案の必ず政黨

側より提出せらる可きを期待す。吾等の期待が裏切らるゝや否やは、こゝ數週日間に決定せられんも、吾等は吾等の希望として主張として不信任案の提出を正當と爲すが如く、機會の許す限り選擧法改正案の提出をも亦正當と爲す者なり。而して選擧法の改正は、衆議院全體國民共通の利害問題なるが故に、先づ第一に愼重審議を要求し、第二に政黨各派の出來得る限り協同一致せん事を要求す。此二つの要求に伴ひ、吾等は選擧法改正案の臨時議會に提出せらるゝを庶幾するも、臨時議會に於て直ちに採決せらるゝを豫期せず、須らく衆議院内に議院法規定する所の繼續委員會を設け、來るべき通常議會に報告せしむるの手續を採らん事を勸告する者なり。吾等は政府に慫慂して、選擧法改正調査會の復活を求むるの餘りに迂愚且つ徒勞なるを想ふ、官僚内閣に向つて、奚んぞ民權擴張を意味する選擧法の改正を求む可けん。選擧法改正の事は衆議院自ら一致の議論を纏めて、貴族院の同意を求むるの最も有效にして且つ權威あるに若かず。此種問題に就て繼續委員會を開くは、大に衆議院の機能を發揚する所以、吾等の熱望して措かざる所なり。各派の一致は重大事項に關して困難なる事情あるも、繼續委員會は須らく最善の努力を盡して、貴族院に對する衆議院の地位を堅固ならしめざる可からず。

　選擧法改正の主要なる眼目は、(一)選擧權の擴張、(二)選擧區制度の改革、(三)選擧取締法の改善、(四)及び別表の改正に在り。其他議員定數、被選擧人資格、投票方法、補缺制度法等に就ても改正の餘地多々あれど、前記四項を以て最も重しと爲す可し。就中議論の中心は、選擧權及選擧區の問題に在り、取締法は比較的容易に政黨各派の一致點を見出し得べく、別表の改正亦歸著する所略ぼ明かなるも、選擧權及選擧區の改正に至つては、言ふ迄もなく政治上國法上の生命に關する重大問題なりとす。

五

吾等の主張は全然ラヂカルなり、ラヂカルの改革にあらざれば到底時弊を救ふに足らずと信ず。先づ選擧權の問題より開陳する所あらん。選擧權擴張の根本義は、民衆政治當然の要求に出づ、吾等は立憲政治の理想は民衆政治に外ならずと爲し、民衆政治の特質は最大多數の民衆をして國政に參與せしむるに在りと爲し、此精神に基いて選擧權を廣く民衆に分配するの最も憲政の主義に適へりと爲す。此根本より言へば、選擧權の擴張は全く主義の問題なり。而かも他の一面より見れば、選擧權の擴張は、單に最大多數の民衆をして國政に參與せしむと云ふ數量的形式的權利の問題に止らずして、自ら具體的實質的利益の問題を包含す。即ち選擧權の擴張は、(一)少數特權階級の專制を排して、民衆多數の利益を政治上に代表せしめ、(二)選擧權の獲得及其行使を通じて、多數民衆の國家社會に對する興味を深厚ならしむる是れ也。前者は政治其者の實質を民衆的ならしむる直接の効果を擧げしむるに足り、後者は間接に國民を政治的文化的に敎育するの機會を作る効果少しとせず。故に純理の眼より見れば、選擧權の擴張は、當然民衆政治の發達を助長し、且つ其根柢たる可き政治敎育を普及する所以の道にして、歐米政治史の敎訓亦大體純理の指す所と一致せずんばあらず。更に他の一面より見れば、選擧權の擴張は制限選擧に於て行はるゝ各種の弊害を匡救して、選擧の理想を實現せしむべき最も有力なる手段とも認め得べし。即ち選擧權の擴張に依りて、投票買收の如き不正行爲を不可能ならしめ、大に言論文章の威力を發揚せしむる是れ也。凡そ選擧權の擴張に伴ふ此種の利益は、選擧に關しての第一義的要件にして、此要件を滿足せんが爲めには選擧能力ある總ての國民に選擧權を附與するを以て窮竟理想と爲さゞる可か

らず。吾等は必ずしも普通選擧と言はず、蓋し普通選擧なる用語は、通例納稅資格を以て選擧權の標準とする制限選擧に對して、大體小兒、精神病者、罪人、自治團體の扶助を受けたる貧民(若くは女子)を除外する一切の成年男子に選擧權を附與するの意義に用ゐらるれども、吾人は此意義に於ける普通選擧に賛同する者にあらず。結局は普通選擧に遠からざる程度まで選擧權を擴張するに至る可けれど、吾等の論理的標準としては、選擧能力即ち政治的判斷力を有する一切の成年者に選擧權を附與すべしてふフオルミユラを取らんと欲する也。而かも歷史を離れたる論理は、一片の遊戲に墮す。吾等は現に吾等の享樂しつゝある選擧權の基礎を離れて、新に全く異れる標準を立せんとするも卓上論としては即ち可、必ずや實際に施す由なけん。吾等は現行法に制定せられたる納稅資格の基礎の上に、吾等の主張を加へざる可からず。即ち吾等の論理的標準たる政治的判斷の尺度を以て、納稅資格を如何なる程度まで引き下ぐ可きか、納稅資格以外に、如何なる資格を規定す可きかの問題を考量せざる可からず。

　本來納稅資格は、英國憲政の歷史に最も著明なる根據を有したり、英國の憲政は純理の所產にあらずして、事實の要求に基けり。納稅に關する君權の濫用に反抗して、英國の憲政は生れたりと言ふも可。英國議會の濫觴は、疑もなく國家を防衞し政費を負擔する者は、國政に對して發言の權利ありといふ一般的自覺に基けり。日本の憲政は一見英國と其淵源を同じうせざるも、根本原理は毫も異る所ある無し。欽定憲法は納稅を兵役と合せて國民の二大義務と爲し、衆議院の重大なる權利は、豫算の先議に在るを明示したり、英國史に現はれたる憲政の原理は、欽定憲法の中にも自ら顯彰せらる。國民は國費を負擔するが故に、國政に參與するの權利ありてふ原理は、日本に於ても既に明かに認識せらるゝ者と見るべ

し、何の疑議か之れあらん。而かも此原理を徹底せしめんには、一厘半錢の微と雖國費を負擔する者は、選擧權を享樂する資格ありと言ふべく、之を直接國稅拾圓に制限するは、素より明白なる理據を缺ける便宜に過ぎざる也。されど便宜は必要に依つて生ず、如何なる必要か納稅額の制限を敢てせしめたる。之に就て考へ得らるゝ理由は、(一)當初の爲政者立法者が自已權力の維持策に基き、權利の一般に分配せらるゝを忌避したること、(二)財産の低級なる民衆が果して穩健中正なる政治的判斷力を有するや否や疑問とせられたること是れ也。前者は暫く言はず、後者は當面の研究問題に屬す。

六

納稅は財産を意味し、財産は或點までは敎養を意味すとも解釋せらる。蓋し相應の財産あり餘裕ある者にして、始めて義務敎育以上の敎育を受け又與へ得べく、新聞雜誌書籍を讀み、講演に列し、社交に親み、且つ納稅者としての經驗勤勞に依りて、自ら政治的判斷力を得るの機會ありとも考へ得らる可ければ也。日本の現情に於て、斯の如き餘裕を有し敎養を有し得べき財産程度は、果して直接國稅拾圓以上と見るを相應と爲す乎。社會敎育の普及しつゝある今日、吾等は到底斯くの如く思惟する能はざる者なり。何となれば敎養は必ずしも財産と並行せず、智力は却つて中産以下に在り、政治的判斷力の納稅資格と一致せざる證據は、識者階級に於ける輿論と選擧界の實際投票とが屢〻相異る事實及び現在の有權者が金錢情實に依つて投票を左右せらるゝ事實に依つて、最も剴切に感得せらる可し。故に直接國稅拾圓といふ標準は、何等健全なる政治的判斷力を保證する者にあらず、之を低下して五圓と爲し三圓となし二圓と爲すも、必ず新しき危險を伴ふ可してふ理由ありとも覺えざるなり。結局は納稅資格の低下

に依つて生ずべき弊害のプロバビリチーと之に依つて購ひ得べき利益のパロバビリチーを比較する以外、判斷の標準存せざる可し。

然らば納税資格の低下に依つて生ずる利害は、如何にして之を比較し得べき乎。吾等は之を二面より觀察せんと欲す。一は我國衆議院議員選擧と府縣會乃至市町村會議員選擧との比較是れ也、一は歐米先進國に於ける選擧權擴張の成績是れ也。府縣會議員の選擧に當りて、衆議院議員選擧に劣らざる運動費を投ずる者無きにあらざるも、そは概ね例外にして、投票買收の事實は衆議院議員選擧の夫れよりも一層甚しと認むべき證據あるを聽かず、選擧法違反事件が兩者果して孰れが多き、今統計の徴す可き者無けれど、大正四年度の全國に亘る府縣會議員選擧の違反件數と、同年度若くは今年度衆議院議員選擧の夫れとを比較せば、思ひ半ばに過ぐる者あらん。直接國税拾圓の納税者は、決して其政治道德に於て直税三圓の納税者よりも高潔なりと言ふを得ざる也。今年は全國に亘る市町村會は議員の選擧も行はれたれば、犯罪比較の精緻なる資料はやがて吾等の眼頭に曝露せられん。納税資格の低下は、選擧法違反事件を增加せしめずして、却つて之を減少せしむ可しとは吾等の推理する所なり、蓋し選擧人多數なれば買收饗應等の不正手段も施すに由無く、運動方法は自ら常道に盡すを以て足れりとするに至る可ければ也、特に言論戰の旺盛を致すは睹易きの趨勢とす。只納税額を低下すとも、現行法に比して僅かに其幾割を增加するに過ぎずんば、決して顯著なる効果を豫期し得可からず。顯著なる効果を收めんには顯著なる改革を要す、吾等は直税拾圓の標準を五圓に低下して、僅かに四五十萬の選擧人を加へ得たりとて選擧界の氣風を一新し得可しとは信ぜず。一切の利益提供を不可能ならしむる程度まで、即ち現在の有

權者を約三倍して市町村に於ける公民總てを選擧人たらしむるに至らば、選擧界の面目必ず一新し、民衆主義の精神大に奮はん事を庶幾する者なり。

世人或は此提案を目して餘りに急進的なりと言はん、されどビスマアクが普通選擧制を獨逸帝國に布きたる達見と英斷とに比すれば、毫も驚心駭目す可きにあらず。故伊藤公すら第十二議會（明治三十二年五月）、選擧法改正案を衆議院に提出し、『我國の現行の選擧法に依りますと四千二百萬の人口の上に於て、選擧權を得て居る者が、四十四五萬人內外になつて居ります、此度提出したる議案に依る時は凡そ二百萬人に上ると思ひます』と喝破せり。當時の提案に依れば、納税資格は『地租五圓以上若くは其他の直接國税三圓以上』と規定したるが、不幸解散の爲めに案は消滅し、次で第十三議會（明治三十三年二月）に山縣內閣亦略ぼ同樣の提案を試みたり。當時直税拾五圓の標準なりし者を一躍低下して五圓以下と爲さんとし、有權者四十五六萬に止りし者忽ち二百萬以上ならしめんとす、流石伊藤山縣の猶ほ意氣老いざりしを見るべし。今日の日本帝國は當時に比して本國人口一千萬人を加へ、文化の普及到底同日の談にあらず。現在約白五十萬の有權者を三倍して四百五十萬となすも決して急激唐突を以て指彈す可きにあらざるなり。（大正六年度衆議院議員選擧有資格者百四拾二萬九千二百九十一人、市町村公民權を有する者最近統計年鑑には四百五十七萬六千二百五十九人、吾等は此程度迄選擧資格を低下せんと欲す。）伊藤山縣諸公は此種の改革を約二十年前に實行せんとして果さゞりしが、伊太利のジオリッチー內閣は一九一二年の選擧法改正に依りて、略ぼ之と同一程度の選擧權擴張を斷行せり。一九六〇年の法律に依り、伊太利の選擧權は著しく制限せられ居りしが、一九八二年の新法に依り最初の擴張は試みられ、

選擧有資格者數は六十二萬一千八百九十六人より、一躍三倍して、二百十一萬二千五百六十三人となれり。一九一二年更に改正案成りて、其結果此年度に三百三十一萬九千百四十九人の有權者なりしを、次年度に於ては約二倍半即ち八百六十七萬二千二百四十九人の有權者を見るに至れり。改正案成りて後幾何も無く總選擧行はれ、其成績に關しては批評區々なるも、目するに失敗を以てする者は極めて少數にして、思慮ある學者は多く斷論を避け、第二の試驗に證徵せんとしつゝあり、蓋し或人々の豫想したる如き弊害を伴はざりしと同時に、顯著なる選擧界の革新をも認め難かりしが故なるべし。吾等は之を以て主に伊太利の國民性及文化程度に基因すと爲す。而かも選擧人の數二倍半にも增大して、猶ほ且つ弊害の大に催進せられたる者無しとせば、此一事實夫自身を以て成功と認めざる可からず、國家擔當の精神を普及し得たる丈け夫れ丈け、伊太利の將來を光明に導く可ければ也。吾等は日本が伊太利の先蹤を追うて一大英斷を試むるの寧ろ餘りに遲れたるを憾ぜずんばあらず。日本は敎育普及の程度に於て、決して伊太利の後に瞠若たる者にあらず。(一九一六年度ウォールド・アルマナックに依れば、十歲以上の人口に於て無敎育者の百分率を見るに、伊太利三七・〇にして、日本は九・一、幾分傍證たるに足らん。ステーツマン・エーアブックに徵するも、伊太利の無敎育者率は著し。)而かも伊太利は人口百人に付二十四人の選擧人あり、日本は僅かに三人弱を有するに過ぎず、日本國民も亦無頓著極れりと謂ふべし。國民の無頓著なるに乘じて、政治家が警世の導師たるを期せざるは、更に不親切不見識極れりと言はざる可からず。

吾等は納稅資格を少くとも公民權程度まで低下するに止らず、更に敎育資格を設け、中學校師範學校

及び之と同様以上の學校卒業者にして成年に達したる者には選擧權を享有せしめんと欲す。彼等の政治的判斷力は、その教育に照し優に滿足し得可ければ也。吾等は更に納税資格の意義來歷と略ぼ同樣の理由を以て、別に兵役資格を認めんと欲す、兵役は納税と共に國民の重大義務なり、國家に對する貢献として、其勤勞は納税以下に在りと謂ふ可からず、一身一家を犧牲として國家に奉公する名譽の報償として、國政參與の特權を享くるは、適當の事態なるべし。只軍事と政治との混淆は、國家の深憂なるが故に、現役を終へ且つ豫備召集期間に在らざる兵役義務完了者に限り、此特權を享受せしむるを宜しとす。思ふに民衆の智力は漸次進歩せり、過般の選擧に於ても在鄕軍人會必ずしも寺内内閣の爪牙とはならざりしならん。吾等は兵役の動もすれば忌避せられんとする趨勢に鑑み、兵役の光榮を顯彰し、壯丁の愛國的義務心を莊嚴せんが爲めにも、兵役完了者に選擧權を附與するの失當ならざるを想ふ。且つ兵營は服從規律の一面に偏するも、兎も角も偉力ある教育機關なり、此修養鍛錬を經たる者が更に立憲國民の權利を發揚するの理解を有せば、是亦一個の教育手段と謂ふべし。吾等は斯くして大體納税資格と教育資格と兵役資格との三者を併せて採用せんと欲す。是れ異常の急進的改革なるも、主義としては恐らく辭み得可からず。

七

選擧權の擴張は、直ちに選擧區制の問題を惹起す。如何なる程度にもせよ選擧權を擴張して猶ほ且つ現行の大選擧區制を維持せば、（一）選擧運動費の膨脹を如何、（二）候補者と選擧民との相互理解を益々困難ならしむるを如何、（三）候補者若くは代議士の奔命に疲るゝ結果、選擧區に對する啓發運動乃至公

的奉仕を不徹底不充分に終らしむるを如何。（四）又等しく候補者たるも現今の如く選擧區の大小不等なるに當りては、候補者の便否利害頗る相違を來し、制度として被選擧人に不公平なるを免れず。大選擧區單記制は歐洲先進國にも類例無き惡法と稱せらるゝ現行法の下に於て、政黨の堅實なる發達は頗る困難なる事情無くんばあらず、就中黨人互に相打つの結果を最も恐る可しと爲す。大選擧區制を維持すとせば、聯記制度を採らざる可からず、或は更に一歩を進めて比例代表制度を採るも可。されど之のみを以てしては選擧權の大に擴張せられたる大選擧區の弊害を匡救する由無けん、特に選擧運動費の膨脹は、寧ろ良貨を選擧界より驅逐して、徒らに惡貨を跋扈せしむるに至るべし。選擧區縮少の止むを得ざる所以なり。さらば吾等は直ちに小選擧區制に立ち歸るべき乎、曰く否。小選擧區制は歐洲先進國の多く採用する所なれど、我が國情に適はしからざるが如し。此制度を以てしては（一）少數代表を失ふの一大缺點あり、（二）地方的小人物の跋扈を來す傾向あり、（三）情實緣故の常に勝利を獲易き嫌あり、（四）少壯人物の崛起を困難ならしむる事情あり。故に吾等は小選擧區制及大選擧區制の長所を合せて短所を避け得可き中選擧區制の採用を提唱する者なり。詳說すれば一選擧區の定員は三名以內を標準とし、之に依つて現行大選擧區を分割せんとする也。最も現行選擧法の別表は、夙に改正せらる可くして改正せられざりし者なるが故に、今は大隈內閣當時立案せられたる改正別表に基いて說明せんに、例へば東京市は定員十五名の新規定なるがそは三名定員の五選擧區に分たる可し、大阪市は定員十名の新規定なるが、之を四選擧區に分割して、其內二つは定員三名づゝ、他の二つは二名づゝたらしむるを宜しとせん。京都横濱神戶名古屋の四市は定員三名の新規定なれば之を一選擧區として可、鳥取郡部亦然り。奈良、山梨

福井、宮崎の四縣は各々定員四名なるを以て、之を二名定員の二選擧區と爲し、京都府神奈川縣其他十縣は定員五名なるを以て之を二と三との二選擧區に分ち、定員六名の諸縣亦然りとすべし。定員七、八九名の諸縣は之を三分し、十名以上のは四分し若くは五分すべし。此考案に依れば、市郡島區を併せて全國の選擧區貳百七となり、其內定員一名の市島區は七十、定員二名の府縣選擧區は四十八、定員三名の市府縣選擧區は八十九。今一選擧區の定員三名以內と限りたるは、單なる便宜にあらずして（第一）公平代表の趣旨に基き、（第二）選擧區の實況に基けり。蓋し定員三名なれば、一選擧區內に於ける多數黨及少數黨、共に其勢力に應じて代表者を選擧し得べきプロバビリチーに富み、二名の場合は一選擧區一名の制度よりもより多く少數黨に利益なる機會饒かなる可きを以て也。但し吾等は定員一名の市選擧區卽ち小選擧區をも認めざる可からず、蓋し市の獨立選擧區たる歷史的地位、及び其商工業代表的意義を尊重する限り、之を維持するは至當なるべし。

選擧取締法の改正中、吾等は特に候補者自身の戶別訪問を禁止し、運動員事務所の數を制限し、違反行爲に對しては今日以上の嚴罰を課し、選擧に關する制裁は、市町村會郡會府縣會及國會を通ずる者たらしむるの必要を認むれども、夜間の戶別訪問を禁止し、若くは違反行爲に對する部落の連帶責任を問ふが如きは、過度の嫌ありと信ず。前者は却つて爲政者の選擧干涉を誘致し易く、後者は個人の特權を無みするの恐あるを以て也。被選擧人の資格に就ても前內閣の提案以外、華族にして貴族院議員たらざる者の代議士候補者たるを承認する亦頗る妙策なるべし。同時に多額納稅議員の互選權を行使する者をして、二重に衆議院議員候補者たり若くは選擧人たらしむるの現行法は改正せざる可からず。投票方法

に關しては既に記名說の勃興を聽くも、吾等は依然として投票者の自由を擁護するの、之をして責任を明かにせしむるよりも一層必要なるを信ずるが故に、無記名制を維持せんと欲す。又投票の法式に關してはドント式比例代表選擧法の如き最も理想的考案なるも、實地に施して猶ほ頗る不便を免れず、吾等の强ひて採らざる所なり。現行補缺制度の缺陷は吾等亦之を承認す、而かも中選擧區制度にして採用せられん乎、吾等は缺員ある每に何時にても選擧を試むるの有益にして且つ合理的なるを想ふ、中選擧區に在りては、別に次點者の有効期限を設くるに及ばざる也。

思ふに臨時議會の實際問題としては、大正六年度追加豫算案あり、その主要部分たる海軍計劃案あり、更に正貨處分問題あり、減債基金問題あり、農業倉庫案あり、製鐵所促成案あり、對支金融機關、小學教育費國庫補助問題、航路補助法改正等の諸案も亦或は政黨側より提出せられん。是等の諸問題よりも一層重大なる意義と價値とを有する對支政策問題は、早晚議會討論の焦點たる可き者なれど、吾等は時機猶ほ未熟と觀ず。兎も角も會期三週日、必ずしも短きに過ぎたりとせず、總選擧後最初の議會は、多く活氣あり光彩あり變化あるを常とす、三週日を以てしては到底吞吐するに堪へざる議案の輻輳し來ると同時に、議場も頗る新奇殷賑の觀あるべし。而かも吾等は多くの議案の無難に通過すべきを豫想すると共に、必ず政府不信任案と選擧法改正案とが何等かの華實を議會に殘さん事を期待せずんばあらず。不信任案の通過は、吾等の素より豫期せざる所、通過を豫期せざる不信任案に依りて何物をか庶幾し得べき、深謀遠慮を要するは此間の機微に在り。選擧法改正案の提出は、吾等の信じて豫期する所、如何

なる黨派か必ず敢へて之を爲さん、吾等は此種の懸案の故に、深き興味と熱心とを以て來るべき臨時議會を迎ふ、又迎ふるの用意あらんと欲す。臨時議會をして意義あらしめよ、光輝あらしめよ、喧囂と紛擾との汚塵に穢れ果てしめず、眞に新選議會たるの意氣と品格と生彩とを備へしめよ、當に生れんとする議會を憧憬しつゝ、吾等は暫し沈思を樂しむ。

講和期に於ける我國經濟社會の變動と國民の用意

法學博士　堀江歸一

戰時の經濟狀態

歐洲戰爭は滿三年の久しきに亘つて、繼續せんとす。時に獨逸の講和提議を再びするの說あり、又露獨兩國の間に單獨講和の交渉を行はるゝの噂ありと雖も、何れも實現せらるゝに至らざるのみならず、却て米國の新に戰爭に參加したる爲めに、歐洲戰爭は今や世界的大戰爭と爲り、其終熄の時期の豫測す可からざるに至れり。然も獨逸に於ける物資の供給が漸を以て困難を加へ、封鎖の影響を蒙ることの大なるは、著明の事實にして、其戰爭持久の能力にも限度を示し來れるの觀なきを得ず。如何なる時に於て、戰爭の終熄するや、其時日を正確に豫言するは、吾輩の能くする所に非ずと雖も、戰爭終熄期の刻々に近づきつゝあることは、之を想像するに難からず。戰爭の終熄期に於て、將た又其以後に於て、戰爭に關係したる諸國の經濟社會は如何なる變動に接す可きや、殊に我國の經濟社會は如何なる影響を蒙る可きや、其蒙る可き影響に對して、我國民は如何なる用意を必要とするや、共に今日に於て攻究を要する問題なりとす。

歐洲戰爭の爲めに、我國の經濟社會が有利なる影響を受けたるは爭ふ可からざる事實にして、而して其有利なる影響の重なるものは、第一輸出貿易の增進、第二正貨の囘收、第三對外債務の減却幷に對外債權の增加、第四內地事業の振興等に外ならず。蓋し輸出貿易の增進は交戰諸國に於て我國の物資を軍需品として需要し、又は生產力若しくは輸出能力の減退したる諸國の物資を補充する爲めに需要するが故に生じたるものと見る可く、年來貿易上に於ける逆勢は一轉して、今や

連年巨額の輸出超過を告ぐるに至れるのみならず、歐洲諸交戰國の中立諸國の市場に對する輸出の減退に乘じて、我國商品の販路の擴張せられたるものありて、益々上記の勢を加重することゝ爲れり。斯の如く輸出超過の勢盛にして、其代金の正貨として、回收せらるる以上は、內地の通貨膨脹する一方に、金融を緩和するは、當然の勢を以て目す可く、通貨の膨脹、金融の緩漫は諸物價の騰貴を促し、國民の生活を壓迫するの弊害を齎したりと雖も、同時に對外債務を減却し、又對外債權を獲得するに資したる所少なからず。英露佛國の爲めに、其債劵を引受け、我國の外債を償還したるが如き、何れも正貨流入し、內地金融の緩和せる結果にして、國際貸借關係に於ける我國の地位は今回の戰爭に依て、一變せんとするに至れり。而して金融緩漫の勢は開戰以來依然たるものあるを以て、自ら株式市價の上進を促すと共に、諸事業の勃興を來し、新設事業の計畫せるゝは勿論既設事業の增資到る所に行はれ、戰爭の結果、內地に於ける生產事業にして外國輸入品の競爭を免かれ、代價の騰貴に依て、偶々物資を所有し、又は今後繼續して其物資を產出するを得る者に意外の利益を與へたるものあると共に、戰時の變動に伴ひ、需要の急劇に增進せる物資を所有することに依て、利益を收めたるものあり。戰時利益は斯の如くして直接間接に廣く社會の各方面に於て生產事業に關係を有する者の間に分配せられつゝあるは明白の事實にして、其分配の程度は社會の各階級に依て異なり、又社會階級の內には、戰爭に伴ふ變動の不利なる影響を蒙りて、何等の利益に浴する能はざるものなきに非ずと雖も、既に商工業を通じて、直接間接に利益を社會の多數に及ぼしつゝある以上は、今日を以て好景氣の時代と云ふの當れるは勿論好景氣の最も旺なる時代とするも亦失當の言に非ざるなり。

然れども今日經濟社會に好景氣を齎しつゝある原因を考ふるに、諧く戰爭に伴ふ偶然の事情とす可く、隨て戰爭の終熄と共に、是等の有利なる事情は忽にして消散し、其反動として不景氣を誘致することなきや否

や、是れ何人の裡胸にも往來する想像にして、昨年末獨逸講和提議の電報海外より傳はるや、我國の株式市場に容易ならざる混亂を醸し、其後事情判明して、人心の定着を見たりと雖も、斯る事實は畢竟我國民多數の胸裡に戰時利益の一時的幻影に止まり、到底永久に繼續す可からず、否戰爭の終熄と共に消散するものなりとする所信の存するものあるが故に外ならず。然らば斯る所信は果して正當の理由に據るものと見る可きや否や。

戰時利益繼續の能否

戰時利益の戰後に繼續す可きや否やに就ては、三箇の觀察點に據て判斷を下さゞる可からず。第一戰時利益の繼續に就て政府は如何なる施設を講ぜんとするや、第二戰時利益を享けつゝある當業者は如何なる方法に依て、之を繼續せんとするや、第三交戰國幷に中立國は戰後の經濟發展に就て如何なる施設を講じ、以て我國に經濟上の競爭を試みんとすや、是等の三點は即ち吾輩の認めて、以て戰時利益繼續の能否を決する標準とするものなり。

第一の點より論ぜんに、歐洲開戰以來我國民は大隈寺内兩内閣を送迎したれども、兩内閣共に、戰時經濟上に相當の施設を講じ、以て戰時利益を戰後に繼續するの工風を爲したりと認むる能はず。彼の大隈内閣時代に制定せられたる藥品化學工藝品製造業に對する獎勵法の如き、戰時輸入品の杜絶に乘じて、我國に企劃せられたる製藥事業又は染料製造事業を保護するの用意に基くものなる可しと雖も、一旦戰爭終熄し、歐洲諸國より盛に競爭品の輸入せらるゝものあり、而して諸國が戰後經濟上の疲弊を恢復するの目的を以て、物資の廉賣を海外市場に行ふ場合に、果して我國に新に起れる事業が經驗に乏しく、機械原料に乏しくして、能く競爭に堪ふるを得るや否や。彼の理化學研究所の如き設立の後には當業者に種々の改良發明を示して、以て外國殊に斯業の先進者たる國の競爭に當らしめんとするものなる可しと雖も、大隈内閣の倒壞以來研究所設立計畫の進行極めて遲々たるの狀況を以てしては、

多年を經過したる後は兎に角、戰後當面の用を爲すことを信ずる能はず。如何にして戰時外國競爭の杜絶に依て勃興したる諸事業を戰後競爭の開始せられたる曉に保護し、以て企業の終始を全うせしめんとするや、保護金の下附に依るか、保護關稅の適用に依るか、其方針の一決せざる間に、戰爭終熄して、外國の競爭の開始せらるゝことあらんか、是等新興の企業に大なる變動を生じ、經濟社會機運の變轉或は端を此一事に發することなしとす可からざるなり。

戰時利益を戰後に繼續するに就ては、政府が關稅政策の方針を確定し、新興事業が外國の爲めに劇烈なる競爭を受くる場合に、或る程度まで之を緩和する目的を以て、關稅を利用する必ずしも不可ならず、殊に外國當業者の行はんとするダムピングに對しては、關稅政策を以て、之に當るを可なりとす。合衆國が千九百十六年の關稅法に於て早く之に關する規定を設け、以て當業者をして將來に安んぜしめんとしたる所以なり。而して關稅政策は單に斯く消極退嬰の方針のみに據て運用す可からず、積極進取の方針に出づ可きは勿論にして、現に今回の戰爭に伴う偶然の事情として、我國物資の販路が歐洲殖民地に向つて擴張せられたる以上は、諸殖民地と關稅上の協定を爲すことも、又諸殖民地に產出せらるゝ原料品の供給に就て、之を安全ならしむるの協定を爲すことも、共に必要の處置と云はざるを得ず。戰爭其他或る事變の爲めに、海峽殖民地が生護謨の輸出を、濠洲が羊毛、皮革の輸出を制限し、其結果我國工業の存在を危うするが如き、狀態を以てしては、戰時利益の繼續の如き、到底之を期す可からず。然も當今我國に於て是等物資を內國に產出し、以て自給自足の經濟生活を營む可しと云ふ主張ありて、一方に是等物資の海外供給を確實ならしむる方策に就て、何等の所說なきは何故なりや、吾輩の了解に苦む所なり。

政府の施設を疑ふ

多年經濟社會の悲境に沈淪したる我國商工業者は一兩年來に於ける戰時利益に際會して、之に眩惑し、徒

に目前の利益を貪るに急にして、將來の用意を怠るものに非ざるか、此一事は吾輩の大に掛念する所なり。

蓋し輸出貿易が歐洲開戰以來遽に增進したるは、我國物資の品質優良なるが爲めに非ず、唯軍需品としての需要あり、又我國以外に供給を求むる能はざるの事情あるが故にして、隨て一旦戰爭終熄し、軍需品の需要減退し、又一方に、交戰國に於ける生產力の恢復したる曉に至れば、我國輸出貿易の進運に意外の頓挫を招かざるを得るや否や。何人も此點に就ては危險の念なき能はず、況や外に我國物資に對する粗製濫造の惡評盛なるものあり、內に物價騰貴の爲めに生產費の加重する勢の大なるものあるに於てをや。之に對する政策としては、第一對外放資を計畫し、殊に支那、南洋の如き我國物資を需要し、而して資金の供給豐富ならざる方面に資金を放下し、以て我國物資に對する需要を促進するは戰時利益繼續の一法として、最も有力なるものなり。然も我國の對外放資が單に安全の一事にのみ着眼せられ、殆ど外國債券の引受に局限せられんとするは何故なるか、吾輩の承服する能はざる所なり。

粗製濫造の弊害に就て見るも、我國當業者の用意に缺くる所あるを疑はず。此事たる、年來の問題なるに拘はらず、今日に至つて、未だ解決せられざるは、畢竟粗製濫造の惡評に依て、輸出品販路の擴張に頓挫を招くも、一箇の輸出業者としては、濫造せられたる粗製品を輸出することに依て、一時の奇利を博するが故に、矯弊の實を收むる能はざるものなる可し。畢竟斯の如きは我國工業組織の幼稚にして、其規模の狹小なるに基くものとす可く、相當の資力と名聲とを有する當業者の斯業に當るの時に至つて、始めて此種の弊を除くを得べし。政府殊に農商務當局者は從來粗製濫造の抑制に就て、甚だ熱心にして、機會ある每に、地方官其他の官吏を集めて、取締法の勵行を訓示し、又當業者に商工業家の道德を說明するの常なれども、果して幾何の效果を實際に奏し得たりや。吾輩を以て見れば斯る形式的空言は遂に何等の實効を生ずるものに非ず、當局者にして粗製濫造を忌むこと斯の如く僞らざ

か、先づ當業者殊に小規模の工業家に對して資金融通の方法を工風し、此融通を得る爲めに、彼等をして組合を設けしめ、組合を通じて、融通を得るの傍、組合員間の自制に依て、粗製濫造を愼しむに至らしむるの方針に出でざる可からず。戰爭の影響を受けて、我國の工業家が其規模の大小を問はず、意外の利益を收め、規模の大なるものは益々之を大にし、其小なるものも亦之を大ならしめんとしつゝある際、工業資金融通の便を謀りて、此機運を助長し、當業者自發の意思に依て、粗製濫造の弊を矯めしむると共に、生産品の統一を期するは、戰時利益を戰後に繼續する方法吾輩の認めて以て重要なりとする所なり。

當業者の用意如何

斯る用意の講ぜられたる後に於ても、尙ほ戰時と戰爭終熄との過度期に於ける經濟社會の動搖大なるものあらんか、不測の變事を招くことなしとせず、況や此危機に於ては人心微妙の變調に依て、經濟社會の支配せらるゝは、客臘に於ける株式市場の變動の之を證明するものあるに於てをや。玆に於てか吾輩は我國の商工業者殊に戰時利益を收めつゝある當業者に向つて、自制、先見、準備の必要大なることを說かざる能はず。商工業者にして戰時利益を獲得しつゝある者は甚だ多し、然も彼等の間に前途の變動に對する準備として、戰時利益の或る部分を流動的狀態に置くが如き用意の周到なるものは果して幾何を數ふ可きや、現に日本郵船會社の如き、戰時利益の處分に就て、會社重役と一部株主との間に意見の大衝突を來し、增配增資を主張する株主の代表者新に重役の列に加はりて、未曾有の高率なる配當を爲すと共に、增資の準備として、新株式の拂込を徵收しつゝあり。然も增配を主張し、其實行を條件として、就任したる新重役は我國海運業の前途若しくは戰後に於ける世界海運業の狀態に就て如何なる意見を懷いて、以て此擧に出でたりや、抑も亦曩に增配を不可なりとしたる重役が意見を一變したるは何故なりや、我國實業家なるものが自家の經營する業務に就て確乎たる定見を懷かず、四圍の事情に迎合す

るに忙はしきは、此一事を以て知る可く、彼の如き大會社にして戰時利益に對して爲す所斯の如しとすれば、他の大小會社が多く戰時利益を增配に、新株式の拂込に、將た又役員賞與金に分配して、將來の變動に備ふるの用意を講ぜざるも亦怪むに足らざるなり。

歐洲諸國は今回の戰爭に際して、戰時利益稅なるものを起し、現に英國の如き始め戰時利益に對する稅率を五割とし、次いで之を六割に引上げたるが、新計畫に於ては更に八割の高きに上らしめんとし、合衆國亦軍需品製造業者稅なるものを賦課しつゝあり。我國に此種の稅法の制定せられざる可否は姑く之を論ぜず、唯實際に此種の稅法存せず、戰時利益の全部が當業者の收むる所と爲るは、卽ち彼等に戰後の準備を全からしむるの餘裕を大ならしむる所以なるに、彼等が之を利用せざるは、我國實業界の短處を暴露したるの感なき能はざるなり。

歐洲諸交戰國が戰後如何なる速力を以て、戰時經濟社會の疲弊を脫して、我國に競爭を試みんとするやの問題は戰爭繼續中の今日容易に之を判斷する能はず。軍備の擴張、軍器の修理、公債利子の支拂等戰後に經費を增加し、租稅の負擔を加重す可き幾多の原因あり、一方に人口の減少殊に壯丁死傷に基く生產勞働者の不足、資本の缺乏に基く金利の騰貴、生產的設備の破壞等生產力減退の原因と爲る可きものあり。然れども是等經濟上の壓迫は國家の政策宜しきを得るときは、之を幾多の歲月に分配するを得るの道あるが故に、上記の負擔あるの故を以て、直に戰後歐洲經濟社會の實力を蔑視するは當れりとせず。況や生產勞働者の不足は機械の利用に依て、資本の缺乏は貯蓄の奬勵に依て、之を補ふの道あるに於てをや。歐洲諸國民は文明の餘弊を蒙りて、惰弱に陷り、逸樂に耽るものと想像せられ、又事實此種流弊の認む可きものありと雖も、歐洲戰爭は彼等に對する一大痛棒と爲り、人心を緊張せしむるの效果少なしとす可からず。實質上に於ては兎に角、精神上に於て歐洲戰爭の齎したる利益は卽ち此點に在り。我國たる、戰時利益に眩惑して、將來の準備を

怠るが如きことあらんか、島國根性を暴露するの甚だしきものとす可し。況や少許の富を得たるの故を以て直に之に滿足し、自ら國家を成金國の低きに就かしめんとするに於てをや。成金者流の社會に跋扈する必ずしも愛ふるに足らず、我國自ら成金國たらんとするは最も嘆ず可き所なりとす。

歐洲戰亂と世界に於ける帝國の地位

子爵 加藤高明

世界の歴史に於て未だ曾て見ざる、而して將來に於ても再び見る事無かるべしと信ぜらるゝ歐洲大戰亂の開戰後既に約三年に垂んとするに係らず、戰局尚酣にして未だ孰れの方面にも平和の曙光を發見する能はざる有樣なり、帝國が此間に處して交戰國の一として締盟列國と相携へて獨逸に對し、更に又極東の盟主として東亞の平和維持の重責を負ひ、世界に於ける帝國の地位を進めんと欲せば、官民協力大なる決心を以て之れに對せざるべからざるなり。

顧れば帝國が海外諸國と接觸を保つに至りしは、僅に最近數十年來の事に屬し、我國が世界的に認識せらるゝに至りしも、元より其後の事なりと雖も、明治大帝が早く開國進取の皐謨を樹てられ、而して國民が發奮努力して國力の進展を圖りしが爲に、僅々數十年の間に能く一等國の班に列するを得るに至れり、然かも帝國が斯くの如く其地位を向上せしむるに至りし楷梯を回顧する時は、自ら感慨の多大なるもの無くんばあらず。

條約改正當時の困難

今我國が初めて外國と接するに至りし時代の事を回想するに、德川幕府は固く國を鎖して外國と交らざりしかば、國民は擧げて三百年泰平の夢に酣れ、日本以外に亦世界あるを知らず、從て世界の大勢に通ずるもの〻如き殆んど稀なりしより、米艦の突如として浦賀を訪ふや我國の上下驚駭策の出づべきものなく、物情甚だ騷然たるものありき、斯くて其結果遂に米國の要求に應じて開國せざるべからざるに至り、次いで諸外國との間に通商條約を締結するに至れり、然かも當時國民未だ海外の事情を知悉せざりしを以て、條約の國民の休戚に關する事の大なるを知らざりしより、從つて我國に有利なる條約を締結せんが爲に努力する事を怠りしが爲に、當時締結せられたる條約に於ては、或は外人に對して治外法權を認め、或は關稅は極めて低率のものと爲し、該條約は大體に於て片務的にして、實に道理上より見れば頗る屈辱的に、又實際上より見れば甚だ不便なるものなりき。

依つて其後明治政府の建設以來、政府も國民も共に全力を竭して此條約を對等的のものに改訂せん事に努め、實に明治の初年以來二十七年に至る迄の間の外交は、殆ど全部を擧げて此條約改正の一事に沒頭せるの觀あり、之れが爲には我國の上下を擧げて有らゆる努力を惜しまざりしなり、斯くの如くして苦心經營の餘明治二十七年六月に至り初めて英國との間に改訂條約の調印を見、次いで諸外國との間に條約改正を了し、茲に從來の治外法權を撤廢し、海關稅に於ては未だ全く自由課稅の權を得るに至らざりしと雖も、尙之れを前率に比して遙かに高率ならしむるを得たり。

而して當時の官民は此目的を遂せんが爲めには、甚大の熱心を以て當りしより、之れが爲に我國の進步發達を促進したる事尠少ならずして、維新以來我國の開發の顯著なるものありしの一因は此點に存す、則ち之れが爲には我國は或は歐米に特使を派し、或は歐米の文物輸入に努め、鐵道、電信、郵便其他の有形的進步を促したるもの〻多きのみならず、政體變更、法典編纂の如き無形的開化をも導きし事殆ど枚擧に遑あらざ

る處なり。

我對外關係の一轉機

斯くの如くして幾多の苦心を重ねし後、明治二十七年に至りて初めて條約改正の目的の大半を達するを得たりしが、之れ實に我國の對外關係に於て頗る重大の意義を有するものにして、從來歐米人一般の思想は基督教的文明を有するものにあらざれば、國にして國にあらず、白人種にあらざれば人にして人にあらずとなしたりき、然るに今や基督教的文明を有せず、且又彼等と同一人種にもあらざる我日本に對し、國際對等の交際を許し、彼等白人が他人種たる我日本人の裁判權の下に服せんとするに至りたるは、我日本としては元より當然の事なるも、彼等としては極めて重大なる寧ろ破天荒の事にして、其國際關係上の一大革命たりしなり、蓋し列國が日本の條約改正の提議に對し容易に同意を表せずして、條約改正事業の彼が如く困難なりしものは全くこれが爲にして、當時東洋に在住せし英國人の頻に之れに反對せしに拘らず、英國政府が敢然として日本の提議を應諾するに至りしは、實に英國が深く世界の大勢と東洋に於ける日本の地位とに顧みる處ありしが爲なりと雖も、吾人の多とせざる能はざる處にして、我國は玆に條約改正によりて、初めて世界大國の班に列するの第一歩を得たりしなり。

日清戰後團匪事件

其後日清戰役の開かるゝや列國は支那の大國なるを見て、我國の敗北を豫想したりしに拘はらず、事實は之れに反して、皇軍の向ふ處敵なく連戰連勝の勢なりしを以て、從來日本を以て單に模倣に巧なる國小美術に長じたる國民に過ぎずとのみなし來りたる、歐米諸國は等しく驚愕の眼を以て我に對するに至り、日本決して侮るべからずとなしたりしも、然も尙之れ黃人黃人を破りしに過ぎず、未だ日本人は到底白人の敵にあらずとなしたるものゝ如くなりき。

然るに其後更に明治三十三年支那に所謂團匪事件の

起りて、北京に於ける各國公使館の重圍に陷るや、我國は英國其他の求に應じて救援の爲に軍隊を派遣し、啻に軍事上偉大の功勳を擧げしのみならず、大に博愛仁慈の德を彰はし、殊に又其後の列國會議に於て帝國は常に公明正大の態度を失はざりしが爲に、帝國の地位は漸く歐米列强の認識する處となり、軈て日英同盟の締結を見るの因たるに至れり。

日英同盟日露戰爭

帝國の世界に於ける地位を高むべき事件として、日淸戰爭團匪の亂に次いで來りし處のものは日英同盟の締結なり、由來英國は同盟を好まざる國なりしが、當時の東亞の時局は日英兩國が相提携して相互に援助するを必要とするものありしより、遂に兩國の間に同盟條約の締結を見るに至りたるものなるが、我國が維新以來頻りに歐米の文物を採用して開發に努めたると、日淸戰爭團匪事件に於て帝國の力の强大にして且公明正大たる事を示したるとは、實に從來同盟を好まざる英國をして、東亞の新興國と同盟の約を締せしむるに至りし原因なるべし。

然るに團匪事件後より露國は次第に滿洲朝鮮に侵略し來り、爲に帝國の蒙るべき危險測り知るべからざるものありしより、帝國は明治三十五六年の交より頻りに露國と折衝する處ありしも、露國が帝國の主張を容れざりしが爲に、遂に彼の日露の大戰を開くに至りしが、當時露國は世界最强の陸軍國として自他共に許したりし處なりしより、我國の武力を侮り實力を輕視し、列强亦我國の遂に露國の敵にあらざるべきを豫想したるもの丶如くなりき、然るに開戰後の事實は全く之に反し、帝國は海陸共に赫々の戰勝を博する事を得たりしより、又もや列國は頗る驚愕の念を以て之れに對するに至れり、蓋し彼等は往年日淸戰爭に際しては畢竟之れ黃人種對黃人種の戰爭に過ぎず、日本人は同人種たる支那に勝ちしと雖も、到底白人種の敵にはあらざるべしとなしたるに拘らず、今や日本が白人種の國にして然かも强國の隨一に居る露國と戰つて大なる勝

利を收めたるより、彼等は寧ろ之れに對して恐怖の念を抱くに至り、口に其戰捷を歎賞しつゝも心中竊かに其强大を恐るゝの情禁ずる能はざるものありしが如し。

第二回の條約改正

是等の事實は遂に我國をして遺憾なく世界に於ける一等國の伍伴に列するを得せしめ、四十年前にありては僅に模倣に長じ小美術に巧なるに過ぎざる東方の一小國となされたる帝國は、玆に世界列强の一に加はるに至りしが、既にして明治四十四年に至りては第二回の條約改正行はれて、前回の條約改正にありては法權の回復を主とせるに對し、這回は專ら稅權の回復に重を過ぎ、遂に自由課稅の權を獲得するを得たれば、明治維新以來帝國朝野の宿望たりし條約改正の事業は玆に完全に其目的を達するを得て、これより我國は世界の强國と全然對等の關係を保持するを得るに至れるなり。

歐洲大戰の突發

斯くの如くして我國の世界に於ける地位は次第に向上し來りしが、此時偶大正三年八月歐洲大戰亂の突發を見、我國亦日英同盟の誼に從つて之れに參加するに至れり、抑も今回の歐洲大戰は其端を墺皇儲の遭難に基し墺塞兩國間の開戰に發すと雖も、更に其源に溯りて斯くの如き世界的大戰亂を惹起するに至りし責任の所在を求めば、蓋し獨逸それなるべし、則ち獨逸は武力を以て權利義務の關係よりも重しとなし、武力に依つてなし得べき事は如何なる事と雖もなすを憚らざる國にして、其建國以來今日の大戰亂を豫期して軍備、兵器、糧食其他諸般の準備を怠らざりしより見て、更に又彼の日露戰爭の創痍を癒やすに銳意しつゝありし露國、及如何なる對價を拂ふも平和を維持する事に汲々なりし佛蘭西、平和の裡に通商の利益を得ん事を目的とせる英國の決して戰意なかりしに見て、今次の大戰亂惹起の責任は實に獨逸の專ら負ふべきものなる事を

論斷せざるを得ざるなり。

日本の大戰參加

而して彼の歐洲大戰亂の起らんとするや、帝國は其始に當りて戰亂の極東に波及せざらん事を希望し、當時外交の局にありし予は、之れが爲に種々苦心する處あり、更に此希望をも聲明する處ありしが、然かも開戰後幾何ならずして、英國の日英同盟の主義精神に基き其規定によりて我國の援助協力を求め來れるに會せり、此場合攻守同盟の對手國たる日本は、利害得失を考究する道もなく、若し又日本に不利なるものゝありとするも、此英國の要求に應ずるの外途無かりしなり。

世上或は當時彼が如く速に英國の求に應ずる事なく、徐ろに形勢を觀望して、彼の更に窮狀に陷るを俟ちて、我國の戰爭參加に就いて有利なる條件を附せしむべかりしを說いて、當局の措置を難ずるものありと雖も、危急存亡の場合其友人より援助を請はれて、徒らに利害の打算のみに耽るの個人間の關係に於ても唾棄すべき事なるが如く、攻守同盟の約ある國の間に於ても、其對手たる締約國の疲勞困憊に陷るを俟ちて、有利なる條件を獲得すべしと云ふが如きは、到底信義ある國のなす能はざる處、又爲すべき事にあらずして、殊に日本の如く義を以て立つ國の爲すべき事にあらざる也、彼の徒らに利害の打算のみに拘へられて、斯くの如き議論をなすの徒は、畢竟日本の信義の國たるを忘れたるものなりと謂はざるべからず。

大戰參加の利益

然るに彼の場合英國の懇請に應ずるは、日本が同盟上の義務を盡すものなると共に、併せて又帝國の利益ともなるべかりしを以て、吾人は喜んで英國の委托を容るゝに決したるものにして、其結果宣戰の詔勅の渙發と爲り忠勇なる帝國の陸海軍は各方面に活動し、獨逸の勢力を極東より根絕し、太平洋印度洋上に於ける獨逸艦隊を驅逐し、遂に今日歐洲本土に於ては尙戰亂の酣なるものあるに拘らず、東洋にありては、泰平の

象を樂しむを得るに至れり、而して帝國が英國の懇請を容れて歐洲大戰に參加し、幾多の困難を排して敵國勢力を驅逐し、聯合與國の爲に盡したるが爲には、啻に我國の利益を進め得たるのみならず、併せて同盟國及び聯合國の感謝を買ひ、世界に於ける帝國の地位を向上せしめたる事決して少しとせざるなり。

對獨報復の機

更に又今回の歐洲戰爭に帝國が參加したるが爲に、吾人は多年の深怨ある獨逸に對し報復をなすべき機會を得たるは偶然の幸なりと謂はざるべからず、顧れば日淸戰爭後彼れ獨逸は主動者として所謂三國干涉を試み、當時日本が多大の犧牲を拂つて戰爭の當然の收獲物として、支那より割讓を受けたる遼東半島を支那に還付せしめ、之れが爲に十年後に於て日露兩國の間に彼が如き大戰爭をなさしむるの因を作りたるに拘らず、自らは些々たる小口實を以て、往年日本の遼東半島領有が東洋の平和に害ありとなしたる其舌根未だ乾かざるに、支那本土の一部たる山東省の一地を占有するに至れり、日本が斯くの如き侮辱を蒙りたるに就て、孰れかの機會に於て之れが報復をなさんとは、蓋し當時の事情を記憶する識者の均しく期したる處なりしが、今回偶之れが絶好の機會を得たりしなり。

殊に近年獨逸は大に支那に其勢力を逞しうし來り、爲に或は日支兩國間の國交を害し、或は支那に於ける日本の發展を妨ぐるが如き事多かりしを以て、若し獨逸の勢力を支那より除く事を得ば、其効果甚大なるものあり、旁以て我國の歐洲大戰參加對獨開戰は其意義の極めて重大なるものあると共に、其結果として帝國が享受すべき利益も決して少なからざるなり。

然るにも係らず世上一部には獨逸萬能主義の思想よりして獨逸を畏敬するの餘り、我國の對獨開戰當時にありては、歐洲大戰の終局の勝利は獨逸にあるべく、其結果日本は非常に困難の地位に陷るべしと爲して、日本が輕卒に歐洲大戰に參加したるを不利となしたるものありしが如きも、近時戰局の進展推移と共に、漸

く斯くの如き議論も其勢力を失ふに至つたるは國家の爲に洵に喜ぶべき事なりとす。

日英同盟に對する論議

斯くの如く日獨開戰の意義は甚だ複雜せるものありと雖も、其主要なる原因は元より日英同盟に基くものなる事勿論なるが、帝國が英國の懇請によりて獨逸と開戰せる以來、我國内に日英同盟に對して頻りに論議を試むるものあり、或は日英同盟を以て日本に對して何等の利益を與ふる事なくして單に英國の利益をのみ圖る片務的のものなりとなして之れが廢棄をすら主張するものを見たるは、吾人の實に心外とせざる能はざる處なり。

蓋し日英同盟に反對するもの丶論據は一は支那に於ける英人が日本の利益を妨害すと云ふにあり、而して他の一は日英同盟は元來露國に對抗するが爲に締結したるものなれば、日露の間彼が如く親密となれる今日、日英同盟を持續するの必要なしと云ふにあるもの丶如し。

支那に於ける英人の行動

支那に於ける英人中動もすれば日本の行動に對して惡聲を放ち、或は日本の利益を妨げんとするもののあるは、吾人と雖も之れを認めざるにあらず、然れども若し此事ありとするも、之れ決して英本國政府の政策と何等の交渉あるものにあらず、彼等は決して英國の代表的人物にあらずして、支那に於ては多少其存在の認めらる丶とするも、本國に於ては勢力無きもの多く、從て斯くの如き人々の言動の如きは決して重視すべき價値なく、要は只英本國政府及本國の識者が日英同盟に對し如何なる意見を抱持しつ丶ありやを見れば可なり。

支那に於ける外國貿易は元英國の獨斷する處なりしに拘らず、近年日本が著しく發展するや、支那を以て恰も自巳の繩張内なるかの如くに誤信したる一部英人は、宛ら日本は英國の利益を侵犯したるが如く思惟し

て、日本の發展に對し嫉妬の念を生じ、日本人の行動に關し種々の言を放つに至れるが如きも、然かも支那の地は極めて廣漠にして、此間に存する利權も決して少なからず、從て支那に於ける日本人の發展が決して外人の利益を侵すものにあらざると共に、外人の發展も亦日本の利益を害するものにあらず、支那に於ては日本人も外人も互に調和を保ちて其利益を占め得べき餘地は十分に存在すべく、此點に於て日英兩國は決して兩立する能はざるものにあらざる也。

されば是等の點についての誤解より多少日本の行動について惡聲を發する一部英人のありとするも、之れが爲に英本國政府及英本國の識者が動かさるゝが如き事なきは勿論にして、之れが爲に英國の日本に對する外交政策の決して變改せらるゝが如きものあらざるは、予の十分に知悉し且確信する處なり、殊に又日英兩國間に同盟なる政治上の大なる了解の存するが爲に、兩國間に多少利害の衝突を見るが如き問題の生じ、或は貿易上の紛爭等を見る事あるも、比較的容易に之れが圓滿なる解決を求め得るものにして、政治上の關係たる日英同盟は通商上の關係等に於ても、兩國に對し幾多の便益を與へつゝあるなり、然るに單に一部少數の英國人の言動に見て、直に日英同盟の價値を疑はんとするが如きは事の輕重本末を辨へざるものなりと謂はざるべからず。

對露關係と日英同盟

次に日英同盟は元對露國の關係より生じたるものなれば、其後日露兩國は次第に親善となり、英露亦親密の關係を有するに至り、近來英國も日本も共に露國と親善となりつゝあれば、單に此點より云ふ時は日英同盟は其必要なきに似たりと雖も、彼の日英同盟の存在するが爲に玆に東洋に於ける國際勢力の均衡を維持しつゝあるものにして、若し日英同盟にして廢せば、更に東洋に於ける新しき均勢を作らざるべからずして、此事たる決して容易の業にあらざるなり。

而して現に日英同盟の存在するが爲に、日本も英國

も共に之れに依りて甚大なる利益を享受しつゝあるものにして、則ち之れあるが爲に英國は多數の艦隊を東洋に派遣して其領土を防衛するの必要なきのみならず、其從來東洋方面に配したる海軍をも對獨の關係上之れを歐洲に移し、東洋方面は日本の力に依賴し得るものにして、之れ英國の爲には大なる利益にして、殊に彼の歐洲大戰亂勃發以來最も適切に其利益を感じ得たりしなり、更に又之れを日本の方面より見る時は日英同盟の存在によつて英國は決して日本の敵國たる事なく、且又啻に敵國たらざるのみならず、其味方たるべき事明かなるが爲に、我國の海軍力も或必要の程度に止め得るものにして、若し英國にして萬一我國の敵たる事を豫想せざるべからずとせば、我國は更に多大の海軍力を備へざるべからずして、遂には國力以上の軍備をも要すべきに、日英同盟ありて英國の決して敵たらざる事を知るが爲に、海軍力も相當の程度に止め得るものにて、此點より見るも日英同盟の効果は大なりと謂はざるべからず、從て單に露國との關係親善なりとの理由を以て、直に日英同盟を不必要となす事能はざるは勿論なり。

日露の親善

今此場合日露兩國の關係に就いて考ふるに、彼が如き大戰役をなしたる後僅に十年に過ぎずして、兩國の關係が今日の如く親密に輝き殊に新日露協約の成立をさへ見るに至りしは、實に不可思議とも謂ふべきなり、然れども之れ何等の不可思議にもあらず、元來日露兩國は親善の關係を保つべかりしものにして、其の日露戰爭を爲すに至りしは、全く兩國の間に意思の疏通を缺けるが爲に外ならず、更に適切に言へば露國が日本の實力を了解せざりしが爲なりしが、彼の大戰役の結果、露國は十分に日本の實力を認め、又日本は露國の畏敬すべき國なるを知りしより、茲に兩國共に兩國の間は親善の關係を保たざるべからざるを感得し、之れが爲に爾來數次の協約の締結をも見、遂に今日にありては、尙同盟の名の存せざるも、殆んど其實を有する

に至りしなり。

然しながら斯くの如き日露兩國の接近についても、日英同盟の力に俟つもの少なからざるは看過する能はざる處にして、今や世界に於ける日本の地位は次第に向上し來れりと雖も、其實力以上に外國より認識せらるゝ所以のものは、英國との間に同盟條約の存在して一朝有事の際には、英國の日本の味方たるべき事あるが爲にして、露國が大に日本に親しむに至りし一部の原因亦此に存するものと謂はざるべからずして、日英同盟の下にある日本は日英同盟を放れたる日本よりもより强力のものたるは疑の存せざる處なり

斯くして日英同盟は我國外交の樞軸たり、日露新協約は又此日英同盟と其主旨を一にし、且之れを補足すべきものたり、從て我日本は將來益此兩者を尊重し、其主義精神に則りて、以て世界に於ける我國の地位を進むるが爲に鋭意せざるべからず。

歐洲戰局の前途

次に翻て歐州の戰局を見るに、開戰以來屢行はれたる平和克復期の豫想は一も適中せるものなく、開戰後約三年に垂んとする今日にありても、尙平和の來るべき徴候の認むべきものなく、曩に一度講和の提唱ありたりと雖も直に聯合國側の一蹴する處となりたる而已ならず、却つて戰局は次第に擴大せんとするを見る、然かも平和は孰れの日にか來るべく、且其平和の聯合國側の勝利に依つて來るべきは吾人の確信して疑はざる處なり。

獨逸は現に殆んど總ての歐洲の强國を敵として戰ひ、開戰以來既に約三年の久しき持續し來りたれば、其力の極めて偉大なるものあるは之れを認めざるを得ず、而かも之れ獨逸が四十年來竊かに今日あるべきを豫期して諸般の準備に努め、大に其軍國主義を發揮せしが爲にして、其後英佛等は次第に各方面に於て非常の準備を整へ、兵器軍需品の供給より兵員の補充增加に至る迄、間然すべき點なきに至れるが爲に、今や獨逸も開戰當時の如く勝利を博する能はず、西部戰場に

ありては却つて英佛聯合軍の爲に退守の止む無きに陷りつゝあり、彼の佛蘭西の如き近年士氣の大に衰へて、如何なる對價を拂ふも尙平和を希望するものゝ如く觀察せられしにも拘らず、今回の戰爭開始以來は佛國人は全く一變して、平素動もすれば輕佻浮薄の風ありとせられたりしに拘らず極めて沈着冷靜に、然かも亦剛健に上下男女老幼の別なく相一致して國難に殉ぜんとする狀の大に歎賞すべきものあり、又英國は戰場とは海を隔つる關係上、戰爭の初期にありては國民一般に戰爭に對して甚だしく緊張するに至らざりしも、其後國民は次第に發奮し來りて今や兵員の增加軍需品の供給等殆んど遺憾なきに至れり。

之れに反し獨逸は其四十年來の蓄積も次第に盡き、兵員亦精銳のものは漸くに減じ、日を經ると共に疲弊の狀あり、殊に其富の程度は決して英佛二國の敵にあらざるが爲に、戰爭の永續は漸次獨逸に不利なる結果を誘起し、今後孰れの日にか聯合軍の勝利に歸すべきは最早疑の存せざる處なり。

平和克復の時期

然れども其平和克復の時期については容易に豫測する能はざる處なるも、尙極めて近き將來に來るが如き事は無かるべし、則ち現に獨逸は白耳義の殆んど全部、佛國の北部及露領波蘭を占領しつゝあれば、此儘にて平和克復に至るが如き事あらんか、佛國は其北部の殷盛なる地方を獨逸に奪はれ、露國は波蘭を割取せられ、而して白耳義の大部分、亦獨逸の有に歸しつゝあるが爲に英本國の防備は戰前に比して遙に不利なる狀態に陷るべきを以て、聯合國が今日の狀態の下に講和を諾するが如き事は斷じて之れなかるべし、而して若し講和問題の起り得る時機ありとせば、そは聯合國が佛領及白耳義より獨逸を追ひ、更に露領波蘭を恢復し少くとも領土關係が戰前と同一の狀態に迄復したる時ならざるべからず、從て若し今後聯合軍が次第に獨軍を驅逐して斯くの如き狀態に至らしめたる事ありとせば、これ講和問題の起るべき時機として、大に注目す

べき價値の存すべきも、遺憾ながら斯くの如き結果は尙容易に之れを見る事能はざるべく、講和の時機は今日まだ切迫せるものと見る能はざるなり、從つて平和克復の孰れの日にあるべきかは、吾人の尙豫測する能はざる處なるも、結局獨逸の敗北によりて早晩平和の來るべきは、吾人の斷言に躊躇せざる處なり。

斯くて現下の戰亂の終局を決する爲の、來るべき戰後の平和會議に於ては、日本も亦今回の大戰に參加したるに對し相當の効果を收めざるべからざる事勿論にして、帝國は此場合更に世界に於ける帝國の地位を向上せしむるが爲に一段の奮勵をなさゞるべからざる也。

歐洲戰後の支那

而して一旦平和克復を見んか、久しく戰爭の外他を顧るに暇あらざりし列强は、戰爭に依りて蒙りたる多大の創痍を醫すべく、各方面に活動するに至るべきが、彼の隣邦支那の如きは蓋し最も列國の注目する處となるべし、世上或は戰後列國は其戰爭に依る創痍を醫するが爲に悉く支那に殺到し、支那は列强競爭の中心たるに至るべしと爲すものあるも、吾人は歐洲列强は平和克復後にありては先づ國內の回復を圖るの必要あると、支那が國土廣大に物資豐富なりと雖も到底歐洲列國が來つて其大戰の創痍を醫すべき丈けの富源を有せざるより見て、戰後直に列國が然かく支那に殺到すべき事は之れを信ぜざるも、戰後支那が戰前に比して一層列國の角逐場たるべきは之れを疑はず、從つて我國が今日より豫め之れに對する計策を怠るべからざるを信ずるものにして、我國は今日より大に戰後の計をなすの必要あるべし。

戰後に於ける帝國の地位と國民の覺悟

更に戰後に於ける我帝國の地位を察するに、爲政の局に立つものは勿論、國民も大なる決心を以て之れに當らざるべからざるもの多かるべし、惟ふに彼の明治

二十七年の條約改正以前の國民は上下一致只條約改正の一事の爲に、三十年間不斷の努力と苦心とを惜しまざりしが、既に條約改正を終り、次いで日清日露の大戰に勝利を博するや、國民自ら驕るの狀あり、往々昔時に於ける努力と奮鬪とを忘れんとするものあるは頗る警しめざるべからざる處なり。

外人は我國最近五十年間の進歩を見て非常なる長足の進歩なりとして歎賞措かざるものゝ如し、然り之れ長足の進歩なるべきもさりとて外人の謂ふが如く爾かく著しき進歩にはあらざるなり、何となれば外人は五十年前の日本を以て全くの野蠻國なるかの如く目したりしを以て、其眼には今日の日本は非常の進歩なりと映ずべけんも、日本は外國と交通せざる以前より既に特殊の文明を有し居たりしものなれば、吾人より見れば最近五十年間の進歩は爾かく大なるものにあらざるのみならず、更に之れを同期間に於ける諸外國の進歩に比すれば、尙及ばざるものあるを覺ゆ、卽ち五十年前の我と彼との實力の差異は、其後の我國の進步發達によりて多少短縮せられたりとするも、尙相當の距離の存するものなるを認めざる能はざるなり。

而して戰後の歐洲列强は戰爭によりて失ひたる兵力財力の恢復其他の爲に戰後の數年を費さゞるべからずして、多く他を顧るの遑なきものあるべければ、此間こそ實に我國民が歐米人との間に存する實力の差違を幾何ともより少ならしむべき絶好の機會なるを以て、國民は大に意を此點に用ひて深く慮る處なからざるべからざるなり。

則ち之れが爲には一方に競爭心を盛にして外國の進歩發達に後れざらんとすると共に、一方には帝國の地位は他の歐米列强と人種、文明及宗教を異にすれば、動もすれば彼等の感情及び利害と相反するに至るべき素質の存する事を忘るゝなく、能く諸外國と和衷協同して、以て帝國永遠の獨立と平和と繁榮とを圖らざるべからざる也、而して之れが爲には國民は自ら驕るが如き事なく、大に發奮努力するを要す。(談話筆記校閱濟)

運動競技の流行と國民の體育問題

早大敎授 安部磯雄

△芝浦に於ける國際的運動競技

去る五月八日より十二日に至るまで芝浦の埋立地に於て第三回極東體育協會大會が開催せられた。幸にして天候ゝ好く、何等の故障なくして無事に其會を終ることの出來たことは、大會の爲めにも、我國運動界の爲めにも喜ぶべきことである。此度の大會は競技の方面より見ても、又設備の方面より見ても大なる成功を收めたるものと云ふことが出來る。私は詳細なる點に就て批評を下す暇を有しないのであるけれども、此大會が我國の運動界に與へたる敎訓に就て少しく所感を述べて見たいと思ふ。第一は極東體育協會大會が徹底的に商賣人根性を排斥したといふことである。大會の規則に依れば假令一度でも運動を以て職業となし、之によりて多少の金錢を報酬として得たる者は、全く競技に參加することが出來ぬことになつて居る。更に極言すれば、運動競技者にして粗末なるメダル以外に多少の價値を有する物品を賞品として受けたる者は大會の運動競技に參加することを許さないのである。勿論此原則を嚴密に適用する時には、我國の運動家にして大會に參加し得る資格を有する者は殆んど一人もないといふことが出來る。然し將來に於ては飽までも我國の運動家は此精神に服從し、目下我國の運動會に行はれつゝある弊風を除去することに努力しなければならぬ。今後如何なる運動會に於ても一切賞品を與ふることを廢止し、單にメダルのみを以て運動家の技倆を表彰することにしたいものである。此點に於て極東體育協會大會は我國民に一の大なる敎訓を與へたのであるといふことが出來る。

私が第二に述べたいと思ふことは、總ての競技が比較的公平に行はれたといふことである。三國の選手は何れも紳士的態度を取り、堂々として競技を行ふたのである。唯私が見て遺憾に思ふたのは、蹴球の仕合に於て支那選手と比律賓の選手とが感情の行違より悶着を惹起したることゝ、野球仕合に於て早稲田の選手が最後の勝利を得たる時、應援隊が餘りに子供らしき狂態を演じたことである。此二の出來事を除けば今度の競技は殆んど理想的に行はれた樣に思はれる。兎角運動競技に於ては選手其者よりも見物人が熱狂し易きものであるから、私共は今度の運動競技によりて大に學ぶ所がなくてはならぬ。

此度の競技に於て日本は幸にして優勝したのであるけれども、是は必ずしも誇るべきことではない。第一回及び第二回の大會に於ける成績を見れば、何時も大會の開催せられたる國の選手が優勝者となつて居る。これには種々なる理由のあることであると思ふ。第一に如何なる優秀なる選手も、いざ外國に行くことゝなれば種々なる故障の爲めに其目的を達することが出來ないこともある。然るに自國に於て大會の開催せられる場合には、殆んど如何なる選手も參加することが出來るといふ便宜がある。第二に日本と比律賓の間には氣候の上に於て大なる相違のあることを忘れてはならぬ。日本の選手が比律賓に遠征して炎熱と闘はねばならぬ如く、比律賓人も日本に來れば寒冷なる氣候に惱まされるのである。故に比律賓人が今回の競技運動に於て敗北したのは恰かもナポレオンがモスコーに侵入して遂に大敗を招いたのに比較することが出來やうと思ふ。左れば將來に於て眞に我が選手の優秀なることを示さんと思はゞ、彼等はマニラに行き或は上海に行き、而して尚ほ其優勝者たる名譽を荷はねばならぬ。

△運動競技の二大目的

運動といへば普通何人も先づ體育といふことを考へる。今日あらゆる學校に於て運動を奨勵して居るのは全く體育の手段であるといふことも出來る。勿論運動

の結果美はしき體格を得るに至ることは何人も常に見る所の事實であつて、私共は殆んど體育といふことを離れて運動競技を見ることが出來ないのである。然し運動競技の目的が單に體育にのみあると考ふるのは餘りに狹き見解ではあるまいか。少なくとも今日の運動競技が發達したる徑路を考へ來る時には、其目的が單に體育のみでないことは容易に了解することが出來るやうに思はれる。此度の極東體育協會大會に參加したる各國選手の數は合計三百四五十名に過ぎなかつたのである。然るに五日間に於ける見物人の數は少なくとも六七萬人を降らなかつたのである。若し運動競技の目的が單に體育のみにあるとすれば、六七萬の見物人は體育上如何なる利益を得たのであらうか。勿論彼等が海邊に近き運動場に在りて新鮮なる空氣を呼吸し、太陽の光を浴び、壯快なる運動を見て、心身共に少なからぬ利益を得たことは、私共も充分之を認むるのであるけれども、彼等はこれによりて直接何等體育上の結果を來したといふことは出來ない。然らば運動競技が體育以外に娛樂といふ一大目的を有して居ることは明かなることである。

運動競技に對して趣味を有する人が必ずしも運動家でないことは多くの事實によりて之を證明することが出來る。角力を見て喜ぶ見物人の中自ら角力によりて己が體格を鍛練して居る者が果して幾人あるであらうか。左れば運動の競技者が自ら運動によりて健康を增進するが如く、見物人は競技を見ることによりて一種の娛樂を得るのである。サンドーの鐵啞鈴によりて筋肉を鍛へ、深呼吸若くは靜座法によりて健康を增進することとは單に體育を目的とするものといふことが出來るけれども、野球、蹴球の如き競技は體育と共に娛樂を目的とするものであることは明かである。私共は娛樂といふことを體育といふことよりも低級なるものゝ如く考ふる傾向があるけれども、これは大なる誤である。人類は何れも娛樂を要求する者であるから、娛樂其ものは決して卑しむべきものでない。言ふまでもなく娛樂には多くの種類がある。一室に閉ぢ籠りて碁を

圍むのも一の娯樂に相違ない。不潔なる空氣を呼吸しつゝ演劇や活動寫眞を見るのも亦娯樂である。然し此等戸内の娯樂に比ぶれば運動競技の如き戸外に於ける娯樂は遙かに健全であるといふことが出來る。米國人が毎年野球競技を見物する爲めに五千萬弗以上を費しつゝあるといふことは決して浪費ではない。彼等米國人は酒の爲めにも毎年十億弗を費しつゝあるといふではないか。之に比すれば野球競技の如き健全なる娯樂の爲めに五千萬弗を費すといふことは必ずしも惜むべきことではない。

△選手制度

運動競技は近年に至り益々隆盛に赴く傾向がある。これは國民の健康といふ點より見て喜ぶべき事であるから、あらゆる方法により之を奬勵することは最も必要である。然し物には必ず利害の伴ふものであつて、運動競技の如きも亦其一例である。故に私共は運動競技の隆盛ならんことを希望すると共に、豫め其弊害を除くことに注意しなければならぬ。世には一方に競技運動の隆盛を希望する者あると同時に、一方には運動の弊害を見て、寧ろ之を排斥せんとする人もある。然らば彼等の所謂運動競技の弊害とは如何なることであらうか。私は今順序を追うて彼等の所謂弊害なるものを指摘し、同時に其所謂弊害なるものが果して運動競技の存在をも否定すべき程のものであるか否かに就き少しく卑見を述べて見たい。

私が第一に述べて見たいと思ふのは選手制度の弊といふことである。元來運動の目的とする所は成るべく多數の人々をして身體を鍛錬せしむるに在る。然るに選手なるものを設くるが爲めに運動場は常に少數の者に獨占せられ、多數の者は殆んど運動を爲す機會さへも得ることが出來なくなる。運動の目的は少數の選手を養成するに非ずして、多數の運動家を出すに在る。左れば各學校の運動場を野球選手に獨占せしめ、或はテニスコートを少數の庭球選手に使用せしむることは運動の精神に反するものであるといふことが選手制度に反對する人々の意見である。然しこれは未だ運動の

眞相に就いて明瞭なる思想を有して居ない人々の誤れる意見である。

若し運動競技を普及せしめんと思ふならば、一の模範を揭げて之を多くの人々に示すことが必要である。例へば野球若くは庭球の如きものが廣く世間に認められるといふことは、單に野球若くは庭球の效能を知らしむるといふことだけでは充分でない。寧ろ其技術に優秀なる選手を有するといふことが、之を普及せしむるに最も有效なる方法であることを忘れてはならぬ。運動競技の目的は國民一般の健康を增進するに在ることは言ふまでもなきことであるから、之を實行する爲めには先づ彼等に優秀な模範を示すに若くはない。我國の競走界に於て金栗君の如き人を出したることは惜かに我國民全體にランニングを奬勵する方法として最も有效なるものであつた。熊谷君の如き人が庭球界に於て世界的名聲を博したることは、我國に於て如何に大なる奬勵となつたことであらう。一月と五月の兩度に於て國技館内に大角力の行はれる時我國の學生界には角力が平常よりも多く流行するのである。外國の野球團が來つて我國の野球界を賑はしたる後には必ず野球の流行を見るのである。之に由りて考ふれば選手制度は運動の普及を圖るに最も有效なる方法である。勿論選手共者が往々運動競技の爲めに犧牲に供せられるが如き傾向があるけれども、選手を監督する方法宜しきを得れば必ず其弊を豫防することが出來るのである。

△運動家の陷り易き弊風

我國に外國の運動競技が輸入せられて以來未だ多くの年月を經て居ないのであるから、運動家の態度に就ては非難すべき點が少なくない。彼等の陷り易き弊は學問を怠るといふ點に在る。或人は運動家が運動の爲に費す時間の長きが爲め自然に勉强を疎かにするのであると云ふかも知れないが、私の見る所はこれと異なつて居る。彼等は必ずしも勉强の時間を有して居ないといふ譯ではないけれども、彼等は餘りに運動に熱中するが爲め自然に學問に對する趣味を失ふのではない

かと思ふ。或人は知力の不充分なる者が多く運動家となるのであると言ふけれども是亦決して正當なる見解ではない。能力の劣等なる學生も或程度までは運動に成功するかも知れないが、如何なる競技に於ても第一流の選手となるには必ず優秀なる知力を要するのである。殊に野球の如き團體競技に於ては非常なる注意力と敏捷なる判斷力とを要するのであるから、知力の優れたる者でなければ到底成功の見込はないのである。故に私共が詳細に第一流の選手に就き其學歴を調査する時には、彼等が小學若くは中學に於て何時も優秀なる成績を得て居たことを發見するに相違ない。故に優秀なる知力を有する學生に非ざれば決して第一流の運動家になることが出來ないといふことは、多年の經驗によりて私が明言し得る所の事である。

私は今日の運動家が運動の爲めに學問を犠牲に供して居るといふことに對し少しも辯護することは出來ないのである。米國の大學に於ては、或程度の學績を得るに非ざれば運動競技の選手たることを許さないことになつて居る。斯の如きことが米國に於て實行せられて居るならば、之を我國に於て適用することの出來ぬ筈はないと思ふ。今や運動家の數は年を追うて增加しつゝあるから、運動家に對して或程度の學績を必要條件とすることは決して無理な注文ではない。

然し私は一方に於て今日の教育制度に對し遠慮なき批評を試みねばならぬ點があると思ふ。我國に於ては知育、體育、德育を併立せしむることになつて居るけれども、其は單に表面のみのことであつて、事實に於て之を見ることは出來ないのである。若し知育と體育を徹底的に兩立せしむるといふことであれば、學校は何故に特待生の制度を設くるに當り、其資格の中に身體の健康といふことをも加へないのであるか。然るに何れの學校に於ても、特待生なる者は單に學績の優秀なる者を意味するのであつて、其身體が如何に虛弱であつても敢て之を問はないのである。世人は學問を怠る運動家を責むることが甚だ酷であるに拘はらず、運動を怠る勉强家に對して頗る寬大であるのは、實に大

なる矛盾ではないか。運動の爲めに勉强を犧牲に供することが運動の弊であるならば、勉强の爲めに健康を犧牲に供することも學問の弊であるといはなければならぬ。然るに學問の爲めに健康を犧牲にする學生に對しては曾に世人が頗る寛大であるのみならず、學校までが之に特待生の名譽を與へんとするのは何といふ誤であらうか。私は此兩極端を避けて出來得るだけ知育と體育の調和を計りたいと思ふ。

次に論ずべきことは今日の運動家が動もすれば品性を傷くるが如き行爲を敢てするといふことである。甚だしきに至れば己が腕力を恃みて亂暴を働くが如きこともある。勿論運動家に限らず何人も品性を修養すべき筈であるけれども殊に選手に於て然りである。選手は恰かも俳優や力士の如く衆人の注意を惹くものであるから、彼の言行は其影響を廣く社會に及ぼす點に於て普通の人よりも勝つて居るのである。故に運動競技の隆盛を計る爲めには、其模範たるべき選手の品行を嚴重に監督する必要がある。若し選手にして品性を傷くるが如き行爲ある時には、恰かも學問を怠る運動家と同じく、之に對して相當の制裁を加ふる必要がある。私は我國の運動界の爲めに是非此弊風を改めたいものと思ふ。

△アマチュアーとプロフェショナル

前にも述べたる如く極東體育協會は聊かにても商賈人根性の侵入することに反對して居るのであるが、私共は我國將來の運動界の爲め飽くまでも此精神を貫徹せしめたいと思ふ。勿論我國に於ける角力の如く既に之を商賈として居る者がある以上、私共は之を攻撃する必要を認めないのであるけれども、我國の學生間に斯かる精神を輸入することは斷じて之を排斥せねばならぬ。今や運動家は種々なる理由によりて社會より不相應なる歡迎を受けんとして居る。あらゆる運動競技家は屢々外國に遠征して其技を鬪はす機會を有し、剩つさへ自ら其費用を負擔する必要さへないやうになつたのであるから、彼等にして充分なる警戒を加へなければ、知らず識らず商賈人根性に感染する虞がある。故

に學生運動家を監督する所の人は其責任の如何に重大なるかを自覺せねばならぬ。

商賣人と素人との區別は何處にあるか。これは充分に研究すべき問題である。殊に我國に於ても野球の競技に於て、或は今回の極東體育協會大會に於て、入場料を徴したのであるから、商賣人と素人との區別を明瞭にして置く必要があると思ふ。商賣人とは運動競技を以て職業とし、且つ其競技によりて多少の報酬を得るものをいふのである。縱し多少の入場料を徴收することがあつても、運動競技者にして何等の報酬を受くることがなければ、彼は即ち素人運動家である。故に我國の學校が野球仕合に於て入場料を徴收する場合、一錢にても之を運動家の爲めに費やすこと〻なれば、是既に第一歩を商賣人の範圍内に踏み入れたものである。斯の如きは學生運動家を墮落せしむる所以であつて、我國運動界の爲めに甚だ怖るべきことである。

若し學生運動家の爲めに何等入場料を使用することがなければ、入場料を徴收することは運動家の品性に對して何等の累を及ぼすことはない。野球仕合の爲めに入場料を徴するに就き種々なる非難を試みる人があるけれども、前に述べたるが如く運動競技が體育であると共に娯樂である以上、見物人が運動場の設備に對して多少の入場料を拂ふことは當然のことであるまいか。若し今回の極東大會に於て假に見物人の爲め何等の設備をも爲さなかつたとしたならば、每日彼處に集まり來つた一萬有餘の見物人は如何にして運動競技を見物することが出來たであらうか。今や各學校は野球仕合の時に於て多數の見物人を收容せんが爲め少なからぬ設備を爲して居る。之に對して相當の入場料を徴收することは少しも非難すべきことではない。運動競技を單に體育と見ればこそ、入場料を徴することが如何にも不適當なる事のやうに思はれるけれども、若し之を娯樂といふ立場から見れば、入場料問題は何人にも直に了解が出來ることであらうと思ふ。

米國の各學校は殆んど何れも立派なる運動場を有して居る。中には數十萬弗を投じて數萬の見物人を容れ

るべき立派なる設備を有して居る者もある。而して各學校は蹴球仕合や野球仕合を行ふ時必ず入場料を徴することになつて居る。然し競技に參加する運動家は其報酬として入場料の一部を受くるが如きことは斷じてない。蹴球仕合の如きは一仕合に於て五六萬弗乃至十萬弗以上の收入を得ることがあるけれども、學校の當局者は此收入を受取り、之を必要に應じて運動各部の費用に當てることになつて居る。斯の如くして米國の學生運動家は商賣人根性に感染するが如き虞はないのである。

△國家問題としての體育

毎年行はれる徴兵檢査の結果によりて見れば、我國青年の體格は益々墮落しつゝあるやうに思はれる。若し此儘にして放任せられんか、民族としての日本人は到底世界的競爭に堪ゆることは出來ないであらう。私共は我國民の富が歐米諸國の夫に比して著しく劣れることに對し敢て悲觀しないのであるけれども、我國青年の健康が漸次衰へつゝあるを見ては實に憂慮に堪へないのである。今日は政治家も教育家も此根本問題に對して大に努力せねばならぬ時ではないか。私共は富に於て、知識に於て道德に於て、歐米諸國の人々と競爭せんとするに當り先づ體力の充實を圖る必要を感ぜざるを得ない。他の缺點は姑く之を忍ぶことが出來るとしても、健康の衰退は一刻も等閑に附すべき問題ではない。若し極端に云へば私共は全力を傾注して我國民の健康增進を計らねばならぬ。決して運動競技の弊害などを論議して運動界全體の氣運を阻止すべき時期ではないのである。縱し運動の爲めに多少學問が犧牲に供せられることがあつても、私共は尙ほ之を忍んで運動の奬勵を絶叫すべき時ではないかと思ふ。

人々の知れるが如く學校に於ける運動は比較的滿足に行はれて居る。若し學校が知育と體育を併立せしむることを事實に於て實現したならば、學生の健康は今日よりも一層增進するに相違はない。然し一度學校を出づれば、我國民は殆んど運動を爲す機會を有して居ないのである。別言すれば我國の社會は學校以外の人

に對して未だ完全なる運動の設備を有して居ないのである。殊に東京の如き大都會に於ては散歩の外殆んど何等の運動法をも見出すことが出來ないのである。歐米諸國に於ては學校以外に於ても倶樂部或は公園等に於て充分なる運動の設備がある。これが爲め多數の人々は學校を卒業したる後に於ても尚ほ運動を繼續することが出來るのである。

今一つ私共の注意すべき問題は婦人の體育を如何にすべきかといふことである。健全なる母を有せずして健全なる國民を得んとすることは無理な注文である。然るに我國の婦人は概して體育を怠つて居るのであるから身體の貧弱なることは言ふまでもなく、其性質に於ても極めて神經的である。故に私共が我國民の健康問題を論ずる時、一方には學校以外の運動設備を必要とすると同時に、一方には婦人の體育を奬勵するの必要を絶叫せざるを得ない。而して國民の體育問題は單に個人の問題にあらずして、又國家の問題である。今回の極東大會に於て比律賓の政府は選手派遣の爲め約二萬圓を補助し、支那政府も亦これが爲め一萬圓を補助したといふことである。私は國民の健康といふ大問題に對して斯の如き支出が決して不相當でないことを信ずる。

徴兵制度に就き軍事當局者に望む

法學博士　吉野作造

（一）

一兩月前から例年の通り徴兵檢査が初まつて、予輩の知つて居る諸學校の學生卒業生中之を受けた者澤山ある。而して之れまた今年に初まつた現象では無い

が、是等の者の多くは――少くとも予輩の知れる限りに於ては――頗る健全なる體格を有し、格別の缺點有るべしとも思はれぬのに、不思議にも不合格の判定を受けて、就役を免除せられて居る。之をば彼等自身が非常な滿足と爲して居るは勿論、周圍の者も亦一樣にこよなき幸福として之を祝つて居る。且つ免役せられた者が其免役を以て檢査官の一種の恩惠的行爲と視て居る事は言ふを俟たない。斯の現象に就て予輩は少しく當局者の注意を喚起したいと思ふ。

最近軍事當局者が一方に徴兵忌避問題を矢釜敷く言ひ立てゝ居る事は公知の事實である。彼等當局者は、一部の道學先生と共に、近來青年の間に兵役義務を輕視するの風を生じ、甚しきは之を忌避せんとするが如き言語道斷の弊風あるを慨歎し、之を取締るためには徴兵猶豫の制度に改正を加ふるとか、其他種々の規則に嚴重なる改革を加ふるとか、隨分頭を惱まして居る。のみならず徴兵檢査の遣り方に就ても、局外から見ては餘りに苛酷に過ぎると思はれる程に嚴重にして居る。去年何某といふ大學の優等卒業生が徴兵忌避の嫌疑を受けて一時世間を騒がしたのも、一面に於ては青年風紀の頽廢を語る現象ではあるが、他の一面に於ては又當局者が如何に苛察なる檢査方法を採つて居るかを明かに語るものである。斯く一方には嚴重に過ぐる程に忌避を取締つて居るのに、他方にはどん〳〵高等の教育を受けた者を兵役義務から免除してやると疑はるゝのは、寔に不思議なる現象と言ふべきでは無いか。

以上の事實から推して考ふると、徴兵問題に就て我我は少くとも次の四點を斷言することが出來る。(一)當局者は徴兵忌避の弊風を憎み、之が絶滅を圖る爲めに非常に苦心して居る事。(二)之れにも拘はらず一般青年の間には、就中高等の教育を受けた者の間には、心中之れを忌避するもの頗る多い事。(忌避の目的を達する爲め、不法なる手段を弄すると否とは姑く之れを問はない)。(三)幸にして兵役を免かるゝを得ば、本人は勿論世間一般概して非常に之れを喜び、甚だしきは

之を祝する者すら有る事。(四)而かも檢査官中には無意識的に忌避の動機に同情し、陰に忌避の目的を遂せしむるもの少からざる事。以上の四點は、當局者が何と之を辯解しても、實際上の事實たることは明白にして一點の疑を容れない。此眼前の事實に對して予輩は實に當局者の注意を喚起せんと欲するのである。

但だ予輩は、當局者が予輩の斯く警告を敢てする趣旨を誤解して、單に當局者の職務上の失態を非難するに止まる者とせられざらん事を希望せざるを得ない。檢査官中には忌避の動機に同情するが如き不屆の者は無いなど丶言ふ眼前の事實に目を被ふた白々しい辯解は、予輩の始めから聞くを欲せざる所である。予輩はまた當局者が、今後檢査官を督勵し、以て大に內部の取締りを嚴重にせんことを要求する意味でもない。然らば何が故に斯くの如き不祥なる現象を態々明るみへ出すのかと云ふに、畢竟此明白なる眼前の事實を事實として許したる上、更に深く其の因て來る所の眞原因を探究し、以て根本的に國家の爲めにこの憂ふべき弊實を絶たんことを欲するからである。

(二)

或人は徴兵を忌避するの弊風が、殊に昨今教育ある青年の間に著しく增長したと言ふが、果して增加したりと見るべきや否やは多少の疑がある。此說は、高等教育を受けつ丶ある壯丁の體格が近年段々惡くなるといふ說と共に、事情を精密に研究して見たならば案外に共論據の薄弱なるものであるかも知れぬ。前にも述べた如く、高等教育を受けた青年が體格に何等缺點無くして、恩惠的に不合格と取扱はれる事實ありとすれば、漫然壯丁の合格不合格の割合を基として近年青年の體格は一般に惡くなつたなど丶論斷するのは正當でない。之と同じく、以前は高等教育を受けた者が大抵免除せられて居つたのに、此頃は段々檢査方法が――少くとも一部分の方面には――頗る嚴重になつた結果、爲めに偶々忌避の疑を蒙る者もポツ〳〵見ゆるやうになつたのである。若し從前も檢査が今日の樣に凡て嚴格であつたなら、今日と同樣忌避の嫌疑を受けた

場合が相當に多かつたらうと思ふ。故に「兵役」と言ふ國家に對して最も尊重すべき義務に關する觀念が、近年特に青年の間に薄くなつたと一概に斷定し去るは少しく誇張に失するの言であると思ふ。けれども兎に角今日の青年の大多數の者の間には、國家に對する此の大切なる義務を重んずるといふ念慮よりも、兵役に就く事に由つて直接に蒙る所の多大の犧牲を苦慮する方の考が先になつて、敢て不法の小策を弄して强て之を免かれんとたくまざるまでも、出來るならば之を免かるゝの僥倖に與りたいと希望して居る者の多いこと丈けは、疑を容れない事實である。斯く高等の教育を受け將來社會の中堅となる可き少壯有爲の青年の間に、大切なる公共的義務を避けんとするの風あるは、當局者の憤慨憂慮を聞くまでもなく、實に國家に取つて由々敷き大問題である。

然らば斯くの如き弊風の生ずる源は何に歸すべきかといふ問題が起る。一部の人は之を單純に青年間に於ける君國奉公の精神の缺如に歸し、全然之を道德問題としてのみ取扱はんとして居る。無論之は一面に於て慥かに一個の道德問題たるに相違ない。從つて一般國民殊に青年者流の道德心を鼓舞作興する事に由つて、此難問の解決は大に容易くなる。然し予輩の見る所では、之れ丈けでは到底問題の全體を解決することは出來ぬと思ふ。此點に於て予輩は特に軍事當局者の深き注意を喚起せんと欲するものである。何故なれば予輩は、青年をして徵兵を忌避するに至らしめたに就いては、一般道德の頹廢といふことも左る事ながら、又軍隊それ自身の方面にも大なる責任ありと信ずるからである。換言すれば、軍隊そのものが兵役を頗る厭ふべきものたらしめて居る事實が無いではないと信ずるからである。

(三)

何を以て軍隊そのものが兵役を厭ふべきものたらしめたと言ふか。此事は少くとも二つの方面から之を論ずる事が出來ると思ふ。

第一は軍隊の非常識と云ふ事である。軍隊の非常識

といふ意味は、苟くも兵役に服する者の直接に接する所の上官が槪して皆非常識なる事をいふのである。軍隊といふ所は全く常識を許さゞる所であると思はしむる程に、彼等は沒常識であり、又一般の風氣が、沒常識を流行せしめて居る。從て多少教育を受けて常識の發達した者に取つては、軍隊は肉體的に苦痛の場所たるのみならず、精神的にも亦非常に苦痛なる場所とならざるを得ない。是れ一つには將校養成の教育が極めて狹隘に失するの結果、彼等は槪して自分達の世界以外他に自由濶達なる世界の存することを知らざるの結果であらうけれども、又一つには軍隊精神若しくは軍紀なるものゝ意義を誤解して居ることにも由ると思ふ。抑も軍隊に最も尊ぶものは命令服從の整然たる規律たることは固より言ふを俟たない。常識を楯として上官の命令を批判するが如きは、決して下級者に之を許す可きではない。けれども、眞の服從は合理的の命令に對してのみ能く行はれ得るものたることを忘れてはならない。軍隊に尊ぶ所は命令服從の眞の――實質上の――秩序である。本當の軍隊的精神は、表面上の形式的の命令服從關係に基かずして、實質上の卽ち心からの命令服從關係に基くものでなければならぬ。それには服從を要求する所の命令そのものが、本來合理的なものでなければならない。少くとも常識に逸れたものであつては不可い。不合理な非常識な命令を發して、それでも上官の命令だから之を奉ぜよと迫り、由つて以て軍隊精神を養ひ得たりと言ふならば大なる誤りである。此點に於て我國の軍隊の內部には慥に根本的の誤見が橫行して居ると思ふ。是れ形式的の命令服從關係が能く行はれて居つて、而かも內心軍隊の非常識を呪ふもの多き所以ではないか。近頃一部軍人の間には、高等教育を受けた壯丁を呪つて、却て無教育なる者よりも成績が惡いと言ふ。焉んぞ知らん、是れ偶々軍隊の遣り方が、如何に教育ある青年の思想感情と一致せざるかを證明するものなることを。教育ある青年をも十分に心服せしめ得る樣にならなければ、我が軍隊は未だ以て眞の成功を誇ることは出來ない。軍事當局者

が壯丁訓育の上に高等なる教育の素養を呪ふが如きは、寧ろ軍隊そのものゝ恥辱をさらけ出すものである。當局者自ら此點に覺醒するに非ずんば、到底我國の青年をして喜んで兵役に就く事西洋諸國の青年の如くならしむることは出來ないと思ふ。

將校の中に非常識なる者の少らざる事は、既に徴兵檢査の際にも現はれて居る。予輩の知人で、徴兵官から第何師團は何處に在るかとか、第何師團長は誰であるかといふが如き愚問を發せられ、偶々之に答へ得ざりしとて滿座の中で非常な侮辱を與へられた者がある。教育勅語、戊申詔書、軍人に賜りたる御詔勅等を字句を謬らず暗誦し得ざりしとて、以ての外の不心得漢と口汚く叱責さるゝといふが如きも、決して稀有の例では無いさうだ。然しそれ位ならば未だ可い。甚だしきは性質の惡い病氣に罹つて居つたからとて、公衆の面前で非常な叱責と侮蔑とを與へたり、又は忌避の疑ありとて打擲を恣にするが如き者すらあるといふ事である。是等は皆檢査の時から既に人民に促して軍隊に對する嫌厭の念を起さしむるものである。將校が兵卒に對して嚴格なる態度を執るのは、軍隊内に在つて固より妨ぐる所無しと雖も、然し檢査官としては、彼等は單に一個の官吏に過ぎず、從つて彼等の壯丁に對するは、普通官廳の役人が人民に對すると何の異なる所無かるべきである。官民其地位を異にするの外、彼等は全然對等の地位に立つものである。些細の事で大聲を上げて怒鳴つたり、甚だしきは打擲を加ふるが如き權限は、決して彼等に許されて居ない。彼等が動もすれば、檢査場に眼鏡を掛けて居つては不可いの、欠伸をしては不可いのと、勝手な拘束を加へるのも亦甚だ間違つて居る。檢査官が、檢査に際して普通の場合に見るを得ざる、窮屈極まる特別の拘束を壯丁に加ふるは、以て如何に彼等の非常識なるかを最も雄辯に語るものではあるまいか。若し我當局者にして、兵役の義務をして最も愉快なる義務たらしめ、軍隊をして最も有効なる國民精神の訓練場たらしめんと欲せば、先づ第一に檢査官の非常識を改め、次いで根本から軍隊

内部の非常識を一掃しなければならない。

第二に軍隊が壯丁の境遇を顧みないといふ事も亦有力なる原因である。軍隊が殊に高等の教育を受けたる者若しくは受けつゝある壯丁に對して兵役の義務を命ずるに方り、殆んど全く彼等の特別なる境遇といふものを顧みてやらない。尤も高等の教育を受くる者に對しては一年志願の制度がある。併しながら、此一年志願の制度に就いても細かに調査して見ると、第一に此制度は高等教育を受けつゝある者の特種なる境遇に適合するやうに定められて居ない。のみならず是等壯丁が一年志願の服役を爲す事より直接に蒙る所の凡ゆる不便に對して、何等の親切なる手段を講じても居ない。今一二の例を以て之を説明せんに、高等の諸學校の學年は九月に始まつて七月に終る。然るに軍隊の役務は十二月に始まるが故に、假令一年の服役でも、學年の中途に始まつて中途に終るが故に、結局二年を棒に振ることになる。且つ服役終了後時々召集せられる場合にも、例へば夏期休暇中に召集するといふが如き壯丁本位の便法を缺くが故に、之れが爲めに亦た一年を損することゝなる。して見れば一年志願の制度は高等教育を受くる者に取り、有難いには有難いが、制度の立て方が宜しきを得ないが爲に、一年で濟む所を二年も三年も懸ることになる。之れが一つ。次には斯くの如き不便あることの結果として、學生は大に學業の進歩に遲れ、又卒業生などは其職業を得るに非常な障礙に遭ふ。職業を得て居る者も、爲めに之を失ことが決して少く無い。其處で政府としては、兵役といふ重大な國家的義務を盡くす事によつて職業を失ふが如き不幸を見ないやうに、懇ろに方法を講じてやる可きである。然るに我國に於ては此點に於て何等の途が講ぜられて居ない。政府部中に職を奉ずる者ですら、現に兵役の爲めに其職を失はしめられた者が澤山ある。之が爲めに進級の遲れた者に至つては固よりいふ迄もない。政府自らが兵役義務の完了者を特に薄遇するとは、餘りに甚だしき矛盾では無いか。政府既に然り。民間の諸會社の如きは更に一層甚しい。斯くては徴兵

を忌避する者の發生するも亦已むを得ないでは無いか。其處で予輩は軍事當局者に望むのである。速に政府を動して、徵兵に應ずる爲めに官吏が失職するが如き事の斷じて無いやうに新に規則を設けて貰ひたい。否、兵役に就く者は之を現職の儘とするは勿論、其服役年限は其儘之を勤續年限に加算し。更に一歩を進め、特に優待して同階級者中の最上位に置くと言ふが如き方法をも講じて貰ひ度いと思ふ。尚又望蜀の希望ではあるが、之も極めて必要なりと思ふのは、私立の會社の被傭人の如きに就いても、兵役に就ける者をば特に優待するやう、出來るならば法律を以て、之が出來ねば便宜會社自身を動して、夫れ〴〵適當なる方法を講じ、若くは講ぜしめて貰ひ度い事である。斯くまで親切なる途を講じなければ、徵兵忌避の弊風を一掃することは到底出來ないと信ずる。人によつては、職業を失つては自分も困り、又自分を便りにする家族も困ると言ふやうな境遇に居る者もある。斯ういふ者に取つては、現在の如き制度の下に在つては徵兵を忌避せざらんとするも事實至難なるものと云はざるを得ない。兵役に就く方が却て利益であるといふ程までに優待しなくとも、兵役に就くが爲めに特に損害を受くるが如き事のないといふやうにするは、絕對緊急の必要であると思ふ。

猶一言すべきは、予輩の要求するが如き事は、何も日本に獨り特例を開くといふには非ずして、實は獨逸などでは夙に實行して居る所である。獨逸の軍國主義があれ丈けに成功して居る所以の根底は、一面實に玆處に在ると思ふ。軍隊に於ける非常識の跋扈といふが如き事實の極めて少ない事も一つの原因であるが、軍隊が進んで國民一般の社會的生活と調和を取る事に努め、殊に高等教育を受くる者に對しては、其特種なる境遇を顧慮して種々の便益を與へて居るといふ點が、彼の國の壯丁をして喜んで兵役に赴かしむる所以であると思ふ。假令何等の便益無くとも、よしんば多少の不便は有つても、苟くも徵兵の義務を忌避するとは怪しからんなど〻憤慨するのみでは、今の時勢には何の

役にも立たぬ。所謂實利的便益を掲げて奉公心を釣るといふことは、固より忌む可きであるけれども、併し旺なるべき奉公心を故らに旺んならしめざるの障害は、速に之を取除かなければならぬではないか。道德論としては「如何なる障害有りとも之を切り拓いて奉公心を旺んにせよ」と言ふに何の妨もない。けれども政治家の經綸としては、奉公心の旺盛に喚發する前途を出來る丈け平坦にして、些の障害でも除き得るものは悉く之れを除いて置くのが當然の話である。前途の平坦といふ根柢が無ければ、奉公心の喚發を一般民衆に望むのは頗る困難である。此點に於て予輩は切に軍事當局者の反省を促し、其遠大なる經綸に訴へ度いと思ふのである。當局者が此點に覺醒し、此點に根本的改革を爲さゞる以上は、如何に兵役義務の貴重なるを說いても、如何に青年風紀の頽廢を罵つて國家當面の危機を絶叫しても、恐らく大した効能は有るまい。道德的に青年風紀の頽廢を責むるは自ら其人がある。軍事當局者が予輩の所謂其當然爲す可きの途をば棚に上げて顧みず、唯他人の領分を冒して青年を責むるに専らならんか、其結果は却て反感を挑發するに止まるであらう。

（四）

之を要するに、徴兵並に軍隊に關する今日の制度は決して完全ではない。今の儘のやうでは、假令進んでこの大切なる義務を盡くさんと欲する者でも、動もすれば之を避けやうとする不心得を起すのは、甚だ慨はしいことではあるが又已むを得ない。是れ世間が不知不識忌避の動機に同情する所以であり、又檢査官までが同じく無意識的に之に同情するに至る所以である。一方には忌避を矢釜敷く取締る陸軍當局あり、他方には其の下に使はるゝ官吏が知らずして忌避を庇護するの結果を生ずるに至るといふのは、豈皮肉なる矛盾では無いか。而して此現象は云ふ迄もなく實に國家の爲め由々敷き大事である。

世間一般が忌避の動機に同情する許りではなく、更に予輩が一歩を進めて軍事當局者の切實なる注意を喚

起したいのは、國家の公共の機關までが事實上忌避を助くるに等しき行動を敢てして憚らない事である。官公立の學校が、特典を有する多くの私立學校と共に、徵兵猶豫の特權を濫用するといふ公知の事實は其最も著るしき例である。曾て某省の官吏が、現に東京に居りながら、表面上外國駐在の命令を受けて如何にも海外に在るかの如くに取繕ひ、以てうまく〱と徵兵を免かれたといふ事實を予輩は知つて居る。當該官省が全然此事實を與り知らずといふ事は出來ないから、言はゞ此事實は、官憲自ら其部下の官吏をして徵兵を忌避せしめたものと言はなければならない。是等の事實は必ずしも今日の軍隊の制度が惡いから起るとのみ言ふことは出來ぬだらう。けれども、少くとも制度がもつと良かつたならば、こんな不都合な事實はさう澤山は起らずに濟んだらうと想像せらるゝのである。

更に一歩を進めて多少極端に論ずるを許すならば、國家が自ら一部階級の徵兵忌避を默過して居るといふことも出來る。何故なれば今日我國の法律は、滿三十二歳まで外國に滯在する者に、服役義務を免除して居るからである。尤も此制度は他に相當の理由があつて設けられたものに相違ない。けれども今日此制度を最も多く利用して居るものは、必要無きに其子弟を海外に送り、以て徵兵忌避の目的を達せしめて居る我國の富有なる上流社會でないか。見よ、現に富豪の子弟にして貴重なる兵役の義務を盡せるもの何人あるかを。貴族の間には進んで軍人になるものも固より少からずあるが、其以外の者は、病弱初めより問題に入らぬ者は姑く措き、他は大抵外國の放浪によつて服役の義務を免かれた連中のみである。して見れば、此制度は其本來の目的如何に拘はらず、今日は兎に角徵兵忌避の目的の爲めに盛に利用されて居ることは疑ない。故に若し政府が徵兵忌避を熱心に取締らんとならば、先づ以て此制度に大斧鉞を加へねばならぬ。而かも國家は此方面は全然顧みずして平然として貴族富豪の濫用に委してある。然らば國家は自ら一部階級の徵兵忌避を默認して居ると責められても、恐らく一言辯解の辭は無

からうではないか。而して斯れを此儘に放任して置くのは、實に一般の風教に害あるのみならず、又一面に於て甚だ不公平である。のみならず貴族富豪の階級に兵役を免れしむる結果として、一方には彼等に、此貴重なる義務の遂行に由つて得らるべき奉公心涵養の好機會を失はしめ、又他方には下層階級の者を促して、國家は我々の階級にのみ此血役を課して居るとの不平の念慮を養はしむるの大弊害がある。其他下層階級のみより專ら兵卒を徴募するの結果は、兵の素質を惡くするといふ事もある。兵そのものゝ素質が惡るければ、從て下士も將校も心から兵を愛撫するといふ精神を薄くするに至り、さらでも非常識になり易き軍隊を、益々非常識の跋扈に委する事を避け難い。

以上論ずる所に據つて、予輩が軍事當局者に希望せんとする趣旨は大體明瞭になつたと思ふ。けれども解り易くする爲めに、更に之を約言するならば、予輩の希望は主として次の四點である。

(一)軍隊内部の生活並に訓練方法を根本的に改良し、凡て常識の上に健全にして嚴肅なる規律を立つる事。

(二)軍隊と壯丁との關係を密接にし、殊に高等なる教育を受くる壯丁の各自の境遇は特に之を尊重し、積極的に又消極的に力めて其便宜を圖る事。

(三)上流階級は國民一般の儀表なるが故に、制度上は勿論、事實上に於ても、彼等の兵役免除は出來る丈け之を制限する事。就中貴族の階級には原則として絶對に兵役を免除せざる方針を採る事。

(四)以上の諸點を十分改善したる上、徴兵檢査官を戒飭して最も嚴正公平なる裁定を爲さしむる事。就中教育の有無によつて採否の決定に偏頗あらしむ可からざる事。

初めて議政壇上に立つに當つて予の政治意見を述ぶ

▽選擧權大擴張、海軍大擴張・日支聯盟

法學博士　今井嘉幸

私は學生時代からの考で前半生を支那の革命の爲めに苦心した。何事も貢獻するところはなかつたが、苦心する事は苦心した。支那は大體に於ては革命を遂げた。形がついた。そこで此方に歸つて後半生は兎も角も日本の政界の爲めに苦心丈けはして見たいと考へて居る。これも貢獻は出來ぬかも知れんが、苦心丈けはして見たいと考へて居る。それで先づ日本の政治上の狀態殊に内政の有様を見るといふと、立憲政治といふものが運用されてうまく行き居るか何うかといふと、或意味に於ては今日の支那よりも劣ると思ふ。之は所謂元老とか閥族とか跋扈したり、それから國會が無力であるとかいふ點から見て何うもさう考へて居る。此等の缺點を改める根本は、何うしても選擧權の大擴張といふ事に持つて行かねばならぬと思ふ。選擧權は今日の選擧法によると、國會は國民の代表者といふよりも寧ろ地方の選擧ブローカーの代表者である。故に從つて國會によい人が出て來ない。又國民との間は疎遠で、其結果無力になる。國會が無力なるが故に、憲法上現はれてはいかぬところの閥族元老なるものが現はれる。故にどうしても選擧權の大擴張によつて此弊風を矯めねばならぬ。

然らば選擧權の擴張はどれ位まで進めばよいかと言へば、先づブローカー團の網を打破せねばならぬ。大體の見當は今日の選擧權の十倍位まで漕ぎ附けねばならぬ。それ丈けやつた所で決して突飛ではない。なぜなれば今日は國民の二パーセント半しか選擧權を有つてゐない。然るに英國は二十パーセント、佛米は三十パーセントある。故に十倍しても此等の國と同じ事になる。さうするにはよく世の中で言ふやうに納税額の標準を下げて、五圓とか二圓とか、又は中學校卒業程度とかいふ間取ろかしい事では出來ぬ。其兩方を取つても半分位しかならない。だから他の標準からもウント擴張する、例へば小學校卒業者に皆與へる位でなければ駄目であると思ふ。然し之は國會では反對するに決つて居る。それは何處の國の歷史でも皆さうであつた。國會は其時の選擧法の産物なるが故に、選擧法が改まると自分が出られるかどうか分らぬ。故に國會外の國民の聲で、其處へ持つて行かなければならぬ。此意味に於て私はさういふ事を遣りたい考を有つて居る。國會議員になるは其の爲めには大した事でない。寧ろ外でやつた方がよかつたらうと思ふ。斯くの如き事をする者は國會に於ては裏切者になるだらう。然し日本の政治の缺點の根本は此處にあるから、他の人から裏切者と言はれても、國民の後援に

よつて遣り遂げて見たいと思ふ。

それから其次ぎに日本の國防に於て非常に恐るべき缺點があると思ふ。國防の不完備についてはよく支那を聯想するが、或意味に於ては之も支那と大差なしと思ふ。なぜなれば日本の今日の國防といふ上から見れば、陸軍は問題にしなくてもよい。海軍丈けが問題である。ところが其海軍なるものは今日の狀態に於ては殆んど之れ無きに等しきもので、戰爭前まではさうは思はなかつたが、戰爭の狀態を見ると、實に恐ろしい感がある。之は海軍の擴張と俗に云ふが、私の考は擴張ではなくて殆んど新設といつた方が適當である。支那で新設すると同じ位に新設せねばならぬ程欠缺を生じて居る。然し此問題も從來餘り國民が考へて居る事が少かつたのみならず、內政の缺點からして之が藩閥者流の思ふまゝに決せられた。例へば海軍と陸軍と平均しなくてはならぬと云ふ事を考へたり、又之は口には云はぬが心の中には或一定の年限に陸軍を增設せぬと自分の乾兒達の地位を維持させ難いと云ふやうな考もあつたやうに見える。詰り閥の爲めに旅團を設けるとか、人の爲めに師團を設けるとかいふ犧牲になつて居つた。然し之は斯ういふ問題ではないので、此點は國民は大いに反省しなければならぬと思ふ。約りさういふ者の遣る我儘に任かして置かずに、國民は日本の國防の欠缺が何處にあるかを考へ、海軍の大擴張を計らねばならぬ。然し之は金の入る事て、なか〳〵容易に出來ぬ。然し此點については予は日本の師團を減師してもよい、場合によりては半減位にしてもよい位に考へて居る。然し私は今日の國民は自分共の國防の欠缺を眞に自覺したならば之が爲めに增税するを拒まぬだらうと思ふ。只の增税ではない。自分共の國防の爲めの增税である。曾て戰艦の爲に官吏の月俸の幾分を醵金せしめた事があるではないか。但しどういふ方面に增税するかは勿論愼重の研究を俟たねばならぬが、此國防の第一要件たる海軍大擴張の爲めに出せないと云ふ事はないと私は思ふ。

第三に外交の事なるが、外交殊に支那の外交についても、從來政府の外交方針も、又國民の外交に對する考もメチヤ〳〵で、定見といふものはなかつたと考へる。例へば支那を分割して方々から切り取つて行くやうな方面に向つて、之を意識し或は意識せずにさういふ風に進んで居つたやうな場合もある。又さういふ風に支那を分割して了はなくても、列國の共同管理の下に將來すべき運命の下に導くやうな遣り方、之も意識し又意識せずにやる事往々にしてあつた。けれども此二つの遣方は共に支那自身を亡ぼすばかりではない。結局日本自身をも亡ぼすべきものであるから之を是非共避けなくてはならぬ。それで何處までも支那保全——それも口丈けではなく眞實に保全する遣方をせねばならぬ。けれども此支那を保全すると云ふ事は只ではいかぬ。詰り「天は自ら助くるものを助く」であつて、支那の助かる途は先づ第一に支那自身が自覺しなくてはならぬ。自覺したる支那人をして支那の國政を操らしめねばならぬ。淸朝とか袁とか淸朝末の官吏に支那を操らしては、日本がいくら之を助けて遣らうとしたとて出來ぬ。故に各種の方法を以て、支那の自覺者をして支那を支配せしめねばならぬ。今まで外國に逃れた者も今は大抵歸つたから、此等のものをして政府の實權を操る處までコギつけしめねば駄目だ。さうすれば支那といふものはそれによつて全きを得る。恰度日本が維新の革命をやつた爲めに助かつたやうに、支那も之によつて助かる。のみならずさういふ類の人間は何うしても日本と手を携へて行かねばならぬ事を感じて居る。又今まで長い間亡命して困しい事に堪へて來た節操もある人間なる故、私等の考へて居る眞正な意味の日支聯盟は之によりて出來ると思ふ。さうすれば其他の些末の問題は之によつて刃を迎へて解けるのである。日支親善とか日支提携とかいふが、商賣をするとか利權

を握る爲めに提携するのではいけない。外交の根柢に於て此頃の流行語たる、所謂大亞細亞主義より起るところの提携親善ではなくてはいかぬと思ふ。詰り我國の外交方針といふものを此意味に於ける大亞細亞主義に於ける聯盟、親善、提携にしたいと思ふ。

まア私の重もな政治上の希望は斯んなものであるが、然し私はどの黨派にも屬しないで一人ポツチであるから、議會内に於ける勢力は極く微弱なものと思ふ。然し私は政黨といふものが立憲政治に不必要と考ふるのではない。政黨の必要を認むるも、之に入つて行くといふ丈けの考を起し得べき政黨は今のところない。之は餘り門外漢で政界の事情に暗いところから起つたので、永い事やつて居る中には多少の缺點を認めても、入ることになるかも知れんが、今のところはさう云ふ考は起らない。若し私の考へて居るやうな選擧權の擴張をやれば今の代議士は所謂選擧ブローカーを代表する代議士であり、國會も又此等代議士の集つた會合であるから全く其面目を改むることになる。而して此處に新らしい政界の分野が起らざるを得ない。其處に我々の始終し得る政黨も自ら出來るだらうと思ふ。けれども此選擧權擴張も前途遼遠でなか／＼容易に出來ぬであらう。近き將來に於ては私は矢張り無援孤立で非常に力ない事と思ふそれで只議會といふもの丶勢力のみを恃ます其背後にある國民の後援に俟つより外なからうと思ふ。我々も正義と信ずるところを取つて進んで行き居る間は、議會に助けがなくとも、眞に國事を憂ふる國民と共に國家の事を苦心し盡力して行く事が出來ると考へて居る。

▽敢て議政壇上に立つに至つた所以

押川方義

超然主義を執る現内閣の存續を默認するは、國家國民に取つて非常の不利益である。何故に不利益であるかと言ふに、天子と人民との間に、政治上に特別の關係ある中間階級が介在して居る事は、上下の意思の疏通を妨ぐ障壁となり、國運進展の上に償ふべからざる障礙を來たすからである。かゝる中間階級、別言すれば所謂閥族官僚が跋扈して國政を專らにする以上は、何處に圓滿なる憲法政治の遂行を覓め得やう。吾輩が老大の身を計らず敢て議政壇上に立つに至つたのも、畢竟かゝる民意輿論を無視したる超然内閣を絶滅して、憲政の圓滿なる完成に力めたいからである。

現内閣の對外政策に就いても、各條に於て不同意の點が澤山ある。歐洲列強に對する政策に就ては姑く之れを問はないにしても、其對支政策丈けに見ても、現政府の執つた方針は根本的に誤つたものである。所謂親善方針と云ふやうな事も、支那人民に取つては決して徹底して居らぬ。却て段内閣を保護するものと見られて居る。之れを歡迎するものは、今日に於ては北京政府と之れに隸屬して居る者位である。南方派などは贊成せぬのみか事實に於て反對して居る。親善それ自身が惡い事はない。但國と國とが親善なるべきは國際上當然の事で、事改めて之れを標榜する必要は無いのである。如何に之を唱へても迚も支那人に徹底する譯は無いのみならず、却て支那に在る日本人は爲めに各方面に於て種々の苦

し致つてゐる事は、滯支友人の通告によつて知つてゐる。

更に若し世上に言ふ事が事實であれば、日本は歐洲列强と共に段內閣を强要し若しくは勸告して、支那をして獨逸に對する戰爭に參加せしめんとして居ると云ふ。之れは英、米、露、佛としてはさもあるべき事かも知れないが、日本の立場としては參戰を支那に勸告するなどは隨分表立つた失策で、日、支兩國の爲めには何の役にも立たぬ不利益であると思ふ。米國が交戰狀態に入つたからとて、支那を勸告して同じく戰爭の渦中に引入れやうとするのは、人道論にも戾つてゐる。百害あつて一利なしとは此事で、それこそ所謂親善主義に妨害を來たし、後には手も足も出ぬ結果になるに違ひない。然らば支那に對して如何したらば可いか。之れに就いては我輩にも相當の愚案があるが、それは外交の機微に屬する事で今は妄りに口外する限りではない。若し質問する機會でもあれば議會で大に所懷を開陳したいと思つてゐる。

選擧權擴張は言ふまでも無く、出來得る丈け實行されねばならぬ問題と思ふ。其方法に就いては種々の方案もあらうが、今日のやうな極端な制限を設いて、國民の參政權を縮少してゐるのは各國に例が無い。然らば其擴張は如何したら可いか。今假りに十圓の納稅額を五圓にしたからとて倍にはならぬ。せひ〳〵二割位である。二圓にした處で五割も增へやしない。だから一派の人の云ふが如く納稅を低度にしたからとて相變らず少數の人を得るに過ぎない。故に納稅制度を癈して國民敎育を了つた者は皆投票權を有するやうにしたい。然し選擧權を擴張した丈けで選擧上の事が非常に革新され、其面目を一新する事が出來ると思ふのは早計である。さうすれば今日よりはよりよいと云ふ丈けで、實は選擧界の腐敗は、寧ろ政府が取締りの名目の下に選擧に干涉し過ぎたりする處より生ずる。根本に於て政府の方が改めなければ、いくら選擧權を擴張しても、これに唯徒らに有權者の數を大にするのみで、却て取締りに手數が掛る位が落ちである。此點に於ても又大に政府に反省して貰ひたい點が多くあると思ふ。

▽初めて議政壇上に立つに當り予の政見を述ぶ

ドクトル、オブ、サイエンス　植原悅二郎

現今の日本の政治組織では一代議士が、否議會に多數を有する一政黨が、如何なる主義政見を有して居つても、直接之れを實現することは殆んど不可能である。故に私が如何なる政見を有つて居ると云ふて見た所が、直ちに之れを體現することが不可能であるとすれば其價値は甚だ尠ないものである。されば私の政見は斯くあるものと云ふて見た處で、結局それを實現したいと云ふ希望に止まつて、其實行に付いては甚だ覺束ないことである。殊に私の屬する政黨は小數黨、而かも超然內閣の存在を默納し或は是認せざるものである。されば私の政見なるものは縱しや發表して見た所が積極的の價値あるものとは思はれぬ。然し議政壇上に於いて而已ならず、外部に於いても常に之れを主張し、且之れを力說すれば、早晩實現の期に到達するに違ひない。此意味に於いて私の政見が意義あるもの、又は價値あるものとすればすることが出來る。故に初めて議政壇上に立つたからと云ふて、私の政見に特別の價値が生ずるのではない。唯從來よりも直接議政壇上に立つ人とより多く接近するのであるから、若し私の政見が立憲政治を實現する爲め、或は國利民福を增進す

る爲め、他の人の政見より一層徹底的のものであり又一層有力なるものであるとすれば、之れと感を同ふする人をより多く見出すやうになると思ふ。私の政見に於いて之れ以上の期待を爲すことは昨今の場合不可能である。

私は私の政治上の主義を數々發表して居るから、今更ら改めて云ふを要せぬ。唯一言にして之れを述ぶれば『君民一致』の政治の實現であると云ふことだ。語を換へて云へば、國民の生活を、土臺として行ひ得る政治組織即ち名實相伴ふ立憲政體の政治組織を作り、君民一致の政治を實現すると云ふことである。我國民をして世界的に發達せしめ、世界各國民間に於ける優者たらしめるには、國民の生活に直接觸れる政治を行はなければならぬ。政治は國民の爲めに行ふべきものである。故に政治の中心は常に國民でなければならぬ。國民があつて始めて國家が生ずるのである。國民の利福を根本とする政治に依らざれば、國家國民の健全なる發達を計ることは不可能である。而して斯かる政治組織を完成し君民一致の政治を實現せんとすることが私の主義である。

此私の主義が根本となり私の政見が生ずるのだ。之れには國民を基礎とする内閣即ち責任内閣の實現を計ると云ふことが第一の問題である。責任内閣と云ふことは、議會の多數に應じて進退する内閣と云ふ意味である。國民を代表するものが政局に立たずして國民を基礎とする政治の行はるべき筈がない。而して責任内閣を建設するには、幾多の方法がある。一時に責任内閣を作りたいと云つて見た處が、さう容易く作り得べきものではない。現今に於いては責任内閣の組織を不可能ならしむる幾多の官制がある。私は責任内閣組織の階梯として第一に是等の官制を改革したいと思ふ。其一例を云へば海陸軍官制である。現在の海陸軍官制により海陸軍大臣たるものは、海陸軍の大中將と制限されて居る。蓋し、此官制の存在は獨り非立憲のみならず違憲である。我國の憲法の規定によれば、何人でも國務大臣となり得べき筈である。然るに此官制の存在するが爲めに海陸軍大臣は、海陸軍の大中將に制限されて居る。而して此官制により藩閥及び軍閥は、其勢力を維持し得るのである。藩閥政治家が克く今日まで我國の政權を左右し來りしは、此官制により海陸軍即ち軍閥を左右しつゝあるが爲めである。此官制か廢止さるれば、藩閥政治家は其勢力の基礎を覆される譯である。而して責任内閣實現の期は著しく促進せしめらるゝのみならず、立憲政治の健全なる發達を計ることが出來る。故に私は此官制及び其他責任内閣を實現するに障害となる官制の廢止を企て、憲政の健全なる發達を計るべき根底を築きたいと思ふ。

第二に私は選擧權の擴張を以て私の政見の重要なる一つとして居る。約六千萬の人口を有し百三四十萬の有權者によりて代議士を選出するが如き状態にては、國民の生活を基礎としたる政治を行ふべき健全なる道を築くことは不可能である。國家は云ふまでもなく國民のものである。而已ならず國家は國民のものなりと國民各自に自覺せしむることは、國民をして眞に愛國の念を生ぜしむる所以である。國家を左右する政治を行ふ參政權を國民に與へずして、國民をして國家を愛せしめんとすることは不可能である。且つ我國現在の政界の腐敗の根元は、選擧權の範圍の縮少されて居ることに起因して居る。政界の腐敗は凡て少數者が其實權を左右することによりて醸さるゝのである。實際、選擧界に於ては多額納税議員の選擧、伯子男爵の選擧が最も腐敗の著しきものである。選擧權が擴張さるれば選擧界は、自然に廓清される。而して選擧人と代議士の關係も密接になる。斯くて代議士が選擧人に其勢力の中心を置くやうになれば、超然内閣を消滅せしむることは左まで困難ではない。故に予は出來得べくんば普通選擧の實現を希望するのである。

第三に我國民は人權と自由との保障に對し不備なる法律を有して居る文明國民はない。私は有ゆる機會を利用し、國民の人權と自由を確保する法律を制定することに努力したいと思ふ。

第四に恐らく我國の財政ほど不統一なるものはない。而して我國の豫算案ほど一般の國民に容易に會得出來ぬやうに編製されて居るものはない。一國の歲入歲出は最も國民に判り易くされべきものである。之れには先づ豫算の編製法を改めなければならぬ。先づ第一に豫算の編製法を改め、一般の國民に我國の歲入歲出を明瞭に理解され得るやうになし、漸次特別會計、官營事業の範圍を出來得る丈け縮少し、減債基金を全廢し、財政の統一を計り、國家凡ての財政をして直接議會の支配を受けしむるやうにしたいと思ふ。之れは私の財政に對する政見である。

第五に各財政を整理整頓し、而して我國民各自の負擔を公平ならしむる税制を築くことは目下の急務であると思ふ。之れも私の希望する政見の一つである。

第六に歐洲戰亂によりて變化せる世界の大勢を洞察し、それを根柢とし我國向後の對外政策を建設しなければならぬ。これには我國將來の國是を軍國主義とせず商工業國主義としなければならぬ。斯くして日支親善、日米親善の根本政策も確立出來ると思ふ。這は頗る抽象的ではあるが、之れは私の外交に對する政見である。

是等は私が個人として有して居る政見である。初めて議政壇上に立つたから作つたものではない。私の深き信念より出づる處の私一個の政見である。故に之れが議政壇上に於いて如何なる價値を有するかと云ふことは、固より問題外である。私が一個人として如此政見を有して居つても議會の多數而已ならず　今日の場合に於いては、藩閥及官僚政治家が之れと同意見でなければ其實現を見ることは不可能である。而して私の關する政黨が略之れと同樣なる政見を有するにあらざれば、議政壇上に於いて是等を具體化し、發表し得る機會を得るや否やも亦疑問である。と云つて議會に列する以上獨り立ちすることは、立憲政治の本旨に悖るものである。議會に於いて一人一黨と云ふが如きことは、無能力を意味することである。議會に連なる以上自分の意見と、縱しや黨の意見と全部一致せざるにせよ、團體的行動を採らねばならぬ。而して之れを爲すことは、縱しや自分の意見を全部表はし能はざるにせよ、多少なりとて實現せしむべき端緒を開く階程である。如何なる人と雖も其政見に於いて多少の差異あるに過ぎない。乍併團體的行動を採るが爲めに其主張を捨てて一致の步調を取ることは、政黨の勢力廣く云へば議會の勢力、倘更らに廣く云へば國民の勢力を政治上に表現する唯一の途である。代議士たるものは此意味に於いて其個々の政見を比較的有意義なるものたらしめ得ると信ずる黨派に結び、團體的行動を採らねばならぬ。而して之れが爲め、自分の政見が議政壇上に於いて思ふやうに發表し得られぬこともあるであらう。乍併立憲政治を實現するには、政黨の勢力即ち議會の勢力を增進することが第一の階程である。此意味に於いて、私は私の政見或は政見の一部を比較的より能く意義あるものとならしめ得ると思ふ政黨に結んで居るのだ。故に私の政見は私一個のものであつて黨のものでないと云ふと共に、私の政見或は政見の一部が直ちに議政壇上に於て實現され得るものとも考へて居るのではない。只出來得る限り是等を實現せしむることに、其屬する黨内に於いても或は議會に於いても努力せんと覺悟して居るのみである。

▽議員となれば議員として全力を盡すのみ

法學博士 氣賀勘重

私は議會に出たのは自分で進んで出たのではない。全く準備がなかつたのだが多くの人に勸められて、其結果とう／＼出ることになつたのである。どつちが初めであつたか分らぬが大いに困つた。

政友會からも憲政會からも、又中立黨としても候補として出ることを勸められたが、皆同じやうに斷つたのである。けれども郷里の政友會の連中が最も熱心で何處までもつ いて來て、三度も四度も遣つて來たので、つひ其方から出なければならぬ事になつた。私は固より政友會へ入つて居つた譯ではなく、只從來の選擧で一二回政友會に同情した丈けである。けれども此等の連中が是非此人間を議會に送るといふ意味で私を推すと云ふのであるから致し方がない。それに私は元來形式論には全く趣味がなく、政黨に基礎があるとかないとか、其う云ふ形式の議論は普段からした事がなく又研究した事もなく、只立憲政治である以上、多數の人民と一致するやうな政治をなすべきものと考へて居る。故に今日の政治は政黨に基礎があるとか無いとかいふよりも寧ろ代議士は相當の人が出て、問題と政策によつて贊否を決するのが適當であると思つてゐる。其意味から私の意見は略ぼ政友會の意見と似寄つて居る。けれど、意見が似寄て居るからとて政友會から出たといふ譯ではない。只友人知己が熱心に勸めて吳れるので出た丈けである。元來政治問題は私の柄ではない。經濟問題については仲間に自分の意見を述べて些か自分の研究した結果の實現に勸める。又私は元來演說嫌ひであるから、演說はせぬ。又諸君のお勸めが切であるから一度丈け諸君の御勸めに從つて出ると云ふ事を友人達に話した。故に選擧も全く人任せであつて、新聞の上で悲觀されても樂觀されても私には分らなかつた。それで今政治上何ういふ意見を有つて居るかと質問されても、直ちに之と答へ得る程の意見もない。只宣言書でも言明した通り、政爭に關係した事は何もなく自分の研究で國家の利益と信ずる事は、之を同僚に說いて、經濟財政に關する平素の意見を行ふ事に盡力するが、具體的に一々の問題について細かい意見を立てる事は出來ない。又其立場についても自分でも永い間學窓に暮らした人間が、あゝいふ所に立つて役に立つか如何か疑問だ。世間では新らしい人間の一人として何とか彼とか云つて吳れるが、自分では大なる抱負も無い。唯私の平常の主義は其日の仕事を忠實にすると云ふ方針で、議員になつたからは議員として自分の力の及ぶ限りを盡す丈けである。今政友會に推されて出たからは差當り政友會と行動を同じうする積りである。けれども一政黨の執る政策も其時の情勢によつて多少異る。其う云ふ場合に自分の行動が何時までも政友會のそれと一致し得るかどうか自分でも分らぬ。私は名前に拘泥する事が一番嫌ひであるから、名前によつて進退を拘束されたりすることはせぬ積りである。

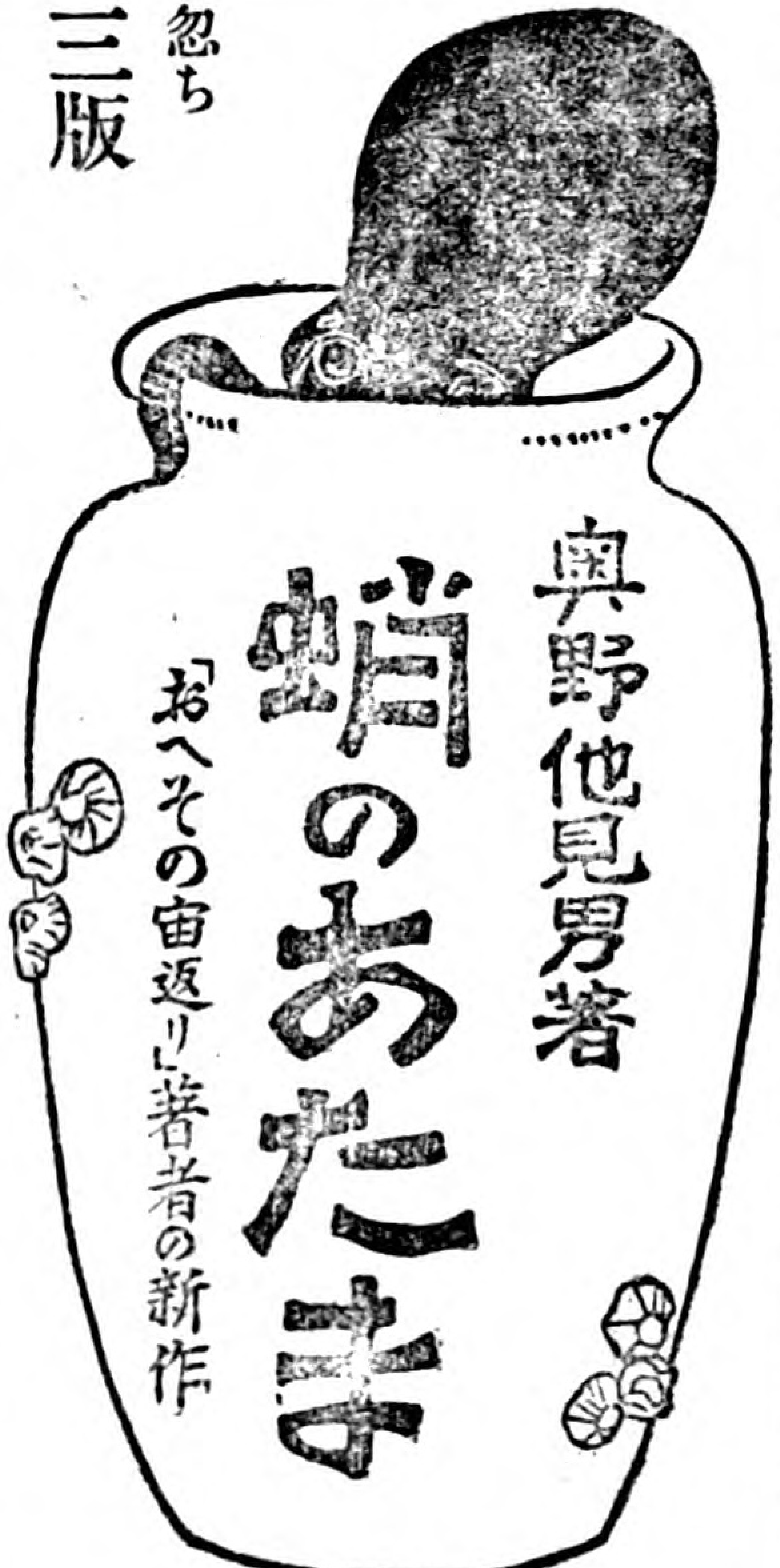
奥野他見男著〔最新刊〕

あの山戀し海戀し

紙數約四百頁　菊判截型更紗表紙上製

□定價七十錢□
□郵稅八錢□

詩の嶋戀の嶋伊豆は大嶋乙女に口說かれて大いに色男がり或は伊香保に遊んで此の景勝の地浪子輩の咯血に穢されたかと痛憤し其他日本アルプス飛彈の山水伊豆半島赤城山上湖畔の一夏箱根の幽境中禪寺の月夜等氏獨特の筆致は觀察の妙巧と根俟つて躍々として活き飽く所を知らず陳腐なる案內記錄を排して敢て此決著を薦む。



著者肖像スケッチ入

ポイント活字　三百八十餘頁　上製　定價七十錢　郵稅八錢

忽ち三版

題旣に群盲を壓す況んや內容の卓拔なるに於てをや。前の激甚なる蘆花漱石と比せられつゝあるは人皆よく知る。著者が著作の賣行なる滑稽あり興趣滾々として頭角を拔くの傑作にして諷刺あり警句あり上品の著作より嶄然として盡きず敢て一讀を薦む。本書は蓋し從

▲奥野他見男著（三十版）價四十錢稅四錢
面白い〳〵佛頂面で名高い某博士も之を拔くが早いか思はず噴き出せりといふ

▲奥野他見男著（十四版）價四十錢稅四錢
是でもか〳〵と追つ驅けて來る樣な面白さ可笑しさ著者自ら噴出せりと云ふ

▲奥野他見男著（忽ち七版）價四十錢稅四錢
大人も子供も片端から轉け倒されば止まぬ滑稽さ面白さ善良なる家庭の好讀み物

おへその宙返り
諷刺滑稽　先生樣と生徒
初旅の呂ちやん

發行所　東京中澁谷町　振替東京七八六四　東文堂

發賣所　東京神田　振替二七〇　東京堂



書眼に映じたる支那

小杉生

(一)西湖新々旅館にて (四月九日)

西湖は恐らく、今が一番好い時節であらうと思ふ、玉蘭も桃も盛りで、楊柳の新葉も鮮かに、湖にも山にも烟霞多く、丁度内地の袷程な暖かさだ、此の新々旅館と云ふのは、支那人が營業して居る西洋人向きのパンションで、葛嶺を背にし孤山を前にし、二階の窓からは恰んど西湖一鏡眼中に在る景勝だ、西湖と云ふ名は、つまり城西の湖と云ふ意味で、方々にあるさうであるが、此の杭州の西湖が支那でも著明であるし、日本人にも聞へて居る、昨日上海で知合になつた瀬野君と徒歩で此の湖を一週して見たが、先づ支那里二十二里日本の四里ほどだから、元より湖として支那に於いて數に入る程の大きさではない、大體此の湖は、其の東方の地が既に湖面より餘程低くなつて居るので、放任して置けば疾くに乾いた野原になつて了ふ可きを、人の力で保つて居るのだ、その位だから西湖の風景と云ふものは酷く人工的であり、一般の感じは纖媚な女性的のものである、それ等が支那の他の山水には稀な處で珍らしいから見物が持てはやす次第であらう、

西湖佳話と云ふ本がある、西湖の岸の名勝舊蹟の一

から十ばかり選んで、その由來を小說的に述べたものである、昔支那に居た故嶺雲氏から貰つて、面白いので二度ばかり讀んだ事があるが、西湖に來た日にぶら〳〵一人步きして眞先きに見出したのが西冷橋畔の名妓蘇小々の墓であつた、是は右の西湖佳話にもたしか西冷韻蹟とか云つて出て居たと思ふが此の蘇小々などこそ善く西湖の女性美を表象し得たものであらうと思はれる、

宿の背後の山に登つて見ると、湖を隔てゝ、丘の上に濃かな烟霞の中に、彼の雷峯塔が望まれる、西湖の山水建築悉く柔和な中に、此の塔ばかりは、他地方の無數の塔に比べても尤も剛壯であるべき形を以つて屹立して居る、夕陽が横さまに此の塔に映ずると、その赭色の煉瓦が烟霞の裡にあつて、且つ自ら烈々と燃えつゝある如き朱金色を帶び、頂から肩へかけて蓬々と草木を茂らせ、恰も一個の古怪雄猛な武夫の立姿を思はしむる、私は尤も此の塔を愛するの餘り、此塔なくば西湖の風光三分の二を減ず可しとさへ思つたものである、西湖の風景は然しながら楊柳と堤と、諸種の建築物とに形づくられて居る、楊柳は何處にも多い、此頃の江南は皆楊柳の江南であらう、堤は長く湖面を走つて幾十の石橋を節として居る、石橋は盡く彼の迫り持ちの半圓橋であるから、水に映つた處は、丁度長い堤の紐に橋の丸い環が付いて居るやうである、楊柳に見えかくれて幾個の寺觀がある、惜しい事には支那は古來兵革が多くて古建築の殘存少く、又殘在したるものも修繕と云ふ事を考へないから、建築の多くは極く近代の凡作である、それでも大きな平面を白で塗つた壁や、屋尖の强度の反りやは、見馴れぬ私の目に、甚だ珍らしく感じられる、一番困るのは岸に割り込んで立てられた西洋風建築である、是等の俗な家屋別莊などが無かつたら、尚一層面白かつたらうにと思はせるけれども、それは口幅の廣い事は申されぬ、箱根日光の洋化の惡俗は斯んなものではない、その上西洋建築と支那建築とは餘程共通點があつて、日本に於ける茅葺屋根とセヽッションほどの奇拔な對象ではない。

支那の繪を見ると、建物が常に平行線で描かれ、或時は遠近法を逆に、向ふへ行つて擴がつてさへ描かれてある、昔は是を見て、遠近法に合つて居ないとして笑つたものであるが、此の二三年の考では中々此處に理合があると思つて來た、遠近法に合はぬなどと云ふのは實に井蛙管見却つて憫笑す可きものである、支那は尤も古く風景畫の發達した國で、彼のミケルアンゼロの頑固爺が、風景畫家は眞の美術家に非ずなどと云つて居る時より、モツトさきに早や幾多の俊才豪傑が風景畫に心血を濺らして居たものだ、(ミケルアンゼロの此の豪語は又別種の意味で、私の喜ぶ處のものなれど)それ等が用ゐた此の非遠近法的描法の持つて居る大きな力は何であるかと云へば、即ち自然の廣さ大いさを現はすものである、去年私は友人の旅行先へ訪ねて行つて、其の油繪の寫生風景畫を見た、それは後に展覧會へ出て、評判の宜かつたものであるから、無論友人としても不出來の作ではなかつたが、しかしその翌日共に散歩して、此處が彼の畫の寫生地だと、示された時には、全く以て別な世界としか思はれなかつた大きさが馬鹿に違ふ、成程、其處に川があり、正面に山があり、三軒ほどの家もある、形は恰んど寫眞的にも狂つては居ない、只大きさが違ふ、それから私は西洋畫の教程には、此の自然の、廣さ大きさに就いて注意される事が少くはないかと思つても見た。

茲に一面の清代の南畫と油繪の初期印象派の風景畫とを比べて見る、靜かに思へば一方の油繪は色彩の描寫であり、空氣の説明であり、又光線の贊美である、そして一方の南畫に私は自然の結構的風景を見得る、此處が兩者の相違點で、各々特長あり等級を論じ難いけれども、しかし私はいづれを珍重す可きかと云へば南畫を採りたい、西洋人は先天的科學者で、物を認め物を究むる事に至つて居る、古支那人は何物にも人性を見出し、何物にも精神を附與した、一幅の風景畫は光を語らず、色彩を語らず、只恐る可き、或は愛す可き、或は尊む可き、或は親む可き自然の精神を表はさんとする。

結局初期印象派の風景畫は、風景畫として前代未發の生面を開いたが、此の自然の遠く且つ大なる容積を暗示するわけには行かない、そこで私はしばらく彼のクールベーにも願望して見るけれども、彼の示す自然の精神は私には餘り快くない、私は只一人彼のターナーを指す、彼の風景畫は記錄でもなく解剖でもなく、明るい廣い非現實的自然であつた。そして此の非現實は彼にあつて甚だ緊切な現實であり、彼と共鳴する者共にも亦實に會心極まる現實の觀念である、シヤヴンヌの壁畫は安定と平靜とを示す事に於て、最も好く壁畫の目的に副つて居る、その原因はいくらもあるけれ共、彼の太陽的觀望から作つた背景もその有力な材料である、太陽的觀望なるが故に、一面の圖に遠近法の消點が限られて居ない、一軒の家と他の一軒の家とは遠近法の關係が別になつて居る、此處即ち支那畫の非遠近法的描法と共通する處で、自然の廣さ大いさを現はす力の存する點である。

一日かねて紹介されて居た大河平と云ふ人を訪問する爲に、地圖を片手にして杭州城内に入つた、地圖の發行年月は今を距る事十五年前であるから、大きに危んだけれども、支那の都市は多く直角に街を劃つてあるから、大した無駄足も踏まずに其家を索ね當てた、此人は龔半仙の大幅、凡そ四尺に七尺程のを持つて居る、龔半仙は故今村紫紅の喜んだもので、清朝諸家の内でも中々進んだ新らしい見識で、仕事をした男である、或人は半仙の圖とセザンヌとを比較して一致點を見出すと云つて居るが、是はセザンヌの方から多少故障も出る事であらう、然し半仙の新味は描法に舊型を捨てゝ、自己の寫生を推し進めたる際に、蹤跡少しく西洋畫風に近づいて見える處にある、大體日本の南畫と支那の南畫を比べると、支那の南畫の方が西洋畫との共通點を多く持つて居る、日本の南畫は餘り自然に向つて目を瞑つて居る爲に、遊戯三昧に墮して居る、支那の南畫は尙心眼を睜つて自然を緊握して居る、支那畫が東西の中ぶらりんではなく、日本畫が餘り離れすぎて居るので、東西兩洋の繪畫を對立して思考する

場合には多く日本の南畫（殊に幕末明治の）を雜へるわけには行かない。

（二）金陵にて　（四月十四日）

南京に來て二日になる、杭州から歸つて、上海より汽船で此の金陵の古都に來たのであるが、上海は全くモウ西洋の一市である、同じ顏色をして同じ字を用ふる日支の國人が、會話に多く英語を使つて居るのを見るにつけても、豪氣な西洋人の仕事の根强いのには感服させられる、日本人がいくら空威張をした處で、到底角力にもならぬであらう、日本に居て壘の上で米の飯を喰つて居る時は、我等は皆個人で、成敗の較量を皆此の米の飯同士でやつて居るが、たとへ百里ほどでも、海を渡つて此等の西洋人の仕事を見せられると、人種の別と云ふ事が明かに個人の頭に印される、去歲佛蘭西や獨逸を歩いて居た時を思ひ出すと、此の人種の別が更に手酷く感じられて、米の飯の個人の質に憐れなる個人たるを覺えた。

それはさて置き、楊子江の大いなるには驚く、何の事はない下總の國の霞ヶ浦ほどの湖水を限りなく連續したものである、それが無氣味な黃濁を以て晝夜に流れ流れて居るのだ、その源は、二萬尺以上の連峯が環立して居る一萬餘尺の大高原だと云ふ、古支那の畫家が、物質の描寫、光線の贊美を擱いて、先づ如何にして此の畏俯すべき大と高と遠とを現はさんかに腐心したのは、無理もない事である、王石谷は淸朝第一の巨手と云ふ、彼は南北の畫派を一身に集めて、大成したものであると云ふ、此の集大成は彼の中年後に行はれたであらうが、しかし我等を以て見れば、彼の作は前期の方が佳い、どうも生前に一代の大家となつた人の作品には、多く一種の官僚臭を帶びて居るものである、彼の臨安山色長卷と云ふのを見たが、是には未だ此の官僚臭なく、規模實に雄大で、しかも仔細に自然の布置を視た處がある、彼又別に長江萬里の長卷があると云ふ事であるが、此の達人は果して、どんな風に此の大江の大を表現し得たであらうか、小生に到つては此の大江に對して只呆然として驚き眺め、やゝ久うして

欠伸を催し、遂ひには長江の中に居て長江を忘れてしまつた、私が此の長江下流から拾ひ得た畫材は、局部局部の小景にすぎない。

南京の荒廢は羅馬の郊外によく似て居る、しかし羅馬では、荒廢を荒廢として保在して、それに見物人を導くやうに設備してあるが、南京では明の故宮壁の磚を、ドシドシ崩して賣つて居る、是も無理はない、大體支那が荒廢そのものであるのだ、南京城の城壁は山と平野とを兼ね包んで、約二方里もあるだらう、その中に沼地と畑と荒野と墓がある、人家は一隅に過ぎない、南京名所として明の孝陵がある、城を出でゝ一里ばかり、畠の間に石馬石象石駝石人の類が出沒連續して、人を陵門に導く、是等の石刻は何れも凡作ではない、殊にその石象などは、現實の象の形似を離れて、而かも尙活けるが如き一個雄大な獸として立つて居る、象は然りながら彼等の常に接し得たものではない、彼等の祖先が常に見常に愛し、喜んで其の形を作つたものは馬である、實に古支那人は、馬の形を圖し刻する事に於ては、世界第一であらう、彼の武梁祠の浮彫りの馬、乃至、西安發掘の塑像の馬などを以つて、希臘、エヂプト、アッシリヤ等の馬に比較して私は常に古支那人の深い藝術的根氣に感ずる、古支那の畫馬に到つては、彼等は馬を描くに當つて、遂ひに之に神性を附した、彼等の馬は最早動物にあらず、人間を超越する事彼の龍、麒麟の如くであるが、龍麟は餘りに空想の產物である、馬の形似の實在的にして、而もその表現の大に非現實的なる點に、小生は一種の强力なる驚異を受ける。

今の支那內地の馬は、多く古と異つては居まい、古から支那にある種類で、日本の如くいろいろの種を雜へたものではあるまいと思ふ、しかし社會の需要も古ほど六ケしくなく、又國力も減つて居るから、大體に於いて古よりは劣つて來、從つて良馬も少くなつて居やう、しかし其胴體の太くして長く、胸廣く、四足短く、平頸(ひらくび)廣く顏の端正なのは、武梁祠の浮彫、西安の土塑に並びに見る處である、土塑の方はその製作の必

要上から脚が太くなつて居る、見た處は騎用よりも輓用に適しさうである、それが却つて今の馬に似て居るが、武梁祠のは脚が細く緊つて居て、如何さま千里一日の駿足を思はしめる、大體日本人ほど動物藝術の下手な民族はない、牧畜の習癖がない爲めであつたらう、西洋でも國に依つて、牧畜術必要の餘り無かつた處は、屹度此動物藝術も進んで居らぬに違ひない、此の明の孝陵中の一小堂に明の太祖の畫像があつた、少許の陰影をも描いて、中々寫生風に出來て居るから、定めし眞容に似て居た事であらうが、その顏と云ふのが、驚く可き異相で、上下の腭骨が駱駝の如く突出し、從つて鼻は龍の如く、鼻の下の長さ三寸にも近い、此の異相の含んで居る性質は、實に復雜だ、小生は精しく太祖の事蹟を知らないが、末世の支那の天下を取るには、正に斯の如きが王者の相であるべきであらう、曾つて袁世凱の寫眞の比較的晩年で精密なのを見た時にも、丁度此の像から先づ襲はれた、淒氣、魔氣の如きものを受けたが、袁君は是に比しては力弱い、此像を見て居ると、天下を取り天下を定めると云ふ、大欲望が一の觀念となつて、民を憐れむのも、臣下を罰するのも、乃至宮嬪を愛するのも、皆此の觀念から出で、決して所謂眞情ではなかりさうに思はれる、結局人間は神ならず、暴君は眞人にして、聖主は却つて魔性かも知れぬ。

支那人は墓を大事にすると云ふが、大事にしかたが日本人とは大分に違ふ、日本人には墓は直ちに紀念塔であるが、支那人は別個の生活に轉じた人の居處の如く見るやうに思はれる、此頃夜になると、獨旅の退屈まぎらしに、上海で買つた聊齋志異を讀んで居るが、單に聊齋ばかりでなく、夥しい支那の奇談書中の過半は、此の墓と死人の生人に交渉した怪話を以て充して居る、日本人は平明輕易な人種だ、故に怪談に乏しい、支那人は執拗深酷な人種だ、それが此の大は甚だ大に高は甚だ高に、遠は甚だ遠なる自然の影響を蒙つて、心情自ら荒唐不可思議を養ひ、そして遂に或は風景畫の背後に鬼氣を帶ばしめ、馬に神性を與へ、怪談を生

り、歴史に誇張を爭ふに到つたのであらう。

風景畫に鬼氣あるものは、支那風景畫の特長の一である、時として北歐人の中古の風景畫にも之を認める事があるが、要するに自然の影響で、之を風暖く天明なる伊太利あたりに求めるわけには行かない、楊子江の黄濁せる大水流の如きは、決して内地で思つた如く暢々として平安なものでは無い、去年の冬、支那の古畫集を見た時に、唐王維と稱する雪景が三葉あつた、一人の日本畫の友人は直ちに之を否定して、筆法が若い、王維に雪景は紋切型だと捨てゝしまつたが、一人の西洋畫家の友人は、何度も何度も眺めて、その畫の持つて居る大沈默の靜寂の力に感じて居た、或はそれが眞物でないにもせよ、必ず眞蹟に彷彿する處あればこそ印行もされたと云ふものであらう、それは問はず、只その持つて居る畫の力を賛嘆した友人を小生は喜ぶものであるが、其雪景はしかし鬼氣と云ふよりは稍少し上等な、或形似以外の感情で、云はゞ雪に神性を與へたとも云はれるやうなものであつた。

（三）長沙の船中にて　（四月二十二日）

長沙は城中の日本旅舍に泊るよりも、寧ろ碇泊せる汽船に宿泊した方が便利である、昨日も今日も降りつゞきで、湘江の水も一尺ほど增し、支那の舟夫は鳶が羽を張つたやうな、棕櫚の簑をつけて、河岸に働いて居る、小生は船のサルンの卓の上で、雨の音をきゝつゝ、此の稿を作つて居る。

南京を出てから、早一週間ほどになる、しかし昔の長江の旅から云へば、眞に電の如く奔つたものであらう、陸放翁の入蜀記は昔より小生の喜ぶものであるが、彼は小生と等しく杭州の西湖邊より、五月に起行して蘇州より無錫金陵を經、武昌あたりに達した時には既に八月となつて居る、尤も風を待つて滯留したばかりではなく、或は古跡を訪ひ、或は詞友と燕飲應酬して居た爲めでもあるが、入蜀記を手にして、遡江の甲板上に立つて居ると、兩岸の小山、城市、灣、磯などの名が或は照合して指點する事を得る、小生の持つて來た日本發行の三四の書物の及ぶ處ではない、しかし汽

船は夜も走るので、其間に折角の手畫も失ふ事が多い。

九江は元の潯陽城、白樂天の琵琶亭は石油の倉庫になつて居る、水滸傳に、潯陽樓に宋江反詩を吟ずと云ふ條があるが、今は右の如き江山を大觀す可き支那流の大酒樓などは見受けられない、反詩も居酒屋の壁などに書かれたのでは、鼠小僧の述懐位にしか受取られぬであらうか。

南京の下關で船に乘つた朝、舳の方で水彩のハンドスケッチをして居る人がある、後から覗いて見ると、甚だ三宅流の筆法に似て居る、前へ廻つて見ると、當の克巳氏であつた。

一體小生は、旅行は一人に限ると云ふ主義であつたが、支那の旅行はどうも連がある方が都合がいゝやうである、殊に會話の出來ぬものなどは、同じ不通同志でも二人集まれば又何とか活路を開く事も出來る、九江にも三宅君と共に一宿したが、船中長江大觀と云ふ寫眞帖を見た時に、廬山の處を開いて見ると、何の事はない瑞西(スヰス)の國の一部が移轉して來たやうなもので、廬山盡く西洋風の別莊で埋つて居る、李白や陶潜が眺めたやうな廬山を頭の中に置いて居る此方も迂濶な次第であるが、此處まで來て西洋別莊を見るには及ぶまいと申合つて、廬山には行かなかつた、しかし廬山も大きな山だから別莊も實は一部分だけで、峰々谷々の瀑布や溪流や又は寺觀や、鄱陽湖の眺めは流石に支那有數の景勝であると云ふ、秋の末冬にかけては西洋人も居まいと聞くと、其頃は如何かすると虎が出ますと話した人があつた、虎が旅人を咬むやうな事は先づ稀であらうけれ共、支那の旅行は內地と違つて中々氣骨が折れる、紙幣が地方々々で通用しない、日本の貨幣は日毎に相場が變化する、遠く旅するには銀貨を持たねばならぬ、銀貨は贋造が少くない、苦力や車夫の爲には銅貨を携へねばならぬ、百圓の銀貨と二圓の銅貨とを何處に容れやう、それは中々重いものである、道を行けば乞食が煩はしい、彼等は驅け行く馬車を追つて、半里位は走り得る、時としては此の乞食が隨分强人と變ぜぬでもない、乞食のみならず下層民は一般に

盜癖を持つ、故に前に云つた重い銀貨袋も身を離す事は出來まい、腰纏十萬と云ふが、百圓の銀貨でも腰につければ中々苦しいものである。

漢口は此處も亦上海を延長したものである、船が埠頭に着く、見る處は櫛比の西洋屋樓である、三宅君は遂ひに怱々として北京に向つてしまつた、小生は此行の眼目長江と洞庭雲夢の澤地に在るが故に、尚留つて武昌あたりに遊び、そして此の長沙に來たのである。

武昌の黃鶴樓は既に烏有となつて居た、此の黃鶴樓の下で、城壁に倚つて下流水を見て居ると、此處、江の幅少しく迫る爲めに、水はいろ／＼にもつれ合つて或は一度び潛りて湧きあがる、あがる時平圓狀に廣がる爲めに風ある日にもその圓面のみ波立たず、滑かにして鏡の如くである、湧きて上るものあれば必ず之に逆らふものがある、玆に於て幾個の小渦を生ずる、小渦は又一條の流勢と他の流勢と繩の如くからみ合ふ際にも生ずる、此時水面長き小段階を生じて、波立ち泡を生じ聲を作すに到る、曾つて豫州の今治の桃山から瀨戶内海の潮の變化を見た事がある、彼と是とはやゝ違ふけれども、水の性命あるが如き事、水の運動の微妙なる事を敎へらるゝは一だ、作者の名を失したけれども、是等の水を見る毎に、思ひ出さるゝは、古い支那畫で北溟と題された橫圖である、その圖の波こそは善く此の活きたる水の神秘さも正しく寫し得た名作であらう、西洋畫に於て我等は水の透明を見る、水のよく物象を映寫し得るを見る、しかし彼等は瀑布にもせよ、波濤にもせよ、是を色彩の塊りとして見る、我等は依つて善く寫されたる物を見得る、北溟の圖の作者の如きは、身直ちに水となり、水と共に波立ち、水と共に渦卷き得たものである、雷が鳴る、長沙地方は雨多く雷が名物だと云ふ、楊柳の枝は風に吹かれて流るゝが如く、對岸微茫として、岳麓山時々その頂をうす墨色に現はすのみである。

長江洞庭一帶の風景を形作る主要なるものは楊柳である、此の樹最も多く他の樹は甚だ希である、そして今が一番楊柳の見頃であらう、芽が開いたばかりであ

るから、その葉は未だ重からず、其線は新にして明るい、古支那畫家は實によく此の樹を査べ、此の樹の習癖を知り此の風神を描くに熟して居る、此の樹を描くには、彼等の描法を參酌するより外に道はない、單に楊柳のみならず、彼等は常に多く用ひらるゝ可き材料、松若しくは竹の如きも等しく、善く其の表現法を極めて居る、態度は彼の西洋畫家の靜物を寫すに似て居る、所期は大に違つて居る、西洋畫家は林檎と皿とを描いて、其物に徹せずんば已まざらんとし、支那畫家はその神を傳へんとする、林檎には物を見、松竹には人を見る。

しかし乍ら、西洋風景畫の樹木は、その何の樹木たるを語らんよりは、よく其の線條の凸凹と、色彩の塊狀を寫さんとして居る、杉の木と檜の木とは、或は區別せられずとも多く問はない、必ずしもすべての場合とは云はず、何の人何の服裝の差別の如く、此の草木の種性の差別を、小生は欲する事がある、すべての木すべての草を等しく表現せん事は、支那畫家の難しとする處で、西洋畫家の尋常の方法である、特殊の木、特殊の草を寫すに臨んで、支那畫家は、恰もその兄その妻を描くが如くである。

小生は柳の描寫を會得しやうとして、細かにその大枝から小枝、それから葉を一つ々々に寫生して行つた、是を上海で買つた印刻の宋の陳居中の柳の圖と比較して見ると、描寫に於て大分の差が見える、しかし一度寫生した爲めに、どうやら其の圖の構成法にも通じて來たので、その上で又更に二枚ほど寫生して見た處が、先の一枚よりは、大分柳に近くなつて見える、思ふに支那畫家の習畫法は之を逆にし、粉本臨摸を先きにし寫生は副であつたらう、之も初の内はそれで結構うまく行つたかも知れぬが、此の臨摸を先きにすると云ふ事が、次第に支那畫日本畫の墮落の因をなしたは確かである。

東洋趣味と西洋趣味との差別、此の差別あつてこそ、始めて人間の文明を莊嚴し得て十分なりと云ふ可きである、東洋畫に陰影なく、西洋畫に陰影ある差別

の如きは、尤も見易きものであるが、是も傾向材料を生じ、材料傾向を推して、加速度に今の差別を生じたのであらう、しかも小生は東洋人なるが故に、東洋趣味なり、西洋人なるが故に西洋趣味ならざる可からずとは思はない、文字と言語とに現せば、區別は判然として居るけれども、物には眞の判然はない、只東洋人の中に東洋趣味ある者多く、西洋人に西洋趣味あるもの多しとは云ひ得る、兩方共に少數の異趣味者あり、又東洋人の東洋趣味あるものと云つても、その個人に就いて細かに檢する時も亦其中に若干の異趣味を認むるに到るだらう、併し之れが爲めに無差別に歸せしめ、又は一方を擧げて、一方を貶すわけには行かない、一人種の繼承せる趣味思想は實に驚く可き根强きものである、支那千年來幾多の藝術家出で、寫生なる名稱は常に傳神なる名稱と、並びつゝあつたが、遂ひに畫面の陰影と、正確なる遠近法は、案出されなかつた、唐の時代既に印度の影響より一時陰影を施すものがあつて、壁面爲めに凸凹の觀をなしたさうであるが、結局一般藝術家の省畧を促すわけに行かなかつた、宋の李成は山上の亭館、飛閣を仰畫すべしと唱へて、自分も此の初步の遠近法を使つたらしいが、多衆は多く顧みず、矢張り平行線的建築畫法を以つて、廣濶の感念を保ち得た。

(四) 北京にて　(五月一日)

船橋上より長江或は洞庭の移り行く景色を見て居れば、實に一卷の物語を讀むにも似て居る、是れ支那に早くから、風景の長卷ある所以であらう、千年前の王維の輞川の卷と云ふものは、書籍に殘つては居るが、實物は既に幾世の昔の灰燼となつてしまつたらう、それを元の趙子昂が摸したと云ふのを、更に乾隆年間に或人が摸したのが、琉球の一家に傳つて居るのを見た事があるが、非常な密畫で、點景の人物寸に滿たず、而も鬚眉面目悉く具はつて居る、日本の風景は此地ほどに長卷を要する事少い、そのかわり日本には物語りの繪卷がある、伊太利亞の壁畫には、此の日本の物語の繪卷の如く、一人の事蹟の幾個かを、一面の圖に集

めたのがあるが、同一の人物が一圖の中に其處にも此處にも見へるので甚だ面白くない、長卷は實に東洋にあつて、西洋になき處のものである、長卷の圖などを描く際にこそ、實に彼の合理的遠近法の不便さを、しみ〴〵と感ずるのである、江湖空濶なるが故に、長卷を生じたと同じ意味で、山高く谷深い山地の表現には正に幅二尺にして長さ五六尺にも及ぶ可き、西洋畫より見れば異樣なる長方形をも要求するに到るであらう、材料も形狀も等しく己む可らざる必要から、生じたものである、日本の畫を買ふ人々は、日本畫と云へば、無差別に縱長の掛軸をのみ求めて居る、支那畫日本畫にも正方形に近い畫面のなかつたわけではない、古には壁畫あり、今でも横物と稱するは、西洋畫の畫面の如き正方形に近い長方形である、此の横物の形が一番自然に適應する畫面で、掛軸の細長形は、要するに床の間の要求が重であらう。

　一部の支那畫家人名辭書を見ても、如何に多く古支那に大家名家が輩出したかゞ覗はれる、それが清末より當今にかけて、只一人も謂へないのはどう云ふものであらうか、建築彫刻などはモット早く此の衰勢を萠して、清初からの建築に恰んど見るべき建物なく、彫刻は何處の寺の本堂へ行つても、皆野蠻藝術のみである、國民の退化が直ちに藝術の野蠻化となつたのであらう、印度なども、此の慘敗の有樣を同うして、出立の早かつたゞけ、變化の時を早くして居るやうである。

　印度人支那人は不思議な根氣を持つて居る、大きな仕事もするが、細かい處は又格別な病的精細を以て、飽かずに同じやうな細かさを重濁した感情で繰り返す、我等が此の二國の近世建築や彫刻に認める蠻氣は思ふに此の點に多く釀されて居る、斯うも云へるかも知れぬ、希臘人や伊太利人、佛蘭西人日本人やの藝術は墮落して惡俗に留まり、尚何處にか文明人の明るさを保つかも知れない、支那人印度人、乃至露西亞人獨逸人の藝術は、退化すれば野蠻藝術となつて、暗く重く沈んで行くと。

　支那のズット古かつた時代、隋唐あたりの畫人の態

度は一番今の我等の所期と近かつたらうと思ふ、丹青は士大夫の餘技也など丶云ひ出してから、次第に藝術を玩具にし、併せて士大夫當人までを玩具にしてのけたらう、芥子園畫傳と云ふ書籍は、支那畫の形式を決めた有力な書籍で、又それだけ弊害も多く、殊に日本の幕末畫家に夥しい迷妄を被らしたものである、支那の繪畫史には此の書の出現前後が尤も大きな曲り角となつて居るだらうと思ふ、此書に

　元以前多く欵を用ひず、或は之を石隙に隱す、書精ならず、畫局を傷くる事有らんを恐る丶のみ、

とあつて、落欵を裝飾的に位置し、遂ひには題するに詩を以てしたのは、倪雲林に創まると記してある、支那の文字が如何に風流な形であらうとも、又その書法が如何に上手であらうとも、之を畫と混在する事は許す可からざる過誤である、明淸の畫帖などを見ても、必ず此の題書があるが、試みに此の文字の部を掌で隱して見れば、實に方寸の裡に遠大を包んだ名作と感ぜらる丶が、掌を放せば大事な空地に邪魔な文字があつて、折角の畫面は狹小になり、圖としては結局一つの玩具になり了る場合が少くない、況んや詩も作り得ず、書も精しからぬ幕末明治の南畫師が、他人の詩句などを、惡筆で正面に塗り立てたのは、まことに醜陋笑ふ可きものであつた、中世の支那畫家が丹青は士大夫の餘技であるとした、此處文人畫の名稱の起る所以であつたらう、しかし文人畫の當初の意氣は、工人的藝術家の市氣匠氣の久しい薫習を厭つて、技工を無視して、頭で描くと云ふ新運動であつて、後期印象派の諸豪が、皆中年から畫道に入つて、在來の官學的技工を一掃したと云ふ邊と同一であるに相違ない、只此の文人畫家等は、形式を破つて直ちに形式を作つてしまつたので、以て自ら囚はれ、後世をも毒したものである、芥子園畫傳は、此の際に好都合な畫道の字引で見本で旦那藝の道樂にも、手輕に山水を纏める術を與へ、支那を知らぬ日本の支那山水畫家にも繪畫製造の便宜を附與した。

　南畫は世界に於いて、最も新らしく・最も好い畫風

であり、日本に於ては最も陳く最も好ましからぬ畫風であつた、南畫が日本に渡來してから、日本の幾多の俊才は皆此の便利な作畫法に依つて、危險な藝術生活を平氣で過ぎ、あたら才分を虛僞な制作に費してしまつた、如何なる天才も未だ見ざる風景を描けない、未だ見ざる風景を描くに、その見本、(芥子園畫傳乃至少數の渡來の南畫)を右に左に置き換へてのみ日本の南畫家は生活した、例外はある、大雅堂の如きは、土佐や狩野から拔け出さうとする苦しみの中に、此の南畫道を見出した、そして希有な旅行家たる彼は、胸中萬里の青山を表現するに、此の隣國の形式を參酌したまでゞある、彼の支那風景畫は彼自身の淨土曼陀羅であらう。

　小生は三四日前、漢口から京漢線に依つて北京に來た、水と柳との江南より、黃沙飛塵の北支那に來たのである、その爲め咽喉を惡くして、昨日終日旅宿に籠居した、北京の舊皇城は、潜帝袁世凱の重修を經て、大部分は頹廢の影がない、その中にある古物陳列館にある、陶器と古銅器とは、その道の人々には、三日四日の熟覽を要するものであらう。

　明日、居庸關に行つて、萬里の長城を見やうか、但し此のまゝ歸途に就かうかと、思ひ迷つて居る、少し支那旅にも惓きが來たので。(完)

未醒畫伯が支那漫遊土產の第一として揮毫せるもの、大昂紙の橫物小點一十四圖、目下之を畫帖に製作中、何れ機を見て一般公衆の展覽に供すべしと(梅陰生)

法廷悲劇「罪の女」(二)

藝者の大學生殺し

讀賣新聞記者　澤田撫松

死因不明の死體

春の大久保は躑躅の世界である。

櫻が散つて、青葉の季節が來るまでの間を占領する躑躅の里に筆者は住むで居る。八重櫻の吹雪の中に、早咲きの躑躅が赤く枝を染めかけた、明治四十三年四月二十日の朝、犬を伴れて戸山の原へ散歩に行かうとすると、躑躅園の通りを大久保停車場の方へ人が駈けて行く。娘、年増、小僧、番頭、書生、仕事師いろ〳〵の人間が同じ方向に駈け出して行く。火事にしては煙が見えぬ、何事が起つたのかと思ふて居ると『人が殺されて居る』『殺されたのは大學生だ』駈けて行く人々の口に斯う言ふ言葉が繰返されて居る。筆者も彌次馬の尻について、甲武線の踏切を越えて柏木の方へ行くと、蕎麥屋の横町は一ぱいの人だかりだ。椿事のあつたのは、左側の板塀を圍らした家である。二人の制服巡査が彌次馬を近づけない樣に警戒して居る。家の中には警部や、巡査や、刑事が幾名も來て居る樣子だ。暫らくすると、二人挽の俥が三臺威勢よく駈け着けた。俥から降りたのは、東京地方裁判所の豫審判事前田久次郎檢事武田鬼十郎、書記原田錦造の三氏と見てとつた。

事件は、早稲田大學生が夜半何者かに殺されたのである。表札を見ると、生田むめと細い字だがはつきり讀めた。

現場の模樣は、當時の檢證調書に悉されて居る。

『生田むめ居宅は、豐多摩郡淀橋町柏木の街路に接したる二軒家屋にして、其の表入口及び勝手口は東方に面し、入口に向ふて左側に三尺の木戸を設け、勝手口及び南方庭に至る通路と爲し、其の通路との境界に高さ一間の上部三尺を板塀とし下部に杉苗を植ゑたる障圍を環らせり、而して勝手口の雨戸一枚外づして地上に倒れ、其の板の上には血痕の足跡、並に其の竪木及び横木に指にて押へたるもの丶如き血痕附着しあるを認む、其の他家屋の外部には異狀を認めず。

生田むめ方屋内を檢するに、表入口は格子戸にして、其の内部に三尺の土間あり、上り口は二疊にして、其の疊上には入口の方向に血痕の足跡二個あり、其の次の間たる四疊半の座敷には鮮血疊上に漂ひ、所々凝結し、此方窓口の右側柱の釘には、銘仙男衣を掛けあり。

南枕に敷きたる三布蒲團の上に被害者半田喜藏は血に塗みれたる括り枕に其の頭部を載せ、頭を西方に向け仰臥し、全身蒼白色を呈し絕息し居たり。

其の身體の外部は、附着したる血液を拭ひたるもの丶如く、胸及び腰部等の皮膚に血液の浸み込みたる形跡を留め、其の咽喉部に左右一文字を爲す横約一寸五分竪約二分の刺傷一個あるを認めたり、而して其の敷蒲團は全く血液に汚れたるも、被害者の左側に在る掛蒲團は些少の血痕もなく、西方押入の唐紙及び疊上に流血の點々せるを認む、被害者の枕元右側に置ランプを箱の上に載せたるもの、草餅入丼、卷煙草數本、炭入籠、容器等散在し、枕元右側には流血の浸み入たる餘地なし、是等の物件は何れも流血の爲め汚染せられ、又被害者の足下には飯櫃を置き、竹及び木にて造られたる茶櫃あり、其の上には茶器並に小說本、尖端の折れたるナイフ一挺載せありたり。

隣室八疊の間には、臺所の方向に血痕の足跡を止め、且つ床の間には、生田むめが當夜着用したる寢衣、襦袢、腰卷等積み重ねあり、其の他異狀を認めず。

八疊の間より臺所に至る三疊の間は別條なし。

臺所板間には、石鹼入、鍋各一個、葱を容れる日笊等置きあり。流し元には赤き濁水に滿ちたるバケツ一個、絲瓜把柄、刈帚把柄等存在せるを認めたり。』

以上は前田豫審判事原田書記の名に依て作製されたる『檢證調書』の一部分である。兇行のあつた現場の模樣は此調書で詳しく分るが、其の當時被害者の死因が自殺であるか、他殺であるか、他殺とすれば加害者は何者であるか、全然り見當がつかなかつた。

自殺か他殺か

そこで現場に於て直に假豫審が開かれた。眞先に證人として調べられたのは、隣家の竹川すみと言ふ三十八歲の婦人で、其の證言は次の如きものであつた。

「私は明治四十二年四月の五日か六日頃現在の所に引越してまゐりました、生田むめは同年の九月二十日頃に隣家へ引越してまゐりましたが、其の當時私の方へ挨拶にもまゐりませんでしたから、平素餘り懇意にいたしません、それ故同家のことはよくは存じませんが、昨年の十月頃から若い男が出入いたしまして、其の男をお梅さんが兄さん兄さんと呼で居りました、然し時々その男の聲と異つた男の聲も聞えましたが、其の男は見たことがありませんから如何な男か知りません、昨夜恰度夜の十二時半頃と思ひます、「隣の家で(兄さん〲)と消魂しく呼び立てる聲が聞えましたから夫藤太郎が私を呼び起しまして隣へ行つてやれと言ひますゆゑ、私は板戸を開けてランプを差し出し、(生田さん、どうかしましたか)と聲をかけますと、それには何の答へもなく(兄さん〲)と又お梅さんの聲が聞えました、私の聲が聞えなかつたのだらうと思ひまして再び(生田さん)と聲をかけますと、今度は(兄さんが咽喉を突かれました)とお梅さんの叫ぶ聲がしましたので、私は吃驚してとても獨りで行かれませんから、隣家の佐々木戸太郎さんを起しに行きますと、朧月夜で分明は分りませんでしたが、黒い縞の着物を着たお梅さんが私の傍へ來まして、何所へ行くかと尋ねますから、お醫者へでも行かうかと申しまして、その足で向側の内藤嘉右衛門さんを起し、三人で柏木の交番へ訴へに行きますと、恰度下駄屋の松岡末吉さん、牛肉屋の飯村瀧三郎さんが交番へ訴へに來て居るところでしたから、私等三人はそのまゝ歸りまして、お梅さんの家の裏口の所へ行て見ましたが、臺所の方は見えませんでした」

次に調べられたお梅の旦那寶生朝太郎の妻常子の陳述は斯うだ。

「一昨々年の十月頃、私の宅が未だ豊多摩郡野方村の新井と申す所に在りました時、夫が日本橋茅町で醫者をして居りましたお梅と馴染になりまして、一昨年の六月に私の家へ入れましたが、いろ〲家の都合がありましてお梅は實家へ歸ることになりました、その後お梅が何所にどう言ふ生活をいたして居りますか、私は少しも存じません、そして夫は昨日午後一時頃用稽古に出ると申して外出いたしまして、午後十時頃歸宅いたしますと直ぐ入浴いたしまして、そのまゝ寢てしまひました。」

現場に於ける取調べはこれで濟むだ。豫審判事は隣家の竹川藤太郎の家へ書記をつれて行つた。それは藤太郎が病氣で現場へ呼び寄せることが出來なかつたので、病床訊問をする爲めであつた。藤太郎は著述家で病の床に就いて居た。

「私は現住所に移轉しましてから病氣に罹りまして、この八疊の間に寢て居りますので、生田方へどう言ふ人間が出入しますか少しも存じませんが、昨年あたりから色々の男の聲が聞えまして、本年になりましてから、生田梅が兄さん〲と呼んで居る男がありました、昨夜十

二時半頃に生田の家で兄さん〳〵と叫ぶ聲がしましたから、私は暫らく樣子を考へて居ますと、生田の臺所の邊でバケツか金盥か何かに當つた樣な音がしまして、又兄さん〳〵と叫ぶ聲が聞えましたから、これは唯事でないと思ひまして妻を見にやりましたが、其の後の事は何も存じません』

これは病床に於ける藤太郎の陳述である。サー斯うなると喜藏の死因は自殺であるか他殺であるか薩張り分らない。然し現場の模樣と證人の陳述とを照し合はして見ると、どうも自殺とは思はれないと刑事等は睨むだ。これが他殺であるとすれば、加害者は何者であらうか、犯人は誰であらうか、これが當面の問題となつた。そこで判檢事は一先づ現場を引揚げ、新宿警察署で更に訊問を開始した。

お梅の自白

喜藏の死因が果して他殺でありとすれば、疑のかゝるのはお梅である。同衾して居た喜藏が咽喉を突かれたのを知らずに居るのが不思議なところへ、變事當時のお梅の行動が怪しかつたので、お梅は新宿警察署で徹宵取調を受けた。武田檢事の訊問にお梅は初の中こそ知らぬ存ぜぬと言ひ張つたが、遂に斯う言ふ陳述をした。

『私は昨年の九月頃から喜藏とわりなき仲となりまして、將來は夫婦になるつもりで居りましたが、喜藏は高利の金を六百圓から借りて居りまする上に、友達にも百圓程の不義理が出來て、とても生ては居られぬから一緒に死でくれぬかと申しますから、私も一緒に死ぬつもりで居りました、その話が段々進みまして、本月の十三日に愈々情死する話が纏りました、そして十六日には二人で死ぬつもりでしたから、此世の見納めに喜藏と二人で深川の八幡樣へ參詣しまして、歸りに暇乞のつもりで月島西中通三丁目の伯父さんとこへ立ち寄り、それから京橋本湊町の實家に寄りましたら、恰度嫂が妹と子息とを伴れて田舍から來て居りまして、是非私の宅へ遊びに來たいと申しますから、十六日に死でしまひましては、定めし後で殘念がるであらうと存じまして、十六日の情死を延ばすつもりで、嫂に私の家へ十六日に遊びに來るやう約束しまして、其の晩遲く喜藏と二人で宅へ歸りました、そして十六日には田舍から來た三人と母と私の妹二人と一緒に私の家へ遊びに參りまして、皆で戸山の原へ摘草に行きましたので、母は摘むで來た草で草餅をこしらへて置くから食べに來いと言ふて、田舍の三人と一緒に機嫌よく歸りました、私の妹二人は其の晩私の家に泊りまして、十七日の朝湊町の實家へ歸りました、私は草餅の約束がありますので、十八日の朝から家へ參り、其の晩は實家で泊り、翌十九日の朝、私の

こしらへてくれました草餅を持つて、午前十一時頃歸宅いたしますと、家主から家賃の催促狀が來て居りましたから、旦那の實生へ直ぐ來てくださいと電話をかけて、又喜藏の方へは夜の十一時頃に來るやう電話をかけて置きました、すると其の晩九時頃に實生がまゐりまして、一時間程話をして歸りました、喜藏のまゐりましたのは十時半頃で、家へ入りますと直ぐ、梅さん今夜ぎりだねと言ふて泣きましたので、私も一緒に泣きました、それから母がこしらへてくれました草餅を燒いて食べ、一族の寫眞を取り出してよそながら暇乞をして、愈愈情死と言ふ一段になりますと、喜藏は四疊半の茶棚にのせてあつた刄先の缺けたナイフを持つて來て、これで咽喉を突いてくれいと申しますから、昔から情死と言ふものは、男が女を殺すのが當然だと私が言ひますと、喜藏はおまへに殺されたいのだから、どうぞ咽喉を突いてくれ、突きやうは俺が敎へてやると、ナイフの持ちやうから突く方法を敎へてくれましたから、敎へられた通りにナイフを握つて喜藏の咽喉の所に突き立て、右の方に引き廻しますと、喜藏はウン！と呻いて兩手で自分の胸を掻き挘りながら寐がへりを打ちますと、創口からサツト血汐が流れました、私も續いて死なうとナイフを逆手に取り直す刹那に兩親のことが胸に浮びました、父は人力車夫を家業といたして居りますが、收入が少ないので、其の日の暮しも立て兼ねて居ります、それに母が病身なので、一家の者は皆私を賴りにして居りますのに、今私が死でしまうたら、兩親はどんなに歎くであらうかと思ひますと、俄に氣おくれがしまして、如何しても死ぬことが出來なくなりましたから、喜藏には濟まぬことゝは思ひながら、ナイフの血を洗ふて元の通り茶棚の上に置いて、他人に殺された樣に見せかけ、牛肉屋の飯村瀧之介を呼びにまゐりました』

お梅が斯う言ふ陳述をしたので、喜藏を殺した犯人はお梅と言ふことに極まつて、お梅は東京地方裁判所の豫審に廻された。

事件迷宮に入る

豫審に廻された翌日お梅は前田豫審判事の調べを受けたが、其の時の陳述は新宿警察署で調べられた時と同じく、喜藏殺害の事實を認めて居た。そして斯う言ふことを附け加へた。

『私は親のところへ、毎月定まつた仕送は出來ませんでしたが、母が參ります度に一圓か二圓位の小遣を渡して居りましたが、先月の晦日に母から手紙が參りまして、金を少し都合してくれいと言ふて來ましたから、喜藏にも相談しましたが如何しても都合がつきませんでしたので、仕方なしに斷つてやりました、それから十八日に母に逢ひました時は別にお金のことは話をしませんでしたが、母は私にこの間易者に見て貰ふたら、おまへの周圍に惡い蟲が付て居ると言ふて居た、惡い蟲とは何のことか知らぬが、おまへも氣をつけておくれと言ふて居まし

た、私も母が變なことを言ふとは思ふて居ましたが、別に喜藏との仲を當擦つて言ふのとは思ひませんでした、又喜藏の咽喉を突きましたナイフは、私の實家に在つたのを鰹節を削るのに持つて歸つたのです、其の時は尖は缺けて居りませんのを、私が罐詰を開ける時に尖を折つたのです』

この陳述のあつたのは四月の二十二日である。然るに五月五日、同じく前田豫審判事の調べを受けた時、これまで自分の言ふたことは皆嘘である、喜藏を殺したのは自分ではないと、犯罪事實を全部否認した。この時の訊問は此事件の眼目であるから、調書の原文を載せる。

判事問『被告は實際牛田喜藏と情死を爲したるか』
お梅答『私は情死は致しませぬ』
判事問『然らば警察署及び豫審廷に於て情死を爲したる旨申立てたのは嘘か』
お梅答『嘘です』
判事問『何故に虚僞の陳述を爲したるか』
お梅答『新宿警察署で刑事巡査が情死と言へば罪は輕くて濟むが、自白しなければ母親を警察へ留置くと言はれましたので、さう言ふことがあつては母に濟まぬと思ひまして、情死をしたと申しました』
判事問『然らば何故豫審廷に於て虚僞の申立を爲したるか』
お梅答『裁判所へ參るまで刑事巡査にこれまで通りのことを申立てよと言はれましたので、其の通り申立てました』
判事問『然らば牛田喜藏は何者が殺したるか』
お梅答『知りませぬ』
判事問『同室に居た時の出來事であるから、知らぬ筈がない樣に思はれるが、どうじや』
お梅答『知りませんでした』
判事問『當夜被告はどう言ふものを着て居たか』
お梅答『襦袢の上に黒格子縞の袷を着て居りました』
判事問『被告が當夜寢衣としたるもの及び根掛はこれか』
（此時着物と根掛とを示す）
お梅答『お示しのものに相違ありませぬ』
判事問『今示したる襦袢の襟及び根掛に血の斑點あるが、これは如何したのか』
お梅答『存じませぬ』
判事問『被告は牛田喜藏と去月十五日、神佛に參詣したと言ふが、これも嘘か』
お梅答『それは事實です』
判事問『何の爲めに參詣したか』
お梅答『十五日でしたから參詣しました』

判事問『被告は四月二十日の朝ナイフを洗ふたか』
お梅答『洗ひませぬ』
判事問『其のナイフを使ふたことがあるか』
お梅答『四月の十七日頃、牛田が夏蜜柑をむきまし時に使ひましたが、それからは使ひませぬ』
判事問『牛田喜藏は被告に情死する話をしたことがあるか』
お梅答『本年になりましてから、始終串談(じゃうだん)に二人が情死すれば大學生の情死として騷ぐだらうと申して居りました』
判事問『牛田喜藏は借金の爲めに困つて居たと言ふ狀況があつたか』
お梅答『さう言ふ樣子は見えましたが、借金の爲めに死なねばならぬと言ふ樣なことはありませぬ』
判事問『牛田喜藏は被告に暫らく遠ざかると言ふ樣な話をしたことがあるか』
お梅答『さう言ふ話はありませんでした』
判事問『被告は去月十九日牛田に電話を掛けた時牛田は何と答へたか』
お梅答『私が牛田に今夜十一時頃來てくれと申しますと、牛田はもつと早く行くと言ひますから、寳生が來ることになつて居るから是非十一時頃にしてくれと言ひましたら、牛田はそれを承知いたしました』
判事問『其の時牛田がヨシタ〳〵と答へはしなかつたか』
お梅答『さう言ふことは申しませんでした』
判事問『寳生の歸り路と牛田の來る路とは同じ方向か』
お梅答『大久保の停車場から來ますと同じ方向です、そして其の晩牛田が、柏木の柏木屋と言ふ蕎麥から少し大久保停車場に寄つた所で寳生に逢ふたと申して居りましたから、牛田も電車で來たと思ひます』

お梅が斯うして喜藏殺害の事實を否認したので、此事件は疑問の雲に包まれることゝなつた。お梅の言ふことが噓か眞言(まこと)か、若しお梅の言ふことが眞實でありとすれば、喜藏を殺したる眞の犯人は何者であるか、事件は遂に迷宮に入つたのである。

小田原の戀物語

玆に又不思議なことがある。それはお梅が兇行に用ひたと稱する尖の缺けたナイフに、果して血痕が附着して居るかどうかと言ふ鑑定を、裁判所から醫科大學に囑託したところ、其の鑑定が意外であつた。お梅が最初自白したところに依ると、お梅はこのナイフで喜藏の咽喉を刺して死に致らしめ、喜藏が絶命したあとで、ナイフを臺所へ持つて行つてバケツで洗ふたといふとになつて居るが、假令水で洗ふたにしても、實際

其のナイフで喜藏を殺したものとすれば、一度科學の試驗にかゝれば血痕の發見されない筈がない。殊に水で洗ふたと言ふにもかゝはらずナイフには暗褐色のネバネバしたものが附着して居たのであるから、乾度血液のついて居るものと信じて居たところ、鑑定の結果はこの期待に全然相反して居るのである。

東京帝國大學醫科大學の助手石川（哲郎）宮永（學而）兩醫學士の試驗したる鑑定の結論を見ると、

『刀身に附着せる物質が果して血液なるや否やを檢査せんが爲め、明治四十三年四月二十一日より、同年七月二十一日まで九十二日間研究を爲したるところ、刀身附着の物質は血液に非ずして、羊羹若しくば蒸菓子の類なりと推測す』

と言ふのであつた。お梅は豫審の第三回目の調べに、これまでの陳述を否認して、喜藏を殺した覺もなければ情死を企てたこともないと言ふて居る。そしてお梅が喜藏の咽喉を刺したと言ふ唯一の證據物件たるナイフには血痕がついて居ないと鑑定人が言ふて居る。斯うなると喜藏の死因は解け難き謎である。喜藏はお梅に殺されたのか、自ら自殺したのか、お梅以外の者に殺されたのか、お梅以外の者に殺されたとすれば何者に殺されたのであらうか、この疑問を解くには、先づお梅、喜藏兩人の人物から研究してかゝらねばならぬ。お梅は京橋區本湊町二十五番地生田菊次郎の娘で、明治二十四年七月十五日の誕生であるから、其の時は數へ年の二十歲であつた。貧しい家に生れた美しい女の墮ちて行く道にお梅も墮ちて、十六歲の綺麗な容貌は一束の紙幣と取り替へられ、相州小田原の三ツ本事塚本智雄方からかの子と名乘つてお梅は雛妓となつた。器量がよいのと利口なのとが評判となつて、忽ち土地の賣れッ子となり、十七の春には押しも押されもせぬ立派な一本となつた。

こゝに一條の戀物語がある。

お梅の妖艶な、クレオパトラ式の美に憧れて、足繁く通ふて來る一人の青年があつた。眉の濃い、鼻の高い、苦味の走つた男振りが、鹿兒島辯とよく調和して、東京の眞中でも女の惚れずにはおかない若い紳士

が小田原で女に騒がれぬ筈がない。狹い土地だから、藝者や雛妓の間に問題となつたばかりでなく、町の娘も寄ると集ると若い紳士の噂をする程であつた。この若い紳士は當時帝國大學に學籍を置いて居る鹿兒島縣人東郷茂と言ふ大學生である。

大學生東郷茂は、毎週土曜から日曜へけて小田原へ遊びに來た。そしてお梅のかの子を傍から離さなかつた。お梅が他の座敷へ出て居る時には直ぐ貰ひをかけて呼びにやる。如何しても貰うて來ることの出來ない座敷に出て居るか、但しは又遠出でもして小田原に居ない時は、外の藝者も呼ばずに、酒も飲まずに、べそをかいて寢て了うのが此男の癖であつた。『かの子さんばかりが女じやあるまいし、こんなに女達の騷いで居るのが分らないのかしら』と愰つたがる藝者連も尠なくなかつた。お梅も東郷を憎からず思ふて居たのは言ふまでもないが、お梅が東郷に愛の全部を捧げるのに一ッの障害があつた。當時お梅に情夫のあると言ふ噂はあつたが、お梅の情夫を見た者は一人もない。無論名などを知つて居る者があらう筈がない。然れどもお梅には實際情夫があつた。横田定雄と言ふ若い男がそれである。雲の樣に、霞の樣に、烟の樣に、姿があるのかないのか、全く人の目につかずにお梅について居た。お梅は定雄を好いては居なかつた、何とかして別れやうとして居たが、定雄の方で如何しても離れない。これにはお梅もほと〳〵困つて居た。斯う言ふ情夫がある爲めに、お梅は東郷に愛の全部を捧げる譯に行かなかつた。東郷の方ではさう言ふことは少しも知らないのであるから、お梅は自分に滿身の愛を注いで居るものと信じて居た。お梅の身も心も自分のものと心得て居た。自分が死ぬと言へばお梅は悅んで一緒に死ぬものと思ふて居た。東郷こそ全く身も心もお梅に捧げて、まるで夢中になつて居た。こんな狀態であつたから、初の中は土曜から日曜へかけて小田原へ遊びに來た東郷が、しまひには大學へも出ないで、小田原にばかり來て居る樣になつた。學業を放擲して寳玉樓の二階に耽溺して居た東郷は、お梅を片時も傍から離

さなかつた。誰にも姿を見せないで横田定雄がお梅に附纏ふて居たことは言ふまでもない。熱烈なる東郷の愛情に尠なからずお梅は動かされて居た。男は好し、身分はあり、今一年で學士となる、前途有望の青年にこれ程思ひ込まれて、何で惡い氣持がするものか。お梅は心の底から東郷を愛せずには居られなかつた。然しお梅には情夫がある、横田定雄がある、何と言ふても離れない魔の樣な男がある。東郷とお梅の戀は、一波瀾なくては治まらないものとなつた。

帝國大學生の變死

小田原寶玉樓に耽溺して居た東郷茂は、身も心も打ち込むだお梅を傍に引きつけて、刹那の歡樂に醉ふて居た。當時寶玉樓の女中をして居た女の話に依ると、東郷はお梅が傍に居る間はさうでもないが、一寸でも居ないと首を垂れて考へ込むで居る。夜遲くまでお梅と密々話をして居ることもある。さうかと思ふと東郷が無暗にはしやぎ出して、飲めない酒を無理に飲むで苦しむだり、何だか譯の分らない新體詩の樣なものを唸り出したり、二人で泣いたり笑ふたり、宛るで正氣の沙汰と思はれぬことがあつたので、情死でもしやしないかとさへ思ふて居たこともあつたと言ふのである。この杞憂はまんざら取越苦勞でもなかつた。明治四十三年二月二日の晩、宵の内から東郷お梅の二人は寶玉樓の二階でしめやかに語つて居た。其の晩は何事もなく皆寢てしまうた。翌朝になると大事件が起つた。樓内は上を下へと引繰返へした。東郷茂が鮮血に染まつて死で居たのである。警察官が來る、判檢事が來る、警察醫が來る、刑事が來る。死體は一通り調べられた。短刀で咽喉を突いたのが致命傷であると言ふことだけは分つたが、自殺とも他殺とも判斷がつかない。無論遺書もなければ、紛失した物品もない。東郷の死は不可解である、謎である、スフインクスである。斯うなると之を尋常の自殺として事件を片附ける譯に行かない。判檢事は直に關係者の取調べにかゝつた。刑事は八方に飛むで、事件の眞相を探究すべく活動した。第一着に嫌疑のかゝつたのはお梅である。嫌疑のかゝつ

たのも無理はない。東郷の總べてを理解して居るお梅が、而かも其の晩東郷と同室で寢て居たのであるから、其の死因を知らない筈がないのに、全く知らぬと言ふて居るので、疑はれるも已むを得ぬのである。然しお梅は東郷の死因については何事も知らぬと答へて居る。種々取調のあつた結果、お梅は斯う言ふ陳述をした。

「私が寶玉樓で泊つたことは事實ですが、其の晩は少し氣分が惡かつたので、歸らして貰ひたいと言ひましたら、東郷さんが是非泊つて行けと言ふて聞きませんでしたが、私は如何（どう）しても歸ると言ふて、東郷さんのお座敷を出ましたが、其の時もう十二時を過ぎて居たもんですから、それから宅（うち）へ歸るのも大儀でしたので、寶玉樓の女中部屋で寢さして貰ひましたところ、翌朝になつて東郷さんが自殺して居ると言ふことを聞きましたから、直ぐ座敷へ駈けつけて行きますと、短刀で咽喉を突いて死んで居ましたので吃驚（びつくり）いたしました」

この陳述が果して事實であるか否かを直ぐ刑事が探偵した。その結果お梅は其晩寶玉樓の女中部屋で寢たと言ふことが事實であつたので、お梅の疑ひは全く晴れた。

東郷の變死事件は、一時小田原の大問題であつた。あれ程女どもに騷がれて居た東郷が、原因不明の死を遂げたので、小田原の町は暫くこの話で持ち切つて居た。斯う言ふことがあつたので、お梅の人氣は忽ち落ちた。今まで騷がれて居たゞけ、急に人氣が落ちて見るとお梅も三ッ本に居にくゝなり、何所かへ住替へたいと思ふて居るところへ、同じ小田原の藝者屋で清水家と言ふところから買ひに來たので、直ぐ話が纏まつてお梅は清水家へ住替へた。お梅が清水家へ住替へると間もなく、又事件が持ちあがつた。それは東郷が變死してから、恰度（ちやうど）一ヶ月たつた明治四十年三月三日の午前一時、小田原海岸野村子爵別莊の下で、海へ身を投げた者がある。水音を聞きつけて附近の者が駈けつけると、波間に黑髮が漂ふて居る、身投はてつきり女である。海邊の人間は斯う言ふことには馴れて居る。忽ち一人の男が海へ飛び込むと若い女を小脇に抱へて濱邊へ上つて來た。身內に未だ溫（ぬく）みがあつたから、水を吐かして人工呼吸をさすと息を吹返へした。見ると

それがお梅であつたから、一方警察へ屆けると同時に檢番へも知らすと、時を移さず警察官が來た、檢番からも人が來た。お梅は一先づ小田原警察署へ伴れて行かれた。お梅の氣力が恢復するのを待つて、入水の譯を糺したが、只死にたくなりましたから身を投げましたと答る外は何事も語らぬ。人間が死のうと言ふのは能々のことだから、お梅の入水には無論仔細がなくてはかなはぬ筈だが、お梅はこの事に就ては一言も語らなかつた。お梅の入水も亦解くことの出來ない謎として小田原に殘つた。魔の樣な男、横田定雄が小田原に居るのか居ないのか、誰も知るものはなかつた。

葭町藝者國松

一時は小田原の名物とまで謳はれたお梅も、東郷の變死やら、入水一件やらで、お客がばつたりと落ちて了うたので、抱主もやりきれなくなつたと見え、お梅を横須賀へ鞍替へさした。横須賀へ行つたお梅は、大瀧町の大和屋から八千代と名乘つて左褄を取つた。エヘンと言へば灰吹、磬と言へば槌の才智と、妖艶な姿、豊麗な皮膚、人を魅する容貌とは、男を引きつけずには置かなかつた。小田原で解き難き謎を作つて來た女とは誰も知らないから、暫らくの間に、横須賀中の評判女となつた。其の評判が東京まで傳はつたので、葭町の松葉家と言ふ藝者屋が態々横須賀へ行つてお梅の八千代を買ふて來た。松葉家から名も國松と改めて披露をすると、此所でも忽ち流行妓となつて、御座敷を斷るのに骨が折れる位であつた。その中で濱町の喜月からは毎日の樣に口が掛つて來た。お客と言ふのは能樂師の寶生朝太郎である。其の年の夏から翌年(四十一年)の三月まで、能樂師はお梅を絶えず喜月へ呼むで居た。斯うなると能樂師もお梅を苦海に沈めて置くことが心配でならなくなつた。遂にお梅は親引で能樂師に落籍されて、お梅の實家へ戻つて來た。能樂師はお梅の實家へ屢々通ふて居たが、家には妻子もある身であるから、家庭にいろ／＼の事情も出來たと見えて、暫らくお梅の所へ行かなかつた。お梅の方では落籍して貰へたのは難有いが、保護者がなくては生活

が出來ないから、能樂師から何とか沙汰があるだらうと每日首を延ばして待つて居たが、何の消息もないので堪り兼ね、新井藥師境內の蔦屋から能樂師を招いて、顏を見せなかつた怨のかず〳〵を並べ立てた上、何時までも親の家に燻ぶつて居るのもいやだから、二階貸りでもよいから何所かへ圍ふてくれと掻き口說いた。能樂師も憎くない女のことであるから、お梅の希望通り大久保甲武線踏切の傍の二階家の空間を借受け、其所へお梅を圍ふて置いた。すると能樂師の妻の常子がこの事を嗅ぎつけた。然れども常子は賢夫人である、少しも嫉妬がましいことを言はぬ。氣に入つた女を妾にすることはかまはぬが、外へ圍ふて置くことは入費もかゝるから、どうで世話してやるなら家へ引取つてやつた方がよいと、捌けた扱ひをしたので、能樂師に異存のある筈がなく、お梅は能樂師の家へ引取られた。暫らくは何事もなく、妻妾同棲して波風も立たなかつたが、不規則な藝者生活をして來たお梅にとつては、嚴格なる能樂師の家庭の人となつて居るのが苦痛であつた。間もなくお梅は實家へ歸つた。

實家へ歸つたお梅は如何にして生活すべきかと言ふ問題に逢著した。再び左褄を取る氣なら別に心配もいらぬが、男の動物的欲望の犧牲になることは熟々飽き果てゝ居るのであるから、苦海に戻るも厭なり、さらばとて差當り苦樂を共にする相手もなく、仕方がないので又々能樂師に縋つた。能樂師の方ではお梅一件で財政上に尠なからぬ影響を及ぼしたので、其の後は金錢の出入を一切夫人常子が掌握することゝなつた爲め、これ迄の樣に經濟上の自由がきかなくなつて居たから、お梅の要求を容れるのは餘程苦痛であつたが、飽までお梅の境遇に同情して居る能樂師は、半は愛情半は義俠から、無理な工面をして、柏木三百五十三番地へ一戸を構へてお梅を入れた。お梅は漸く安心した。ところが其の後能樂師から養扶持を送つてこぬ。これは能樂師が薄情な譯でない。經濟の鍵を夫人に握られて居るので、思ふ樣にお梅を世話することが出來ないのである。家賃は溜る、御用聞きは來なくなる、

其の日の生活にも困る様になつたのを、隣家の宮城お孝と言ふ婆さんが同情して自分の家へ同居さした。この婆さんは、半田直次と言ふ夫があつて、喜藏、幸介すみ、鎮壽の男女を儲けたが、明治三十三年の十月夫、が死亡したので、長男の喜藏を半田家の相續人とし、自分は宮城家へ復籍して宮城の姓を名乘つて居るのである。お孝婆さんの家もなか〳〵生活が苦し相なので、お梅も厄介になつて居るのが氣毒で堪まらないから、其の譯を能樂師に訴へると、能樂師もだまつて居られなくなり、柏木九百四十九番地の現住所を六圓の家賃で借受け、此所へお梅を圍ふことにしたが、相變らず金が自由にならないので、二圓三圓と少しづゝ時時送るだけで、生活費の全部を供給することが出來なかつた。お梅は借金の言分けばかりして、心細い日を送つて居ると、お梅に一人の同情者が出來た。それはお孝婆さんの長男の喜藏である。喜藏は母親からお梅の哀れな身の上を聞き、面りお梅の濃艶な姿を見ては、若い情緒を動かさずには居られなかつた。

お梅と喜藏の關係

喜藏の父直次は鑛山の技師で、相當の生活をして居たのであるから、喜藏も將來は大學へ入れて工學士にするつもりで居た。喜藏も亦子供の時分から學問が好きで、小學校は毎も優等で通して居たのであるが、直次が死でからは喜藏に充分の教育を施すことが出來なくなつたから、何でもかまはない、早く職業にありつける方法を採らねばならぬと言ふて、喜藏が神田錦華小學校を卒業すると、直ぐ江戸橋電信技術養生所へ入つた。そして此所を卒業して中央電信局で義務年限を首尾よく勤め、新宿警察署の電信係となり、勤務の餘暇に正則英語學校へ通ふて高等科を卒業したが、尚ほ進むで專門の學問を修めやうと思ふたが、新宿警察署の勤務が晝間であるから、學校へ通ふのに都合が惡いので、四谷警察署の夜勤電信係に轉任して、明治四十年の九月に早稻田大學の商科へ入つた。喜藏は斯うして働きながら勉强して、學業の成績も頗る好かつたのである。ところがお梅と言ふ者を知り、お梅の哀れな

運命に同情し、お梅の美しい姿に憧れる様になつてからは、學も身入らねば仕事も手につかなくなつた。世馴れぬ青年のことであるから、初の中は自分獨りの胸に納めて焦れて居たのであるが、遂には堪えきれなくなつて思ひのたけを掻き口說いた。お梅の方では、旦那はあつても自分の面倒を見てくれる譯でもなく、自分の心持を理解してくれるでもないので、心淋しく暮して居たところへ、斯うした青年の熱烈な戀を受けたのだから、これを拒む筈がない。殊にお梅は男の愛情を處置するには充分の手腕を持つて居たので、喜藏の戀は頗る簡單に成功した。喜藏とお梅の戀愛關係が成立したのは明治四十二年の九月二十一日で、その後の喜藏はお梅に夢中になつて居た。貧しき家に生れて數奇の運命に飜弄されたるお梅と、逆境に立つて獨立奮鬪せる喜藏とは、互に哀み互に同情する心から、戀も益々深くなつて、二人は如何しても離れることの出來ないものとなつた。其の年の秋から冬へかけては二日目か三日目にお梅の家へ通ふて居た喜藏も、翌年の正月からお梅の家で寢泊りをして、夫婦氣取りで暮して居た。能樂師もお梅と喜藏の關係を薄々感附いては居たが、自分の地位が大切であり、殊にお梅を獨占するだけの經濟的保護が與へられないのであるから、見て見ぬ振りをして居た。戀に成功した喜藏は、職務を怠つて居たので、遂に免職となつて生活の保障を奪はれた。幾等好きな女の傍に居ても、收入の道がなければ生命を保存することが出來ないから、喜藏は勤口を搜して居たが、思はしい所もないので困つて居ると、小石川區江戸川町三十二井原長吉と言ふ人が、ケイフ製造の特許權を持つて、ケイフの製造をして居たのが、金主が金を出さなくなつて事業を繼續することが出來なくなつて、金策の運動をして居るのを喜藏が聞込み、明治四十三年一月牛込區早稻田鶴卷町三百二十八番地高澤角太郎と言ふ人から三百圓、早稻田大學商科生直原四郎から百圓、合計四百圓の金を借り受け、これを提供してケイフの共同經營を井原に申込むだ。井原も渡りに船と悅むで直ぐ承諾したので、喜藏は件の

四百圓を資本に提供し、井原は三河木綿五十反、泉州木綿百反を提供して、ケイフ製造販賣の共同事業を始むることゝなつた。ところが事業は確に有望なものには違ひないが、資本が充分でない爲め原料の仕込が思ふ樣に出來ないから、なか／＼利益を見るところへは行かぬ。これではならぬと言ふので、喜藏は高澤に泣きつき同年の二月の上旬に二百圓を借り受け、更に同月の下旬に三百圓を借り受け、孰もケイフ事業の資金に投じた。その當時喜藏の身體は如何いふ樣に働いて居たかと言ふに朝は早くから起きて學校の下調をして、それが濟むと早稻田大學へ行き、學校から歸つてくると工場で帳簿の整理、取引上の相談、製造の研究等に腦を使ひ、夜はお梅のところへ通ふて、一ツの身體を學問、事業、戀愛の三方面に使ひ分けして居たので、心身共に疲れ果てゝ、極度の神經衰弱に罹つて居た。その上ケイフ事件は捗々しい成績が擧らず、此事業に依つて生活費と學資を得る目的でかゝつたのが、費用が要るばかりで少しも利益を見ることが出來ないので、この上は今少し大仕掛けに製造して利益を得る道を開くより外に手段がないと考へ、更に增資の運動を始めた。

義理と人情の板挾み

事業が斯う言ふ風に蹉跌を來たしたるところへ、學年試驗は追々迫つて來る。お梅との關係も何時まで曖昧にして置く譯にも行かぬ。斯う三方から攻め立てられては喜藏も堪つたものでない。そこで喜藏は先づお梅と公然夫婦となつて、お梅に慰められ、お梅に勵まされ、お梅に助けられて、學問も勵み、事業も成功さしたいと考へ、自分の決心を母と弟の宰介とに話をすると、母親も宰介も喜藏の心持を理解して居ないから一も二もなく反對した。藝者をしたり妾をしたりした女を、如何して嫁に貰へるものかと喜藏の辯明を耳に入れなかつた。喜藏は氣の優しい男であつた、親の反對に反抗する勇氣がなかつた。然しお梅を思ひ切るなぞと言ふことは夢にも思はぬ。喜藏は自分獨りで此問題を解決することは出來ぬと考へ、八百圓の資本金を

貸してくれた親友高澤角太郎を訪ふて自分の胸を打ちあけると、角太郎は其時二十三歳の青年であつたから、喜藏の心持も稍理解して居たので、無暗に反對はしなかつた。然し角太郎はお梅と言ふ女が如何いふ女であるか知らなかつたので、一應お梅に逢ふて、果して喜藏が言ふ如き見込のある女であつたなら、過去の經歴がどうあらうと、自分が仲へ入つて縁談を纏めて見せるが、若し自分の鑑定で喜藏の妻たる資格なしと認めたら、此頼みは斷然斷ると言ふ返辭をした。喜藏は角太郎がお梅に逢ふたら、屹度お梅に同情して縁談を纏めてくれるものと信じて居たから、角太郎の厚志を謝して悦むで歸つた。すると其の翌日、喜藏の弟の宰介が角太郎の家へ遊びに來たので、角太郎は喜藏から頼まれたお梅の一件を語つて、一應お梅に逢ふて見るつもりだと話をすると、宰介は驚いて、それは以の外だ、お梅と言ふ女は逢ふて見るまでもない莫連者で、到底兄の嫁に出來る女でないから、さう言ふ世話は決して仕てくれるな、その代りに、我々一家の爲めを思ふてくれるなら、お梅と手を切る樣に君から意見をしてくれいと頼むので、角太郎も宰介の言ふ方が道理と思ふて、それでは二人で喜藏に意見をしやうと言ふことに決着した。

そこで角太郎宰介の兩人は喜藏を呼寄せ、改めて意見をした。喜藏は初めの中はお梅の爲めにいろ〳〵辯明したが、二人が如何してもお梅と別れよと言ふので、角太郎は資本を出してくれた恩人であり、宰介は自分の爲めを思ふてくれる實の弟であるから、お梅と別れることは出來ないとは何うしても言はれない、仕方がないから、お梅と別れることを二人に誓ふた。この事のあつたのは日は判然せぬが、同年の三月下旬であつた。其の後喜藏がお梅に別れ話をしたかしないかは誰も知るものがない。警察署、檢事廷、豫審廷、公判廷に於けるお梅の陳述中に、喜藏から別れ話のあつたことが少しも述べてないから、喜藏は遂に別れ話を持ち出さなかつたものと見える。

十九日の晝間

お梅と喜蔵との關係と經歴とはざつとこんなものである。次に研究せねばならぬのは、喜蔵が變死した十九日の晝間、喜蔵とお梅の二人は如何いふことをして暮したか、これは餘程注意すべき事柄である。

喜蔵の弟の宰介は證人として斯う云ふことを陳述して居る。

『十四五日頃と思ひます、非常に立腹した態で工場へ歸つてまゐりまして、(馬鹿にして居やがる、まるで人を死人扱ひして居る、俺だからよい樣なものゝ、人に依つては如何なに怒るかも知れたもんじやない)と餘程腹を立てゝ居た樣子です、然し何所でさう言ふことを言はれたかは申しませんでした、それから十九日の日は兄は午後一時頃から工場の方へ來て居りました、私が午後五時頃工場へまゐりまして いろいろ營業上の話をいたしました上、高澤角太郎に面會する必要が起りましたので、兄と二人で一應鶴卷町の自宅へ歸りまして夕飯を濟し、又も二人つれだつて角太郎の家を訪問いたしますと、角太郎は不在でありましたから、井原長吉の家を訪問しやうといたしましたが、兄が雜記簿を持つて來るのを忘れたから、待つて居てくれと申し自宅の方へ引きかへしましたゆゑ、私は其所が丁度早稻田大學第二寄宿舍前の碁會所でしたから、其所へ入つて兄の來るのを待つて居りましたが、夜の十一時までもまゐりませんでしたから、何所かへ廻つたのだと思ひまして、其のまゝ歸つて寢ましたら、夜半の二時頃に、生田お梅の所から呼びにまゐりましたから、俥で駈けつけますと、兄は咽喉を突かれて死で居りました』

高澤角太郎も斯う言ふことを陳べて居る。

『十九日の夕刻、喜蔵は學校からの歸り途に私の家の前を通りましたが夕飯を食ふて又來ると申して寄らずに行きましたが、其の晩私の留守中にまゐつた相ですが、私は逢ひませんでした』

又井原長吉は次の如き證言をして居る。

『十九日の午後五時頃工場へまゐりまして、宰介と話をして居りますと、家主の丸山の女中が喜蔵に電話が掛つたと知らして來ましたので、喜蔵は電話を掛けに行き、間もなく歸つてまゐりまして、午後の七時頃宰介と二人で鶴卷町の自宅へ歸りました、後で聞きますと、其の電話はお梅から掛つて來た電話で、喜蔵は電話口で(ヨシタ〳〵)と言ふて、暫らく先方の言ふことを聞いて(それならよいだらう)と言ふて居た相です』

これは喜蔵が變死した當日の行動である。其の晩情死でもする人間の行動としては、餘りに世間的である。一方お梅の行動は如何かと言ふと、能樂師は斯う言ふ證言をして居る。

『十八日の午後八時半頃、お梅の所へまゐりましたが、お梅は居りま

せんでしたが、錠がおりて居ませんから、戸を開けて内へ入り、一圓紙幣を紙に包むでランプ臺の上へ置いて歸りました。そして、其の翌十九日の午後一時頃から俥で夏目漱石先生の所へまゐりまして、兜町の門人の所へ廻りますと、お梅から電話が掛りまして、是非今夜來てくれと申して居りましたから、其の晩にお梅の所へまゐりますと、宮島辯護士から來ました手紙を見せまして、家主が辯護士を頼むで、家賃の滯り分を二十五日までに仕拂はねば相當の手續をすると言ふて來たから、如何かしてくれと申しますゆゑ、そんなことは心配するなと慰め、持合せの二圓五拾錢を取り敢へずお梅の小遣に與へ、尙ほお梅の母親への見舞として別に一圓を渡して、午後十時頃に歸りました』

其の晩情死する女が、家主から家賃の嚴談を受けたと言ふて心配して居るなぞは、餘り例のない話である。

お梅が豫審の第四回の調べの時、魔の男、横田定雄の消息を語つて居るから、茲に記して置く。

判事問『被告は横田定雄の所在を知つて居るか』

お梅答『存じません』

判事問『被告は其の後同人に逢ふたことはないか』

お梅答『昨年の夏、大久保停車場で逢ひましたが、其の時の話では大久保に住むで居る樣子でしたが、其の後は逢ひません』

魔の男はお梅の行く所について行くと見える。

斯う言ふ風に本件を見て行くと、喜藏自らの自殺か、お梅と合意の情死か、お梅が惡意で殺したのか、お梅以外の者が殺してお梅が情を知つて居るのか、お梅の眠て居る中に何者かゞ殺したのか、お梅以外の者が殺したとすれば加害者は何者であるか、種々の疑問が起つて來るが、筆者はこれに對して一切判斷を下さぬ。なぜならば、公明なる裁判官の下したる判決に依つて總ての疑團が氷解したからである。

疑獄事件の判決

明治四十三年十二月二十四日、東京地方裁判所刑事五部、滿田裁判長、猪股檢事の係でお梅の公判が開かれた。公判廷に立つたお梅は、豫審第三回の調べの時に陳べた通り、喜藏を殺したことを全然否認した。檢事廷並に豫審の第一回第二回の調べの時に、喜藏を手にかけて殺した樣に陳べたのは、刑事巡査にさう言ふ樣に陳べなければ母親を歸さぬと言はれたから、年寄つた母親を苦めては濟まぬと思ふて、心にもないこと

を陳べたと言ふのである。裁判長は其の時お梅に向ひ『然らば問ふが、若し喜藏が被告に情死を迫つたとしたら、被告は之に應ずるかどうか』と問ふた。お梅の答辯に依て、喜藏に對する愛情の厚薄を計らうと言ふ考へであらう。お梅は言下に答へた『喜藏は命にかけて愛して居ます、一緒に死ねと言はれたら何時でも死にます』、裁判長は之を聞いて『よし』と快く頷づいた。

この疑獄事件に對する檢事の論告を聞くと、

『牛田喜藏は家貧にして學資に乏しく、亦自己の經營せる事業も意の如くならざるが爲に世を悲觀し、被告に情死を迫りたるに、被告は固より情死の意思なきも、人情之を拒絶するに忍びず、陽に同意の旨を答へ、明治四十三年四月十九日の夜、喜藏の教へに從ひ、喜藏の咽喉部を刺して死に至らしめ、恰も他人に殺されたるが如く裝ひ、以て己の責任を免れんとせしものなれば、刑法二百二條に依て處斷すべきものなり』

とお梅が詐欺情死を企てたものと斷定して居る。此事件の辯護人は花井(卓藏)博士、三宅(重也)、作間(耕逸)、高見(之通)の四辯護士で、孰れも熱烈なる辯論を試みたが、辯論の要旨は同一でなかつた。喜藏の死因はお梅以外の者の加へたる兇行にして、お梅に何等の責任なしと論ずる人もあれば、喜藏は單獨に自殺したるものにして、お梅の與り知るところに在らずと說く人もあつた。以上の兩論は孰れも無罪を主張し、お梅は喜藏と衷心より情死する考へなりしも、喜藏の悶絕するのを見て遂に氣後れして死に遲れたるなりとて執行猶豫論を主張する人もあつた。裁判長はこの此件に對しどう言ふ斷案を下すであらうか、疑獄は如何に處理されたであらうか、幾多の疑問は如何に解決されたであらうか。

明治四十四年二月二十一日、東京地方裁判所刑事五部、部長滿田寛一、陪席三淵忠彥、陪席矢部持輪三氏の連名で次の如き判決が下された。

主文

被告を懲役一年六ケ月に處す。

理由

被告人は曾て東京市日本橋區葭町に於て藝妓稼を爲して居たる際、記藥師寺生朝太郎に落籍せられ其の妾となり、東京府豐多摩郡淀橋町ー

木九百四十九番地に一戸を構へ來りたるところ、偶々早稲田大學々生半田喜藏と馴染み、互に夫婦たらんことを契り、情甚だ密なりしが、喜藏は固より貧困にして、研學意の如くならず、生計の便とせし事業も振はずして負債嵩み、周圍の事情亦被告人と夫婦となる事を許さゞりしものありたるを以て、寧ろ死して其の苦境を脱せんと欲し、明治四十三年四月十三日、被告人を訪ねて情死を計りたるに、被告人も亦之に同意し、相共に情死決行の機を待ち居たり、同年同月十九日夜十時半頃、喜藏は前掲被告人方に來り、先づ自分を刺殺したる上被告人も亦自殺しくれよと、自らナイフを執り仰臥して咽喉部を指し、具に刺殺の方法を敎へ、殺害の決行を囑託したるを以て、被告人は同夜十二時頃、前掲被告人方四疊半の一室に於て、遂に右ナイフを執り、喜藏の咽喉部を刺し、同人を殺害したるも、自ら機を失して、遂に自殺するに至らざりしものなり。

この判決に依つて、解くことの出來ない謎の一ツたる喜藏の死因は解けたが、東郷茂の變死、お梅の入水その他の謎は未だ解けずに居る。

現在に生きよ

お梅はこの判決に對して遂に控訴をしなかつた。五日間の控訴期間が過ぎると懲役一年六ケ月の刑は確定して、お梅は八王子の女囚監へ送られた。一年半の苦役を勤めて出獄したお梅は、何所にどうして暮して居るか杳として消息がない。出獄した當座は大森邊で又も藝者をして居た相だが間もなく神奈川へ轉じて、其の後の行方がさつぱり分らぬ。今年の正月も辯護をした辯護士の所へは鄭重な年始狀が來たが、姓名だけを書いて住所が書いてない。スタンプに朝鮮と書いてあつたから、朝鮮あたりに居るのであらう。貧しき家に美しく生れたるが爲めに、數奇の運命に弄ばれ、刑餘の身となつて放浪へる哀れなるお梅よ、過去を忘れて現在に生きよ、未だ二十七歳の女盛りであるが、美の生命は至つて短い、花は一夜の嵐に散る、生を尊むで現在に生きよ。

最近の坪内逍遥先生の印象

中村孤月

一

逍遥先生には久しくお眼にかゝらないので、一度お伺ひしようと思つて居りながら、つひ〳〵延び〳〵になつて居たのを、四月十六日の朝思ひ立つてお伺ひすることにした。

其日は淡い赭色がかゝつた雲が少しばかり空に浮んで居たが、自分の心は眞に晴々とした氣分の良い日であつた。

郊外電車に乗つて青々とした麥の畑を眺めながらも今日は必と先生が御在宅で、久し振りでお眼にかゝれる如な氣がした。

新大久保で降りて、余丁町の先生のお宅に歩く間も大正二年から今日までつひ御無沙汰したので、其頃には一週に何度も歩いた途を久し振りで歩く今更らの心持がした。

先生のお宅の白木の開き門が見えると、自分は非常に懐しい氣がした。よく譯文の原稿を持つて來て、應接室で先生に筆を入れて頂いたことを思ひ出して、眞に久しく此門を入らなかつたと思つた。

其頃にはよく此門の前まで來ても、先生の御都合を思つて、必ず一二度は其前を往つたり來たりしてから漸く心を決めて入つたことなどを思つた。

奇麗に敷いた礫の上を玄關にかゝると、靜に中に入つたが、取り次ぎに出た下女を見ると、前に來た頃の下女とは違つて居るので、彼れ程度び〳〵來た自分が實く久しく來なかつたと思つた。

下女の取り次いだ間も、先生が直ぐに會つて下さるか如何かと思つて居ると、やがて下女が應接室に入つ

た足音がして、例の開き戸をあけて、其方に上がるように言つた。

應接室に上がると、其れは全く三ヶ年前に伺つた時と變りはなかつた。圓い卓を一つ置いて、其周圍に四脚の椅子を配して有るのも、丈の高い陶器の圓筒の如な火鉢が二つ置かれて有るのも、室の片隅の三角棚の三段になつて居るのに、雜誌の置いてあるのも、油畫の風景を描いたのが一枚かけられて有るのも、其畫こそ違へ凡て同じ如な狀態であるのを思ひながら、椅子の傍に立つて敷き詰めてある絨壇の、赤や靑　花模樣を眺めて居ると、やがて先生の廊下を歩かれる足音がして、應接室の戶が開いた。

自分は一と眼見て、前にお眼にかゝつた時とお變りがないと思つて居ると、つか〳〵と自分の對ひの椅子の所に來られて

「やあ久濶、さあお掛け。」と立たれたまゝ椅子をすゝめられる。自分は

「一度伺はう〳〵と思ひながら、つひ延び〳〵になつて御無沙汰いたしました。」と言つて御挨拶して、先生の掛けられるのを待つて居たので、先生も漸く腰を掛けられた。

椅子に腰を掛けて先生を見ると、頭髮と髭とは白くなつて居られるけれども、其顏の生々とし、晴れやかになつて、眼に希望の光りの輝いて居られる點は、前よりも若々しくなられて居るので、自分は非常に嬉しく感ぜられた。

すると

「文壇の狀態は如何だな、つひ小說を讀まないので何にも知らない。誰々が最ん良い。」と尋ねられる。

自分が知つて居る一と通りのことを述べると、先生は一々に耳を傾けられ、先生自身の意見をも言はれたけれども、其れは悉く自分の意見と近かつた。

自分は先生の「帝國劇場論」の何所までも實際に適切であつて、其れが非常に詳らかであり、少しの改良で行はれることのみを論ぜられて居ることを云ふと、

「いろ〳〵の考も有るが、彼れは舞臺についてのこと

だけ。しかも其始めだけのものだ。五月には書かなかつたが、六月には書くつもり、一度實際に演つて見てからでないと、言ふことが明瞭しない。」と言はれる。

今度の「桐一と葉」のことを言ふと、

「まあ如何にか斯うにかあれだけに行つた。十日間世話を焼いてあれだけのもの。しかし私は俳優が惡いとは思はない。熱心にやつて居てくれるけれども芝居といふものには、惡いいろ／＼の習慣が有つて、其れが打ち壊して終ふ。

俳優も上の方は、熱心にいろ／＼自分の心持も呑み込んで爲てくれる。梅幸だの、宗之助だの、森律子などは、まづ良いと思ふ。俳優などゝいふものは、君の想像以外のもので、唯だ一人一人に渡す抜讀みを見るだけ、自分の科白だけを讀むのであるから、作全體のことなどは解りは爲ない。本讀みといふのも有るのではあるが、聞いても居ないと言つた狀態である。

今度なども舞臺稽古は、二十三日に歸つて來て、其れから始めたのであるから、舞臺稽古にも何にもなつて居ない。十日間通つて、いろ／＼に言つて漸く彼んなもの、まつたく芝居は齒痒いものだ。

彼の中に新らしい所が有るが、其れは若い人には解つてもらへても、年老つた人には氣に入らないのだからね。まあ追ひ／＼に爲て行くよりは爲方がない。」と言はれる。

「今度中央公論にお出しになるといふ原稿は既うお出來になつて居るのですか。」

「もう出來て居る少し直せばいゝようになつて居る。」

「長いものなのですか。」

「何に五幕ばかりのもの。」

「舞臺にお掛けになりますか。」

「まだ其れは定まつては居ない。今度の如な成績では掛けてもよし、掛けなくても良いといふ位なものだ。

唯だ脚本だけは書くつもり、今までは、いろ／＼の爲事が有つて、其夜業に爲て居たのであるから、思ふ如には出來ない。脚本などを書くのには、其れは無理だ。專心に其れにかゝつて居るのでなくては良く行れ

ない。

専心にやれば何所まで行けるか、其れを行つて見たいと思ふ。」

「先生のお年頃から眞の爲事をした人間が外國にはいくらも有りますから。」

「外國人の如に行くか如何か、其れは解らないが、とにかく行かれる所までやつて見るつもり。生きて居る間は。」

自分は先生の此言葉を聞くと嬉しくてならなかつた。(生きて居る間は、やつて見るつもり)先生の口から此言葉を聞くと、四十を越したばかりで早くも衰退する如な作家は何といふ作家であらうと思ふ。

自分は暫くしてお暇することにした。

先生は

「さうか、またお來で。住居は何方に」

「淺草に居ります。」

「大變に遠い所だな。」

二

門の外に出ると、自分は今年の一月早稻田の文科の學生が三人伺つて、復び講堂に出られる如にと言つたけれども、先生が肯かれなかつたといふことを思ひ出して、先生が此所まで決心されて居られゝば、もう何人が何と言つても、心を動されないことを思つて、何とも言はれない嬉しさを感じた。

早稻田の爲めには惜しいけれども、先生の専心に脚本を書かれる上には、學校に出て居られることが妨げになるからである。

自分はまた先生が、自身で劇場を造つたり、演ずる者を養成されたり爲られないのが良いと思つた。

其爲めに徒らに忙しく、煩はしい思ひを爲れることが、何の位先生の脚本を書かれるのを妨げるか解らないと思つた。

眞に先生が脚本を書かれるのには、今が最ん良い時である。「名殘の星月夜」は、先生が専心になつて書かれた脚本の最も始めの作である。先生が凡てのことから離れて、脚本を書かれた其始めの作である。

自分は此作が、其内容が良く、舞臺にかけても充分な効果の有るものであることを望んで居るとゝもに、充分に信じて居る。

唯だ自分の考を言へば、先生の脚本は、常にシェークスピーアやイプセンや近松の作に近いか、ハウプトマンに近いかであるが。もし先生の脚本が、其等の作家の作よりも、トルストイ。ドストイヴスキー。クープリン。アルチバーセフなどの創作に近いものを書かれることが有るようになるならば、非常に良いと思はれる。

先生には非常に新らしい囚はれない自由な心持ちが有るのであるが、其れが今までの脚本には少しも表れて居ない。自分に言はせれば、先生の最も良い所はまだ其方に潜んで居ると考へられる。

顔を上げると、先生のお宅の前から横に曲つて、電車通りの廣い道に出て居て、其所の黒板塀の所の大きな櫻の樹の花の咲いて居るのが、非常に晴れやかに美しく見えた。

議政壇上の新花形

鐵拳禪

一

▼花未だ開かざるに議會は解散され、花開いて總選擧は行はれ、新樹の緑濃かなるころ新議會は開かれんとす。新議會は宜しく、新緑の生彩と、活氣となかるべからず。

▼新議會は、解散後の臨時議會なり。臨時議會は、近年、新緑と一種の關係を有す。限閥の下に召集されたる、解散後の臨時議會も亦新緑の候なりき。新緑の香、

人に迫り、新綠の色、日光に映じて、强烈なる刺戟と、鮮明とを生めり。自然の男性美を發揮せり。

▼解散は、議會の換氣法なり。之に由りて、人物の新陳代謝を促すと雖も、倦怠の氣は容易に一掃すべからず。舊人を送りて、新人を迎ふるも、議會の倦怠は依然たり。新人の衣を纒ひて、舊人の顏を曝すもの多ければなり。

▼四周の自然は男性美を發揮するも、議會は依然として劣性の醜を曝露す。彼等は强烈なる刺戟に活きず、徒らに任期の上に隋暇を貪らんと欲す。その政見の、新綠の日光に映發するの鮮明さを有するもの、果して幾人かある。今や變說改論は、知名の雄辯家の專有にあらざるなり。

▼廣告の團扇に、表裏美醜を異にせざるは稀なり。白扇の如く、はた澁團扇の如く、表裏あるも、表裏に由つて美醜を異にせざる人士は、殆んど議會に求むるを得ず。自ら稱して國士と得意がるもの、これ多くは廣告團扇の類ならずんば非ず。

▼白扇に瀟洒たる凉味あり。手に執つてはた〱と扇げば、凉味隨つて生ず。澁團扇には素樸の凉味あり。月下凉風の椽、なほ之を用ゐるも趣致あり。紅多き廣告團扇に至りては、その俗惡厭ふべきものあり。議會の倦怠は、多く人物の廣告團扇なるが故なり。

▼隈閣の臨時議會は同じく新綠の候と云ふも、淺綠肌に冷かなる時に始まれり。今の寺閣のそれは濃著紅綠に燃ゆるの時、活ける廣告團扇を一堂に驅り集めたるの觀あり。斯かる時、人物の白扇、乃至澁團扇は、最も議會の注目を喚起す。

▼隈閣の議會は、初袷の人、若葉の下に逍遙せるの觀あり。寺閣の議會は、單衣の人、青葉の風に吹かれて佇むの概なくんば非ず。彼を若葉の議會と稱すべくんば、是は青葉の議會と呼ぶべきなり。後者の前者に比し、活氣と、鮮明とを缺く所以のもの、單に新樹の深淺の然らしむるのみに非ざるなり。

▼若葉の議會は、盛んに憲政の本義を說き、高遠の理想を喋々せり。山伏深嶺を降りて、市に法螺を吹くに

似たり。青葉の議會は、秉公持平の味噌を摺り、不自然なる多數黨を擊破せりと稱するや明かなり。新規なる新屋の、自動車にて廣告團扇を配るに類す。

▼青葉の議會の生彩と、活氣となかるべからずして、而も之を期待すべからざるは、廣告の團扇餘りに多數を占むるが故なり。强ひて活氣を招かんが爲めに、之を烈しく使用せんか、へたりと腰の折れん恐れあり。同じく折ると雖も、新しきは舊きに優れり。多少の新彩と、生氣とを有すればなり。

二

▼醫博金杉英五郎は廣告團扇の一枚なりや否やを知らざるも、現に內相たる自動車男と、一種の關係を有す。己れ中立議員なるが故に、中立議員の糾合に奔走す。人心の機微を知る。病體を打診するが如くなる能はず、可なりに氣迷の爲體なり。

▼金杉は代議士たらざる以前、政治家の素質あり、策士の才ありと稱されたり。その大呂敷をひろげ、顯位高官の間を往復するの二事を以て見れば、如何にも一廉の政治家にして、策士なるかに見ゆ。然れども、その實際に至りては、外觀を裏切るもの尠からず。

▼彼れの大風呂敷は、侯大隈のそれの如く他を煙に捲くに非ずして、他を煙に咽ばしむるなり。その傲岸なる態度、人好きのせぬ貌、既に他の反感を買ふに充分なり。而も巧みに如才なさを以て、反感を融和調節せんとするも、そは顯位高官に試みるのみ、然らざる者には施さず。利害の打診に長ずること、本業を凌ぐものあり。

▼金杉の策士肌を裏切るものは、往年伯田中對孝子の情事に關する所の聯想なり。この聯想は、彼れの策士肌を認めずして、却て彼れを刀圭界の幇間なりと貶す。その顯位高官の間に往復する、推して知るべきなりと云ふ者少なからず。彼れの大を示さんと欲せば、先づ斯かる惡印象を拭ひ去らざるべからず。

▼金杉の代議士となる、演說會を開くこと一回、而も衞生講話會に過ぎずと云ふに至りては、誰か呆れて、その聰明を笑はざるものあらんや。彼れは政見なくし

て候補者となり、政見なくして選出さる。現代の病弊を、最も能く象徴せるの一人なり。議政壇上に立ちて、メスの如き快舌を揮ふの人ならざるや勿論なり。

▼青葉の議會、何の奇なしと雖も、强ひて特色を求むれば、醫師團の代表者と稱するもの十四名を有すること即ち是れなり。先年百姓議員に對して、商工議員あり。一名大體議員と稱して、金力を擁するを唯一の誇りとせり。自家の利害によりて動くこと猫眼のそれよりも甚しく、何時も政府援護に傾けり。今次の醫師團と稱するもの多くは、絕對政府贊成を以て政見と心得るに似たり。

▼素より醫師團の人物を細別すれば、憲政會所屬あり、政友會所屬あり、中立ありて、政界に加ふるメスの揮ひ方を異にすと雖も、政界の病所、腐肉を痛抉せんとするもの幾人かある。憲政會所屬のもの、政府反對の擧に出づべけんも、同じく自己のメスの光を眺むるに過ぎず。痛抉を彼等に望むは、團扇を杖となして起たんとするに等しかり。

▼中立の土屋清三郎、政友會の齋藤紀一、多少の名あり。土屋は千葉より、齋藤は山形より、その陣笠を青葉の議會に陳列せんとす。醫師團代表の名、醫博金彩に蔽はれて現はれずと雖も、土屋は實際に於て、裏面に於て、活動を、飛躍を試みつゝあり。

▼齋藤は青山腦病院長、事件の突發と、廣告とを以て、その名を揚げり。屢〻出でて海外に遊び、海外の醫界を視察せるは、彼れの最も誇りとし、且盛んに廣告する所なり。世辭愛想よく、座談に巧ならざるに非ざるも、政論界に何程の重きをなすや疑問なり。

▼紀一、前回の總選擧に於て、東京市部より名乘をあげ、醫師團の勢力に立脚して當選を期せんとせしも、選擧違犯の辣手に呪はれ、運動中止の餘儀なきに至りき。事は彼れが經營せる病院の創立五十週年紀念品なりと稱し、醫師及び知人に贈與せるより起れり。彼れの選擧に迂遠にして、注意の疎漫なるの致す所なれども、これ彼れが餘りに賣名に急に、成功に焦燥せるの失なり。

▼齋藤紋に、なほ河野徹志あり、佃安之丞あり。醫師團の勢力に立脚せりと雖も、要するに内相後藤が、曾て醫師たるの關係より、彼等を煽り立てたるに由る。新平は往年『自由』の犧牲たらんとせる伯板垣を治療して名を揚げ、今又醫師團を操縱して自家の勢力を張らんとす。青葉の議會に、能く廣告團扇の使用法を解せるもの。

三

▼白扇に緣ありて、而も澁團扇の趣味に活くるもの、國民黨の白河次郎あり。彼れは酒を呷り、筆を呵し、火の如き熱辯を揮ひて、滔々として時事を論ず。その人蠻氣ありて、灰臭を認めず。少壯黨人中、有望の人物なり。

▼白河は二十三歳にして帝大文科を出で、夙に鮮洋の號を以て文名を馳せ、數種の著述あり。文章瑰麗にして雄勁、而も激越の調を成す。これ彼れが滿腔の不平、抑へんとして抑ふる能はずして、文に露はるゝに非ざるなからんや。久しく浪華に隱れ、中央文壇とは遠ざかれるも、新聞記者として、政論家として、實際的に活動せり。

▼文壇知名の少壯者にして、議會に入れるもの、曩に樋口秀雄あり、小山東助あるも、代議士として甚だ振はず。未だ舞臺に馴れざるが故なりと云はゞ、それ迄なるも、自重の期長きに過ぐれば、無能に歸す。無能と有能の差、固より沈默と、饒舌との差に非ざるも、能有る者は爪を隱すと雖も、先づ口を開いて獅子吼せざるべからず。

▼小山の熱辯、紳士的態度、選擧區民に對し、頗る受のよきものあり。然れども、彼れは之を選擧の際に用ゐるのみにして、未だ之を議政壇上に試みざるなり。自重か、不馴か、餘りに大事を取り過ぎてなるかを知らずと雖も、隱爪の期長きに失せり。徒らに票格者の列に伍して、碌々鉛筆を削るの徒と誤解する者あらんを怖る。

▼白河の議會に顔を出す、文章以外必ずや抱負を有するなるべし。彼れは健筆を揮つて、宣言すらく、『吾[illegible]公

護憲の誠意を以て、その基礎を國民的ならしめざる可からず。有力なる政府を建て、而して有力なる大策を施設遂行するの途あるのみ」と。論旨空漠たりと雖も、彼れの進まんとする所を觀取するに難からず。如何にして彼れが有力なる政府を建て、有力なる大策を施設遂行せんとするかを見んと欲す。

▼上島長久は早稻田の出、操觚界に於ける可なりの古顔なり。先年候補を爭うて敗れ、今次漸く當選せり。政界の情僞に通ずる、白河の上にあり。彼は理想に偏するも、是は實際に活きんとす。白河の『有力』を夢想しつゝある間に、上島の實際に當つて策戰を講ぜんことと明かなり。

▼上島の外、操觚界に緣あるもの、竹村良貞あり。頭本元貞あり。岩佐善太郎あり。一宮房次郎あり。兒玉右二あり。就中、英語家の頭本最も名あり。官僚的臭味と、御用記者の色彩顯著なるは、彼れが閱歷の然らしむる所なり。

四

▼中野寅次郎の無名、却て有名の濱口雄幸を破れるが故に、有名となれり。彼れは小吏より一轉して、政界の妖星と目されたる星亨の幕下に入り、市政に容喙するに至りて、纔かにその存在を認められたるに過ぎず。現に鬼怒川水電の理事たるも、亦財界知名の士を以て目すべからず。この人、敢然起ちて、憲政會の巨頭を一蹴し去れり。

▼由來高知市は、政友非政友の競爭劇甚の地なり。第七回の總選擧以來、政友非政友交互に當選せり。有名の仙石貢が無名の光森德治に破られたる。又今次有名對無名の勝利たる、皆政友當選の歲に當れるなり。中野の勝利、固より歲廻りの好きにも由れど、政府黨のお蔭を蒙れること尠からず。

▼濱口の風丰獅子の如く、音聲美ならずと雖も、眼光の透徹と理路の井然とは、敵を慴伏せずんば止まざるの概あり。之に反して、中野は美音美容、人を魅せずばやまず。その辨舌の滑かなる、世辭愛想の選擧區民の歡心を買ふに巧みなる、到底濱口の企及する所に非

ず。

▼年齒少壯にして、而も優型を以て市井の噂に上るは、磯部尚なり。彼れは今年四十二、帝大法科の出身なり。法博富井政章の媒酌に由つて、法博磯部の養子となり、卒業の時既に二人の父なりき。子女、今や十指を屈するに至らんとす。多產、實に艶福に正比す。

▼磯部は多藝多能、殊に義太夫を能くす。この點に於て、父四光太夫に遜色なし。法博鵜澤總明は、彼れの同窓、夙に刑法學者として、代議士として、名聲を藉けり。彼れが四光の勢望を負ふも、未だ著はれざる所以、藝に浮身を窶せるが爲めなりと云ふ者あり。

▼磯部の鹿を中原に逐ふや、必勝を期し、運動に、廣告に、努力と苦心とをなせり。かの政友會總裁以下、政友會出身の前大臣の姓名を列記せる推薦廣告を石版摺とし、之を全市の湯屋、床屋にまで掲載せる、異樣の觀なきにあらざるも、米國的色彩を發揮せる所、我が選擧廣告界の新記錄ならずんば非ず。

▼知名の士と云ふは、世間に名を知らるゝを要件とす。實力あるも、隱れたるは、知名の士に非ず。知名の士となる、固より實力の光輝に外ならざるも、實力乏しきも虛名を博せんとする、宜しく廣告の力に待たざるべからず。代議士候補者の如き、一たび名乘をあぐるや、有權者の前に俄かに知名の士となるの方法を講ぜざるを得ず。磯部の推薦廣告を、最も人の集る所の湯屋、床屋に掲げたる、又知名となるの一方法なり。

▼電燈の光威を假りて著はれたるもの、越山太刀三郎あり。若尾璋八あり。越山は多年東電に關係し、若尾は銀行の經營に任じたるも、皆これ甲州系の人物なり。後者は中央大學の出身、未だ若輩なるも、若尾の養子なるが故に、甲府市に勢力あり。

▼押川方義は、基宗教界の人、東北學院長として名あり。一轉して實業界に投ずるや、萎靡未だ振はざるもののありしが、近年漸く首を擡げ來れり。今次代議士となれる、蓋し再轉して政界の人たらんとするの野心に由らざるか。

▼彼れは其の辯舌を以てすれば、新議會を壓するに足

れり。然れども彼れは未だ黨人の新米なり。政務の調査、對議會の用意に缺くる所あるを以て、宗教界に莅めるが如き權威を有せず。唯だその滿々たる山氣を露出して、議會に如何の印象を與ふべきか一寸興味あり。

五

▼當初議會の花形と認められて、將來の活動を期待され、案外にも越袓の獄を免れざるは、帝大敎授乃至學者の群なり。先年、法博戸水寛人議會に顏を出すや、軀幹の矮少に似ず、人氣を一身に集め得たるも、爾來萎靡振はず、今尚議場に重きを爲すに至らず。

▼法博小林丑三郎、及び法博大場茂馬の轡をならべて若葉の議會に入るや、多大の期待を以て迎へられたり。然るに、小林の態度の曖昧なる、大場の賣名に急にして進退を誤れる、その試みの日に於て躓けり。是に於てか、議會に於ける法博の相場は、著しく下落せり。

▼今次當選せる新顏に、法博四人あり。曰く小川鄕太郎、曰く今井嘉幸、曰く小山溫、曰く氣賀勘重。之に英國法博の植原悅二郞を加ふる時は、片手の指を屈するに足る。之を以て議會の品位を測定するの標準とせば、青葉の議會は、若葉の議會に比して、大に優るものなくんば非ず。

▼法博小川は帝大敎授、商業界に人望あり。政友會の名物奧繁三郞の落選せる、全く彼れの蠶食する所となれるが故なりと云ふに徵するも、京都人の同情翕然として集れるを知るべきなり。法博氣賀は慶大敎授私學出身の經濟學者を以て著はる。

▼法博小山は、曾て司法次官たり。辛辣の手腕、一時天下の目を駭かせり。近來彼れが近眼鏡を蒐集するの奇癖を稱し、實用の趣味に遊ぶものとなせども、彼れは到底道樂に沒頭するの人に非ず。將に來らんとする政變に處して、如何の態度を執らんか位は、常に心掛け居るの人なり。

▲斯るが故に、彼れの眼鏡は、決して道樂の眼鏡に非ず、實用の眼鏡なり。政界を覗くの眼鏡なり。政變の機微を透視するの眼鏡なり。活動操縱の用に供するの

眼鏡なり。蓋し眼鏡は、能く小川の性格を象徵す。彼れをして一個實用の眼鏡を徹せしむれば、卽ち彼れの特色の大半は消失す。

▼法博今井は、總選擧の時日目睫の間に迫れる頃、卒然として立候補を宣し、輙く當選せり。これ彼れが對支政策の言說、大阪人の理解する所となれるに由るべしと雖も、彼れの人物の面白味あるに歸せずんば非ず。

▼彼れは夙に支那の研究を試み、彼の地に在留すること多年、歸來大阪に辯護士の店を張れり。第三革命の勃發するや、馳せて雲南に赴き、軍務院の法律顧問となり、樞機に參して畫策する所少からず。而して一切の支給を拒絕して、志士的學者として、隣邦の爲めに盡瘁せり。

▼革命の業漸く緒に就き、最早彼れを要せざるに至り、南北融和のために各地を歷遊して圖る所あり。歸來名乘をあげたるの態度、颯爽として、風雲を叱咤するの槪あり。浪人茅野良知が自ら對支問題の解決者と稱して現はれたるも、御用臭あるを窺はされ、鹿を中原に逐ひ損ねたるの比にあらず。

▼小川、氣賀、小山の三人者は、共に政府贊成なるも、獨り今井は反對の側に立てり。彼れは學者の優柔なく、剛健にして覇氣あり。未だ政黨に何等の因緣なく、政界に勢力なしと雖も、默して止むべきに非ざるや必せり。彼れは確かに新議會に於ける、一個の新花形たるを失はず。

▼植原は明大の講師、政治批評家乃至政治史論家として、雜誌界の流行兒となれり。彼れは倫敦大學に學ぶこと三年、在學中に英文『日本憲法論』の著あり。歸來某校の講師となり、轉じて駿河臺に據り、大にメートルをあげ居たりしも、その實際に面接して、彼れが言論を裏切るの餘儀なきに至れり。

▼彼れは曾て日本の政黨を罵り、政黨の首領を嘲り居たるが、愈よ立候補を宣するに際し、政黨の眞價を具へずと罵れる國民黨に入り、不備不完全の演說なりと嘲れる首領の應援演說を請へり。理想論の破綻と云ふ

も、却々に滑稽なり。

▼然れども、植原の國民黨に投じたるは、即ち彼れの適所に赴けるもの。彼れは苦學力行の結果、拔くべからざる反抗心と、不負魂と、我慢强き性癖とを有す。彼れが議政壇上の鬪士としての强さも、亦此處にあり。彼れに取べき所も、亦政權を目當に小利口に立廻らざるにあり。

▼正木照藏は人物奇峭、剛健なりと雖も、趣味を解す。海運に關する智識以外、書畫文章に遊ぶは、彼れが趣味性の然らしむ所。法博今井と彼れを以て獨身の對幅となし、其の人物を稱揚するも、人物は獨身なるが故に豪きに非ざるなり。彼れを以て獨身なるが故に取るべしとなさば、そは不具者を以て豪しと云ふに異ならず。

▼日比野寛は愛知一中校長たりし時、マラソン校長の綽名を有せしが、轉じてマラソン代議士となれり。最近奠都博の五十三次競走に、芝浦の極東競技に加はり、襯衣一枚になりて驅りずり廻れるは、四疊半裡の低唱を以て代議士の一資格なりとする迷想を破るに足れり。曩に劍客本間三郎を迎へたる議會は、今又この奇物を得て、一異彩を添へたり。

▼沖繩に左遷されたる欝憤を以て蹶起せる、退職知事小田切磐太郎あり。福島に國民黨の新領土を開拓せる近藤達兒あり。妙な事件を引受けて、法曹界に奇名を博する鈴木富士彌あり。滿更、枯木も山の賑のみに非ず。

▼瀧正雄は年齒僅かに三十四、京大法科講師たり。法博戸田海市は彼れを稱して『立憲政體の寶なり』と云ひ、法博神戸正雄は同名の好みを以て『世界的智識なり』と讃歎せり。彼れは此の裏書の手前、政友會の一陣笠に甘んず可からざるなり。

▼書して玆に到れば、滿月の綠樹、日光に映發して新綠の生彩と、活氣とを呈し來る。吾人は新議會の新人物に對しても、亦寶の持腐れに終ることなく、その生彩と、活氣とを發揮せんことを望まざるを得ず。

(大正六、五、二一)

中流民の生活と其保護

(醫者の眼に映ずる中流民)

醫學博士　額田豐

中流民といふと、其範圍が極めて廣いから、簡單に言ふことは六つかしい。或人は所得税を收めて居らぬ貧民以上の階級者であると認めて居るが、税金の多少を以て實際の收入を確實に判斷する譯には行かない場合もある。又假りに月給を標準として見れば、拾五圓貳拾圓から四十圓五十圓が中流であると云ふ人もあるが、昨今の樣な世の中では寧ろ斯くの如きは殆んど貧民と云はねばならぬ。四五十圓から二三百圓位の者も、見方によれば矢張り中流民ではなかろうか。普通の會社で言ふて見ると、書記課長といふところ、役所で言ふて見ると、判任官乃至高等官の下の方は正に中流である。中流民の定義は何を以て標準とするかといふことは、非常に六ケしい樣である。が、兎に角、此處に言ふ中流民とは社會のあらゆる方面の中邊を指すのである。

方今、多く口を開けば直ちに社會政策とか、貧民救濟とか、勞働者の保護とか言つて、下級民の研究は大いに遣つて居る。これは元より誠に結構の事である。然かしそれと同時に、中流民の事も忘れないで居て貰いたい。實に我が中流民は即ち國家社會の中堅なのである。而かも最も健全なる思想を有し、智識に於ても亦德義に於ても一番優れた階級ではなかろうか。又國家社會のあらゆる方面の手腕者は大抵皆茲から出て居るのではなかろうか。

自分は職業上、主として此中流階級に多く接して居

る。のみならず、自分も其階級の一人であると自認して居るから、其生活狀態を比較的よく知つて居る積りである。而して今日の場合、此階級者が生活上一番苦しいといふ事を最も痛切に感じて居るものである。今私共腎者の眼に映じ耳に觸れた事實の一二を最も簡單に話して見ようと思ふのである。實際今日のやうな世の中では、中流民の生活程苦しいものはない。大抵は手一パイの生活である。卽ち少しも餘裕のない生活である。極めて健康な活動して居る時期に於てさへ、五十圓の收入なら五十圓、二百圓の收入なら二百圓悉く使つて了ふので、恐らく借金さへしなければ餘程結構といふ有樣である。であるから、若し不意の出來事例へば病人でも出來るといふと、それこそ大變で、それ丈け生活費に喰ひ込んで行く、卽ちそれ丈け借金となつて後に殘るのである。不意の災難を見越して、平素からちやんと用意をして置けばいゝと言ふかも知れぬが、さうなくとも足らずがちの生活であるから、餘程心掛けのよい人でもなかなかさう行くものではない。貯蓄でもして居るやうな人は、實際餘程珍らしい奇拔な人と言はねばならぬ。

又言ふまでもなく、一部下級勞働者の生活の悲慘な事は、已に何人も認めて居るところであり、澤山な研究報告もある事であるから、今更ら茲で述べる必要はない。扨て第一に、中流民の階級はこれを平均して考ふるに、一國の所謂智識階級であつて、學問も皆相當にあり趣味も廣いのであるから、下級勞働者よりも亦上流貴族階級よりも、寧ろ學問智識及び趣味等に對する欲求が多い譯である。そこで、新聞雜誌も讀まねばならず、新刊の書籍も買はねばならぬ。又社交上種々の宴會にも行かねばならぬ。友人知己の婚禮、葬式にもそれぞれ御祝又は御香料を供せねばならぬ。從つて中々案外な出費もかゝる譯になる。又中流民は社交の關係上、相當な服裝なども必要である。下級勞働者は印半纏一枚で何處へでも威張つて行けるのであるが、中流民にあつてはいくらなんでもさうは行かない。又中流民は衞生思想も發達して居る。そこで、衣食住總ての方面

で、下級勞働者のやうに不注意にする譯には行かない。相當な家屋に住まひ、垢のつかない衣類を纏ひ、可成衞生に適ふ飮食をも取るといふ必要上、それ丈け支出が多くなる譯である。曾て東京驛の車夫の收入を聞いたことがあるが、彼等の月收は大抵平均五十圓を下らないといふ事で、實は私共一驚を喫した譯である。從つて其暮しは中流民の安月給取よりはずつとしよい譯である。食物の榮耀な事などは彼等の方が普通中流者よりずつと贅澤のやうである。又軍人でも中邊のところ、即ち大尉位から佐官位のところが實際に最もよく働いて居るのであるが、其月給は實に安い、實際氣の毒である。

中流民に於て實際一番困るのは、確に病氣の場合であると思ふ。健康で十分な活動の出來る時でさへ、やつと生活の車を廻して居るのであるから、一旦病氣になるといふと、忽ち其車の運轉は障碍を來すのである。主人公が病氣になつた場合は勿論である、殆んど一家内の者は皆餓えに苦しまねばならぬやうな事になる。それ故、主人公は病氣を押して倒れるまで仕事に從ふ。一度倒れるといふと、平常から無理をして働いて居る其積りつもつた疲勞が一時にどつと出て來て、大病人になつて了ふ。又家族の中の一人が病氣になつた場合は、主人公は非常な心配をして頭を痛め、又實際自分で萬事世話をせねばならぬ。それ故、つい〲職業の方は手につかぬと云ふ仕末になる。そこへ行くといふと、下級勞働者の方は比較的よくはなからうか。彼等勞働者は、一面大體に於て藥もよく利き早く治る傾向を有つて居る。又少しでも身體が惡るければ忽ち働けぬから、比較的早期から治療をする。それに今日は、或は貧民病院とか或は濟生會とか慈善病院などの設備が澤山ある事であるから、彼等は貧乏人といふ一種の特權を以て無料で治療を受ける事が出來る。ところが、中流民になると、體面上からでもさういふ處へ行く譯には行かない。假令無理算段をしても相當な處へ行かねばならぬ。自分の今日までの經驗によつても、其事はよく解る。即ち下級民が私共の病院へ來る場合は、無論拂ふ

金もないのであらうが、拂はぬ事があつても『俺は貧乏人だ。どうか施療をして呉れ。』と平氣で居る。又上流の所謂貴族富豪の階級の一部は、有餘る金を有つて居るのであるから、定めて十分な支拂ひをする事かと思ふであらうが、なか／＼さうでない。上流の家には夫々家令執事などゝいふ者が居つて、會計を取扱ふて居るものであるが、其支拂ひを盆暮に延ばすのはまだしも、延ばした揚句、何うかすると忘れて了ふことさへ少なくない。一體に上流民は我儘で、夜遲くでも朝早くでも何時でも遠慮なく直ちに呼びつけてをいて、時間も非常に費す。其クセ報酬は別に多いとは限らぬ。ところが中流民になるといふと、總てキチョーメンで正直で忠實である。禮儀作法も心得て居る。藥代でも診察料でも規定通りキチン／＼と現金で收める。時間も多くは間違ひなく守る。私共は其内幕の非常に苦しい事を知つて居るから、規定の金額を富豪同樣又は以上に收めるのは、氣の毒に思つて返して上げようとしても、決して受取らぬといふ有樣である。

殊に慢性の重い病氣、例へば肺病にでも罹つて入院などした場合に於ける中流民の苦しみと言つたら、實に想像以上である。

要するに、今日の場合中流民の生活は、上流民よりも亦下級民よりも一層割りが惡いものである。恰度中流民は山の中途の崖の上を歩いて居るやうなものである。而かも其狹い崕の上で多數押合ひへシ合ひ、少しでも弱く一寸でも隙のある者は、下層社會といふ谷のどん底へ突き落されて了ふ。中流民であつて一旦下層社會へ落ちて來たものは、勞働者としては一番ヤクザで殆ど役に立たぬ。又中流民の失敗したものゝ家族は、何うなるかといふ事を調査したら、それこそ實に驚くべき事實を見出すのであらう。但し、此危い崕を押合つて歩いて居る者の中には、一足飛びに飛び上つて、山の頂上に登る所謂成金成功者のないことはないが、然かしそれはほんの僅かなものである。それに此山の上へ登つた者が、本當に上等な人間であるか何うか、容易に斷言出來ないといふ事は何人も認めて居る通り

である。

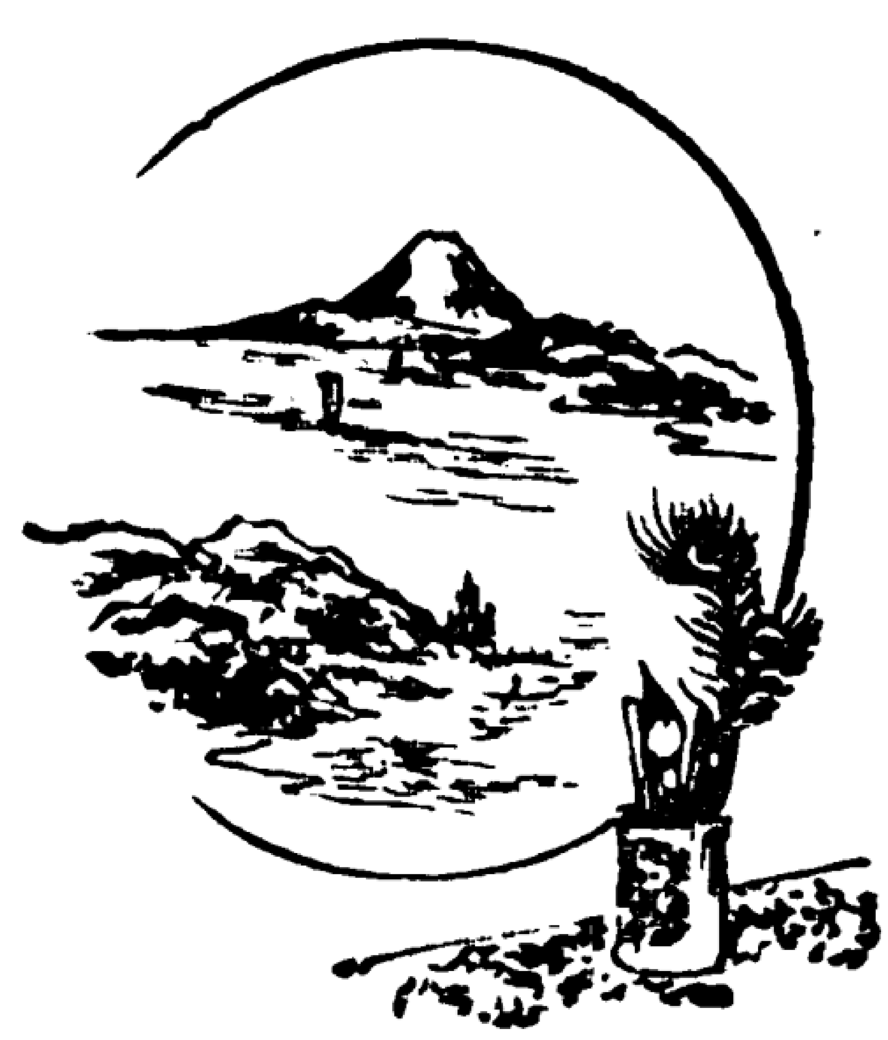
扨て或は此際どん底へ落ちる者は生存競爭の劣敗者であり、頂上へ登る者は優勝者であるから、これ正しき自然淘汰であり、歡迎すべき人類の進化であると言ふものがあるかも知れない。然かし其結果はどうであろう。人類の社會は結局貴族と貧民、資本家と勞働者との二階級にはつきりと分れて、中流民の階級は早晩滅亡することになる。其場合はどうであるかといふに、何しろ前にも言ふ通り、中流民は國家社會の中堅であり、あらゆる方面の手腕者であり、學問及び道德の支持者であるのであるから、それこそ大變である。それ故、中流民の救濟保護といふことは、目下非常に必要な事業の一つであらねばならぬ。中流民を保護するといふ事は、一面から言へば、之れ取りも直さず下級貧民の製造を未前に防ぐのである。斯く見れば、中流民の保護は下級民の救濟よりも、一層重大の意義がある樣に考へらるゝ。少くとも我が國今日の場合に於て、最も緊急な問題の一つであると思ふ。

以上の意味に於て、私は中流民の保護の必要を極力主張するものであるが、但し、救濟といふ事は考へものである。只、多少保護を加へ、又中流民は相謀りて自衛の道を講究すべきである。救濟は貧民に對しては行ふべきであろう。然かし、今日行はれて居る所謂慈善事業を觀察すると、未だ其方法は完全とは言へない。或は餘り貧民の世話を爲過ぎる關係上、彼等に卑怯な根性や依賴心を助長せしむる傾向がある場合があるやうに思ふ。此事は今日の貧民病院などに於て最もよく見受けられる。即ち患者を餘りお客樣扱ひにして、一から十まで手厚い介抱をしてやる爲めに、其恩に慣れ我儘になる者が多數の内に生ずる。保護救濟の方法については、よく／＼注意して、獨立自主の精神を失はぬやうにする必要がある。例へば、慈善病院でも藥代の如きでも其程度に應じて多少でも出さしてはドウかと思ふ場合がある。又病院に入れた場合でも重病人でない限り、臺所の手助とか、衣類の洗濯、或は室内の掃除などは、可成さした方がよいと思ふ。中流民の保護につきても、

矢張り此意味を以て多大の注意を必要とするのは勿論である。

最後に、中流民の保護事業の實施については、幾何らでも爲すべき事業がある。私も日頃多少考へて居る事がないでもない。それは勿論醫者としてゞある。實際中流民に少こし重い病人が出來た場合程同情すべきはない。さればとて、中流民で懷が苦しいからとて、私共開業醫が一々藥代を安くしたり入院料を半額にして居ては、醫者其者もともだをれをせねばならぬ。此處で何んとか方法を立てねばならぬとは、私の日頃の希望である。彼の實費診療所の如きも此意味で至極結構な事業であるが、今少し程度の高い設備の完全したものがほしい。此外幾何でも保護の事業方法があるであらう。

兎に角、中流民の研究保護といふ事は、目下非常に必要な重大な問題ではなかろうか。自分も、多少の希望と抱負を有つて居るが、それを述べる事は他日に讓る。要するに、議論はいくらしても駄目であるから、假令小さくてもよいから是非實行したいものである。同志同感の士はなかろうか。（談話校閲濟）



大正の男女問題を解決する一大光明現る

正價 金壹圓卅五錢 郵稅八錢

一條忠衛新著

男女道德論

四六判最上製美本 全壹冊約五百卅頁

人生の歷史は男女の歷史である。一切事件は男女を背景としてゐる。父母といひ夫婦といひ兄妹といふ皆男女の關係ならざるはない。然るに男

女の根本研究殊にその倫理的關係——殊に現代の新生活を立脚地として新道德上より男女問題を論究したるもの甚だ少なきは寧ろ吾人の怪訝に堪ぬ所である。一條忠衛君の本書はこの興味ある問題を捕へて縱橫自在に之を分析解剖し高遠なる理想に照して之を批判す。或は卑近なる實例を採り、或は社會の暗黑面を抉發し現代人心を警醒し指導せんとするの精神到る所に溢るゝの觀がある。現代青年男女は勿論敎育者倫理學者また父兄たるもの一讀して利益を受くる所多かるべきを疑はない。一條君は篤學の士である未婚の一青年なれども其思想は老人を凌ぐの慨がある。倫理學を研究する事年あり本書は多年研究の第一發表である本書によりて同君を江湖に紹介するは吾人の光榮とする所である。——早稻田大學敎授 內ケ崎作三郎識

最新刊

稻毛詛風新著

〔最新刊〕

父と子

四六判最上製美本 全壹冊四百五拾頁

正價金壹圓貳拾錢 郵稅金八錢

文明の大轉廻期に際して我が國民道德も亦革新の必要を感じ今や義務本位利己主義より責任本位人道主義に移らんとす。著者此の新潮の光頭に起ち在來の「孝道」に對して新に「父道」の價値を立說高調せんとし以て本書を公にす。勿論單なる抽象論と趣を異にし愛兒の夭折といふ。悲痛なる經驗より體得せる盤石の信念を根抵とする衷奥の絕叫を裏付るに東西古今の『文學に現はれたる父』を以てす。されば本書は子を持てるものに取りては始めて父たる道を理解し得べく子を失へるものは之によりて無上の慰安を受くべし。家庭道德荒廢の時必ず一本を擕いて新道德の眞髓を會得するを要す。敢てすゝむる所以なり。

東京市神田區表神保町七番地 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

德富健次郎著

第八版

死の蔭に

人生の旅の中途に、何時とはなく死蔭の谷に迷ひ込んだ旅人の著者が片手を死神にとられつゝ、日本の西半部から滿鮮かけて蹌々踉々とさまよふた其道行きを、父の死の後三年生きながら埋れた墓の中で思ひ出して書いて見たものです。

普通製　定價壹圓八拾錢
上製　定價貳圓參拾錢
送料各拾貳錢

新刊豫告

山路愛山先生の絶筆

世界の過去現在未來

發行所　東京日本橋西河岸町十五　振替口座二二九四六　大江書房

(中付二の二)

坪内博士鑑選

〔申込〕六月卅日限り

〔送本〕七月より毎月壹册

見本呈送

豫約出版

近世實錄全書

史傳的知識の普及機關として一般家庭の好讀物

〔豫約要項〕全部二十册四六判布製九百餘頁。九ポイント活字總假名附—豫約價即納十五圓、分納九拾錢宛廿回、送料毎册東京市四錢、内地八錢、支鮮樺十四錢、

書名の一部

大鹽平八郎—佐倉宗五郎—笹野權三—宮本武藏—四谷怪談—河内山宗心—佐野次郎左衛門—荒木又右衛門—大丸屋騷動—加賀騷動—伊達騷動—柳澤騷動—佐賀の夜櫻—幡隨院長兵衛—國定忠治—め組の喧嘩—天一坊—八百屋お七—村井長庵—越後傳吉—雲霧仁左衛門—鬼神お松—妲妃のお百—鼠小僧—延命院日當—鈴木主水—蓮華往生—清水次郎長—高橋お傳—小狐禮三—花井お梅—島田一郎—栗原百介—錢屋五兵衛—澤村田之助—雷神お新—寫眞の仇討—(書名百種に近きを以て悉く舉け難し)

實錄物とは著名なる事件人物を題材として興味本位に叙述せるものにて其範圍甚だ廣く、史傳的知識の普及機關、穩健なる娛樂機關として極て重要のものたり。近時盛行の講談筆記は概ね實錄物を底本となせども、座興を主とし駄洒落、滑稽を加へて枝葉を語るに止まるを以て之を實錄物に比すれば内容の充實と筆致の興味とに於て遙に劣れり。是に於てか讀書界の要求は勃然として往時の實錄物に傾きたれども今や原本を得る容易ならざるを以て、坊間に印行せられたるは其一少部分に過ぎず。當出版部之を遺憾とし原本の蒐集に力むるもの約十年、上は德川初期より下は明治廿年代までの實錄物の殆ど全部を網羅し得たるを以て坪内博士の鑑選を求めて全部廿册となし、嚴密なる訂正を加へ、毎編に深切なる解說文を附し豫約方法により逐次之を刊行せんとす。

(中付二〇三)

豫約元 東京市牛込早稻田 振替一一二三番 早稻田大學出版部

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 遠藤隆吉先生校閲
靜岡師範學校教諭 高部勝太郎先生譯

新刊

ロッス社會心理學

原著者米國ウヰスコンシン大學教授ロッス氏は現代社會學の泰斗なり。而して其の社會心理學は古今獨歩の觀あり。眼光鋭利、識見卓絶、論歩縱横、社會部衆の心理を説き盡して餘蘊なし。譯者は他年研究の傍ら一語一語殆ど逐字譯的に譯述し加ふるに遠藤博士の校閲を經て江湖に紹介す。希くば此の信頼すべき權威ある書の一讀を給はれんことを。

中判五百四十頁
布緞特製函入
正價金壹圓四拾錢
送料八錢

東京府立第一中學校長 川田正澂先生著

新刊

教へる人學ぶ人

著者は世の所謂名聞利達を雲煙に附し、悠々自適、身を中等教育に捧げ好望幾多の青年を指導啓發して愧る所なきを期するを天職とせる斯界の權威なり。曩に歐米の教育を視察したる感想と平生懐抱せる萬斛の意見とは、歴々書中に活躍し、文章平易にして理義徹底せり、教育家は勿論父兄並に青年學生の爲に最も適切なる教育的修養書なり。

中判總クロース函入
正價金壹圓
送料八錢

文學博士 久米邦武先生著

新刊

國史八面觀

磐余朝
奈良朝

三版新版

興味あり權威ある史學泰斗の著述

中判布製
各一冊
價壹圓廿錢
送料各八錢

(中付二の四)

□ 發行所 東京日本橋區鐵砲町六番地 振替東京[壹五〇五六番] 磯部甲陽堂 □

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

人物評論（八十五）

三黨首領比較評論



▽三黨首の比較

石川半山

憲政會の加藤、政友會の原、國民黨の犬養の三黨首を比較して、批評をせよとの御注文に對して、我輩は不幸にして先づ三黨首の誰れをも喜ばすべき發言をなし得ざることを遺憾とせざるを得ない、寺内伯の[illegible]

ではないが、此の三黨首に對して秉公持平の態度を以て批評を試むる時は、三黨首は之を喜ばないに違ひない、蓋し三黨首の如く平生多くの人に擔がれて居る人は、常に阿諛追従の空世辭に飽いて居るから、少しく其の耳の痛い事を言はれると、直ぐに怒りを發するに至り易い傾向が有るから・・・・

金力の比較

近頃の政黨の黨首となる第一の資格は、金力で有る、昔は貧乏を以て有名なる板垣退助伯を黨首に擔いだ自由黨を初め、黨首は必ずしも金力を要しなかッたが、近頃は世間が露骨になッて、何でも第一の資格は金力となッて來た、代議士の候補を選むにも、先づ彼れの金力は如何と問ふ樣になり、政黨の黨首を推戴するにも、第一に金力如何を問ふ世の中となッた、此の點に於て加藤君の背後には、三菱と云ふ大金力が光り、原君には古河銅山が光ッて居るが、犬養君にも金融の道は相當に開けて居る、彼れは元來三菱系の政客で有て、其の生活は、三菱に依て保證されて居るのみならず、豐川良平君は彼れを助くる所の親友で有り、郵船の近藤男爵と雖も、彼れから助力を申込めば、否とは答へ難い關係が有る、それに三井系の朝吹英二君は彼れの助力者中の大なる者で有る、其の外支那人の中にも彼れの後援者は有る、國民黨が兎に角三十餘名の黨員を擁して、儼然として一黨を成して居るのは、犬養君の力で有て、黨首として之を支へ得るに必要なる金力は、彼れの手に依て支辨される道は有るのだ、然かしながら其の黨員の少數なるは、明白に其の金力の乏しきを示して居る者で、若しも犬養君に三菱、古河以上の金穴が着いたなら、彼れの黨勢は一層盛になるに違いない、現に神戸の勝田君が僅かに三十萬圓寄附したばかりでも、既に十人ばかりの代議士を增加したではないか、玆に五百萬圓も國民黨に寄附する者が有れば、之れが忽ち政友會以上の大政黨になることは、疑ひもない事で有る。

閥族との緣故

今日の政黨は、官尊民卑の事大思想の國民を相手の事だから、其の發達は閥族との握手の程度に比例する事が多い。

加藤君は四たび外務大臣となり、官僚閥族の間にも相當に信用の有る人で有る、現に山縣公も先般彼れに向て『君も内閣總理大臣となるべき人物で、決して惡るいとは思はないが、惜しいことには政黨の首領で有るから、今回は寺内伯を奏薦した』と言ッた、若しも加藤君が政黨の首領で無ければ、之を首相に奏薦するに躊躇しないと云ふ意味は、此の言中に明かで有て、閥族の頭領たる山縣公に、之れ迄に認められるだけの緣故は持て居るのだ、然かしながら寺内内閣組織以來、加藤君が極力之に反抗した爲めに、今日では閥族元老の感情は、恐らくは原君よりも惡るいに違ひない。

原君も亦明かに官僚の出身で有て、加藤君と同じく四たび國務大臣の班に列した人で有る、而して閥族とは相當の緣故を有し、信用をも博し

た人で有る、然かしながら彼の二個師團の擴張に反對した爲めに、一時長州の陸軍閥から睨まれ、遂に前記の總選擧に大打擊を受くるに至ッた、然るに大隈內閣の在任中、加藤君が外交上の問題に依て、元老の感情を害し始めた頃から、彼れが元老との關係は漸次に復活し始め、近來は又加藤君以上の信任を博して居る樣に見える。

犬養君は自ら閥族反對を標榜し、世間に向て閥族とは何等の因緣をも有せざるが如く誇示して居るが、其の實際に於ては必ずしも無關係ではない、先づ長閥に對しては、三浦梧樓將軍と握手して居る、三浦將軍は山縣系の長老で有る、山縣公が必ずしも犬養君を嫉忌して居ないのは、三浦將軍が彼れを褒めて山縣公に話して居るから有る、又薩閥と犬養君との關係は、長閥以上で有る、山本權兵衛伯は島田三郎君と尾崎行雄君に對して、多大の憎惡を感じて居るが、犬養君に對しては決して惡感を持て居ない、犬養君が床次竹次郎君を褒めることの過大なるは、何故で有る乎、床次君が唯人物が良いと云ふばかりではない、外に種々の關係が有る爲めだ、若し往年大隈侯に大命の降下した時に、其の成立を見ざること、猶淸浦子の如くで有ッたならば、其の次ぎには犬養君を包容したる薩派の高島內閣が出現すべく計畫されたる事は、國民黨の一代議士が公開の演說會に於て自白した所である、彼等が寺內內閣に對する態度の曖昧なるも、決して偶然ではない、犬養君亦全く閥族と何等の緣故ない者とは言はれない。

學問と識見

加藤君は帝國大學を優等で卒業し、原君は外國語學校を中途から退學し、犬養君も慶應義塾を卒業はしなかッた、加藤、犬養兩君は英語、原君は佛語に通じて居るが、然かし語學に於ては加藤君の英語が一番優れて居る。

內外の事情に精通し、其の識見の高いことに於ても、加藤君は三人の中の優者で有る、若しも政策の問題に關して、意見を戰はしたなら、原君も犬養君も加藤君と太刀打ちは出來ない、犬養君は支那問題に付ては、最も研究の深い筈で有る、然るに此の最も得意で有るべき此の問題に付てさへも、彼れの意見として傾聽すべき者は無い、最も彼れは革命黨と深い關係を有するが上に、袁世凱とも連絡を取て居た者だから、十分に意見が立ち難いので、又其の心には一定の意見が有ても、種々の情實上から之を發表し難い事情も有るかも知れぬが、是れ迄彼れの支那に對する意見の確乎たる者を發表したことを聞かない、原君に至ては主義政策の問題に關して、曾て彼れの意見と云ふ者を聞いたことが無い、唯國家の情勢に付て憂慮すると云ふ話は聞いたが、國事を憂ふるのは國士を以て自任する者の常で有て、之れは原君の專賣とするに足らない、唯憂慮するばかりでは仕方がない、其の憂ふべき情勢を救濟する方法如何を說かなくては、立憲政治家とは謂はれないワケで有る。

政治家としての學問及び識見に於ては、加藤君を以て第一とするが、

是れは單に原、犬養兩黨首に比較して優秀なるばかりではない、今の日本帝國の政治家中に於て、其の識見の彼れに優さる人物は、極めて少ないと思ふ、曾て伊藤公は偉大なる人物で有ッた、現代に於て大隈侯と山縣侯の識見卓越せるは、我輩と雖も之を認む所で有る、西園寺侯も亦八面玲瓏の頭腦で有る、然かし加藤君の識見は、此等の諸先輩に比して、少しも遜色はない、所謂ステーツマンとして此の國家を委托すべき資格は、我輩加藤君に於て十分に之を認める。

原君に至ては、國家の政治に對して、如何なる經綸を有するや、甚だ明瞭を缺いて居る、其の明瞭を缺けるは其の頭腦の明晰ならざるを證する者で、其の立言の曖昧なるは、確乎たる經綸が胸中に無いからでは有るまい乎、犬養君も亦國民をして敬服せしむるだけの經綸を吐いたことが無い、偶ま發言したる者は、例の一年兵役論で一世の物笑ひとなッた位の者だから、殆んどお話にならない。

人心收攬の才

今日の政黨の首領は金が有て、經歷が良くて、而して學問と識見が優秀なるばかりでも務まらない、一種人心を收攬する才が無くてはならぬ。

此の一般の人氣を集める才氣に至ては、三黨首中犬養君に及ぶ者は有るまい、而して加藤君は一番其の才を缺いて居る、犬養君は憲政の神に祭り上げられた程の人氣取りの名人で有る、然るに原君も加藤君も兎角無愛嬌で、喧嘩腰になり易く、未だ能く群衆心理を解せざる者ゝ樣に見える。

加藤君は、群衆が自分を神にでも祭り上げたら、却て人を馬鹿にして居ると言て怒る位の者だ、原君にしても未だ平氣で神樣になり濟ます程の、度胸を持て居ない樣だ、是れ兩君共に官僚の畑に育ちて、理性が勝て居るからだが、それだけ今日の政黨の首領たる資格に缺けて居るワケで有る。

然かし案ずる事は無い、加藤君や原君も近來大分擔がれ方が上手になッて來た樣だ、今から十年も年期を入れたら、十分に角が取れて、低級の群衆から程良く、御輿に擔がれる位の人物にはなれるだらう。

黨員訓練の技倆

一般群衆の心を收攬する才氣に於て第一の犬養君は、其の黨員を訓練する技倆に於ても、他の二君に比較すれば或は第一かも知れない、而して此の點に於ては原君も近來大に上達したが、加藤君は矢張り一番拙劣で有る。

全體黨首として大政黨の上に臨む者は、一種春風の如き德望を以て、黨員全體を感化する力が無くてはならぬ、然るに犬養、原、加藤の三君共に決して德の人ではない、寧ろ智の人で有る、其の眼中に涙は無くて寧ろ冷酷な方で有る、一片の俠骨は之を具へて居るかも知れぬが、利害の打算に明かにして、理性が勝て感情を制する方だから、黨員が悅服すると云ふワケには往かない。

ソコへ往くと松田正久君は天下一品で有ッた、不得要領の中に要領を得たること彼れに及ぶ者は有るまい、然かし松田君の如き人格は、天品にして學ばんと欲して學ぶことは出來ない、原君でも加藤君でも犬養君でも、生れ代はらなければ、松田君の如き人格には兎てもなれない。

三黨首の將來

我輩は豫言者でないから、三黨首の將來迄も達觀して、確かに之を豫言することは出來ない、然かしながら三黨首の比較をなす序を以て、彼等の將來に關する我輩の感想を語るなら、先づ加藤君が今後永く政黨の黨首たるや否やは疑問で有る。

彼れが近き將來に於て臺閣に立つ機會を得たなら、其の必要上政黨の首領を継續することも辭さないで有らうが、三年も五年も逆境に沈淪して、政黨の世話をすると云ふことは、兎ても彼れの堪ふる所で有るまい、歷史を見玉へ、官僚から出て來て政黨へ飛び込んだ者は、間もなく恐れ入て逃げ出したではない乎、西鄕侯は明治二十五年に國民協會を創立して、日清戰爭前に逃げ出して、海軍大臣となッた、伊藤公は明治三十三年に政友會を創立して、日露戰爭前に逃げ出して、樞密院議長となッた、兎ても三年とは續かない、桂公も同志會を創立したが、若し生存して居たら三年とはやり得なかッたらう、後藤新平君も仲小路廉君も忽ちの間に逃げ出した、奥田義人君も東京市長となッて政友會を脫し得た時に、『ヤレ〱』と太い息を吐いた、如何に彼れの境遇が苦しかッたかを察することが出來る、一言にして之を言へば、政黨はウルさい者で有る、其の首領の地位は如何にも堪へ難い者で有る、加藤君が今から三年を出でずして逃げ出すことなきや否やは問題だ、試みに政府が若し加藤君に向て歐洲に開かるべき講和會議に列すべき日本の全權大使の地位を提供し、此の交換條件として、政黨を擲たんことを求めたなら如何で有る、其の持ち込み方に依ては、彼れは乾度政黨を捨てゝ全權大使を受けるで有らう。

原君は政友會の幹事長から叩き上げた男で、加藤君とは少しく趣を異にし、政友會のお蔭を以て、四たび臺閣に列した男で有る、其の個人の勢力を黨内に扶植したる力も、決して加藤君の憲政會に於けるが如き者ではない、故に彼れは政友會に於て、非原黨の起らざる限り、政友會本部の玄關前に、彼れの銅像の立つ迄やるだらうが、さて政友會を率ゐて彼れは何を爲すで有らう乎、再び西園寺侯を擔ぎ出して、内閣に立つ位の者で有らう、西園寺内閣の成績は、前の二回で大概分ッて居る、到底顯著な事功を擧げ得る見込みはない。

犬養君が將來果して如何なる事をなし得るやら、我輩には分らない、目今の所では憲政のミイラになる迄やる積りの樣にも見えるが、何しろ全黨を擧げて、野次を得意となし、犬養君自ら野次の隊長を以て自任して居るのだから、如何にも大人氣のないやり方で有る、さらばと云て次の薩派の内閣や西園寺内閣へ割り込むワケにも往くまいし、又若し割り込んだ所が、何の仕事の出來るでもないから、彼れは或は終生逆境で

るかも知れない。

青年の奮起

要するに今日の政黨の極めて不完全なるが如く、其の三黨首も今日の所では決して吾人の理想に適したる者とは謂はれない、吾人は新らしい立派な政黨を望むと同時に、黨首たるべき新らしい偉人の出現を望まざるを得ない。

▽三黨首對照觀

鵜崎鷺城

日本に政友、憲政、國民の三黨以外に別の新しい政黨が顯はれざる限り、又た原、加藤、犬養の三氏が黨首である限り、三黨が善かれ惡かれ何等かの働きをするに連れて、此三氏は是非の批評に上るのである。實際を言へば原も加藤も犬養も耳新しい人物で無い。餘りに世間の耳目に熟し過ぎて居るが、併し兎に角常に政黨を代表する現在の人として、三氏の態度が或る程度まで政機を支配するモーチーヴ・パワーになつて居る。

其年配からいへば犬養氏は原氏よりも一つか二つ年長で、加藤氏はずつと若い。從つて其閲歴も犬養氏が一番先輩で、明治十四年大政官權少書記官を罷めて改進黨に加り、大隈の幕僚として相當世間に知られた時分は、一方の原氏は司法省法學校を放逐されて下宿屋にゴロ〳〵し、加藤氏は漸く大學を卒業して三菱の雇人になつたかならぬかの時であつた。新聞記者としても原氏が報知新聞の雜報書きに雇はれて矢野文雄にコキ使はれ、不平で飛出してから糊口に窮して、甲府の峽中日報に一文五十錢の原稿料で通信を送つて居た時、犬養氏は操觚界に第一流の名を成し、政客としてよりも寧ろ新聞記者として知られて居た。加藤氏も日露戰爭後、三菱が東京日々新聞を伊東巳代治子から買取つた時、初めて新聞といふものに關係したが、固より自分で文章を書くのでなく、唯時々顏を出して社長權を振廻した丈けである。而も氏の新聞事業は失敗に歸し、トウ〳〵人手に渡して元の役人生活に還つた。又た松隈内閣、憲政黨内閣の時、犬養氏は進歩黨隨一の智將として切つて廻し、或は大臣以上の勢力ありと稱せられ、縱令ひ三日大臣にせよ文部大臣に任ぜられたが、原氏と加藤氏は漸く公使に過ぎなかつた。特に代議士としては犬養氏は第一期より今日まで只の一度も拔けずに押通し、原氏は漸く十二三年も後れて議會に入り、加藤氏は三十六年島田三郎と横濱市に爭ふて敗れたが、奧田義人氏が辭職したので補缺當選したのである。かくの如く犬養氏は他の二氏よりも早く社會上の位置を得、名を成すことも早かつたけれども、始終割の惡い在野黨として押通し、特に貧乏世帶の政黨で苦勞をしたから、却て官僚の仲間入りをした原、加藤の方が後に至つて幾度も大臣になるし、今では兎に角大政黨の總裁としてより以上に時めいて居る形である。單純なる物質主義功利主義の上から言へば、原氏

と加藤氏は社會の成功家にして、朝野に遠かり勝ちの犬養氏は成功者でないといふ理窟も立つ。が、或る意味に於て他の二氏よりも成功して居るとも言へる。其處は唯だ見方一つである。

政黨首領としての三氏を比較するに、原氏は政友會の黨情を最もよく飲込み、其黨情に順應するように務める。言ひ換へれば政友會を政權に接觸をさせて所謂る順境に置く爲めには、政治上の名分とか理義とかいふものに重きを置かずして、臨機應變主義で行く。黨が順境になれば不平などは起るもので無いといふ黨人心理を解して居る。氏が妥協政治情意投合の歴史を殘し、又た嚢に淸浦子の飛出した時、超然内閣といつて反對しながら、今度は寺内々閣擁護の位置に立つたのも、究竟する處政治其物よりも、政黨それ自身の利害の桁から割り出されて居るのである。それ故に便利主義、現實主義の政黨の首領としては確に相應しく出來て居る。加藤氏は政黨生活の經驗が淺い上に、原氏の如く黨情を解して居ない。動もすれば自分といふ頭が勝過ぎて黨員との間にシックリと結付がない。原氏に比すれば操縱の術を缺き、又た黨首として熱力と野性に乏しい。犬養氏は黨情に從つて黨を運用して行くといふよりも、黨全體を自分の理想の鑄型に嵌めなければ滿足せぬといふ風がある。少くも自分が黨を同化して其針路を誤らしてはならぬとして居る。黨内に在ては自分が模範であり、外に對して黨が政黨の典型であるといふ立前で指導するから、或者は氏に同化するけれども、或者は非常に窮屈に感ずるかも知れぬ。

原氏なり加藤氏なりは政友會の原、憲政會の加藤で、未だ原の政友會加藤の憲政會とは言へぬが、犬養氏に至つては犬養に國民黨である。國民黨は犬養であると言へると思ふ。蓋し政友會は原氏の力量を認め、憲政會は加藤氏の黨首權を承認して居るけれども、其いづれにも精神的に傾倒して居ない。而も犬養氏に對しては、國民黨全體が其地位と人格と識見に關して充分の理解を有つて居る。以前は兎に角少くも今日の國民黨は、首領と黨員の間に精神的結合があつて、首領の言ふ處に共鳴し、向ふ處に附いて行く。凡そ政黨には組織上の中心點と衆望の中心點とがあつて、此二者を調和して權力の中心を定むるのである。原加藤氏は組織上の中心點で、總裁の位置が物を言ふ形であるが、犬養氏と國民黨との關係は、單に一總務としてならず、犬養といふ箇人の力が黨員の信仰を喚ぶ一つの偶像になつて居りはせぬか。

原氏の信條は何處までも現在主義(プレゼントモーメント)で、是れが現實的な政友會に適應して居る。由來現在主義は權勢本位で、黨派と政權との結合を存在の第一義とするに傾き、之れを實現して行くのが殆んど黨首の主たる任務のようになつて居る。原氏の重んずる處は實行にして、説や理窟よりも行爲本位で行かうとするにあるが、而も其實行は新しい時代の政治主義の下に於ては時代錯誤に陥つて居る。此權力主義の上からいふ時は加藤氏も現世教の信徒ではあるまいか。尤も氏に原氏に比すれば何程か理窟に傾く丈け、時として理窟に依て行動し、間々世評に頓着する跡がある。犬養氏は現在のみに囚はれて筋の通らぬプラグマチズムに凝り固まるを嫌ひ、

政務と風馬牛相關せざる一時の勝敗に拘泥するのを無意味だとして居る。それ故に政策を重んじて政略黨略を輕んじ、大義名分を尊んで御都合主義を卑むのである。唯だアブノーマリーに黨が膨脹して無意味な事をするよりも、少數でも好いから意味のある働を爲し、斯くすれば少數でも有力なる地歩を占めることが出來るとして居る。氏が常に口にするキャスチング・ヴォートは畢竟此理想から來て居るのである。唯だ主義理想名節に殉し、手段を第二にして國策を主とし、共に來るものは來れ、去るものは勝手に去れ、古い議員は背き去つても新に來るものと共に行くといふような頭があるから、或は人に依て偏狹と言ひ、或は黨員の身の立瀬を思はずして唯だ自身を全うするとの非難も起つたのであるが、斯うした處にこそ氏の眞價と信用と勢力とがあるのである。兎に角氏に從ふて行くものは恰も險しい山を登ると同じで、大概のヘロ〳〵議員は中途で閉口垂れて了ふ。現實主義の上からいへば原氏などが當世向で、氏の如き遣口は政黨の首領として不向かも知れぬ。

一時の勝敗に拘泥する結果、選擧に多數を得、政權に近いた時は大に樂觀し、然らざれば忽ち悲觀するのが常である。現に政友會が少數に切崩された時、原氏はヒステリーの妻君が愚痴を溢すように到處で隨分泣言を言つたが、今度憲政會が大敗を取ると加藤氏も愚痴を言つて居る。そこに行くと犬養氏は十數年敗け通した慢性的敗將丈けに、四十が二十八に減つても夫程の感覺もなければ、二十八が三十五に殖ゑたからとて格別得意の色もない。蓋し氏は逆境に一種の趣味を感じて居る。逆境に趣味とは妙であるが、兎に角勝敗利鈍を哲學的に考へて、順逆に喜憂しない丈けの精神を修養して居る。氏は常に西郷南洲翁を嘆美し、いろ〳〵研究して居るさうであるが、翁は月照と共に薩摩潟に身を投げて蘇生してから、一層人物上の偉大を加へ常に安心といふものがあつた。煩悶も苦痛もなく、功名とか利害とかいふ唯物論の上に高く超越して居た。此安心があつたからこそ翁は國家と同化したのだと言つて居る。氏も亦此安心の上に立て居るから、餘り成敗利鈍の末に拘はらないのかも知れぬ。氏は禪を學んだことがないけれども、其枯淡にして機鋒の鋭い處に自ら一種の禪味がある。

黨首としての三氏の異る點は啻に是れのみならず、原、加藤氏は常に何等かの事情に囚はれ、犬養氏は常に極めて自由不羈の立場に居ることである。前にも言ふた如く二氏は一時の勝敗言ひ換へれば政權のヤリトリを念とするに專らであるから、勢ひ其周圍及び背後との關係に於て、いろ〳〵面倒があつて拘束さるゝを免れぬ。獨り犬養氏は元老の機嫌氣褄を取る必要もなければ、其他の周圍背後に遠慮する心配もないから、一切の因緣情實を超越して、自由に論議し自由に行動することが出來る。

近頃チョク〳〵三黨首會合說が傳つて居るが、一旦立消同樣になつたものを今更蒸直しも出來まいから、是れは新聞記者が種に窮して例の手製をやつたものと思はれる。昨年の三黨首會議に於て外界一切の容喙即ち議院以外の勢力の排斥を協定した時、加藤氏は當時の立場が立場であつたから、其申合せ實行の一段になつて困つたが、今度は原氏が困る順番

である。犬養氏は如何なる塲合にも主張者ともなれば實行者ともなり、誰れに憚る處がない。三十八議會に政府反對の第一着手を執つたのも、不信任案上程に際して政府にも政友會にも憲政會にも當り散し、總選擧に於て思ふ存分に八當りをすることが出來たのも、畢竟斯うした立場に居るからである。

原氏には古河、加藤氏には三菱といふ大きなパックが控へて居るが、國民黨即ち犬養氏には何等のパックも無い。特に今度の選擧に於て前二者は一は政府の權力に惠まれ、一は財閥の庇護に負ふ處少くない。若し加藤氏に此背景がなければ、憲政會はもつと減つたかも知れぬ。其間に介在して國民黨が獨自一己の力で二十八から三十五に躍進したのは、權力と金力の背景がない丈け一層健氣である。原氏は黨の爲めに金を引き出す便利があるにしても、氏自身に金がない。犬養氏に至りては更に貧乏浪人である。多年愛藏の刀劍を賣放したし、問題の屋敷も買手があらばいつでも手放すと言つて居る位で、實は持餘して居るらしい。三黨首中加藤氏が一等金の蔓にブラ下つて居る。妻君の持參金丈けでも大たものである。然し金離れのは好い方でない。加藤は金を散ずる爲めに三菱の婿になつたのでは無く、金を貯込む爲めだとは驚くと、金に汚いので有名な增島六一郎氏が惡口を言ふ位だから想像が附く。原氏は餘り金を惜しまない。犬養氏も金離れの奇麗な方である。財力が政黨首領の必要なる資格とすれば、少くも加藤氏は此の點に於て一番資格がある。

三黨首中世間の同情、群衆の人氣があるのは犬養氏で、原氏と加藤氏に至つては極めて人氣に乏しい。政友會、憲政會の不人氣なるに反して、いつも國民黨に人氣があり、特に今度の選擧に一層の人氣が集つたとすれば、それは大部分犬養氏其の人の人氣である。國民黨の新議員中には隨分お粗末な顏觸れがあつて、選擧民は犬養に入れる積りで其等の人々に投票したといふものも少くなかつた。由來國民黨には演説上手演説好きが多いが、犬養氏の雄辯に至ては、啻に國民黨のみならず又た議會の誇りである。加藤氏も相當辯力を持つて居るが、プラットフオーム・スピーカーで無い。原氏は元來口の人でない。政府彈劾演説をする時はボリボリ頭を搔くなどは威權を損すること甚だしい。特に原氏といひ加藤氏といひ、反對黨の攻擊や演説の揚足取りをするが、犬養氏は現在將來の國策を論ずる以外に、他黨の惡口や人身攻擊を試みない。或人が犬養尾崎の演説を稱して、犬養は座談で皮肉な惡口を言ふが、演説は詭辯である。尾崎は對話は禮儀正しいが、演説になると口汚いと言つたのは適評である。兎に角犬養氏は表面に立つ闘將としては理想的に近い。

加藤氏と犬養氏は正直で、原氏が一番ずるい處がある。執着力と野性にも富んで居る。加藤氏は傲岸で無愛嬌で偏理的で頭は透明でも人間が餘り小さく結晶して居る。原氏は冷かなるも冷中に多少の溫味あり、犬養氏は智の人にして又た情の人である。加藤原氏は無趣味であるけれども、犬養氏は多趣多才にして刀劍の鑑定、圍碁に長じ、書は自から一家

を爲し、文章の才がある。近年揮毫を斷つて居るが、筆、墨、硯の諧謔をする。端的に言へば犬養は東洋式、加藤は英國カブレ、原は和洋折衷である。犬養は奔放、加藤は氣障、原は俊敏である。斯くの如く三氏は黨首として其の立場を異にし、意見と行方を異にし、歷史系統を異にし、人物の點も三人三樣であるが、唯一つの類似といふのは調和的のヌーボー性に乏くして、險峻人を壓するが如き點である。

▽三黨首領の特色

前田蓮山

一

○原は總理大臣の器にあらず、加藤も然り、犬養も然りと言ふ者あり。然らば誰れが總理大臣の器なるぞと問へば、打ち案じて遂に一人をも擧ぐる能はざるなり。然して過去の人物を問へば、彼も偉人なり、斯れも人傑なりと、續々指を屈し來る。過去の時代は偉人、人傑にて埋まりたるものゝ如し。

○斯の如き人、常に現在に不平にして、將來に對する理想もなく、せめて過去の時代に慰安を求めんと欲するものから、自分の空想のまゝに平凡人を偉人に作り上げ、二言目には必ず昔の人を語る。

○予は斯の如き人に向つて眞面目に論議せんとは思はず。唯だ思慮分別の相違にあるらしき紳士にして、一概に人をケナシ付けんとするは常套の悪習なり。彼等口を開けば直ちにロイド・ジョージと言ひ、ルーズベルトと言ふ。自家面上の瘡痕の見へざるも人の常なれども、他家の料理の美味さうに思はるゝも亦た人情の錯誤なり。

◎予は決して原、加藤、犬養諸氏を總理大臣の器ならずとは思はず。外國の大政治家と云ふも大概斯の如きものならずやと思ふ。ロイド・ジョージヤルーズベルトは彼の地にては大政治家ならんも、日本の大政治家たることを得るや否や疑問にあらずや。

○假令三氏が總理大臣として不足なりとするも、今日にては彼等を推すより外、別に傑出したる人物も見當らざるが如し。評者が三氏を總理大臣として理想的にあらずと言はゞ可し。若し總理大臣たらしむべからずと排斥するに於ては異議を唱へざるを得ざるなり。

○若し彼等を排斥せんか、何處に總理大臣の適任者ありや。政黨界に於て三氏の上に傑出する人物ありやと問はゞ、何人も否と答ふるに躊躇せざるべし。然らば樞密院に於ては如何。清浦子、伊東子、三浦子、末松子、都筑男、數へ來りて何れか三氏に優れりと爲す。同等にあらずんば其れ以下ならん。

○貴族院に求めて如何、官吏中に求めて如何、軍人中に物色して如何、學者中に物色して如何、若し三氏を以て總理大臣の器ならずと排斥し去らんか、當分日本は無内閣ならざるべからず。

○予は以下三氏の特色を擧げて之を比較せんと欲す。素より大體に於て

總理大臣たる資格を有する人物と認めての批評なり。

二

◎各人の特色は即ち各人格の統一原素なり。各人の特色は即ち各人格の全體なりとも云ふを得べし。故に人の特色を擧ぐることは容易ならず。世俗の人を評する者、彼には斯々の長所もあれば斯々の短所もあり、斯うもあれば彼ア(あ)もありと、部分を擧げ並べて以て公平を得たりとなすが如し。是れ完全なる人物論にはあらざるなり。

◎卒然としてペンを執り、紙に臨みて沈思すること數分間、以て三黨首領の特色を擧げ來らんとす。予の企や頗る大膽ならずとせず。中るも八卦、中らぬも八卦、兎も角讀者の一餐に供せん。

◎原氏の特色は打算力なり。氏曾て人に語りて曰く『政友會が自分の言ふ事を諾いた時は必ず成功して居るが、自分の言ふ事に背いた時は屹度失敗した歴史を持つて居る』と。道は原氏の言ふ通りなるべし。少くも予の知れる範圍に於ては確かに然り。

◎氏の頭腦は驚くべき迄に發達せり。此の點に就て予は當今の政治家中、氏に比すべき人物を發見する能はず。年と共に記臆力は稍々衰へたる如きも、判斷力の卓越せること眞に驚くべきものあり。原氏常に曰く『九分間以上議論を繼續する者は愚者なり』と。以て氏の頭腦を知るべし。

◎氏は其の明晰なる頭腦を更に最も經濟的に使用す。氏の門前は常に訪客の群を成し、代議士、地方有志家、新聞記者、浪人、雜誌記者として朝より夜に及ぶと雖も、氏が毫も倦怠の色を示さゞるは、一に頭腦を經濟的に使用すればなり。

◎原氏は原理の上に立たずして、直接事實の上に居らんとす。コントは人智の進歩を三階段に分ち、其の初期を神話的時代とし、次を形而上學的時代とし、最後を實證的時代となしたり。氏は即ち實證的科學的なり。

◎犬養氏は何事に對しても直ちに結論、斷案を下す人なり。加藤子も亦た犬養氏ほどにはあらずとも、結論に早き人なり。是れ一見甚だ頭腦の明晰を示す如きも、實は其の智や頗る單調たるを免がれず。

◎犬養氏や加藤子の考へ方は多くは演繹的なり。即ち先づ一定の原理を立てゝ説明を試んとするものにして、所謂コントの所謂形而上學的時代に足を止めたる人ならずんばあらず。演繹論は其の前提たる原理にして誤りあらんか、其の結論に何等の價値あるを見ず、即ち机上の空論とは此の事なり、書生論とは此の事なり。

◎演繹論者の議論を行るや、實に正々堂々として、其の結論や確乎不動の眞理の如きも、實は同一の事に就ても、前提の立てやうにて數個の結論を得べし。尾崎行雄氏の議論は其の最も著るしき例なり。氏は一個の問題に對して、合理的に贊成する事も出來れば反對することも出來るなり。曾ては氏の一身四様使ひ分けとして有名なる如く、一個の問題に對して四つの結論を與へたる事あり。而して四つ共合理的たることを失は

ざりしは寧ろ滑稽なり。犬養氏や加藤子の政治的經歴を仔細に點檢し來らば思ひ半に過ぐるものあらん。

◎之に反し原氏は歸納的なり。歸納法は演繹法の前に來る。即ち歸納法は演繹法の前提を創造するものなり。原氏は他人の作りたる原理に滿足せず、直ちに個々の事實より出發して結論を得んと試む。犬養氏や加藤子は英米の政治を說き、憲政の本義は斯々なりと定めて議論を立つると雖も、原氏は之を冷笑して英米の本義は英米の本義なり。我は我が本義を行はんのみと言はんとす。

◎前提を創造すること豈容易ならんや。引力說の前提よりして地球廻轉の結論を得るは易し、困難は唯だ引力說を創造するにありて存す。極言すれば演繹論は一個無用なる論理的遊戯に墮する事あり、此の種の人如何に議論を逞ふすと雖も、幵は眞の識見家と稱すべきものにあらずして所謂理屈屋なる者のみ。

◎前提を創造することは議論にもあらず說明にもあらず。直接宇宙の大秘密裏に飛び込みて探し廻はるより外なきなり。されば創造者は銳敏なる直覺力を有するシオたるを要し勇者たるを要す。或學者が『天才は大冒險家なり』と言へるは此の故なり。

◎從つて歸納的結論に對しては、賛否の批評喧々たるを常とし、或は神とせられ或は惡魔と見らるゝことあれども、演繹的結論は單純に二一天作五と彈き出さるゝを以て、低級の民衆に對しては喝采を以て迎へるゝを常とす。

◎原氏は一定の軌道を走る汽車にはあらずして、自由自在に道を擇びて疾走する自働車なり。或は軌道に乘る人にあらずして軌道を敷く測量師とも言ふを得ん。原氏が打算に長ずるは其の歸納的思索に精しき結果にして、打算が其の目的にあらず。然れば外間より見れば却つて打算的ならずして大冒險と思はるゝ事もあるなり。

◎立憲政治は軌道的政治なりとせば、原氏は立憲政治家として餘りに形式を輕視する弊あり。然れども政治は元來創作なり、議論にもあらず又た說明にもあらざるなり。故に原氏は政治家としては眞に政治家らしき政治家なり。唯だ歸納的人物は部分に囚はれ易くして、卓勵風發的高調を有せざるを缺點となす。

三

◎加藤子の特色は理屈にあり。實に理屈を言ふことに就ては三首領中加藤子を第一とし、犬養氏と雖も之に及ばず。玆に理屈と云ふは前提を吟味せざる演繹論、三段論法にして、其の弊に陷れば論理的遊戯に終ることと既に述べたる所の如し。

◎詭辯家は先づ胸中に結論を有して、之を合理的ならしむる爲めに便利なる前提を探し來るを常とす。尾崎行雄氏の如き是なり。是れ三段論法家の陷る弊なれど、加藤子は未だ尾崎氏程に陷落せず、多くは先づ自ら信ずる原理ありて、其の上に論理を築き上ぐる如きも、隨時隨所に於て互に矛盾せる得手勝手の前提を持ち出す事も少なからず。

◯近き例を擧ぐれば、大隈内閣を退きたる時も、河野廣中氏の入閣を承認したる時も、辭職後依然同志會を率ゐて大隈内閣を援助したる時も、寺内々閣の成立に反對したる時も、凡て氏に言はすれば合理的行動にして立派に理屈を付すれども、少しく注意すれば此の四つの場合に於ける議論の前提が互に矛盾せることを發見するに難からず。

◯子は原氏に劣らざる明晰の頭腦を有し、論理の形式を整へ、其の場限りの議論を立つる事は甚だ巧みなれども、原氏に比し天才的分子なく、直覺力に乏し。是れ一は演繹的にして一は歸納的なる所以ならんか。

◯其の修養を見るも、加藤子は秩序的の學問を爲し、書籍より原理を得たる事多けれども、原氏は學校生活の期間短かく、其の識見は實地より得たるもの多きを以て、前者は原理の上に立たんとし、後者は實地の上に居らんとするなり。犬養氏が政治上に於て單調なる三段論法を立つるに拘はらず、黨略上に於て神出鬼沒的なるは、政黨生活に實地の經驗多き爲めならずんばあらず。

◯英獨開戰の當時、カイゼルは『白耳義の中立は一片の紙にあらずや、英國は此の一片の紙を守らんが爲めに人命を賭して開戰するか』と皮肉を言ひたり。曾てビューローは議會に演說して『世界の版圖は確定せられたりと言ふ勿れ、英國は人間の住まざる多くの土地を占有し、獨逸は健全にして聰明なる國民を容るゝの地に苦しみつゝあるにあらずや。世界の版圖が確定せられたりと言ふは迷惑なり』と論ぜり。

◯英國は一片の紙の爲めに開戰すと宣し。獨逸は自ら生きんが爲めに開戰すと言ふ。英國の主張する所は形式なり、獨逸の主張する所は現實の必要なり。然れども英國とても實は戰はざるべからざる必要は他にありて存し、唯だ名分形式を此處に求めたるのみなるべし。是れ三段論法的理屈のみ。

◯佛人ボーミー氏の『英國々民』と云へる書に『英國人の思想の定め方に就ては一種特別の所あるを見る。英國人は其の政治上の說を擇ぶに方りて、利害輕重を比較することは十分ならざるが如し、彼等は先づ偶然一說を擇び、其の思想を中心として說を固め、更に之に理由を附して固守するものゝ如し』と言へり。而して彼等は之を正義と言ひ主義と稱するなり。

◯又た曰く『英國人は孤立的にして主觀的なり』又た曰く『英國人は天性過激にして且つ殘酷なり、英國に於て宗教の盛んなるは此の天性を矯正せんが爲めの努力に外ならず』と。加藤子は英國人の如く、原氏は獨逸人に似たらずや。

◯三段論法的人物は人格の内容單調貧弱なるを常とす。此の單調貧弱なる内容に强き意志の活く時、人は如何に現はるゝや。即ち消極的には剛情、執拗となり、積極的には傲慢不遜となるなり。加藤子の如き確かに其の弊を有す。

◯所謂ダヾッ子なる者も斯の如し。彼等は世の中を知らず、其の人格の内容が甚だしく單調貧弱なるが故に、其の内容を統一調和する意志活動も亦た從つて單調となり、剛情傲慢の行爲を爲して人を困まらすなり。

四

◎犬養氏は趣味に豐富なるを特色となす。原氏も加藤子も殆んど道樂と云ふ道樂なけれど、犬養氏は種々の道樂を有し、殊に刀劍と碁道とは商賣人以上なりとの評あり。然れども氏の趣味は美的趣味にあらずして知的趣味ならずんばあらず。

◎心理學者の說に依れば、人間の情操は抽象的と具體的との二種に分類するを得、眞理を愛し藝術を愛するが如きは前者に屬し、父母を愛し朋友を愛するが如きは後者に屬す。此の分類に從へば犬養氏は抽象的情操に富み、原氏は具體的情操に豐かなり。

◎而して加藤氏に至りては、元來情操に乏しく、知的に偏したる單調の人格なる事蔽ふべからず。予は加藤子を英國人に比したるが、英國人の立派なるは彼等の品性が宗教に依りて陶冶せられ、彼等の人格が宗教に依りて完成せらるればなり。若し彼等より宗教を取り去らば冷靜氷の如く、嚴酷鐵の如き理智と意志との人ならずんばあらず。宗教を有せざる加藤子の人格や推して知るべし。

◎而して抽象的情操は更に之を分ちて美的情操と知的情操に分つを得べし。美的情操とは藝術を愛するが如きものにして、直接利害を離れたる絕對的歡喜滿足の狀態を云ひ、知的情操とは眞理を愛するが如きものにして、事物を研究して眞理を發見する其の事が、利害關係を離れたる喜悅滿足となる狀態を云ふなり。

◎犬養氏は知的情操に富み、知的趣味を有す。氏が刀劍を愛するは、此等を研究し批評することの趣味にして、刀劍其の者を愛するにはあらず。卽ち刀劍に對する美的趣味にはあらずして、知的趣味なり。

◎犬養氏の政治的生活にも亦た常に知的趣味の伴ふを見る。氏は常に國策を論じ、憲政を說き、黨略を講ず。而かも其の論議する所は氏自身に取りては一種の趣味に屬する事尠からず。卽ち氏の論議は或部分氏の道樂なり。

◎殊に氏は政黨の懸引きに趣味を有し、他人に皮肉を浴びすることに趣味を有す。必ずしも必要ありての懸引き必要ありての皮肉にはあらず。或程度以上は氏の道樂なり。卽ち智を弄するなり。是れ道德上好ましからざる、又た氏自身も損失を招ぐ道樂ならずんばあらず。然れども道德や利害を顧慮する暇なき所に趣味の趣味たる所以は存するなり。

◎氏の境遇は益々斯の如き趣味に氏を導きたり。氏は久しく少數黨を率ゐたる結果、責任の地位に立たざりしを以て、徒らに智を弄して閑を遣るの傾向あり、而して是れ少數黨として必要の場合ありき。斯くて遂には弄智趣味の魔道に陷らんとするなり。

◎加藤子に趣味ありとせば、皮肉の趣味なり。而して子の皮肉趣味は弄智より出たるにあらずして、傲慢の昂じたるものなり。若し夫れ原氏に至つては毛ほどの道樂氣なく、必要以上の議論を爲さず、必要以上の策を出さゞるなり。然れば犬養氏が何處やらに面白味を有するに反し、原氏には殆んど面白味と云ふものを發見する能はず。

○予は人の優劣又は善惡を比較するを好まず。以上は唯だ三氏の特色の異なる所を略說したるのみなれども、讀者徐ろに之を讀みて三氏の政治家としての價値を判斷せば、其の優劣を知るを得んか。唯だ三氏共に現日本に於て總理大臣たるに充分なる人物なることは最初に述べたる所の如し。

▽五月場所其儘の實情

川尻東馬

（一）

▲拔群の力量を備へた太刀山の休場せる五月場所は、東西の横綱、大關の力量殆んど互角にして、全く五分々々の相撲をとり、寧ろ觀客に多大の興味を與へたのである。栃木山土附かずで、優勝額揭揚の榮を荷つたとは云へ、何人が最初より此好成績を斷言し得るものがあつたらうか。さなきだに連日の所謂番狂はせは、新進氣鋭の横綱大錦を以てしても、大鳴門との一番に、脆くも土俵の砂を浴びせられ、西の海、鳳は共に黑星二個を頂いて半途休場し、伊勢の濱、朝潮の成績元より論ずるの價値なく、九州山又其終りを全うする能はずで。彼等所謂大物同士の力量は、互に一長一短、其道の通人を以てするも、勝敗の數讀め逆睹する能はざるの實情にあつたと、今更ら言を俟たずであらう。

▲然り而して政黨界の實況、又實に此類なくんばあらずである。政友會の原總裁、憲政會の加藤總裁、國民黨の犬養總裁、其人物力量に於て互に一長一短あるは勿論、其人格、抱負、性質等比較し來ると、何れを優秀、何れを劣惡と、相場は殆んど高下を附し兼ねる有樣である。之れを角界に譬ふれば、全く五分々々の相撲で、得意の手を差し、注文に適へば必ず勝てるが、多少無理な處を立つても、强引に極めつけて、必ず土俵上の勝利を其手に收め得る確信のある力士は、先づ今の場合見當らぬと云つても差支ない。即ち一段優れた力士は、今日只今居ないと斷言しても過言であるまい。併し强いて優劣をつけると、五分々々の力士間にも、自ら歩のある者が居ると同樣、三黨首の間にも多少の懸隔は確かにある。

▲事務的才幹に於て優れたる原氏、抱負經綸に於て一頭地を拔く加藤子、機略明敏に於て他を凌駕する犬養氏、三黨首各樣に傑出せる長所はあるが、是れを總體的に比較すれば、遺憾ながら原總裁、幾分の遜色あることを免れぬ。加藤、犬養の兩黨首、殆んど優劣を判じ兼ぬるの一線上に立つ人物だが、加藤子の永く要路の地位にあり、常に新智識を吸收すべく極めて便利の立場にありしに引き代へ、犬養氏は終始野に在つて民權伸暢の爲めに奮闘し、自然に頭腦荒み智識古るく、眼界又一方面に局限せられたる傾きあり、時勢の進運に適す大政治家としては、將さに一籌を加藤子に輸するの止むなき憾みと云はねばならぬ。即ち同じく政黨界

の横綱としても、原氏を西の海、加藤子を大錦、犬養氏を鳳に見立てるのが至當であらう。

▲殊に其性格伎倆が、如何にも此見立てたる横綱の取口に酷似して居るから可笑しい。西の海が比較的大事を取りつゝも、其腰の脆さが祟りて時々不覺の敗を招ぐは、原氏の穩健主義を標榜しつゝ、常に閥族の傭兵隊長に甘んずる腰の弱さに比すべく。横綱としては時に其格式に關するが如き取口を為すと雖も、奇手妙技、自ら死地に陥りて却つて敵將を見事に捺ち止める土俵上の離れ業は、之れ鳳の聲價を保持する所以、而して犬養氏の政治的行動、常に此傾向を有するは、何人も目睹耳聞して疑ひなき處、大錦の新進気鋭、土俵上の瞬間にも常に頭腦を働かして油斷なき相撲振りは、之を加藤子の理義を第一として行動擧止せんとし、平生用意修練怠りなきに較ぶべきであらう。

（二）

▲三黨首殆んど共通の缺點とも云ふべきは、器宇の狹少と好惡の感情強烈なることである。原氏比較的此迄に修養を積みつゝあるかの観あるも、未だ以て天分を矯正し得たりとは見られぬ。加藤子、犬養氏に至りては、恐らく自ら修養に力めたることさへあるまい。議論の強い事も、三黨首又同一である、中にも加藤子は最も雄と稱すべきであらう。若し何人か三黨首の討論會を催す勸進元ありとすれば、恐らくは徹宵して尚且つ論旨盡きざるるの大活況を呈すべく、三浦観樹子の如き、中途にして之を壓迫し、各自十二分の論議を盡さしめざる干渉主義の主催者は、此三黨首討論會には最も不向の人物である。

▲原氏は徹頭徹尾實際主義を宗旨とし、之れに反して加藤子は理想派に近く犬養氏は理論實際を調和的に進まんとして、常に苦心慘憺、機至り變來らんことにのみ注目して居る。但し調和愈々不可能と見れば、忽ちにして極端なる理想派となるのは、犬養氏の所謂機略縱橫、政界の綱渡りに妙を得て居る所以で、木堂一流の綱渡りは實に正々堂々、妙技神に入り、些の危ぶなかしき痕跡を觀客に見せぬのが專賣特許である。故に一方からは政界の魔術師と貶され、一方からは憲政の神様と祟めらるゝ事になる。此離れ業に至りては、加藤子は勿論の事、實際主義標榜の原氏に於ても、迚も其脚下にさへ寄りつけぬ冴え方である。

▲原氏は唯物主義を以て黨員を統べ、直接の利害問題を餌食として、專ら人心收攬の具に供して居るが。加藤子は理義を説き主張の一致に依りて、黨員の結束を強固ならしめんと努力して居る、又力めて利害觀念より遠ざかり、識見と伎倆、人格に依りて人物の採否標準を確立すべく、之を黨員指導の根本方針として居る。要するに原氏は現在に生き、只今繁榮し、刻下隆盛なれば、以て政黨は次第に發達進展すべく、其間に自然的淘汰行はれて、他日の大成玆に基礎を確立し得べしと觀じ。加藤子は先づ根本を浄め土臺を築き、然る後に大成せざれば、腐敗深く入りて、健全なる發達、強固なる團結、到底之を望む能はずと斷ずるもの丶如く、未來に渉りて永遠の大策成就を期し居るのである。

▲若し夫れ犬養氏の統率振りに至りては、實に理想的と評するも過言であるまい。黨員僅少、察するに易しとは素人の觀察、前途に何等の光明希望なく、又現在にも何等の特典恩惠を受けず、地方に於ける國民黨の位置は、或る二三府縣を除けば、其存在さへ認識せられざる憫然の實情。然るに黨員悉く犬養總務の一言一行に随喜渇仰の涙を流し、敢て或ひは其機縁を損ぜざらんことに汲々たるもの、寧ろ局外者の怪訝に絶えざる處である。是れ黨員統率術の妙用、全く其堂に入つたもので、豪勢とや云ふべき、又絶妙とや云ふべき。畢竟するに原氏、加藤子の共に官僚出身なるに引き代へ、犬養氏は純然たる生れからの政黨員にして、其運用の妙諦を、十二分に理解し得たる賜物と見るのが、最も眞に近き觀察であらう。

（三）

▲原氏は冷靜、加藤子は剛情、犬養氏は峻烈との一般批評だが、大體に於て適評たるを失はぬ。併し原氏とて冷靜打算的の裡には義理人情を解し、加藤子とて剛岸不愛嬌の裏には温味愛情を蔵して居る。犬養氏は峻烈深酷の他の半面には、涙脆き熱情、親み易き一種の愛嬌を有して居る。只敵が強ければ強き程反撥する、所謂爆烈彈的性格は、加藤子、犬養氏に共通だが、原氏は強い者に衝突することを、悧巧ならぬ遣方と確信して居る。此意味に於て原氏は、俗に云ふ世渡り上手、他の二黨首は下手といふ結論が來る。原氏は飽迄長い物には捲かれろ主義を發揮し、他の二黨首は損と知りつゝも、癪に障るから一つ叩いて遣れといふ遣方である。即ち單に利害の觀念を主とし、所謂男の意氣地なるものを度外視すれば、原氏は最も明智練達の人物である。眞に當代向きの氣分を、遺憾なく發揮し代表し得る大政治家である。

▲原氏は自身決して惡事に手を染めぬが、他人の爲す事は、大概大目に觀過して知らざる眞似をする位の雅量(？)を持つて居る。是れ多數の内には、惡人も亦交互するの止むなき社會現象と觀念せる結果なるべく。加藤子は一度惡事を爲せりとの證跡を得んか、例令其人に對し、從來何程の信用を拂ひ居たるにしても、忽然として態度を一變するのである。是れ餘りに正邪曲直の觀念に強き、即ち正直過ぎる長所にして又短所なる爲めであらう。犬養氏に至りては更らに一層甚しく、直ちに之を面責し又叱咤して、果ては義絶を宣告する場合さへ珍らしくない。但し徹頭徹尾憐みを乞ひ、低頭平身、今後の改悛を誓ふものに對しては、極端なる正義觀念忽ち一變して、極端なる同情心となり、終ひには弱者として之を庇護するをさへも、亦敢へて辭さない事がある。頗る矛盾の行動であるが、一方から見て如何に情に脆いかゞ判る。

▲原氏に從ふものは、多く其權勢利祿の分配に與らんことを希ひ、加藤子に附くものは概して其識見に服し、男性的性格を喜ぶものであるが、犬養氏に至りては、希望悅服を超越した、一種の信仰關係となつて居る、即ち殆んど、宗教的の觀がある。故に一度政權に遠ざかれば、政友會内苦情百出して、甚しきは總裁不信任の聲さへ起り、憲政會員又加藤總裁

との私的關係、多くは極めて冷々淡々たるものあるに反し、犬養總務と國民黨員間の親密程度は、全く公私何等の區別さへ發見することが出來ぬ。

▲人物の鍛錬されて居る事は、何を云ふにも、犬養氏が第一で、而も他の二黨首に比すると數等上である。此點になると加藤子は最も未成品で、今後政黨總裁として、第一に苦勞を積み修鍊を經ねばならぬのは是れである。個人として親しく話して見れば、三黨首共に世評とは正反對、何れも氣持ちを惡るくする樣な應接振りの人はない。遠方から見ての批評ならば、美人も醜婦と見へたり、肺病患者も樣子好き若者と見へることがある、又近視眼、遠視眼、夫れ相當に頓珍漢の見方もするが、夫れは要するに見らるゝ方の實質でなくして、見る方の見當違ひである。

▲最後に余の希望として一言したい事がある。即ち人間の好惡觀念は、何人にも到底免るゝ能はざる事、之れ迄極端に矯めてから批評せよとは云はぬが、少なくとも人物批評を試みる人の義務として、親しく其人物に接觸する位はして欲しいものである。是れ被評論者に對する禮儀でもあり、又世間に對しても盡すべき責務であるまいか。

▽三黨首の長所短所

早川鐵冶

三黨首の內で所謂政黨の懸引、政策とか云ふやうな點では、追がに多年千軍萬馬の間に往來して、具さに辛酸艱苦を嘗め、經驗の功を積んだ犬養君の右に出づる者は無からう。世間一部の人は彼の人を極めて狹隘偏屈な人と見て、蛇蝎の如く忌み厭ふ者もあるやうだが、我輩の如く同鄉に生れ、先生の內部を能く知つて居る者の眼には決して然うは映らない。同君には士を愛する念が深く、禮を厚くして人を待つ風がある。隨分足健めに奔走して人の爲めに盡くす處は、今の世の所謂政黨の首領が傲然人の來つて頭を下ぐるを待つとは自ら其選を異にしてゐる。だから隨分彼の爲めには御馬前で打死をしようと覺悟して居る剛體もある。彼が政黨の首領としての强味が玆に在る。其上政黨者として最も得意とすべき、機を見るに敏な事と、人氣を落さぬ怜悧な點とに掛けても亦、他の二人者の企て及ばぬ處がある。

唯同君に望む處は、も少し人間を神經質で無いやうにしたい事である。一派の黨首となり、其黨員を縱横に操縱して大事を行ふには、もつと神經を落着けて、裕のある、淸濁併せ呑む底の寬大な處が無くてはならぬ。此事は何にも犬養君一人に限つた事では無い。原君でも加藤君でも銳敏、怜悧、機敏と云ふ點では申分は無いが、如何にも神經が强すぎて、

芋や豚の食ひやらが足りない。然し加藤君を除いては犬養君も原君も六十を越してゐるから、今更ら精神修養を説いても、芋や豚の人爲培養法を施しても効能が現はれまい。犬養君程の人が僅かに一黨の首領としてキヤスチング・ボートは握れても、自ら天下を取る事の出來ぬのは、隨分殘念な事ではあるが仕方がない。上に西郷隆盛のやうな人でもあれば、同君の如きは其智將謀將として申分の無い立派な者になれたであらう。畢竟之れも先輩が惡いからである。良木を選び損ねた結果である。境遇の爲め大隈侯に附從してゐた結果である。大隈侯には人の長となり、人を舉げる處が無い。其親分に發成せられたのが、犬養君の今日を致した遠因である。西郷とか山縣とかの門下であれば、立派な政治家として伊藤俊助や井上馨と共に大に盡くして行けたらうと思ふ。伊藤でも井上でも彼より少し裕りは有つたが、彼程機敏では無かつた。上に木戸あらしめ、西郷あらしめたら、同君もも少し大成したであらう。

要するに在野の政黨首領としての犬養が偉いのであつて、グリーン、テーブルに坐せしめて經營の任に當らせては疑問である。物を壞すのは容易だが、造り上げるのは六つかしい。犬養君が六十餘年の經歷に徴しても、爲された仕事に一つもコンストラクチーブなものは無い。往年大きくなりかゝつた進歩黨が、今日の國民黨と變遷したのを見ても、同君に芋の食ひ方の足りないのが分る。然しコンストラクチーブの識量が足り無いのが犬養君の缺點としても、流石に政黨から叩き上げて、難儀苦勞の限りを盡くしたから、政黨者の心理を察し之れを操縦するの點は他人の及ばぬ處である。在野黨の黨首としては立派な人である。

▽

原君は却々思慮の周密な人である。前半生は官僚であるが、我輩の感心して居るのは、原君には官僚の卑屈な根性が無い事である。官僚出身の者は動もすれば貴族院議員になりたがつたり、恩給や爵位や勳章を欲しがつたりする。原君は此點には餘り齷齪なさらない。原君だつて位階や勳章の欲しく無い事はなからうが、それを得んが爲めに運動したり、汚い行爲を爲ない。勳一等は近頃の事で、勳三等で大臣になつて居た時もあつた。理屈を付ければ勳一等でも爵位でも貰へたらうが、それはやらない所が原君の好い所である。普通の新聞記者や政治家などには此間の心理は分らないが、我輩はもと官僚に育つたものである丈け、官僚畑の心理は能く知つてゐる。彼等の欣求する處も能く知つてゐる。陞爵問題に運動した者が在野政黨にある世の中に、官僚の畑から出た原君がそんな事に餘り頓着しないのは見上げたものである。

原君は所謂闘將では無い。加藤君などが「原君は能く憂慮に堪えないとお仰しやるが何が憂慮に堪えないのか」など〻嘲弄してゐるが、それに應答しないのは出來ないからでは無い、それに係り合つて下等な論戰をするのは品格を損ずる恐れがあるからやらないのである。罵詈讒謗をやる下等政治家から見たら腑甲斐ないと思ふであらうが、我輩などの眼からは加藤君の嘲弄の方が却て卑しい。大政黨の首領として、他日局に當るものが、濫りに口論を振舞はしては後に差障りがある。若い者に

して青筋を立てるにも及ばないとニヤ〳〵してゐる。加藤君が頻りに挑戰的態度に出づるを、力めて辯解もせず、隱忍してゐるのは、やれないからでは無く、局に當つてやるつもりだからであらう。政治家の操縱は到底犬養君に及ばない。原君は緻密で冷靜の人だから、求むる所ある者が君の門に拜趨しても、早くも其肚裏を看破して、輕々しくおべつかに乘せられて人を信用するやうな事は無い。此點になると、根がお坊ちやんで、苦勞を知らないだけに加藤君などは少し危い。唯大きな政黨だけに玉石混合してゐるが、それを自由に圓滿に操縱して遺憾なきを期するには、原君では未だ手の食やうが足りない。それに根が用意深い性質だけに、急轉直下の行動は之れを望む事が出來ない。

人としての原君は情誼の厚い人である。維新當時に振はなかつた奧州から出た人だから、今日の原君は恐らく最も世に著はれた人として鄕黨に拜がまれる地位にある。それにも拘はらず能く友人故舊を忘れず、心切に世話をしたりしてやる。山本內閣瓦解の時でも、問題が海軍のコンミツシヨン問題で政友會とは何の關係が無かつたのだから、政友會としては內閣と悲運を共にする必要は無い。內から狼煙を上げて內閣を打倒しても可かつたのである。それをあゝして一黨を率ゐて山本內閣と運命を分つたのは、政黨としては下らぬ方策であつたが、人としては花も實もある行動であつた。政友會が今日大きくなつたのも、畢竟原其人が打算的でなく人情的義理的であつたからこそで、原君の善根が今日に至つて實を結んだのである。唯然し義理人情に絡まれる人だけに、原君は何方かと云へば政略や人氣を取る事が下手である。が、之れは味へば好くなる。味へば味ふ程不良くなるよりは可いのは云ふまでも無い。犬養君とは反對にコンストラクチーブの人で、デストラクチーブの人でないから、少數黨を以て政府に刄向ふ點は足りぬ。又イニシアチーブが無いから、政權を握つても唯現狀維持に專らで、外交の刷新などは期せられない。政友會が政權を取つても立派な仕事の出來なかつたのは、黨首たる原君にイニシアチーブの才幹が無いからである。

▽

不自然な發展の下に大政黨となつた憲政會の首領加藤君は、何と云つても經驗が足り無い。今の所では海のものとも山のものとも見分けが付かない。從來の經驗が餘りに平々坦々で、順境に許り居た所爲(せひ)か心魂が鍛れてゐないので、お坊ちやん氣質が拔け切らない。自分の思ふ通りに行かなければ直ぐ腹を立てゝ膨くれる。氣に入らなければ後の責任も關はず短氣にどん〳〵辭職する。之れまで彼が內閣に入つても何時も短命なのは、此經驗が足りない所から生ずる氣儘と短氣のお坊ちやん氣質がさせる所業である。世間で加藤君を無愛想であるの、尊大であると云ふのも、皆境遇の然らしむる所である。尊大は近頃は種々言はれるので大部改つたが、無愛想に至つては恐らく死ぬまで矯るまいと思ふ。斯かる性格の加藤君が能く黨員を統一したり操縱したりする事が出來るであらうか。加藤君の經驗は加藤君をして規則正しい生活を踏ましめた。其加藤君の思想が果して今日の不規則不拘束な勞働政治家の思想と一致し

て能く扞格する處が無いであらう。

加藤君の政治家としての手腕は如何か。曾て日々新聞を經營した事もあつたが、唯資金を投入したのみで、新聞に對しては營業的にも政治的にも何の爲す處がなかつた。小村に拯はれて外交官にして貰ふと、忽ち「一等」と買ひ被られ、後桂公に馬骨を購はれて其政黨を貰つた。然し其外交家としての手腕も、實は極めて有損れたもので、珍田捨巳などと選庭が無い。如何も我輩には、加藤君は政治家などをしてゐるよりは辯護士に爲つた方が適當だと思はれてならない。見給へ、あの揚足捉りの巧妙な處や、無遠慮に惡口を吐く事を。如何しても辯護士である。政治家としては包容の大が無さ過ぎる。況んや政黨の首領をや。

犬養君のやうに理想を以て在野黨に成つて居るのと違つて、加藤君は總理大臣になる野心を以つてゐる官僚式の人である。政黨の領袖になつてから貴族院議員になつた位で、寧ろ官僚臭の强い人である。此點は官僚畑から出て、而かも餘り貴族院議員の椅子や歴爵に戀々としない原君と好一對である。我輩も目の黑い内に加藤君の總理大臣振りを拜見する光榮を有したいとは思つて居るが、首相の椅子が却々廻つて來ない内に餘り間遠しいので加藤君は例の短氣を起して政治家が厭になつて終ひはしないかと氣遣はれる。要するに加藤君は經驗の足りない、初心で幼稚な、譯の無い駄々つ兒である。人から偉いと奉られて、自分でも偉い氣になつて終つた人であるが、眞に偉くなるには、加藤君の前には未だまだ長い道程があると思ふ。

▽比較するを得ず

若宮卯之助

一

今にして昨非を知る。余も亦久しく、多くの直譯的政治家と共に、論理上に於ける元老の地位の否定者であつた。少くとも其の自然消滅を以て、希望すべき最大善政の一と看做して居たのであつた。然も實際的に元老は消滅するもので無い。山縣古稀庵主の不老不死と否とに關係なく、實際政治の必要上、元老制度は、容易に日本に於て消滅するもので無い。是れ政黨の微力なるが爲で無くて、却つて其の勢力を漸次に加へんとするが爲である。

日本の政戰は、今や何人も認むるが如く、而して余の夙に道破したるが如く、勝てば官軍で無くて、勝てる官軍である。官軍は必ず勝つ。日本に於ては必ず勝つ。而して此の勝てる官軍の政治的心理は、竟に、元老制度の必要を公認するに至るべき論理上の基點である。

勝てる官軍の爲に、官軍ならば必ず勝てるが爲に、二大政黨の對立は容易に日本の期待するを得る事實で無い。政治の神は偏愛である。勝利の命運は必ず官軍の上にのみ來るとすれば、内閣明け渡しに際して反對黨を奏薦するは、卽ち其の奏薦者の自殺的行爲とならざるを得ない。其の内閣を退くに當りて既に反對黨を奏薦するを得ないとなれば、全く獨立せる奏薦機關の必要は、論理上の結果とならざるを得ないでは無い乎。

横文字の房より脱れて、西洋的史眼を閉ぢて、而して純日本の政眼を開くときは、獨立せる奏薦機關としての元老制度は、其の存續性を有するものと觀ざるを得ない。既に元老制度の存續性を認むるときは、政黨首領にして此の制度を認むると否とは、其の首領としての運命に至密の關係ある非常の事件と謂はざるを得ない。

二

第二の問題は貴族院である。貴族院に固有する內閣の破壞力は、衆議院と同等である。否、同等以上である。貴族院には解散が無い。貴族院が此の無解散の立場に據つて內閣に砲彈を浴せたならば、如何なる堅固なる內閣と雖も、遂には必ず倒れざるを得ない。然しながら純理上に於て此の如く強大なる貴族院と雖も、單獨では內閣を組織する實力が無い。單に豫算の一事に限定して考へても、貴族院丈けでは豫算の可決力が無い。此の點に於て衆議院も結局は貴族院と同等である。貴族院だけに可決力の存せざるが如く、衆議院だけで可決力は無い。總稱すれば、貴族院も衆議院も各々單獨の破壞力はあるが、單獨の構成力が無い。然らば內閣組織に當りて、貴衆兩院の或意味の妥協を必要とするに至るは、運命の當然である。既に之を運命の當然とすれば、政黨首領にして貴族院に勢力を有すると否とは、是れ亦緊要なる一問である。

三

第三の問題は、衆議院に絕對の勢力、若くは准絕對の勢力を張るの必要である。此の衆議院の絕對力は、それ自身に於て複雜なる一の綜合物である。勝てる官軍の地位は既に一言した通りであるも、其の勝てる官軍に對しては固より複雜なる條件がある。世間の人氣も其の一であり、黨內の節制も其の一であり、自信ある實行力も其の一であり、國政上の經綸も其の一である。若し是等の條件を全體的或は部分的に充たして而して現に官軍の地位に居る者あらば、是の者は官軍の地位に居らざる者に比して、殆ど一切の點に於て優越を極めて居ると稱するも、決して不當では無い。此の意味に於て、日本の政黨は、其の首領と首領とを同格に於て比較すべき狀態に置かれて居ないのである。具體的に言へば、現在の原氏と現在の加藤氏とは、其の政黨首領としての地位に於て、殆ど比較ならぬ程の優劣の懸隔を示して居る。今の原氏の優越は、何人も認めざるを得ない。然も此の優越は、主として政黨首領としての地位に屬する事件である。而して原氏と加藤氏との個人的優劣は、余の問はんとする主題で無く。否、答ふるを得ざる難問である。

首領の個人的性格に於て、最も鮮明なる色彩を有する者は、何と云つても國民黨の犬養氏である。國民黨の犬養氏か、犬養氏の國民黨か。余は寧ろ犬養氏の國民黨と看做すを至當とする。犬養氏百年の後、日本は果して國民黨の名稱を保つであらう乎。犬養氏の個人的色彩は極めて濃厚である。而も犬養氏は終に小粒である。國民黨の小粒であるが如く小粒である。此の點に於て犬養氏は曩きに引退した角界の玉椿である。小粒を以て大物喰ひの妙技を演ずる處に彼の手腕の非凡が見える。而も玉椿は橫綱的の力士では無つた。

評論

内外時論

法學博士　古川學人

交戰國としての露西亞の近狀

（一）

協商國側一方の雄鎭として、西部戰場に於ける英佛と策應し、東方より獨逸を壓倒すべき使命を有つて居る露西亞の近狀は、實に寒心に堪へざるものがある。本年三月の革命の結果は、親獨的陰謀の屏息と共に、戰局の上に良好なる影響を持ち來たすだらうと、一時世人は大に期待する所ありたるに、其後今日までの經過は、却て自由思想の横溢と共に戰爭的氣分の弛緩を招致し、就中下級の兵士の間には極端に誇張された自由主義の弊害が、放縱無規律といふ形に於て遺憾無く表はされて居るといふことである。中にも最も憂患に堪へざるは、下級勞働者、並に兵士の極端なる社會主義的空論が臨時政府を壓迫し、以て强固なる中央の權力立たず國策の一に歸せざるの結果を來せることである。今や敵國の獨逸は段々困憊の境に沈みつゝある。味方の陣容も亦米國の蹶起によつて聊か振はんとして居る。而かも此際露西亞が内爭に統一を缺き、東西策應の大計を蹉跌せしむるは實に慨歎に堪へない。

今や協商國側の最大の弱點は、露西亞に集中して居る。而して露西亞は此の先き如何に收りが着くか。之れ實に戰局の大勢の上に重大なる關係がある。されば

英佛側は昨今頻りに露國民を動かして戰爭繼續の決心を固めしめんと苦心し、獨逸側も亦下層階級の非戰思想を煽動して、相手方同盟の一角を崩さんと企みつゝある。斯くして昨今の露西亞は、一面に於て英佛側と獨逸側との外交的暗闘の場所となり、他の一面に於ては戰爭繼續主義者と非戰主義者との內爭の舞臺となつた。此狀恰かも開戰當時に於ける巴爾幹諸國の內情に彷彿たるものがある。

然らば露西亞が斯く內紛に累はされて居るのは、畢竟如何なる事情に基くものであるかと言ふに、其根本は要するに戰爭そのものに對する國民の考が二つに分れて居る結果に外ならない。革命以前に於ても、今度の戰爭に對する考は決して一つに定まつては居なかつた。露西亞は言ふ迄も無く獨逸の軍國主義絕滅を標榜して立つたのであるけれ共、上流社會の一部には、暗に獨逸の利益を計つて、表面主張せるが如き意味に此戰爭を繼續せしめざらんとするものが少く無かつた。革命は卽ち或意味に於て此陰險なる思想に對する國民全般の反抗であると言ふて可い。故に革命に依つて、戰爭に對する此種の異論は一切排斥せられた譯になる。然らば此排斥に成功した國民の戰爭に關する考は、全部一に歸して居るかと言ふに、必ずしも然うではない。彼等は從來の守舊派、反動派若しくは親獨派を排斥する目的の爲めには快く協力したけれども、一旦成功すると、彼等自身の間に彼れと此れと各々其思想を異にすることに氣が附いた。茲に於て戰爭を從來通り繼續せんと欲するものと、出來る丈け平和の恢復を速かならしめんとするものとの差別を生ずるに至つたのである。而して恁かる思想の差を生ずる所以は、一つには境遇の然らしむる所と見えて、前者の思想は中流階級に多く、後者は概して下層階級に多い。現に中流階級を代表する者より成る所の臨時政府は、戰爭繼續派であつて、下層階級を代表する所謂勞働者兵士代表委員會は明白に後說を執つて居る。故に大體の觀察に從へば、露西亞の現在の內爭はまた中流階級と下流階級との思想上の衝突と見ることも出來る。現在露

西亞が直接に困難を感じて居る問題は、上述の臨時政府と勞働者兵士代表委員會なるものとの意見の不一致であるが、今度の革命が專ら下層階級の力に成り、而して臨時政府は其代表者たる勞働者兵士代表委員會の監督の下に、中流階級の代表者たる議會の行政委員會が實際の必要上から作つたものであるが、この臨時政府と勞働者兵士代表委員會とは自ら中央に於ける二つの中心勢力を形造り、而して一方は自由主義を代表し他方が社會主義を代表して、思想上の根本に於て相一致せざる所あるは餘儀ない事である。而して此兩者が特に當面の問題たる戰爭そのものに就ての見解を異にし、而かも兩々其主張を持して相讓らざる點が、即ち前にも述べた如く時局を非常に困難ならしめた所以なのである。

（二）

臨時政府によつて代表せらるゝ中流階級の戰爭に關する意見は、第一には單獨講和の排斥である。何處までも英佛等との同盟條約を尊重し、毫も條約上の義務を解ること無く、彼等と手を携へて彼等の行く處へは何處までも行くと言ふ考である。從て彼等は第二に捷利を以て此戰爭を終結せしめんとする堅き決心を有つて居る。獨逸の軍國主義を打破すること無くして中途妥協するが如きは、全然彼等の念頭に無い。光榮ある平和は彼等の理想である。從て又彼等は戰爭の終結に伴ふ償金の獲得と領土擴張とを豫想して居る。少くともダーダネルス、ボスフォラス及びコンスタンチノープルを手に入れんことを豫想して居る。尤も此頃下層階級の激しき要求に屈して「償金並に土地の割讓なしの平和」を承認せんとするが如き口吻を洩せるも、之は固より强迫の結果に出でたもので決して彼等の本心では無い。要するに彼等は國際同盟の誼を重んじ、從來の內外の事實的關係の基礎に立ち、名譽と實利と兩つ乍ら之れを得んことを目的として戰爭を繼續せんとするものである。

之れに反して下層階級を代表する勞働者兵士代表委員會の意見は、一切從來の行き掛りや約束等を顧慮せ

ず、飽くまで抽象的の議論に拘泥して、其本來の理想とする所に驀地に突進し、之に由つて生ずる所の實際上の影響の如きは深く之れを顧みざらんとするものである。現に彼等は第一に戰爭は全然侵略的目的を含むべからざるを主張して居る。償金と領土の割取を目的の一として戰爭するは罪惡である。戰爭などの起るは畢竟相互に侵略的目的を包藏するからである。之れさへ棄てれば今でも直ちに講話の成立を見ることは難くないと言ふのが彼等の確信である。此方で侵略的目的を棄てゝも敵が尙其我慾を藏めず飽くまで我に侵し來るといふのなら、吾々は祖國の自由と名譽との爲めに戰爭を繼續せなければならないけれども、之れ以上の目的を以て戰爭を繼續することには同意し得ないと言ふのである。次に彼等はまた縱令以前の官僚的政府が如何なる約束を英佛側と結んだからとて、右の貴重なる根本主義を棄てゝまで彼等と道連れするの必要は無いと主張する。卽ち彼等は同盟の誼よりも、彼等の本來の主義を以て貴しとする。主義の爲めには同盟の誼を犧牲にするも亦辭せないといふやうな態度である。然ればと言ふて彼等は直ちに英佛を棄てゝ獨逸と單獨講和をせよといふのではない。尤も獨逸から買收され故國に歸りて頻りに單獨講和乃至絕對的非戰論を唱へて居るレニン一派の運動もある。此派は一時大なる勢力を下層階級の間に得たやうであつたが、間も無く化けの皮が露はれて、今は何等纏つた勢力では無いやうだ。單獨講和說が時々唱へらるゝからとて、彼等を場合によりては輕々しく英佛を棄てるものと觀るのは酷である。唯彼等は同盟の誼よりもより多く其主義に忠實ならんと欲するが故に、一見英佛に背くやうに見ゆるのである。尤も彼等は其主義に忠なるの餘り、極力仲間の英佛をも誘つて我と同主義ならしめんことに熱中して居る方面もある。併し彼等の主張を一言にしていへば一擧して國際的平和を見んとするのであつて、決して單獨講和ではない。故に英佛に裏切つて獨逸と提携するが如き事は容易に有り得ないと思ふ。唯英佛と當初約束した通りの協同動作に出づることを欲

しないことを丈けは明かに認めざるを得ない。

以上は兩派の意見の根本的相違を示したものである。而して此根本的相違より來る所の第二段の意見の衝突は、露國は爾今戰爭繼續の爲めに備ふる所あるべきや否やといふ點に就いてゞある。此點に關する下層階級の意見は、恐らく次の如きものであらう。曰く、吾々の方から進んで侵略的希望を棄て、全然無條件で講和するといふ意思を聲明するならば、全般の平和克復を見ること必ず疑が無い。侵略的希望の放棄といふことが明白でなければ、敵方も十分に安心が出來ないから、從つて平和の準備に躊躇する。故に吾々に取つて第一着の必要は、戰爭の目的に對する吾人の見解を天下に聲明することである。之に次いでは戰爭の繼續に必要なる一切の軍事的準備を中止して全然他意無きを示すことであると。然るに中流階級の一派は到底斯くの如き理想論に同意を表することは出來ない。彼等は從來の經歴に照して現獨逸政府の誠意を信じない。從て前者の言ふが如き理想を說き廻つて居る間に獨逸から其隙を覗はれることを常に恐れて居る。侵略的希望を放棄して無條件講和を主張するにしても、萬一に備ふる兵備だけは之れを解ることが出來ないと言ふのである。故に彼等に取つて第一の急務は、萬一の爲めに戰爭の繼續に必要なる用意は之れを解つてはならないと言ふことである。其上で獨逸から戰爭の目的に關する聲明を聞いた上、英佛兩國とも相談の上、吾人の態度を決しやうといふのが、恐らく此派の執つて動かざる考であらうと思ふ。斯く兩方の戰爭觀の異るのが、今日露西亞の時局をして不安定ならしめて居る根本の原因であらうと思ふ。

下層階級の代表たる勞働者兵士代表委員會は、夙くより臨時政府に迫つて、戰爭の目的に關する宣言の發表を求めて居つた。彼等が(一)一切の占領的希望を放棄し、(二)此思想に對する同意を速に聯合國に求め、(三)斯くして聯合諸國と協力して、右の基礎の上に講和談判開始の爲めに盡力すべきことを、極力政府に迫つたのが三月二十七日であつた。臨時政府は國より我

より進んで斯くの如き宣言を爲すことを欲しない。けれども相手方の要求の餘りに激しき爲め、政府は遂に(一)侵略的目的を有せざること(二)並に償金領土の獲得は其本意に非ず、戰爭は專ら祖國の擁護、自由の防衛の爲めに爲さるゝことの旨を宣言した。是は四月十日であつた。然るに此第一步に於て政府を壓倒した下層階級は、國民に對するこの宣言のみを以て足れりとせず、更に之れを聯合各國にも通告せんことを求めて熄まない。其結果臨時政府は五月一日を以て之を各國に通じたのであるが、此時政府は更に之れに附け加ふるに、(一)露西亞は戰爭の目的に關して各國の主なる政治家と其の見る所を異にせざること、(二)勝利を以て戰爭を終結せしむるの堅き決心を有すること、(三)從つて全然單獨講和を爲さゞるべきことの三點を以てした。是れ實に臨時政府は下層階級の要求に壓せられて先きの宣言を發表したものゝ、其本心に於ては飽くまで聯合國と協同一致して、當初の考通り戰爭繼續の決心を毫も改めざることを示さんとしたものである。然れば此事が露都に於て公表せらるゝや、下層階級の側は非常に憤慨した。何となれば此の附け加へは、當初國民に對して發表した宣言とは、全然相反する趣旨のものであるからである。此結果露都は一時大騷動となり、ミリユコフを殪せ、外相を斥けよなどの聲が、一時内閣そのものゝ運命を危殆ならしめたのであつた。ミリユコフの自ら進んで群衆に其所懷を訴へた其の男らしき態度と並に彼の雄辯の力とが、辛うじて此難局を救つたことは、當時の新聞にも明かなことである。

(三)

ミリユコフの雄辯が一時此難局を救つたといふことは、必ずしも下層階級が臨時政府の戰爭繼續論に讓步したといふことを語るものでは無い。矢張り大勢は、今日臨時政府を組織して居る政治家の手腕に期待しつゝも、下層階級の平和論が依然として着々天下を風靡しつゝあつたのである。

斯く論斷するの根據となるものに、最近到着した二

つの電報がある。一つは閣員増加の說にして、他は陸相外相の辭職である。五月初めの騷動が治まつて間も無く、閣員增加の說が起つた。之れ畢竟勞働者兵士代表委員會の有力者數名を、無任所大臣として入閣せしめ、所謂聯立內閣の內に中流階級と下層階級とを包含し調和せしめんとするものである。此事は勞働者兵士代表委員會でも十二日の總會で、十九に對する四十一票の多數で可決したといふことであるから、彼等も亦從來の態度を改め、敢て進んで今後の政界に責任ある地位に立たんことを決心したものと見える。是れ實に下層階級間に行はるゝ說が、今や愈々政界の表面に於ける一勢力として、共に責任を頒たねばならぬ事に至つた證據である。次に陸相並に外相の辭職のことであるが、前者は十四日に辭表を呈出した。其理由として彼自らが語る所に依れば「最初の豫期に反し、國防狀態を改善して露國の存立と自由とを防衞するの見込が立たぬ」からといふのである。而して陸相の辭職によつて崩れ掛かつた政府の取纏めに外相は頻りに奔走して居つたといふ報道があつたのに、次いで十七日の電報は外相も亦辭表を呈出したことを報じて來た。彼の辭表呈出の理由に就ては未だ何等聞く所無きも、思ふに陸相と其所見を同じうする點にあるのであらう。然らば此事は臨時政府に對する勞働者兵士代表委員會の勢力の壓倒の結果、此際全然戰備を修むるの必要は無い、否、戰備を修むることが既に平和克復の到來を妨ぐるものであるといふ思想が勝を制し、爲めに陸相外相をして全然萬一に備ふるの計を爲すこと能はざらしめ、從つて彼等は英佛に對する條約上の義務を完うし得ざるに至つたことを語るものではあるまいか。然からざれば、米國が既に一億弗の金を提供して着々露國軍隊の整理を助けんとするに方つて、彼等が國防の前途を悲觀し此危急の際に其職を退く筈は無いからである。一體臨時政府が着々下層階級の壓迫を受けて餘程苦しい立場に在つたことは、外相の時々發表する演說にも顯はれて居つた。五月十一日巴里發の電報に據れば、協商國は戰後コンスタンチノープル、ダーダネルス及びボス

フォラスの統治を白耳義に委任するに一致したとある。之れも畢竟露國に於ける下層階級の占領的希望放棄論に照應するものである。何れにしても、露西亞昨今の形勢は戰爭によつて獨逸を屈しやうといふ風潮からは、遠ざかる一方である。而して今後吾々の注意は次の二點に向つて集注せられなければならない。

(一)露西亞に於ける中心勢力は、現在の形勢を其儘進めて結局下層階級の代表者の占むる所となるや否や。從つて英佛側と協同して飽くまで當初の目的を達するまで戰爭を繼續するといふ希望が到底復活の見込無きや否や。

(二)露國下層階級の考は、果して理想通りに實現せられて一般的平和を促進するの有力なる端緒となるや否や。又は彼等の戰意の放棄は、偶々獨逸に乘ずるの好機を提供し、爲めに著しく聯合國の不利を來たし、以て戰局の終結を一層長引かすこと無きや否や。換言すれば、露西亞下層階級の見込は、獨逸に於ける民主的革命の勃起によつて實現せらるゝや、又は獨逸政府の巧妙なる警戒と、其結果たる軍國主義の安全なる繼續とによつて裏切らるゝこと無きや否や。

(五月十八日)

戰爭繼續乎講和乎

(一)

何れにしても戰爭が段々終局に近づきつゝあることは疑ない。唯問題は昨今繰返して傳へらるゝ單獨講和の說などが端緒となつて、案外早く平和の克復を見るか、又は愈々最後の講和期に入るに先立つて、もう一二度戰爭が行はるゝかの點にある。此兩樣の觀察に對しては夫れ〱相當の理由があつて、今の所何れを何れとも定め難い有樣である。

講和に先立つてもう一二度の戰爭あるべしと見る說には、種々の根據を擧げ得ると思ふのであるが、中に就いて其最も主なるものを述ぶるならば、次の數點であらう。

第一に數ふべきは西部戰場に於ける英佛軍の活躍である。四月の八九日頃を以て始まつた英軍の活躍、同じく十七八日頃を以て始まつた佛軍の活躍は、一旦獨逸軍に阻止せられて一時却て英佛側の危險を說くの報道もあつたが、獨逸側にも最早や逆襲に轉ずるの元氣は無いと見えて、やがて英佛側は再び頹勢を盛り返し五月初めよりは微弱ながら再び攻勢的態度に出てゝ居るやうである。此方面に於ける英佛の態度の決して退嬰的に非ざることは、五月中旬獨逸が東部戰場から約四十個師團の兵士を西部に移したといふ報道に據つても明かである。何故なれば、此獨逸の行動は、英佛の進擊に備ふる目的なりと見ねば、解釋が付かぬからである。若し單に東方の敵勢の手薄なるを好機として、大兵を西部に轉じて英佛を攻擊せんとするに出てたものならば、獨逸の態度はも少し活潑なるべき道理である。而かも獨逸の態度斯くの如くならざるは、是れ畢竟英佛の態度が常に積極的に出てゝ居るからであらう。且又三月初め以來の英軍のメソポタミヤ方面に於ける成功、四月末以來の伊太利軍の對墺活躍、皆夫れ〲敵方を相當に牽制するに足り、今や英佛側は西部戰場に殆んど其全力を傾倒し得る境遇に在りとも言へる。巴爾幹方面の近き將來に於ける危險を豫想するの說も無いではないが、此方面は屢々予輩の述べた如く、獨墺に取つては非常に大事だけれども、英佛に取つては夫れ程の關係は無い。且又此方面に於て英佛側が切迫したる危機に臨んで居ると言ふ報も眞否確ではない。先づ當分の所此方面にも差迫つた後顧の憂は無からうと思ふ。

第二に數ふべきは四月六日の宣戰以來の米國の態度である。合衆國の宣戰布告は、更に之れに次いで起つた南米諸國の對獨宣戰と共に、著しく協商國側の元氣を鼓舞するに力あつたことは言ふを俟たない。然し米國は唯だかゝる精神的聲援を與ふるに止まらず、更に進んでモット直接なる實質上の助力をも與へんとして居る。如何なる實質的援助を與ふるやの內容は、未だ明白ならざるも、今日まで世に知られて居る處に依つ

て見るに、先づ第一には其豐富なる富の一部を割いて協商國側に財政的援助を與へんと準備して居る事である。四月二十九日の電報に據れば、米國政府は自ら公表するに、協商各國に對して、毎月少くとも八億乃至十億圓の援助を與ふべきを以てしたとある。之れ畢竟英、佛、露、伊の諸國が米國に於て購入する食物、軍器鐵道材料等の代償の仕拂ひに充てらるべきが故に、是等の諸國は詰り、米國より宏大なる物資の供給を受くることになるのである。啻に之れのみではない。第二に米國は英、佛、露等に向つて又夫々相異なれる特別の援助を與へんとして居る。此事の爲めに英吉利はわざ／＼バルフォアを送つた。彼は四月二十二日から五月十日頃まで華盛頓に居つたが、其間彼は飽くまで戰爭を繼續すると言ひ根本義に就き深くウイルソンと默契する所ありし外、特に食料並に運送船の供給に就て深く米國の好意に恃むことを得るの確信を得たといふ事である。佛蘭西は又ヴィヴィアニに副へてジョッフル元帥を送つた。四月二十七日米國に着いてから朝野の間に大に活動して居るやうであるが、其結果として現はれた最も著るしいものは出兵論である。ジョッフルは三十日新聞記者に對つて頻りに米國の出兵を熱望する佛蘭西の希望を表白したが、幸にして之れは米國多數の承認を得たやうである。其結果でもあるまいが、徴兵案は同日下院を、翌日は上院を、殆んど滿場一致に近き大多數を以て通過した。五月八日の電報には、早くも已に米兵一萬三千の佛國派遣を報ずるものがあつた。佛蘭西は思ふに此外にも尚諸種の援助を得るものであらうが、少くとも其最も乏しとする兵力の補充を米國に得たる事は、彼等の最も滿足する所であらう。次ぎに米國は露西亞に對しては、先方から人の來たるを待たず、我から進んでルートを派遣し、出來る丈けの援助を與へんことを申込ませんとして居る。ルートは四月の末頃露西亞に向つて出發した筈である。之れ又米が露西亞をして飽くまで英佛と行動を共にせしめんことに熱心なるを證するものである。斯くの如く米國の態度が積極的である以上は、協商國側

は義理にも此儘指を啣へて居る譯には行くまい。

第三に獨逸の窮狀も亦之れを並べ數ふるの價値がある。獨逸が兵員の補充に於て、物資殊に食料の補充に於て、益々窮乏を感じて居るのは寧ろ當然である。人或は獨逸は今日尚左程窮乏を感ぜずなどと、見て來たやうな事を言ふものもあるが、之れは道理上有り得ない事である。此上堪へられない程の窮狀には陷つて居ないにしても、各種の物資の窮乏に困憊して居ることは疑があるまい。夫れに露國の革命に促されて民心の動搖は更に一層の激しさを加へた。爲めに遉がの政府も若干民論の要求に折れ、自由政治の曙光或は之を端緒として發し初めるも知れぬといふことは、既に前號に於て予輩の詳述した所である。而して五月十日の電報には、新に帝國宰相の責任に關する憲法の規定に修正を加へ、改めて其責任が「議會に對するもの」たることを明かにしたと言ふことである。眞僞未だ確かならずと雖も、獨逸國民が一方には窮乏を感じ、他の一方には自由に覺醒せんとしてゐること丈けは、以上の事實に依つて明かであらうと思ふ。

それかあらぬか、四月央ばよりは頻々として各地に同盟罷工が行はれてゐるやうである。中にも十六日伯林の同盟罷工は參加勞働者の數二十五萬の多きに達し爲に軍需品工場の已むなく休場するもの三百に及び、市民の動搖は十九日に至つて漸く鎭靜したといふことである。獨り伯林許りではない。其他の諸市に於ても恐らく同じやうな騷動があつたことであらう。然れば勞働黨の申入れ日たる五月一日は、政府に於ても餘程懸念して居つたらしい。幸に豫め警戒をさをさ怠りなかつた爲めに、格別の事も無くして濟んだやうであるが、他方に於て或は豫め千余名の社會主義者を拘禁したとか、或は同盟能工者を反逆罪に問ふことにしたとか、又は五師團の兵を以て伯林の警戒に充てたとか、種々森嚴なる取締りと壓迫とを加へた事實を見れば、幸に何事も無かつたとは言へ、如何に潜伏せる禍危の恐るべきものありしかを想像することが出來る。要するに之等の內情は他の原因と相伴つて、遂に獨逸をし

て從前の如く華々しき攻勢に出づる能はざらしめて居る原因であらう。而して是等の事情は又同時に協商國側に乘ずべきの好機を提供するものたることは言を待たない。

斯く論ずれば、英佛側は恐らく此の儘有耶無耶に戰爭を終局せしむべき考ではあるまい。何處までも勇を鼓し、獨逸に最後の致命的打撃を與へずんば已まざらんとする考で居るものと謂はねばならぬ樣である。

(二)

然し又他の一方から見れば、何等の戰爭無しに此儘講和期に入るであらうとする說にも、各種の根據がある。今その主なるものを數ふれば、第一には露國に於ける下層階級間の平和風である。近き將來に於て露國の中心勢力たらんとする下層階級が、其本來の立場に於て極端なる平和主義者たることは前既に之を述べた。彼等には所謂同盟の誼に義理を立てゝ英佛の行く所まで漫然引き連られて行くと言ふ考は、最早毛頭無い。これでは大變だと、英國は勞働黨の長老ヘンダアソンを送るとか、白耳義は社會黨の世界的名士たるヴアンデルヴェルトを送るとか、又米國は遙々勞働組合の頭梁たるコンパアスの名を以て、軍國主義の絕滅を見るまでは決して干才を收むべからずとの警戒を發電せしめたとか、頻りに露西亞社會黨の反省を求めて居るけれども、更に何の効果も無いやうだ。即ち露國は今や無條件平和克復主義を執つて一擧に世界の平和を再現せしめんと努力しつゝある。單に夫れ丈けならばまだよい。此の上彼等は更に進んで、平和の促進に害ありとなして一切の兵備をすら解かしめんとして居るのである。露西亞が獨逸と單獨講和をするといふが如きは萬々之無かるべしとするも、露西亞に於ける右の如き風潮は、少くとも英佛をして思ひ切つた攻勢に出づるを躊躇せしむることは明白である。固より斯くして英佛が特別に不利益を蒙ると言ふことは、露西亞の希望する所では無からう。けれども唯彼等は、是の如くする事により、始めて英佛・獨墺の双方を促して我の意見に同意せしめ、以て一般的平和を齎らし得ると信じ

てゐるのであらう。尚序でに言ふが、露亞西が斯く兵備を解つて居るに乘じ、獨逸が之に附け入つて進攻し來ることは無からうかと言ふに、斯かる心配は多分あるまいと思ふ。何故なれば、斯くして露國民の怒を挑發し、折角平和的になつたものを一轉して主戰的に變ぜしむるゝ恐れある事柄は、獨逸の最も愼むべき所であるからである。蓋し獨逸は目下露國を誘つて之と單獨講和をなすを以て唯一の活路と見て居るらしい。固より之に由つて敵城の一角を崩壞し得るとは期待して居まい。が、少くとも彼は之を端緒とし、露西亞を通じて多少面目の立つ講和を贏ち得るの望を抱いて居るのであらう。

第二に獨逸の內部に昨今講和風の頗る旺んなことも亦看遁すことは出來ない。思ふに獨逸は今日余程困つては居るものゝ、未だオメ／＼敵に屈せざる丈けの餘力は有るのであらう。然しどの途先は見へてゐる。一部の者は潛航艇戰の効果と、露西亞の政變の結果とに一縷の望を掛けて居るやうであるけれども、多數の人の腹は、相當の條件ならば早く和を講じた方が得策だと云ふ位の考であらう。少くとも斯の如き思想が下層階級殊に社會黨の方面に流行して居ることは疑を容れない。唯帝國主義を代表して居る現政府並に其與黨の一派に至つては、固より我からイニシヤチイヴを取つて和議の提唱を爲すことを欲しない。若し速に和議を修むべくんば、先づ露國と單獨に和して同盟の一角を崩し、次で英佛を促して我に和を乞はざるを得ざらしめやうと言ふのが彼等の希望であらう。其爲めにや獨逸は先般來頻りに露國の下層社會に講和熱を煽らんとして非常に努力して居つたやうである。極端なる非戰論者レニンを露國に歸らしめて、彼に依つて無智の勞働者を煽動せんと試みたのは、即ち之が爲めに外ならぬ。四月央ば以來屢々獨逸より和議の提唱あるべきの報道を言ひ振らしたのも、或は露西亞を誘はんが爲めの探りであつたかも知れない。此計畫は今の所失敗に終つたやうであるが、兎に角之に由つて我々は獨逸にも亦講和風の旺んなるを推測し得るのである。

レニンを操縱して露國の下層階級を動かすの計畫に失敗した獨逸政府は、最近ストックホルムに各國社會黨聯合大會を開くの計畫に依つて更に活路を開かんとして居る。此催しはスカンヂナビア諸國の社會黨代表者の主催する所となつて居るけれども、主として斡旋の勞を執る者は丁抹のボルグビエルグである。ボルグビエルグは是より先き獨逸の内命を受けて露國社會黨の意嚮を探りに行つた事もある人であるから、彼の斡旋に係るストックホルムの會合の陰に、獨逸政府の存在する事は略々之を推測する事が出來る。其證據には獨逸政府は自國社會黨の穩健なる者には、出來る丈け多數出席すべき事を勸誘して居るに拘らず、ハアゼー派の過激派には悉く旅行劵の交付を拒んで居るといふではないか(五月十四日の電報)。されば英佛の社會黨は、初めから之れに警戒の眼を注いで居つたが、終には公然參加拒絕の聲明を爲し、五月十日の電報に據れば、却つてアベコベに六月を期して聯合國の社會黨勞働黨大會を倫敦に開くといふことである。不幸にして露西亞の社會黨は、十一日代表者をストックホルムに派遣するの決定をなしたと言ふから、少くともスカンデナビア諸國の代表者と露西亞及び獨逸の代表者との會合は實現する事になるだらう。而して獨逸が此會合に由つて達せんとする所の目的は、露國代表者の參加あるのみで十分である。何故なれば、之に由つて露獨兩國は如何なる講和條件に一致し得るやを略ぼ探知する事が出來るからである。新聞紙上には、獨逸社會黨のストックホルム會議に提出すべき講和條件なるものが屢々發表されたけれども、之れは固より深く信用するに足りない。が、兎も角、此會合で露獨兩國代表者の合致したる意見なるものが成立發表さるゝことになれば、之れが著るしく不當なるものに非らざる限り、精神的に英佛側をも動かす力を持つことは爭はれない。斯くては英佛は獨逸に先手を打たれた形になり、將來の掛引上甚だ不利の地位を取らねばならぬことになる。何れにしても此會議の成行きは、今後我々の大に注目すべきものであると同時に、此會合に熱心なる

丈け、獨逸に於ける講和の希望は又切實なるものあるを推測せざるを得ない。而して此會合にして若干の成功を見ば、之が又著るしく一般的講和の機運を促進すべきや言ふを俟たない。

更に之れと關聯して看遁すべからざるは、露西亞の下層階級が頻りに其宿論を以て政府に迫る所あると同様に、獨逸の社會黨も亦頻りに昨今政府幷に議會に向つて迫る所あることである。五月二日の電報に據れば、社會黨は議會に向ひ、極めて强硬なる態度を以て次の如き請願をなしたといふことである。一に曰く、領土の保全を條件として速に露國と單獨講和を爲すべきこと。二に曰く、政府は進んで其講和條件を明白に聲明すべきこと。三に曰く、議會は政府を助けて、戰後軍備制限を目的とする國際條約締結の爲め、國際的平和機關を組織する事に全力を竭くすべきこと。四に曰く、政府は國民の希望要求に適合する様に國内政策を改定すべきこと。是等の請願がどれ丈け聽かれたかは分らないが、次いで五月五日の電報に據ると、帝國宰相は不日帝國議會に於て講和條件に關する明白なる聲明をなすべしとの事であつた。以て如何に獨逸政府も亦下層階級の要求の爲めに動かされつゝあるかを知るべきである。尤も後報に據れば、帝國宰相は十四日を以て行る筈になつて居つた戰爭目的に關する聲明をば、終に見合すことにしたといふことである。其故は、さう社會黨に壓倒されては困るといふて、保守的軍國主義者から反對されたからであらう。軍國主義者は今なほ潜航艇戰の効果を過信して居るし、且露國政變の今後の發展如何に依つてはも少し有利に戰爭を終結し得べしとの空頼みを抱いて居る。斯ういふ考の人も獨逸だけにまた少く無いのであらう。何れにしても宰相は、自ら進んで講和條件を聲明するが如きは、斷じて避くると言ふ方針に改めたことは疑ない。然し獨逸は、自ら進んで何等かの聲明を爲すこと無くして露國を動かす事が出來るであらうか。之れ我々の注目に値する點にして、又思ふに獨逸政府の最も關心する所であらう。

（三）

ストックホルム會議の結果如何。露獨兩國代表者の間に、講和條件に關して、果して一致點を見出し得べきや否や。之れは和協の速かに來るや否やに重大の關係がある。而して假りに露獨兩國が其占領的希望を全然棄てたとすれば、其間に一致點を見出す事は決して難くない。而して斯くの如き一致が兩國の間に成立したとすれば、如何に英佛が從來飽くまで戰爭を繼續すると主張したとしても、結局露獨の協定に大體盲從せざるを得ない事にならう。況んや露獨の斯くの如き協定には、米國の如きは—少くとも主義に於ては—始めから同意を表するに吝ならざるべきに於てをや。故に今後我々の尤も精密に觀察を懈るべからざるは、露獨兩國の間に眞の一致を見出す事が出來るか否かの一點に在る。之れさへ出來れば、最早英佛の意嚮の如きは深く之れを問はずして一般的平和は來るであらう。

且又英佛それ自身も、獨逸と同じく、昨今非常に困難を嘗めつゝある。佛蘭西が兵員の不足に苦しんで居る事は曩きにも述べた。若し夫れ英國に至つては、獨逸潜航艇戰の結果として、昨今非常に食物の窮乏を感じて居る。四月二十八日の電報は、强制的に食料を制限するの外他に良策無きを悟り、遠からず切符制度を布かんとして居るといふ事を傳へて居る。之れ亦如何に英國が窮乏に惱んで居るかを語るものである。而して此れが原因は畢竟船腹の不足に在る。換言すれば昨今獨逸潜航艇の犧牲となる輸送船が非常に多くなつた結果である。兎も角、食料缺乏は今や英國に於て極めて危急なる問題となつて居る。新聞も亦筆を揃へて食料缺乏の結果時局は正に重大なる危機に在る旨を說いて居る。以て其の如何に此問題が重要の意味を有して居るかゞ分るであらう。果して然らば、英國と雖も、適當の條件を以てする講和談判の開始には、實は必ずしも反對では無からうと思ふ。此點は佛國とても同じ事である。

要するに和協の到來は決して遠くは無い。差當り之に直接の關係を有するストックホルム會議の經過は、

吾々の特に注意を傾けねばならぬ點である。戰爭繼續か將た講和か。それは更に今後の時局の發展に見やう。

（五月十九日）

新刊批評と紹介

▽明暗

夏目漱石遺著　岩波書店發行

「明暗」は言ふ迄も無く昨冬永眠せられたる漱石氏最後の勞作で、不幸未だ完了を見ずして中途筆を絶つの已むなきに至つた、紀念深きものである。氏一流の明快にして細緻の極を盡くした心理描寫と、儼正にして透徹せる批判とを以て、虚榮と虚僞と利己心との桎梏の下に喘ぐ現代人の生活を解剖し盡した近來の傑作である。裝幀も亦頗る立派である。（定價二圓五十錢）

▽論語年譜

林泰輔編　大倉書店發行

論語の世に現はれて以來和漢歐米各國に如何に飜刻解說せられ、又其主義精神が政治敎育其他各般の問題に如何に應用せられたかの事實を編年的に叙述したるもの。平素深く論語を愛誦せりと唱せらるゝ澁澤男が七十七回誕辰の祝賀紀念出版也。（定價三圓八拾錢）

▽最近の南國

序谷水哉著　博文館發行

著者が臺灣總督府の南洋觀光團に加はりて、南洋諸島、馬來半島、佛領印度支那等を遍歷したるに起行日誌也。南洋企業者の參考、實業者の案内記として絶好の讀物たるのみならず、一般國民の娛樂的讀物としても有益にして且つ面白きもの也。（定價一圓四十錢）

▽宗敎論

相馬御風譯　早大出版部發行

トルストイ論文集の第二編。「宗敎とは何ぞや」「我信仰」を收む。前者は宗敎其物の外部的說明で、既成世界宗敎の凡べてに杜翁一流の儼正な批評と明確な闡明を下し、後者は彼の後半生を光輝ならしめた彼の宗敎的生活の最初の、最も純眞な內面的表白である。譯文は例に依つて明暢流達である。（定價一圓三十錢）

▽古代より現代まで西洋哲學史

若守義孝譯　目黑書店發行

本書はコルネル大學敎授フランク・シルリー氏の著を譯したるもの。時間的には古代より現代に亘り、空間的には歐米各國に及び、苟くも一代の思想は悉く之れを網羅して、組織的系統的に哲學思想の沿革を說いてある。說明の餘り專門的に流れず平明を旨としたる處、初學に恰好の指針である。（定價二圓五十錢）

▽次の世界大戰

長田秋譯　冨山房發行

一名を日本の野心と云ふ。原書は昨秋伯林で匿名の下に出版されたるものとか。專ら我國勢現下の擴張發展を述べて、日本に第二の獨逸たるべき野心ありと協商國側に中傷し、以て我國を國際關係上獨立無援の地位に立たせんとするものゝ如し。種々の意味に於て本書は我國民に刺戟ともなれば敎訓ともなるであらう。（定價八十錢）

▽ルッソー懺悔錄　石川戯庵著　大日本圖書會社發行

本書は戯庵氏が前年公にしたる譯者に新に訂正增補を加へて、二册を一册に縮刷したるもの。本書の紹介は其當時に試みた事があるから、玆には唯かゝる有益な書の容易く手に入るやうになつたのを喜ぶに止める。(定價二圓)

△戰鬪的人生觀　(定價一圓二十錢)　鹿子木員信著　同文館發行
△墨西哥と其天產　(定價不明)　村岡玄著　西班牙語學會發行
△新運命觀　(定價七十錢)　祖先教本部編　同發行
△新文學辭典　(定價八十五錢)　長江、草平等編　天院堂發行
△國民年鑑　(定價五十錢)　國民新聞社編　民友社發行
△憲政の巨人アスキス　(定價一圓二十錢)　永山定富著　東京堂發行
△朝鮮の旅　(定價一圓五十錢)　原象一郎著　岩松堂發行
△大僧正天海　(定價二圓二十錢)　須藤光暉著　富山房發行
△話の種　(定價七十錢)　湯朝觀明著　實業之日本社發行
△笑話集　(定價二十五錢)　小瀧水郷著　豁水社發行
△西洋歷史地圖　(定價一圓十錢)　齋藤清太郎著　明治書院發行
△巨人握手　(定價五十錢)　宿利重一編　國民書院發行
△苦學十年　(定價三十五錢)　松尾正直著　國民書院發行
△中學檢定指針　(定價五十錢)　國民中學會編　國民書院發行

△迷信と科學　(定價三十五錢)　加藤熊太郎著　國民書院發行
△雞とひつじと山羊　(定價九十五錢)　長寄蘇生著　國民書院發行
△英語研究二十講　(定價六十五錢)　佐久間信恭著　至誠堂發行
△和歌講話　(定價八十錢)　若山牧水著　天信堂發行
△禁酒　(定價五十錢)　長尾半平著　丁未出版社發行
△大戰の審判　(定價一圓)　土屋泰次郎著　丁未出版社發行
△旅役者　(定價三十五錢)　長田幹彥著　新潮社發行
△强健法　(定價九十錢)　伊藤銀月著　實業之日本社發行
△國民性傳說　(定價七十錢)　原正男著　實業之日本社發行
△新世帶　(定價四十五錢)　大倉桃郎著　南人社發行
△怪談情話　(定價四十五錢)　室津鯨太郎著　南人社發行
△自然のさゝやき　定價四十錢　松本、今井共著　警醒社發行
△大戰の將來と米國　(定價一圓)　西村二郎著　同文館發行
△天樹院佐竹義和公　(定價一圓五十錢)　大久保鉄作著
△萬葉集物語　(定價八十錢)　尾山篤二郎著　東雲堂發行
△廣く深き基礎に　(定價九十錢)　大塚小一郎著　洛陽堂發行
△斷腸錄　(定價一圓二十錢)　榎本秋村著　誠文堂發行
△現代と偉人　(定價一圓二十錢)　仲小路廉著　大倉書店發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

六月一日發行

婦人公論

定價二十三錢
郵税二錢

六月號要目

◎日本の女は幽靈である（遠く米國から寄稿せられたる女子必讀の文字）……茅原華山

□臨時議會と婦人……石川半山

□子寶妙寶記……わらび生

□ユーモアを解せ……新渡戸博士

□痩せる法……宮原立太郎

青年男女交際論　安部磯雄　與謝野晶子　平塚らいてふ　馬場孤蝶　内ヶ崎作三郎

（小說）
●蹂躪られて……正宗白鳥
●春宵記……小山内薫
●秘めたる戀……德田秋聲

□貸家を搜す人に……伊東博士

□赤い花（お伽噺）……鈴木三重吉

□電燈の法……近藤教授

□「痲疹」の話……宇都野研

◎情話 黄八丈の小袖（黄八丈の小袖を着て江戸中を引廻された白子屋お熊の哀話）……岡本綺堂

中央公論社

（中付三の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

加藤咄堂先生著

十年苦心の大著述

日本風俗志

●紙數約六百頁餘●菊判總クロース
●口繪挿繪數十葉●裝幀優美函入

▲製本既成

定價貳圓貳拾錢
送料 拾貳錢
臺、樺、鮮 四拾錢

世界無比の國體を有せる我が日本は又世界特殊の風俗を有す。今や交通の便開けて國内の風俗略ぼ同一なるが如しと雖も、前代の流風遺俗は尚ほ各地に殘留し、地方自ら地方の色彩ありて風土の異るに隨て人情を異にし歷史の同じからざるに隨て習慣を同うせず。口碑傳說、俚諺民謠、皆な其鄕土趣味を發揮し、特に各地に散在せる奇風異俗は殆んど想像の外に屬するものあり。著者、多年各地を歷遊して遍く其の風土人情を視察し之れを補ふに古老の談を以てし、之れを質すに舊記の文を以てし、之れを地方別に編述して世態の觀察を加へ、文化の狀態、產業の振否、鄕土の人物等細大洩すなく、苦心經營終に本書を成す、實に日本風俗の集大成したるものにして、自然の聲ともいふべき俚諺民謠、小說よりも面白き口碑傳說、昔を今に見る如き奇風異俗は、皆本書の中に收められ、附するに數多の挿畫を以てし、地方の色彩は最も濃厚に示され、一種の人國記たり、風土記たると共に鄕土研究の好資料たるを疑はず、政治家は之れによつて民政の資を得べく、宗教家は之れによつて敎化の案を立つべく敎育家は之れによつて鄕土の資料を得べく、實業家は之によつて實業上取引上に多くの便を得べく、社交家は之れによつて幾多の好話材を得べし、眞に我が國民生活の根柢を看取し、徹底的に此の日本を解せんとするものの座右一日も缺くべからざるの空前の好著たり。請ふ一本を購ふて其言の誣ならざるを知れ。

▼發行所
東京市小石川區林町七十番地
電話小石川二七六番
振替東京八二二六四番
新修養社

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

坪内文學博士序　松村みね子譯

シング作 いたづらもの

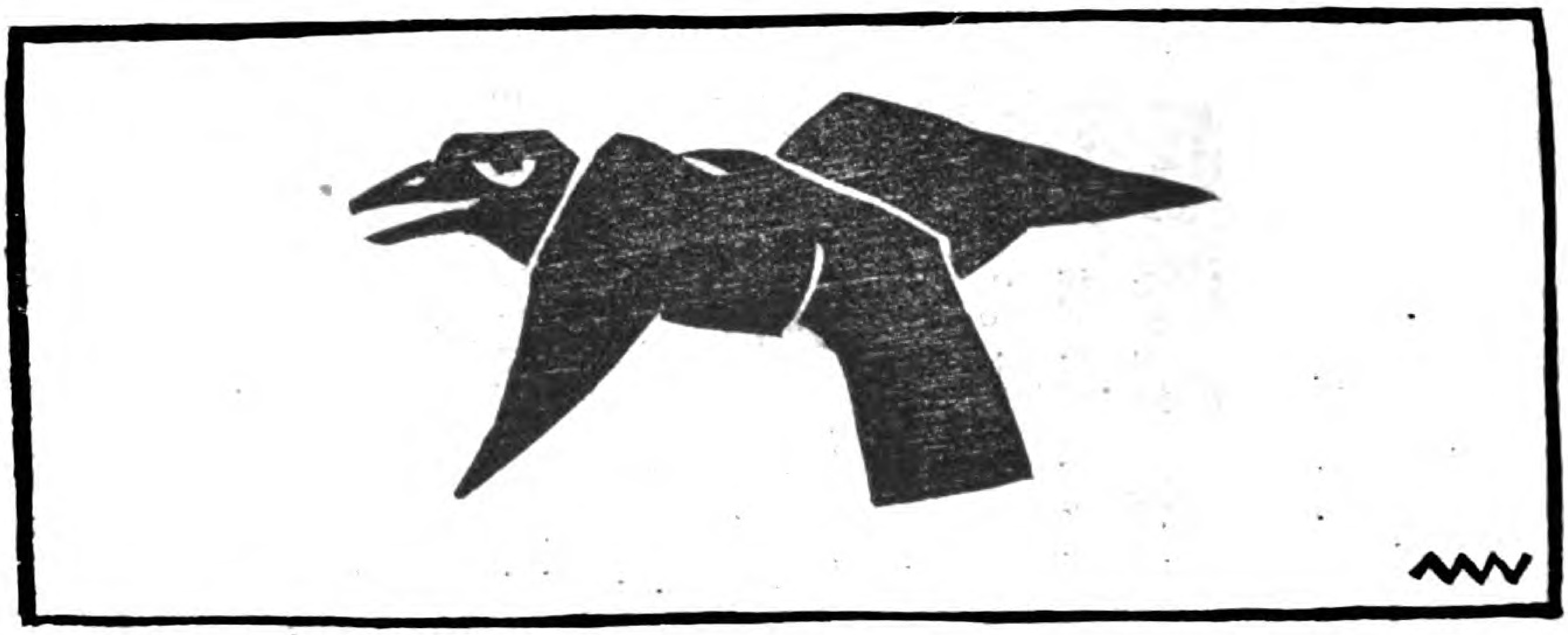
最新刊

シングの歐米文壇に於ける價値は既定の事實なり。而してプレイボーイはその最大傑作なりと稱せらる。唯その愛蘭土に日常使用せらるゝ言語を用ゐたるが故にその詞句優婉人を魅するものあるに拘はらず、邦人英文を解するもの丶間に於ても讀まるゝこと尠なし。今、松村みね子氏の三年間の努力に依りて始めて茲に好個の邦人譯を得たり。シングに依つて歌はれたるケルト特有の優美にして皮肉なる思想を味はんとする者は必ず先づ此書を一讀せざるべからず。

定價八拾錢
郵送料八錢

發賣所　東京神田表神保町
東京堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



名殘の星月夜

（尼公、實朝、公曉の悲劇）

逍遙

第一幕

第一場

別當院裏手の山上

正面（平舞臺）は、むかし鶴が岡別當僧院の在つた今の八正寺谷の北東に起伏してゐる杉山の一部の頂きにて、一帶の平地。其上手、下手共に、太い大きな杉の幹が、遠く又近く、並び立つてゐるので、見切られ、やゝ上手寄の、更に小高くなつてゐる處の木蔭には、谷間への降口がある。正面の奥は谷を隔てた直向うの杉山。其谷間からも澤山の杉の梢ばかりが、或は高く、或は低く見えてゐて、他の樹木は殆ど見えない。別當僧院は此ずつと下手の凹地に在るらしく、下手の、杉の木立の間に登り口があつて、人は總てそこから出入する。平地のやゝ上手寄に、二三の大きな石と一二の切株がある。

時は建保五年七月初旬(陰暦)の午後。幕の開く前に、雨の音や雷鳴が聞える。

幕が開くと、激しい電光、すぐつゞいて雷鳴。どしやぶりの雨の音。

ト下手の登り口の下の方で、鄙びた節で、左の唄を歌ふ聲が、雨や雷にかぶさつて聞える。

唄へ龍宮は近いなア、乙姫御が、鞴踏むのが聞ゆる。その鞴何と踏みます？たゝら〳〵と踏みまする！

此唄の餘韻が切れると同時に、登り口から、びしよ濡れになつて黒髪を振亂した眞蒼な顔の若い女が半身を現はす。ト見る間もなく、づぶ濡れの一重衣をしどけなく引摺りながら、やつと十八九歳かと思ふ標致も醜からぬ狂女が、湯立に使ふ幣の附いた大きな笹の枝をかつぎ、如何にも嬉しさうに快活な笑ひ顔をして駈けあがり、高々と鳴り渡る雷の音を地にして

「ハンヤ！ チヤンチヤカ！ チヤンチヤン！ チヤン〳〵〳〵！」

と鉦を叩く口眞似をしながら、平地を一ぱいに踊り廻り、トゞ上手の降口から谷間へと駈けおりてしまふ。

トすぐに下手の登り口から、近い頃關西から呼戻されて鶴が岡の別當に就職した公曉(十七歳)まだ除髪はせぬ童形、これも大分雨に濡れた一重衣に指貫といふ打扮、手に笠を持ち、跣足にてつか〳〵と駈けあがり、狂女の後を追はうとするらしく、早足に上手へと進む。途端に、上手一面にくわつと赤照がして、すさまじい落雷の音。ト谷間からぱつ〳〵と火炎と黒煙とが立昇る。或大木の幹が、今の雷火で裂けて、燃える體である。公曉は、之が爲に、目が眩んだらしく、たぢ〳〵と五足六足下手へとよろめいたが、忽ち踏みこたへて、きつと上手を見込み、又つか〳〵と進む。此内に、雷も雨もだん〳〵遠くなつて、正面の空が晴れかける。公曉は上手の谷間を見おろし、一寸思入あつて、笠を抛げすて、狂女の降りて行つた降口から降りて行く。尚遠くで折々電光がして雷が鳴る。

ト下手の登り口の下の方で、人聲が聞えはじめる。暫くすると、同宿の所化、專念(十八九歳)鼠色の服に墨染の腰衣、同淨念(二十五六歳)同上を先に、公曉の前の傅三浦の義村の子にて公曉の傍仕へを勤むる駒若(十五歳)一重衣に指貫の童形、いづれも素足にて駈けあがる。

專念　やアこゝにはござりませんぞ。

浮念　何處へ行かつしやれたか？

　ト三人が三方に分れて、きよろ〳〵とあちこちを見廻す此時、又登り口から、公曉の附人、傅の彌源太兵衛（六十以上）息を切つて、急ぎ足で登り來り、左の白をいひ、前の三人に近づく。

彌源　やれ〳〵、おそろしい雷鳴であつたぞ。相變らずお氣が荒うて、危さ知らずで、困つたものぢや。どうかお怪我がなければよいが。

　ト此内、專念と駒若とは、上手の谷間を見おろしてゐたが

駒若　やア、あそこぢや〳〵！　や、氣ちがひめがどうかしをつた！

專　おゝ、顔から血が流れてゐる！

　トこれにて浮念も彌源太兵衛も、同じく谷間を見おろし

彌　いかさま。しかしまア和子さまが御無事でよかつた。

浮　あゝ〳〵、氣ちがひめが逃げまはりをる。中々捉まらぬわい。

駒　あゝ、早いわ〳〵！　あゝ手も足も血だらけぢや。

專　禪師さまを手傳うて來う。駒どのもござらつしやれ。

　ト棄ぜりふにて、專念と駒若とは上手の降口から降りて行く。

彌　やれ〳〵、ひやいなことであつた。氣ちがひ一人を捉まへる爲に、大切なお身にお別條があつた時分には、取返しが附かぬ。いやはや、いつまでもお氣が荒うて困り切る。

浮　これでもう二度目ぢや。先度も、あの御境内へ落ちた時、雷獸の正體を見屆けるとやらいはつしやつて、みんなが雷除の呪文を唱へてゐる最中に、たつた一人軒先へ出て、見張つてござらつしやつた。えらい膽玉ぢやなア！

彌　其の膽玉が困りものぢや。此頃は阿闍梨さまの仰しやることをさへも聽かつしやらぬ。それに

浄　つけても、早う頭でも圓めさつしやつたら、おのづと氣持も變らつしやらうずに、つまり尼御臺さまが、いとをしがつて、あゝしておかつしやるがわるい。

浄　それに、あの腕ぶしの強いこと！　わしらは、迚も、三人かゝつても叶はん。きのふも投げられて、專念めは目を舞はしをつた。

彌　剛情や腕立は、坊さまには餘計なものぢや。

ト苦々しげにいふ。此時浄念は谷間を見おろして

浄　とう〳〵捉まつた。

ト彌源太兵衞も下を見おろして

彌　成程なア、氣ちがひは、怪我をしをつたと見える。

ト此内、公曉を先に、專念は狂女の右の手を、駒若は其左の手をおさへて、谷から上つて來る。狂女は、額口から左の半面へ掛けて怪我をしたらしく、血に染みてをり肱も膝頭の邊も、同じく血で衣服が汚れてゐる。けれども、先刻同樣に、當人は大元氣で、嬉しさうに目をくるくるさせて、笑ひ顔をして、手には御幣の附いた笹の枝を持つてゐて、一寸でも隙があれば、振離して駈け出さうとする。

公曉　おそろしう骨を折らせをつた。岩石の間に突伏してゐをつたゆゑ、死んでゐるのかと思うて、傍まで行くと、やがて猿のやうに駈け出しをつた。

彌　ま、お怪我がなうてようござりました。おあぶないことでござりました。

公　（やゝ上手の大きな石に腰をかけながら）一體此氣ちがひは何處のものぢや？

彌　へい、これは昨年から大評判の、陽氣な氣ちがひでござります。何でも戀が窪近在の名ぬしとやらの娘さうにござりますが、其色男が、まだ婚禮もせんうちに、非業に死にをりましたのが原で、氣が觸れたげにござります。其男といふのは、たしか材木座邊の、さる商人の一人息子

とやらでござりまして……

トいひかける。此以前より、狂女は、時々とんきよな併し快活な顔をして笑ひながら、おさへられてゐる手を振離さうと踠いてゐたが、此時出しぬけに、田舍びた唄を歌ひ出す。

狂女唄へおらになア逢ひたくば、由比が濱邊の小砂利まじりの荒砂持つて來て……

ト急に專念と駒若とを左右へ手荒く振離し、突きのけて前へつゝと走つて出て、いかにも愉快さうに笑ひながら

脊戸の小窓にばら〳〵投げやれ。小雨ふるかと出て逢ほぞ。……

ト歌ひつゞけて踊り廻る。皆々驚きて捉へようとする。公曉は棄てゝおけとこなし。狂女は歌ひ了ると、笹の枝をカセに使つて、囃子言葉やら、太鼓の口眞似やら

ソコヤレ、ソコヤレ！ どつこい〳〵 テン、テン！ テコテン！ テン、テン、テン！ おゝ、どつけい！ ハアハア！

ト平地一ぱいに踊り廻る。一同は呆氣に取られて見てゐる。ト、狂女はケロリと泣止んで、しきりに一同を眺めまはし

さア〳〵！ お月さまが、眞圓にならつしやつたら、きつとおれに隨いて來い。おれにさへ隨いて來れば、いつでも龍宮へ行かるゝ。やいよう聴け。鹿島明神さまのお告げぢやぞ。疑ふな。疑ふな。

ト笹の枝を湯立をするやうに二三度振廻したかと思ふと又上手の谷間へ駈けおりさうにする少糸、專念や淨念や駒若が止めようとする。トおそろしく腹を立つて荒れ廻る。

此騷ぎの最中に、下手の登り口から一人の老女、此狂女の母（五十五六）相應の農家の妻の拵へにて、息を切つて登り來り、此體を見て駈け寄り

母 おゝ、汝、こゝにゐてくれたゞか？ （ト狂女の手をおさへて）はれま！あによしただ？ 額口から、おゝお、腿ッけたまで……言はんことか、生血だらけでねえかよ！（ト涙聲で言ひかけながら、一同を見返りて、急に腰をかゞめ）へい〳〵、皆さま、御免なはれ

やせ。‥（ト狂女が又振拂つて逃げようとするのを、抱きとめつゝ）これ、さちよ。これさ〳〵、さちよ〳〵、‥‥これ阿母だよ。そうら、な、阿母だがよ。さ、落ち著くだ。落ちつくだちふに。

ト これにて狂女少し靜かになる。

では、おぬしがお袋か？　すんでの事にのう、あぶないところであつたを、こちの禪師さまがお助け遊ばされて下されたのぢや。ようお禮をいはつせいよ。

それははア、あてこともねえ恐れ多いことでござりやした。いかいお世話をかけやしてござりやす。どうかまア、氣ちげへの事だから、御容赦して下されやせ。

（石に腰を掛けたまゝで）氣ちがひにしてもめづらしいわい。嬉しさうに、歌うたり、踊つたりしをる。面白い奴ぢや。噂では、緣談の間ちがひが原で、氣がちがつたんぢやとやら聞いたが、眞實か？

母　（尙狂女の手を捉へたまゝで）へい〳〵、さよでござりやす。不思議な緣で、材木座の、さる物持の惣領どんに、いかく思ひ附かれやしてなア、それからといふもん、中ア打裂からとしても裂れゝばこそ、釣合はねえのは合點で、結納まで貰ひやして、早既來月は腰入れだちふ去年の八月十五夜の事でござりやす。何とした業因だつたか、釣好の其息子どんが、ふいと其晩小舟に乘つてたつた一人で沖ん中へ出られやしたでござりやす。すると、なんぐりしてゐた天氣が俄に變つて、すてッこちもねえお雷雨になりやして、小山のやうな浪が立つて、船も人もそれッきり見えなくなり、三日たち四日たつても歸らばこそ、先の親たちの泣きの淚よりも、こいつめか落膽しやしてなア‥‥（ト泣きながら）それからといふもんうッぷさいで、寢もせず、物も食はず、しくり

しくり泣いてばかりゐやして、物の半月も經つと、氣抜けのやうになつて、うぬが家も、親の顔も、忘れやして……

ト言ふうちに、狂女は又もだしぬけに陽氣に笑つて「チヤンチヤカ! チヤン〳〵! チヤン〳〵チヤン!」と口拍子に合せて踊り出す。老母はそれをやつと取りおさへながら

藥も符呪も願がけも、かつちりとも驗がござりやせんので、はれまア一人娘を打殺いてしまつたかと泣き悲しんでをりやすと、ふいと又樣子が變りやして、浮かれ出いて、あたけ廻つて、「鹿島の明神さまのお夢想で、おれ神子さまになつただから、今から龍宮へい行くだ。息子どんが彼方で待つてるだ」とあぢやらもないことべい口癖にして……

トいひかけると

狂　さうだ〳〵。今夜も待つてるだよ……今夜も。

トいふや否や又駈け出さうとするを、老母はやつとおさへつけて、むりやりに地上に坐らせ

母　ふん縛つといても、縄アぶつ切りやす。とりわき、お月夜やお夕立の夜となると、どねえに突込めといても、あたけて〳〵、戸オぶつさばいて、駈け出しやして、浪打際べい行かう〳〵といたしやすだ。此間も、眞夜中に、拔け出しやして、飯島が崎の深い處へ入りやしたゞ。……だアから、これッぽちも眼が離されやせん。……へいへい、お庇さまで、命べい拾ひやして、おかたじけでござりやした。……さ、起つだ。歩べ。さ、歩べてば。……

ト坐り込んでしまつた狂女を引起しながら

へい〳〵、おかたじけでござりやした。……さ、こつち來う、こつち來う。

ト公曉はじめ一同に會釋しつゝ、老女はやつと狂女を引立てゝ下手へおりて行く。

駒　をかしい氣ちがひぢやなア!

專　お袋めは泣いてゐるけれど、當人は大陽氣ぢや。

淨　あんな陽氣な氣ちがひめは、初めて見たわいし

ト此内彌源太兵衞は、公暁の衣服の汚れてゐるのに目を著けることありて

彌　おゝお、お召もぐつしよりなりや、お袴も泥まみれぢや。早う下へござりまして、お召替なされませ。

公　まだ俺は此處に用がある。替へるには及ばん。おのしは最早、往け〳〵。

彌　もう直に夜風になりまする。雨にお濡れなされたのはお毒でござります。ちよとマアお被替なされませ。

公　うるさい！　無用といふに。

彌　はい。（トばかり口をつぐんだが）では私が、ちよと往つて取つて參じませう。

ト彌源太兵衞は、急いで下手へおりて行く。日はだん〳〵西へ傾くらしく、正面の杉山の彼方の空が夕照の反射で赤く美しく輝いてゐる。

公　さア〳〵、爺が去にをつたによつて、始めい始めい。さ、いつもの通りぢや。三人一しよに掛つて來い。

淨　今日は眞平御免でござります。きのふ酷くお投げなされたので、今日は脊骨が痛うてなりませぬ。

專　私も御免でござります。思ひ出したばかりでも又目が舞ひさうでござります。

公　えゝ、弱蟲めが！……では、けふは手は出さんさ、かうして組んだまゝでゐる。さ、來い。

淨、專　今日は御免でござります。御免でござります。

トいひ〳〵、下手の降口へ逃げかけるを

公　おのれ！……

トいつて忽ち追ひつき、左右の手で淨念、專念の襟上を取つて引立てゝ戻り

相手になりをらんと、承知せんぞ！

トこづき廻す。

淨、專　では、成りますく。

ト二人は據なく身支度する。駒若も身づくろひする。これより公曉は、手を組みて、眞中に突立ち、三人は左右より組附き、よろしく相撲ふこと。トヾ三人共、手を轉がすやうに、幾度もく足がけて見事に倒される。

公　弱蟲！　けふは格別手ごたへがなさ過ぎて、張合がない。……あゝ、腕が鳴つてならんわい！

ト四邊を見廻し、先刻腰掛けてゐた大石に目をつけ、「よい物があつた」といふ思入。すぐに身づくろひして立寄り、其石に兩手を掛け、徐かに搖を入れて、うんと引起し、上手の降口の方へ轉がし始める。淨念、專念、駒若は呆れて見てゐる。いよく降口近くまで持つて行くと、一息入れ、更に滿身の力を籠めて、先づ膝頭まで、それから又だんく高くかゝげ上げる。皆々其うしろに立つて見惚れてゐる。

此時、下手の登り口から以前の彌源太兵衞、青梓の衣服を持つて上り來り、此體を見て「又か！」といふ思入。途端に、大石は公曉の頭上を離れて、谷間へ落込む。すさまじい音がする。

公　はゝはゝはゝ！

ト愉快げに笑ふ。彌源太兵衞は「困つた物だ」といふ思入にて

彌　又でござりますか！　やれく！（ト淨念、專念に向ひ）お同宿たち、今お客來で、阿闍梨さまのお召でござりましたぞ。早う往かつしやれ、往かつしやれ。……

ト是にて淨、專は、一寸公曉に會釋し、これを好い機に急ぎ下へおりて行く。駒若もつゞいておりる。

和子さまにも――かうして持つて來ましたものの――下でお召替なされませ。只今尼御臺さまからのお使ひにとて、村橘のお局がわせられましたので、阿闍梨さまが、早う呼びまして來いと申されました。さ、早うござらつしやりませ。……

ト公曉は、折角の興を破られたのを憤る思入にて、正面の杉山を見やつたまゝ、脊を向けて、返辭もせずに、立つてゐる。彌源太兵衞は思入あつて、其傍に膝まづき

もし、和子、どう遊ばされたものでござります

？　きのふ阿闍梨さまの仰せられた事を、何とお聴きなされましたぞ。貴下は御當社の御別當職にならせられたのでござりますぞ。なれば、御定業でなうお果てなされた父御さま、二品禪室さまの御冥福のお爲にも、又源家御一統の御罪障消滅のお爲にも、是非とも貴下樣は御戒行を積まつしやつて、慈悲忍辱を第一となさらねばなりませぬのに、又してもく、腕立や力わざばかりなされますのは、お心得ちがひでござります。これからはふッつりお止めなされませ。きつとお學問をばお勵みなされませ。……

公曉は振向きもせず、後ろ向きのまゝでゐる。

ともかくも、ま、下へござらつしやりませ。阿闍梨さまのお召でござります。……もしく。

公　やかましい！　知つてをるわい。

彌　又そのやうにすねさつしやります。それではなりませぬ。何ぼうでも、阿闍梨さまの仰せに、お背きなされては濟みますまいぞや。

公　いんにや、たとひ師の坊のいはれることでも、不道理な事は、聴くには及ばん。

彌　え？　では、阿闍梨さまのお言葉をさへ、不道理ぢやとおつしやりますか？

ト是にて公曉はきつと此方を見返りて

公　不道理でなうて何とする？……

ト手强く言ひながら、傍らの切株に腰をおろし

おれが力わざをしたり、武藝を修めたりするのを、やれ、淺ましいの、無用ぢやのと、見當ちがひの異見立をさつしやるのが、第一の不道理ぢや。あれは、俺を欺して、毒にも藥にもならん腑拔けにせう爲でなければ、師の御坊が毫けてゐるのぢや。俺は京師にゐた間に、大寺の坊主といふ坊主の振舞は、よう見もし聞きもしたわい。どこに戒行や悲慈や忍辱を專一にしてゐる寺があるぞ？　五山を見い。第一、あの延暦

寺を見い。兵力を備へてゐればこそ、佛教の大本山ぢや。いざといふと、陣立をして、無二無三に、神輿を振込む。禁廷にさへ憚られるのはあの兵の力ぢや。それが何の忍辱ぢや?、今の世は、在家も、出家も、所詮は腕ぶしの强い奴が勝ぢやわい。兵力さへあれば無理も通る、非分も勝つ。‥‥

ト一氣に勢ひ込んで言つたが、急に何か思ひ出して、無念さうに

父上とても‥‥(ト齒をくひしばつて)若し十分の兵力さへあつたなら、何のむざ〳〵、あの修善寺なんぞへ押込められて、無念の最期を‥‥無念の最期を‥‥

トいひかけたが、俄に激しく感動して、後をば言ひかねて、ヒステリーのやうにしやくりあげ、全身をふるはして泣く。彌源太兵衞も、思はず引込まれて、同じく涙に暮れながら、

彌　さういはつしやれば、そんなもんぢやけれど、互ひに腕づく、力づくで、我を立て、修羅を燃し合うた時分には、いつまでも淺ましい業因の盡きる瀬はござりませぬ。まゝ、諦めさつしやれ〳〵。

ト介抱しようとするのを突飛ばし

[illegible]　えゝ、うるさいわい!

ト駄々子のやうに、身がみをして歎く。此途端、下手の登り口より駒若が又あがつて來る。

駒　禪師さま。阿闍梨さまがお待ちかねでございます。早‥‥

ト二の句を繼ぎかけたが、二人の樣子を見て、驚き、後をいひかねて突立つてゐる。四邊がだん〳〵薄暗くなつて、塒へ急ぐ鴉が、三四羽、向うの杉山を横切つて、左手から右手へと、啼きながら飛んで行く。

第二場

別當院公曉の居間

正面(平舞臺)は別當所の別棟、これは公暁の居間、本院は下手にあるらしく、長い廊下が下手へ通じてゐる。正面には板縁が見え、庭續きの直傍の杉山が見えてゐる。障子は開け放し。上手の側面は、蔀格子が悉くおろしてあり、下手の側面は、廊下口の柱の處までは障子、正面の板縁がそこまで折れ廻りになつてゐるらしく、柱から下手に當る奥のかたには、やはり庭つゞきの杉山の裾が見渡される。廊下と居間との間の妻戸(板子張)は、開放したまゝになつてゐる。

此居間の上手には阿闍梨勝圓(七十位)天台宗の僧衣にて住ひ、下手には村櫛の局(四十以上)下げ髪、小袿にて、座右に白木の脚附の臺に、公暁に呈する僧服を取揃へて載せたるを置きて、住ひ、談話なかばの體。日は既に山に入つたらしいが、席にはまだ燈火もない。

阿闍　いや〳〵、善は急げでござる。尼公にも、そこにお心が附かせられたとあれば、一日も早うお落飾をおさせ申さるゝがよい。毎度申し入れた通り、お聰明であらせらるゝ癖に、何ぼう御教訓申しても、經文はおろか、はづか三四句の眞言をすらも記えうとはしめされず、ともすれば同宿共を相手に、太刀打、力わざ、殺生三昧。いやも、われらの手にも及ばぬ。これといふも畢竟は、お俗體のまゝでおかせらるゝ爲でござる。はや佛門に入つたりとおぼしめされたなら、よもやあゝもあるまいでござる。

村櫛　嘸かしお困りでござりましつらう。お察し申します。三浦さまお邸にて、私お附き申し、お育ち遊ばされたまだ四歳、五歳のお幼少い時分から、ほんに玄祖父様、鎭西八郎さまのお血統は爭はれぬもの。お癇が高ぶつてこそおむづかり遊ばしつれ、なみの子のやうに、痛いとか、怖いとかいうて泣かせられたことはござりませなんだ。京都にお上りの後も、三井寺にて御修行の間も、毎日のやうに、木登り、山登り、喧嘩口論、腕立、力わざ。折々は、お行くへが皆くれ分らず、其夕方または其あくる朝になつて、けろりんと、鞍馬山または比叡山などからお歸

りなされたこともござりましたげな。こちへお戻りの初手ほどは、さすがに御殊勝げに見えさせられましたが、それもやっぱり空頼めでござりましたわいな。成程、延ばせば延ばすほど、御未練も、お惡戯も募りませうず。けふは、尼公さまの仰せを楯に、否應なうお勸め申しまする。

阿　それがようござる。寸善にも尺魔ぢや。こよひをお過しなさるな。……では、早速呼びまして參らう。暫時お待ち下され。

ト阿闍梨は下手の廊下を通りて入る。局は一人殘り、思入ありて、傍の白木の臺を引き寄せ、中なる新調の僧服白綾の小袖、緋の素絹、金襴の袈裟等を取調べ、一寸愁のこなし。此内、前の場の所化專念、下手より燈火を持ちいで、よき處に据ゑおきて、又下手へ去る。

ト引きちがへて、同じく下手より、公曉、前の場とはちがつた服裝(水干に指貫)にて、腰に小さ刀を帶び、廊下を渡りて出で來り、無言にて室内に入る。局は心付きて振りかへり

村　おゝ、和子、お歸りでござりましたか?

ト形を改めると、公曉よろしく上手に住ふ。

いつに變らぬ麗しいお顏持、お嬉しうござります。お祖母さまからも、よしなに申上げいとのお言葉でござりました。

公　(不興氣に)けふは何しに來たんぢや?

村　はい、今日は、ちと折入つて申上げねばなりませぬ事がござりまして……

トいひかけて躊躇するのを、ジロリと見て

公　いよ〳〵坊主になれと、勸めに來たんぢやらう。

ト外方を見ながらいふ。

村　恐れ入りましてござりまする。御意の通り、尼御臺さまの仰せ附けによりまして……

トいひかけるのを冠せて

公　祖母上の吩附ばかりではあるまい。叔父上やあ

村　の義時が、やかましくいふのであらうが。いえ〳〵、將軍家からは、何等のお沙汰もござりませず、また相州どのからも、別段言上の儀とてもござりませねど、既に別當職に就かせられました上は、お俗體のまゝでいらせられまするも異なもの。諸人の思はくもあり、將軍家へのお聞えもいかゞと、とりわけ、尼公さまの御遠慮にござりまする。……

ト傍らの臺を公曉の前へ押し進めて

これ、御覽じませ。お飾りおろしの式が濟めば召させまゐらせまする此品々は、尼公さまのお心づくし。中にも、此金襴のお袈裟に添へさせられたお飾紐は、お手づからのお細工にござりまする。

公　(それには目もくれず)ではいよ〳〵……騙したんぢやな。……うまいことを言うて、俺をば京都から呼寄せておいて、のつぴきさせず、坊主にしてしまふんぢやな。おのれ!

ト憤激の思入。向うを睨みつめて身をふるはせる。

村　あゝもし、滅相なことをおつしやりませ。何のマアお騙しなさりませうぞ。最初から、此鶴が岡八幡宮のお別當職にといふお約束、こなたもそれを御合點の上で、お下り遊ばしたではござりませぬかいな?

公　俺や別當職といふものは、もつと威のある役目ぢやと思うてゐたんぢや。瘦神主や生臭坊主の先達になつて、供養や祈禱の世話をする分なら、爺か、病人か、女か、子供で澤山ぢやわい。……よくも俺を騙しをつた。……こんなことかと思うたによつて、俺は廿歳になるまでは、京都を離るまいと思うてゐたのに、無念なことをしてしまうた。(ト急に臺の物に目を附け)何ぢや、こんな物!……

ト手荒く引繰返しながら

父上に、あの修善寺で、詰腹切らせをつたと同じ手で、（トいひかけて、歯をくひしばつたが、忽ち泣顔になつて）おのれ、俺をも……俺をも……坊主にしてしまひをるんぢやな！

トいふや否や、激しく泣き出す。

村　あゝこれ、滅多なことを！　其やうな大きなお聲で。（ト四邊へこなしあつて）若し惡い者に聞かれたら、それこそお身の上の一大事になりまする。（ト介抱しながら）此お社の別當職といへば、お位ゐは將軍家の直お次、萬人が尊敬の的。なればこそお祖母さまのお肝焦。それを騙されたとおぼしめすは、こなたのお僻みと申すものぢや。

トいろ〱こなし。此内、下手より義時の郎黨深見三郎次郎（四十七八）烏帽子直垂にて出て來り、妻戸の蔭に立ち、はじめは腕組をして、内の問答を聞いてをり、後にはこゞむ。

公　いや〱、騙したんぢや。（トだん〱歎きよりも怒りが主になつて來る）俺を京師に置いたなら、行く行く謀反でもしやせぬかと、きつとさう疑うて呼び戻しをつたんぢや。あゝ、今思ふと、俺も大阿呆であつたわい。公然に武藝を習うたり、友達を多勢集めて、敵討の軍の眞似をしたり、叔父貴や義時の事を、さん〱惡口したこともあつたによつて、俺の本心を勘づかれたのぢや。

村　えゝ！（ト驚きて）すりや貴下は、將軍家や北條どのを、今でも怨んでござらつしやりますか？

公　怨まいでか？……父上、二品禪室どのは、あいつらの爲に、無慚な、無念な、淺ましい御最期を遂げなされた。……父上に、何の科があつた？　どんな罪があつた？　横道者の北條一家を滅ぼさうとせられたのが何がわるい？　それぢやのに、逆まに、北條めの爲に殺されをされたは、つまり、あの叔父貴がさせをつた事ぢや。

村　あゝもし、又してもそのやうな滅相なことを！

將軍家は、あの頃にはまだやつとお十三、どうしてそのやうなお考へなぞがござりませう？
　殊には、尼御臺さまが附いておいで遊ばされまするもの。それは貴下も、かね／＼聞いて、御存じのことではござりませぬかいな？

公　いや／＼、その時はどうあらうと、現在兄の敵のあの義時めを、今以て誅戮しようともせず、ぬく／＼と將軍になつて榮耀をかはいてをらるるのは、義理も人情も辨へん無道人の證據でないか？　父上ばかりか、兄の一幡をも、弟の千壽をも、みんな慘たらしう殺しをつた！　おのれ！……（トいたが、又急に女々しくなつて）第一、祖母上が聞えぬわい！　おれまでも、騙して、呼び寄せて、坊主にするとは……坊主にするとは！

ト又しやくりあげて泣き出す。村橋もこらへかねて泣きながら

村　御尤ぢや／＼。其お怨みは御尤ぢや。さ、御尤ぢやけれども、何事も時世時節、今更それを言うたとても、返らぬことでござります。な、もし、二品さまのお不幸も、つまりは其同じお癇の強い、荒いお氣質から起つた事ぢや。かりにもそのやうな事を、二度とお口外遊ばしますな。萬一にも御所さまのお耳に入らば、それこそお身の上でござりますぞよ。

公　えゝ、かまふものかい！　おのれ、坊主にするならして見をれ。今に思ひ知らせてくれるわ！

ト覺えず腰の小さ刀を掴みて、居丈高になる途端に、妻戸の蔭に居る深見三郎次郎の姿が目に入る。これにて、きつとなつて

だれぢや？　そこにゐるのは？

ト鋭く咎める。これにて、深見はしづかに内に入り、妻戸の締りをなし、やがて恭しく下手に平伏して

深見　失禮の段平に御免下されませう。北條どのよりのお使ひとして、參上仕りましたものにござり

ます。

公　（ぎよつとしたる思入）なに、北條の使ひ？

ト村松深見を見て

松　おゝ、たれかと思うたら、深見どのか？

ト公曉に向ひて

お氣づかひ遊ばしますな。此仁は、私かねがね噂いたし、何かの御相談相手とも相成りませうずと申しあげおきましたる私の腹がはりの兄、深見の三郎次郎にござりまする。

公　（やゝ落着きて）昔、父上に仕へてゐたとかいふのは、おのしか？

深　はゝ、御意の通り、若年の砌、秀若丸と召されて、御父上、前將軍家のお傍去らずを勤めをりましたる者にござります。只今は相州殿に御奉公いたしをりますれども、前將軍家の御高恩は夢の間、束の間も忘却仕りませぬ私、かりそめにもお爲にならぬ儀は、正八幡、毛頭他言は仕りませぬ。必ずお氣づかひ遊ばされますな。實は、今しがた、お廊下口まで參りかゝり、ふとお言葉を洩れ聞きましたるゆゑ、萬一にも四邊を徘徊いたしをる者などあつてはと存じ、只今までとつくと見張いたしをりましたが、只一人の出入もござりませねば、御安心遊ばされませ。

公　（尚油斷せざる思入にて）さうして、おのしは、何しに來たんぢや？

深　はゝ。實は（ト思入あつて）主人義時の吩咐を受けまして、一日も早くお落飾の儀を、强ひてもお勸め申さうとて、參上いたしましたのでござりますが、測らずも、只今の御述懐を承はり、御尤とも、お道理とも、申し上ぐべき言葉もなく、そゞろに前將軍家御在世の折の事共を思ひいだし、不覺の涙に暮れをりましてござりまする。

ト深涙のこなし。これにて村松も泣きながら

村　兄上、お察しなされて下され。世が世なら、當然將軍家の——現に一旦はお猶子でもあったとゆゑ——お跡目ともならせらるゝ筈の和子さまの、此うるはしいお飾りを、むざ／＼おろさせまゐらするのは、尼公さまはもとより、たれしも、痛はしうて／＼ならぬのぢやけれど、……又御無念も、お道理ぢやけれど……どうもならぬ時世。……何とかいうて、お慰め申してあげてくだされ。

深　御發明の和子さまに、御異見などゝ申しては、嗚呼がましうござりますが、さすがにまだお若年ゆゑ、憚りながら、只眼前の事のみ御念頭に置かせられ、最も大切な儀にお心が附かせられぬかと存ぜられまする。

公　なに？　最も大切な儀とは何のこッちや？

深　萬一にも、當將軍家が、不慮に御他界あらせられましたならば、其のお跡目は如何なりませうぞ？

ト公暁默ってゐる

深　御臺所をお迎へ遊ばされてより、もはや十二年にも相成りまするぞ。今以て御出産の、氣ぶらひもござりませぬ。お胤が無うて薨去れさせられましたなら、何人がお世繼にならせられませうぞ？

ト公暁なほ默ってゐる。

村　成程、さういへば、天にも地にも、源家御正嫡のお血すぢというては、此和子の外には……

トいひかけるを深見目まぜにて制し、三人顏を見合せてよろしく思入。

深　此儀を申し上げおきまするは、只一へに和子さまの御自重をお願ひ申さんためばかり。もとより當將軍家のお身の上の御不祥などを希願うての儀ではござりませぬ。併しながら（ト四邊へこなしありて）こゝに今一つ、内々聞え上げておかね

ばならぬ一大事がございまする。（ト膝を進め、聲をひそめて）和子は、此たび、將軍家が宋國へお渡り遊ばす爲、前代未聞の唐船を御建造遊ばされ既に不日お船おろしのお催しあることをば、御承知でございませうな？

公　うん、唐人の陳和卿とやらの言葉を信じて、前世の宿縁のある唐の何とやらいふ山へ參詣に行かれるとか聞いた。

深　陳和卿は、將軍家の御前生は、宋國醫王山の長老ぢやと相しました。將軍家御自身にも、先年右同樣の儀を、不思議にもお夢の裡にて御感得遊ばされたとのお沙汰にはございますれど、何共以て奇怪千萬なる事共。和子は、此儀をば、何とおぼしめされまする？

公　俺も奇怪ぢやとは思うたが、あの柔弱な、公家臭いことや唐臭いことや佛臭いことの好きな叔父貴ぢやによつて、そんな夢を見たかも知れんわい。どちらにせい、たはいもないことぢや。

源　いや／＼。たはいがある段ぢやございませぬぞ。

（トきつと言ふ。これにて公曉も村橋も不審の思入。村橋は膝を進めて）

村　と、おつしやる仔細は？

（トこれにて深見又四邊へこなしあつて）

深　將軍家を、只御柔弱とばかりおぼしめされたら大きなお目ちがひでございまするぞ。外面には似ぬ、中々逞しい御生來。和歌よ、蹴鞠よと、殿上ぶりの風流に、耽らせらるゝと人には見せて、内々京方とのお親しみ。とりわけ、仙洞御所とは、多年の御昵懇。あるひは容易ならぬ御陰謀があらせらるゝやも圖られませぬぞ。和田一黨の先年の謀反とても、内實は將軍家豫てお含みの上の儀ではなかつたかとも疑はれまする。併しながら、仙洞の御底意は、申すまでもなく武家政治の倒滅、決して北條どののばかりを的のお

企ではござりませぬゆゑ、京方との御合體が定ならば、それこそ源家の大禍根、行く〳〵如何やうな珍事が出來いたすやも圖られませぬ。

村　まア思ひもよらぬお話！　さういへば今年の三月、御臺所のお兄上さま、坊門大納言さまが、仙洞御所のお使ひとして、不意にお下り遊ばしたのも、どうやら仔細がありさうな。

公　では、宋國へ渡るといふのも、嘘か？

深　何か京方とお打合せあつての、御計略ではあるまいかと、これは私の當推量。何れにもせよ、いつかは斯様な雜說が原となつて、此儀尼公さまのお耳に達しましたならば、御當家の御安危には易へさせらるべうもござりませねば、將軍家に御隱居又は御落飾をお勸め遊ばさるゝこととも相成りませう。さすれば、當然何人かに、將軍職をお讓り遊ばされねば相なりませぬ道理でござりまするぞ。

ト氣味合にていふ。

公　ひゝ。

ト思入。村備もよろしくこなし。

深　そこにお心が附かせられましたなら、明日にも早速お落飾遊ばされて、御幸運の巡環するまでひとへに御殊勝の御振舞をこそ、平に願はしう存じまする。

トしみ〴〵といふ。此時下手より阿闍梨勝圓出で、何心なげに妻戸に近づいたが、ふと立どまり、內の話に耳を立てる。

公　（思入あつて）今の話には、何ぞたしかな證據があるか？

深　（懷中を探りて一通の書き物を取り出し）これは先年內勅によつて、仙洞御所よりお歌合せの一巻とやらを下し賜はりました折に、將軍家が其御返辭に詠ませられましたお歌の由。一昨日傳手を求めひそかに寫し取らせおきましてござりまする。

ト差し出すを公暁受取り、すぐに開いて見て、中音に

公　大君の勅をかしこみ……

ト讀みかけるを深見おさへて……

深　あ、もし。……お默讀、お默讀。

ト深見、村橋よろしく四邊へこなし。公暁は紙を繰りひろげつゝ默讀する。妻戸の外にて立聞く阿闍梨もまたよろしく思入。

第三場

由比が濱邊

正面(平舞臺)は、すべて由比が濱邊。上手、下手、共に間近な岨の裾で見切られ、正面は大分遠くまで一面の眞砂地にて、木も何もなく、只白波が打寄せてゐるのが見えるばかり。もう夜が深けてゐるので、上手の奥には遠く黒く稲村が崎が見え、中央から上手へ掛けては、巨大な、異様な唐船の舳の方、およそ二間程だけが、おそろしく大きな怪鳥の尻尾か何ぞのやうに眞黒に、中空を切つてヌツと突き出てゐる。もう建造に懸つたれども、内外の装飾などに手間取りがあるらしく、足場がまだ架けてある。それから下手の眞近くには作事小屋の一端が見えてゐる。時は前の場と同じ日で、九日頃の月が、もう既に稲村が崎の彼方に低くなつてゐる。北條義時の郎黨、大場の權平太(三十五六)烏帽子、直垂、腰刀にて、船大工甲(五十位)烏帽子、袴と共に、後ろ向に立つて、船を見上げてゐる。

權平　成程、十八間か? 大きなものぢやのう。一廻りぐるりつと見廻るばかりでも一寸草臥れるわい。いかさま、これならば、二百人位乘込んでも大事なからうのう。

甲　へい、これをば二枚瓦と申しまする。あの(ト船の下手を指さし示して)お花表のやうなものが媽公とかいうて、船玉さまを祀るためのものぢやさうにござります。これが沖へ出りや、御所がまるごと浮び出いたやうでもござりませうわい。

權　さうもあらう、さうもあらう。

ト此内、船のうしろより、更に一人の北條の郎黨、佐越の次郎（三十位）烏帽子、直垂、腰刀にて、船大工乙（三十五六）烏帽子、袴と話しながら、中央へ廻りいで、前の二人と一しよになる。

次郎　大場どの、そこもとの御檢分も濟みましたかな？

權　濟みました。……（大工らに向ひ）兩人とも太儀であつた。もう歸つてよいぞ。

甲　へい／＼。さやうなら、お二人さま。……

乙　これで御免を蒙りまする。御機嫌ようゐらせられませ。

ト大工甲、乙、めい／＼作事小屋の一隅から大工道具を取り出して來て、それを持ちて、下手へ入る。殘つた二人は四邊を見廻し、思入あつて、ずつと傍へ寄り

權　いかさま、噂の通りでござる。これならば、どんな荒海でも乘切られませう。又、軍兵の二百人位は乘組めませう。左右とも、舷には、箭眼らしい堅固な格子が設けられ、艫も、船首も、あれ、あの如く、まるで城樓のやうでござる。兵糧倉かとも存ぜらるゝ構へもござるて。

次　いよ／＼以て、深見どのゝ推量通りでござらう。

權　併しながら、世には似寄つた事の出來いたすもの。前將軍家も、御晩年には、北條家を憎ませられ、比企能員どのと謀じ合せて御謀反のおもくろみ。當將軍家にも此御陰謀、いづれも御主君をけぶつさう思し召されての事でござる。

次　（うなづきて）此上は、ともかくも此通りを主君へ申しあげおいて、御沙汰を待ちませう。只今の話では、程なくお船おろしの御模樣。（ト一寸思入あつて）事によつたら、成るたけ手早く……

トこなし。次郎うなづきて

次　今夜にもやりますか？

權　お下知次第でござるが、今の内ならば、作事小屋に木の切れ、鉋屑なぞも夥しうござるゆゑ、

不慮の失火らしくもてなし……

ト兩人ともに、あとは無言にて、船を拋いてしまはうといふ密談のこなし。此以前、前の場の狂女、先刻の通り幣の附いたる笹の枝を手に持ち、やはり髪を振亂し、しどけなき姿にて、上手の網蔭よりふら〳〵と出で來り、船の手前の足場を攀ぢて、する〳〵と船首へ登ることありて、其最も高く聳えたる處に突立ちて、下を見おろし、じつと二人の問答を聞いてをり、此時だしぬけに、陽氣な聲にて

狂女　あはゝゝゝゝ！

ト笑ふ。權、次の二人はびつくり敗亡して、覺えず下手へ一さんに逃げかけたが、忽ち我に返り、立ちどまり、めい〳〵腰刀に手を掛けて、きつと船の上を見込む。ト狂女は、持つてゐた笹の枝を二人の頭上へ投げおろしながら、一聲高く叫び、身をひるがへして船の下手へと駈けおりて行き、忽ち見えなくなる。二人は、これを見て拍子拔けのしたる思入。

次　あゝ！　例の氣ちがひか？

權　何の事だ！

ト二人顔を見合せて、苦笑ひをして

次　ともかくもお知らせ申すことにいたさう。

權　さやういたさう。

ト二人は下手へ入る。あと暫くは浪の音ばかり聞えてゐる。

ト唐船のうしろより一人の旅僧、鼠色の服の上に墨染の衣を着て、笠をかぶり、手に錫杖を持ちて、しづかに沙地の中央へと廻り出で、じつと二人の後ろ影を見送りつゝ、錫杖を我肩にもたせかけておいて、笠を脱ぎかける。此以前、同じく船のうしろより、先刻の狂女、そろりそろりと窺ひいで、旅僧の擧動を不思議さうに見てをり、だん〳〵近づき、すぐ後ろで腹這ひになりて、摺り寄り僧の袖の下から、ちやうど今笠を取らうとする顔を見上げる。

旅僧は年の頃三十位。日に燒けてはゐるが、人品よき、顔だち。これは故和田義盛の二男朝盛入道實阿彌陀佛なのである。實阿彌が笠を取ると、狂女はだしぬけに

狂　あはゝゝゝゝ！

ト如何にも陽氣に、聲高く笑ふ。さすがに僧も驚いたが少しも動ぜず、すぐに逃げにかゝる狂女の襟上を取つておさへて、波の上に落ちかゝつてゐる月の光りで顔を見

て「あゝ氣ちがひかー」といふ思入、頻りに逃げようとして踠くのをおさへたまゝ、倒じつと向うを見て、何事か考へてゐる。

風が急に落ちて來て、岩に強く打寄せる浪の音が一きは高く聞える。

* * * * * * * *

第二幕

第一場

鎌倉御所寢殿

正面（平舞臺）五間の間は、御所の寢殿。正面は織物の緣附きたる極彩色の畫をかいたる襖。上手、下手共に廣庇（入側）を隔てゝ高欄附の廣緣を折廻したる心にて、端々には蔀格子、其眞中には翠簾、翠簾は、上下ともに高く捲上げありて、そこより上下の對の屋の方へ通ふ心。

序幕よりは四五日の後。陰曆七月十日頃の午後。

こゝに、上手に臨時の執權代理たる前の大將の太夫大江の廣元入道覺阿（七十歲）褐の長直垂の上に袈裟を掛けて住ひ、下手に村楠の局、下げ髮、小袿にて住ひ、談話なかばの體。

覺阿　いや、其心づかひお察し申す。實は、其以前、一旦御猶子と定まらせられた時分は、まだやつとお六歲であらせられたのぢやが、其折にさへわれらに向はせられて「では、おれは、此次には將軍になるのぢやな」と念を押させられたには、われらほと〳〵我を折り申した。やがて其儀はお沙汰やみとなり、三井寺へ上らせられて後も、猛しいお振舞は止ませられぬとの御消息を聞くたびに、内々心痛のいたしをつたに、まづ以て滯りなく、此たびのめでたき御落飾。御同前に悅ばしい儀でござる。

村　お式が濟みまする間際までは、お飾りをおろさせますのが、勿體ないやら、お痛はしいやら、只なさけなく、涙に搔暮れてをりましたが、見

覺　かはすばかりお立派な御法體を見あげまして、きのふの歎きはけふの喜びにござりまする。嘸かし尼公さまにも、御安堵遊ばされたでござりませう。

御安堵といへば、更に一つの御心勞は、例の將軍家御渡唐の一條。御母公の御異見も、我々共一同の諫爭も、更にお聽入なく、いよ／＼一昨日、既にお船おろしとまで運んだる處、百數十人の筋力を以てしても、不思儀に船陸を離れず餘儀なく、其日は其儘に御中止なされ、今日改めて人夫を增し、是非とも海上に浮べさせられんず御結構と承はつたが、さて／＼困つた儀でござるて。

ト此時上手の廊下を渡りて、尼御臺(六十一歲)先に、公曉禪師、天臺宗の僧衣を着し、附いて出で、其後より女童二人、尼公と公曉の褥を携へて從ひ、徐かに寢殿内に入り來る。覺阿、村橋は席を改め、上手と下手とによろしく住へば、尼御臺は眞中やゝ上手に、公曉は其やゝ下手に住ふ。

尼　入道どの、聽いて下され。居は志しを移すとやらいひますが、心持で、同じ居處が變つたやうにも見ゆることのある證據は、和子の法體すがたの尊さに、釣殿から見る我庭の風情、四方の山々の風姿までが、けふは例にならう珍らしうも麗しうも見えました。それのみならず、今がたあの中島の橋の上で、人の世を池の鱗族に喩へての和子の法談。經文からの引事といひ、辯舌といひ、ほんに一廉世に聞えた知識というても恥かしからぬ程の學問、識見。ほと／＼感心しましたわいのう。

公　そのやうにおつしやりますと、恥かしうてなりませぬ。つい此間までは、どのやうに叱られても、學問をする氣にはなれず、懈つてばかりをりましたが、村橋はじめ一同の者の剛異見に、搗てゝ加へて師の御坊の御教訓。「鶴が岡八幡の

別當といへば、關東では第一の僧職ぢや。權化の活佛とも崇められ、下萬民の身の掟ともなるべきぢやに、其振舞は何事ぢや？　和子は京師にござつたから、見聞したこともあらう。なさけないことぢやが、今は佛法の末世ぢや。名に高い五山の僧徒さへも、只管官位や顯榮にあこがれて、佛の道には遠ざかり、學問はせず戒行は守らず、慈悲忍辱を第一とせねばならぬ身が、常に衣の下に腹卷して、いざといへば兵伏取つて、佛弟子互ひに血を流す。淺ましいことぢや。こなたは、よく〱物の道理を考へ、我身は下萬民の鑑ぢやと思うて、身を愼めい」とのお諭し。長い間の誤りを、やつと昨日けふ覺りました。

覺　義理明白な其お言葉。先頃お目にかゝりました時分とは、大きな相違。入道、感じ入りましてござる。

村　まことに、お生れ變り遊ばしたかと存ぜられまする程の御殊勝さ。此中は、夜分は大概、一番鷄の啼く頃までも、御書見なされてゞござりますげな。

公　あゝこれ、要もないことを。祖母上が又お氣づかひ遊ばされる。

尼　ほんに、此やうな嬉しいことはござらぬ。したが、もう程なく未さがり。さぞ阿闍梨が待ちかねてゞあらう。村橋、さ、禪師どのをそば。

村　はゝア。

公　では、祖母上さま、今日はこれでお暇仕りまする。

尼　いづれ明日にも又逢ひませう。……

ト　これにて公曉會釋して席を立つ。

あ、これ、學問も大切ぢやが、必ず無理をしやるまいぞ。

はッ。かしこまりました。

ト村橋先に立ちて案内し、公嶋と共に下手の廊下を渡りて入る。尼公は其後影をじつと見送つてゐる。此間覺阿入道は、何やら思案の思入。尼公は嬉しげに覺阿を見返りて

尼　入道どの、改心しての落飾とは聞きましたが、あれほどまでに柔順に、温厚しうならうとは思ひ設けてゐませなんだ。ほんに、案じるよりもでござるのう。

覺　さぞ御安心。祝着に存じまする。

この方はこれで落着きましたが、心がゝりは、彼の唐船の一條でござる。きのふも、事にかこつけ、再び村橋をば名越御所へ遣はし、それとなく様子をば探らせましたが、何等別條もないとの事。さりとて此たびの渡海は、彼の、「前生は醫王山の長老云々」といふ夢想を信じてとのみも受取りがたい。時も時、例の結城朝光の一條このかた、將軍家と執權義時との間柄、面白

覺

からずといふ噂の立つた折柄とて、何か將軍家に不思議の企あるやにも、言ひ觸らすげに聞き及びました。義時は所勞にて、いまだに引籠り中の事でもあり、かた〳〵、ようせぬと、此噂にどんな花實が結ぶまいものでもなく、痛う心にかゝりまする。よもやとは思へども、前將軍賴家をば、あの比企能員が教唆し、謀反を企てさせし前例もあることなれば、油斷はならず。……入道どの、此事に附いての所存をば、どうぞ腹藏なう聞かせて下され。

はッ。成程、御新造の唐船の儀に附きましては或ひは種々けしからぬ事共を申し觸らす輩もござるやに承はり及びましたなれど、何がさて、將軍家に限り、決してさやうな粗忽の御企など遊ばされう筈はござりませぬ。恐存によりますれば、これは只、例の風雅のお嗜好より、宋國の文物を深くも愛で喜ばせられまする折柄、

彼の陳和卿が不思議の儀を申し出でましたる爲いよ〳〵御景慕の念が募り、遂に御渡海をおぼし立たれましたに過ぎますまいと存じまする。現に、名越の濱御殿に、ことしお建添へ遊ばされた一構へは、まだ拜觀はいたしませぬが、表がゝりから、内のお飾り、御器具、御調度の末までも、專ら唐風を學ばせられたお物數奇と、やら承はりをりまする。それこれ、思ひ合せますれば、これは只異國ぶりを御一覽遊ばしたさのお思ひ立に過ぎまいやうに存ぜられまする。とは申せ、御意の如く、折あしく執權相州は引籠り中、かてゝ加へて泉、和田の殘黨などが諸所に潜伏し、隙もあらば乘ぜんと窺ひ居るやに聞えまする折柄なれば、將軍家の御外遊は、民心動搖のもとゐ、天下の亂端とも存ぜられまする。此儀は、遮つてお留めあらせらるゝが宜しうござる。我々が申せばこそなれ、上お口づから、改めて御異見あらば、御孝心深き將軍家ゆゑ、必ずおとゞまり遊ばされませう。なれば、此儀は、強ちお懸念にも及びますまいが、それよりも聊か心がゝりに存ぜられまするは、禪師君のお上でござる。

尼　禪師とは公曉の事でござるか?

覺　はッ。(ト頭をさげて思入あって)餘りに手の裏を返すが如き御殊勝さが、中々に心元なう存ぜられまする。一旦御猶子にならせられた上にての御出家ゆゑ、一段と御未練が深うもござらうに、生得御發明なれば、御父上はじめ御兄弟お二方までも御横死の事悉く御承知にて、つい此間までは、深く當將軍家をお怨みにおぼしめさるゝやに承りをりました。最前お見受け申す所、お言葉は御殊勝なれど、何となう殺氣を帶ばせられた御眼中。(トいひて、しばらく間をおき、思入あって)やはり、あの君は、以前の通り、京師に留めおか

尼　せらるゝが、双方のお爲めかと存ぜられまする。

ト此間尼公は大分不興げの體であつたが、やがて氣を變へて、靜かに、冷かに

それはちと取越苦勞ではござるまいかの？　あの目のきつさは、爭はれぬ鎭西八郎どのゝ血統のせいであらう。又歯に衣きせず、たれが憎いの、彼れが怨めしいのと口外するは、幼少からの持前。癇症も、無遠慮も、あの頼家をば生寫しの我儘。子供心の正直と見るのが當然。・・・

トいひかけて暫く言葉をとぎらせ、思入あつて

あれを京師から呼び戻したのを、わらはが愛着ゆゑとのみ思ふ者もありげなれど、まことは、あゝして京師に手離しておいたなら、いつまたあの一幡や千壽のやうに、野心のともがらに煽てられ、守立てられて、其まきぞへとなり、・・・どんな淺ましい最期を・・・・

トいひかけて、聲をうるませ

せめて、あれ一人なりと・・・・

トいひさし、俄に萬感胸に迫つたといふ風に、我知らずむせび泣しさうになつたが、きつと自ら制して、忽ちまに落着いた調子に戻つて

どうか滿足に人と爲らせたいと思ふばかりでござる。・・・・したが、只今の心ぞへは、ゆめ〱おろそかには聞きませぬ。必ず油斷なう氣を附けませうわいのう。

トいひ了り、やがてさりげなく横を向きて窃かに涙を拭ふ。入道もわざとさしうつむきて、目をそらしてゐる。

第二場
名越濱御殿

正面は名越の濱御殿の別棟にて、小一の東の端へさしいでゝゐる一構への心にて、やゝ上手寄に少し斜に、三間

四方(高足の二重)は、法隆寺の夢殿の様式に更に唐風を加味したる六角形の一堂、鎌倉時代の建物としては、全く破格違例の建造物。堂内は、すべて磚を敷詰めたれど、處々に御座疊并びに圓座の設けあり。四方とも折廻して同じく磚を敷詰たる入側、石の高欄附、土臺には石を疊み正面にも左右の側面にも、同じく石の高欄附きたる石の階段。

上手は、同じく磚を敷詰めたる廊下を渡りて正殿の方へ通ずる心にて、上手の奥に純然たる寢殿造りの一端見えそこの妻戸を開閉して人物出入することとあり。

正面の奥及び下手の奥は、此小山の極端の心にて、枝振面白き磯馴ひよろ松七八本越しに、遙かに由比が濱の白帆を浮べたる地平線と白雲を漂はせたる青空だけが見える。下手のやゝ前寄には濱邊への降り口ありて、こゝより人物屢々出入する。上手の舞臺ゐは、山の裾と叢り生へるひよろ松とにて見切られ、下手もほゞ同様。

前の場と同日。ほゞ同時刻

こゝに下手の濱邊への降り口より奥のばに、若き侍女甲乙二人、下げ髪、小袿姿にて後ろ向に立ちて、濱邊の方を見おろしてゐる。堂上、下手のやゝ奥、御座疊近くには實朝の御臺所(二十二三)下げ髪、小袿、緋袴にて、柱によりて立ち、同じく濱の方を見てゐる體。其下側面の石の階段の下には局繪の浦(三十位)下げ髪、小袿にて立つてをり、同じく濱の方を見てゐる。

遠くで木遣りのやうな大勢の掛聲が、或ひは高く、或ひは低く、聞える。

繪浦 これ〳〵、ちつとは動きさうに見えるかいの?

甲 (ふりかへりて) いえ〳〵、まだちつとも動きませぬ。

乙 (向ふ向きのまゝで) あれ〳〵、少しは動きましたやうでござります。

甲 (乙に) 何の、まだちつとも動きやしませんわいな。

乙 (力なげに、甲に) あれほど大勢の人の力で、どうしてマア動きませんのでござりませうなア。……おゝ、しんど!

ト侍女甲乙は、草臥れたといふこなしありて松の根がたに休らふ。此以前繪の浦は石の階段を上りて、御臺所のうしろに膝まづき

綸　憚りながら、しばらく御休息遊ばしませ。中々御早速には動きさうにもござりませぬ程に。

ト これにて御臺所は徐かに御座臺の上に住ふ。綸の浦は其下手よき處に圓座を敷きて住ふ。

御臺　ほんに、不思議な事もあるものぢやのう。船にもこそよれ、名人陳和卿の手に成つたアノ唐船が、どうしてマア浮ばぬのであらう。けふは人夫をば二倍にして、上御自身にてお指圖まで遊ばすのに、何の效もないといふのは、不思議なことぢやのう。

ト 此内、濱邊の掛聲聞えなくなる。

綸　はじめから動かずばまだしもでござりますれど、今朝がた御人夫を增させられました間際には、つい二三間も水際へおりたとやら承はりましたに、晝過からは、たんだ二三尺さへも動かぬとはげふなことでござりまする。

ト 御臺所心配げの思入あつて

御　以前は、何事にも、おほどかであらせられた我夫ぢやに、此春、あの結城朝光を補任のことにて、執權の義時と、ついぞマア例のないお言葉爭ひがあつてこのかた、お氣むづかしうならせられ、政道をも餘所になされて、只奥殿にばかり御閉居あそばし、いと痛う御不興げに見えさせられたる折ふし、あの陳和卿が不思議の言上がお氣に叶うて、一旦御機嫌がなほつたものを又ぞろ此船の事でみけしきわるく、慰め申さうにも附穗がなく、心を痛めてをりましたところ先夜、圖らずも久かたぶりにて、和田入道の參入——京師から、つい此間下つたとの事——其夜は夜もすがらお物がたり。どうやらマア少しはお心がお慰みなされたやうぢや。

綸　では、あのお方がアノ和田左衞門の尉さまのお二男で、御謀反の時に御出家なされました朝盛さまとやらでござりますか？

御　あい。今は實阿彌陀佛と名乘つて、もう久しう京師ずまひ。幼少から我君のお氣に入り。お文通だけは、ついぞ中絶れたことがないとやら聞きました。

ト此以前、侍女甲乙は又立上つて頻りに濱の方を見おろしてゐたが、此時戻つて來て

甲　申しあげまする。御休息と見えまして、人夫一同陸の方へ引上げました。

乙　上様は、わらは衆にお太刀をお持たせ遊ばし、實阿彌どのと御一しよに、如何にも御不興さうに、浪打際をお歩ひ遊ばされてゞござります。

御　まア心がゝりなことぢや。檜の浦、そなた、御様子を見て來てたもれ。

檜　かしこまりました。

ト檜の浦は御臺所に會釋して、石の階段をおり、下手の降り口よりおりて行く。侍女甲　は石の階段を上りて、下手によろしく住ふ。

此時、上手の廊下を渡りて、老女日の岡(六十以上)下げ髪小桂にて出で來り、堂内に入りて御臺所に會釋し、よろしく圓座の上に住ふ。

御　おゝ、日の岡か? 此中は不加減ぢやと聞きましたが、もうおこたりましたかいの?

日岡　ありがたい御意にござりまする。もはや常に復しましてござりまする。……さて、今日は、ちと折入つて申しあげねばなりませぬ儀がござりまして……

トいひかけて侍女へ思入。御臺所察して、侍女らを見返り

御　用があらば呼びませう。そちたちは、暫くあちらへ。

甲、乙　ハア。

ト侍女甲乙は上手の廊下を渡りて入る。

御　折入つて話といふは?

月　餘の儀でもござりませぬ。やはり此たびの御渡海に……(ト四下へこなしあつて)附きましてゞござ

りますが、此儀に附きまして、先頃以來、世上にてはいろ〳〵の取沙汰、けしからぬ事を申し觸らす者もござりまする。御前さまには、最早お聞及びにござりまするか？

御　けしからぬことゝは？

日　噂によりますれば、上様には、豫て仙洞御所とお謀じ合せの儀がござりまして、不日事を擧げさせられまする御結構。されば、彼の御渡海云云は、畢竟只一時　當の敵の目をくらまし、油斷さするための御計略に過ぎぬなぞと申し傳へをりまする。

御　ま、思ひもよらぬ噂！　して其當の敵といふのは？

日　執權相模守どのをお憎しみ遊ばされてのお企ちやと申しまする。

ト　これには御臺所思案の思入よろしくありて

御　さういへば、此春以來、相州は所勞をいひたて今以て出仕の模様なく、又我君よりも、ついぞ只一度のお見舞をさへも下されたことが無い。とはいへ、義時は、切つても切れぬ尼御臺のお骨肉ゆゑ、どう考へても、さうしたお企などのあり得よう筈はない。

日　さ、たれしもさうは存じまするものゝ、昨夜はからず其風説の種とも證據ともなりましたことを承はりました。これは御前は、とうにお聞及びの儀かとも存じまする。すなはち（ト聲をひそめて）たしか四年も前のお事とやら、仙洞御所からお歌合せの一卷を下しおかれました折に、其お返しごとに「大君の勅をかしこみ父母に、心はわくとも人にいはめやも。」また「山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心われあらめやも」云々とよませられて、窃かに彼の方さまへ、獻らせられましたのは、取りも直さず仙洞御所への御誓約、御謀反のお企ちやなぞと申し觸ら

しをりまする。とりわけ、昨今は此浮說かしましく、中には、御新造の唐船は、不意に京方の或方ざまを此鎌倉へ迎へ參らせうための御用意ぢやなぞと申しまする。さういふ噂が原かあらぬか、二三日前の眞夜中過、何者かゞあのお船へ放火せんず手配りをいたしましたを、幸ひ和田入道が早くも聞知り、此事を言上し、人々仰せを承はり、嚴重に見張をいたしましたゆゑ、事なう濟んだとか申しまする。……御臺さまには、此事をば、どう御判斷遊ばしまする。

ト御臺所思入あつて

御　其お歌は覺えがある。したが、仙洞御所のお使ひは、いつも兄上中納言どの、其お歌の折とても、同じく兄上がお取次。もしそれが果して一大事の御誓約でゞもあるならば、わらはなぞにはお秘しもあるべきぢやに、あの折何氣なうお聞かせ遊ばしたのを思ひ出せば、さうしたお歌ぢやとも思はれぬが、とにかく、浮說の立つたは大きな不祥。どうぞして取鎮めたいものぢやのう。

ト心配の思入。

日　今一つ不審なは、あの唐船の動きませぬこと。これにもどうやら、何か仔細がありさうに存ぜられまする。

御　さ、わらはもそれが心がゝりで……

トいひかける。此時下手降り口より局綸の浦登り來りて、すぐに階段を登りて下手に住ひ、會釋する。

おゝ、待ちかねました。

綸　さぞお待ちかねでござりましつらう。上樣にはどう遊ばされましてやら、あれから程なく人夫には、お暇賜はり、すぐにも御還御遊ばすげに見えましたる處、ひよんな事が起りました。

日　なに、ひよんな事とは？

綸　いつぞやお聞きに達しましたアノ評判の物狂ひ

が、丁度御還御のお伴先へ、どこからやら、ひよつこりと出て參り、いつもの通り、踊りますやら、歌ひますやら、わけもなう狂ひまするのを、上樣には甚うお興じ遊ばしまして、いつにない麗しい御機嫌にて、程なうこれへ、狂女をばお伴ひ遊ばしまする。

御　又例のお慈悲心からであらう。いつぞや三浦岬でも、孤兒を御覧じて、御自身で御介抱遊ばしたことがある。

綸　いえ〳〵、けふのやうな不思議な麗しいみけしきは、ついぞ近ごろお見上げ申したとがござりませぬ。御自身で狂女を相手に御問答遊ばすのみか、童たちに仰せつけられ、手拍手やら、小唄やらで、さらぬだに狂ひまする物狂ひを、尙と狂はせてお興じ遊ばしてゞござりまする。

日　それはマアけふなことおや。どう遊ばされての御機嫌やら?

ト此內、綸の浦は聞耳を立て〻

綸　あ、もし、人音が聞えまする。お歸り遊ばしたのでござりませう。

ト此時、下手降り口より、將軍實朝(二十六歲)白綾の小袖狩衣、指貫、立烏帽子にて、太刀を童、犬王(十三四)に持たせ先に立ち、和田朝盛入道實阿彌陀佛(三十位)鼠の服、墨染の衣、其の後に附きて登り來る。日の岡と綸の浦とは急ぎ席を離れて、階下に出迎へ、御臺所もまた席を離れて、階上に立ちて迎へ、實朝はすぐに堂內に入りて、上手の御座疊に着坐し、御臺は元の席に、實阿彌は下手の圓座に、其他それ〴〵よろしく住ふ。

實朝　(機嫌よげに)のう御臺、けふは珍らしいものを見ましたわい。狂人にも、いろ〳〵の差別あつて「陰氣衰ふる者は癲と爲り、陽氣衰ふる者は狂となる」などゝ、豫て物の本で讀んではゐたが、只今觀た物狂ひのやうに、是非もなく、我を忘れ、思ひ上つて、樂しげに世を經る者とは思ひも及ばなんだ。聞けば、戀人に死に別れた深い

悲みが原の亂心ぢやといふに、其死別れの辛さをも、わびしさをも、つゆ聊か知らぬげの浮れごゝろ。おのれをさる明神の使はしめと思ひ込み、およそ此世の事、心に任せざるはないと信じ、又其戀人は、只今龍宮の主となつて、珊瑚玳瑁の臺に座し、明月の夜毎に彼女を待つゆゑいつにても海へさへ行けば、乙姫どのとは相嫁同士ぢやなぞと、世に類ひもなう嬉しげに狂ひをる。餘人はそれを見て嘲み笑ふが、予はけふとなつて、はじめて人の心の作用の不思議さをば知つたわい。(ト思入あつて)位は人臣を極め、榮華は身に餘ると見えても、思ひは篝火を以て煎らるゝよりも苦しく、憂ひは閉込めた扃鐍の奥秘いよりも深いことがある。

ト いひさして感慨に堪へぬ思入、悵然として向うを見つめてゐる。

和田　仰せではございますが、あの狂女とても、さすがに、時々は我に返つて、笑ひもせず、物も申さず、只打ふさいでのみ居りまするともあればいかにも悲しさうに泣きいだし、聞くも哀れな鄙唄を歌ふこともあるげにござりまする。畢竟悲喜哀歡は糾交うた繩も同樣、生ある間はまぬかれがたく、亂れ果てた性根にも、忘れかねるものと相見えまする。

ト此時、ずつと下手にて狂女の唄を歌ふ聲聞える。

あれ〳〵、あの悲しげな歌聲をお聞き遊ばされませ。あれがやはり、あの狂女の聲でござりまする。

ト これにて實朝思入あつて

實　いかさまのう。最前とは……聲も……調子も……

ト此内、悲しげに歌ふ狂女の聲はだん〳〵間近くなりて其唄一ぱいに、狂女は、下手の登り口より「ハーレー、ヤーレー」といふ囃子言葉を、如何にも力なげに歌ひつつ登り來る。其唄

へエエエ、けふの日も、エエエ、暮れエたアれどオ、エヤノサー、エエエ、わがアとのはア、ヤアレ、マアだ見えぬ。ハーレ！ ヤーレ！

ト狂女は頭髪の前だけを無雑作に角髪のやうに取上げ、後ろ髪はみだりがはしく脊に、肩に垂れ、手製と見ゆる金紙張の烏帽子を戴き、しどけなく引摺りたる一重衣の上に古び破れたる水干を被て、脊に大きな幣を負ひ、右手には柄に白き幣の付たる大きな柄杓やうの物――形は柄杓なれど、其両面には銀紙と金紙とを巴形に貼りて、其中央に穴をあけ、打振れば、そこより紅、白、金、銀の小さき紙片の出づるもの――を持ち、胸には鉦を掛け、左手には撞木を持つてゐる。

狂女の後よりは、童猿王（十四五）と侍士二人――狂女を警衛しつゝ附いて来りし體にて――徐かに登り来る。

狂女は、登り了るや否や、急に泣顔になつて、あはたゞしく庭上を二三度あちこちと駈け廻つたが、トド

狂女　あゝ、昏い！ 昏い！ どうすべい！ あんとすべい！ どうしたらよかつぺい！ あゝ、どつちらもこつちらも真昏くなつちまつたどア！ 真昏くなつちまつたどア！

ト身もだえして、地上に泣倒れる。これにて犬王及び侍士が立寄りて介抱しようとする。ト手荒く拂ひのくることありて、身をふるはせて慟哭する。實朝これを見やりて

實　あゝ、すてゝおけ、すてゝおけ。（トつくづく見て）いかさま、實阿弥が申す通り、時々は憑物が離るゝと見ゆるわい。あゝ、憫然なことぢや。何とかして慰めてやりたいものぢや。こりや誰れかある？ 鼓を持て。鼓でも鳴らいたなら、大かた又、最前のやうに、浮立ちをるであらう。

トこれにて猿王心得て、上手の廊下を渡りて入る。此内御臺はじめ局らは狂女を見てよろしく思入あり。

御　見れば、顔かたちも醜うはないのに、てもマア憫然な！

ト此時、和田實阿弥、狂女のもだえ歎くのを見かねるといふ思入ありて、階段を下りて、徐かに狂女の傍に立寄

和り　こりや〳〵！　泣くな〳〵！　もうよい〳〵　もうよい。もはや夜がくわつと明けたわい。どこもかしこも、龍宮のやうに明るうなつたぞよ。さアさ、いつものやうに、龍宮の唄を歌うたがよい。わしが音頭を取つてやらう。さアさア、もうよい、もうよい。

ト小兒をあやすやうに慰める。此内に狂女は泣き止んだが、佝逡面して、戀しさうに、又怨めしさうに、あちこちを見廻してゐる。此の時猿王、上手より鼓を持ち來る。

ト實朝見て

實　さ、打て〳〵。

トこれにて猿王、階下に膝まづきて、鼓調べに掛かる。

あ、音頭といへば、（ト御臺所及び局を見返り）成程、實阿彌は、在俗の昔は、和田一黨中はおろか、鎌倉中にも竝ぶ者のなかつた舞の上手であつたのう。朝盛の風流、三郎義秀の大力。……あゝ

御　あの頃が思ひ出さるゝわい！　わらはが初めて其舞振を見ましたのは、小壺の濱の御遊の折でござりました。義秀が大鮫を手取にいたしましたのも、あの折でござりましたなア。

實　（うなづきながら、實阿彌に）さアさア、實阿彌、音頭。（トわらは犬王を見返りて）そちも歌へ〳〵。

トこれにて、犬王かしこまりて、太刀を局輪の浦に渡して階段の上まで進み出でゝ、よろしく住ふ。此内、猿王次第に鼓を打進む。實阿彌は庭の中啓にて拍子を取りつつ、歌ひはじめる。よき頃に犬王も一しよになりて歌ふ

其唄

〽佛は常に在せども、現ならぬぞ哀れなる。人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見えたまふ。

なまいだ〳〵〳〵！

〽大品般若は春の水、罪障氷と解けぬ

實

れば、萬法空寂の波立ちて、眞如の岸にぞ打寄する。
なまいだ〳〵！

「佛は」の唄の末頃より狂女次第に聞耳を立て、顏の表情が變つて來る。

實阿彌。序に、舞へ〳〵。

トこれにて實阿彌は「大品般若云々」の唄の中頃より立上りて、犬王の唄、猿王の鼓に合せて、中啓を使ひて、徐かに、品よく、今様まがひの舞を舞ふ。狂女次第に唆かされたる思入にて起ち上り、實阿彌の後ろに引添うておひ〳〵舞振を眞似つゝうろつく。されど例のやうには浮立たぬ體。これを見て、實阿彌は、犬王、猿王によろしく思入にて心得さすることとありて、狂女が胸に掛けたる鉦と手に持てる撞木とを取りて、倶に之を叩きつゝ左の唄を、初めは自ら歌ひ、後には、犬王に歌はせて、次第に間早に、空也念佛式に面白く踊り廻る。猿王も之に合せて鼓を打つ。

へ遊びをせんとや生れけむ。戯れせんとや生れけむ。遊ぶ子供の聲聞けば我身さへこそゆるがるれ。
なまいだ〳〵！
へ十七八は二度そろか？ 枯木に花が咲きそろかよの！
なまいだ〳〵！

「十七八は」より犬王も唄ひながらも一しよになりて、實阿彌に絡み、姿をかしく踊り廻る。

ト狂女も、例の如く笑顔になりて浮れ出し、これも一しよになりて踊り狂ふ。トゞ實阿彌と犬王とを手荒く突きのけ、追ひ拂ひ、一人となり、次の唄を自ら歌ひつゝ、柄杓を振り、實阿彌が打鳴らす鉦に合せて、紅、白、金、銀の紙片を八方に散亂せしめつゝ、踊り廻る。此内犬王は元の席に戻り、猿王も鼓の手を止める。

へ龍宮は近いなア、乙姫御が鞴踏むのが聞ゆる。そのたゝら何と踏む？
たゝら〳〵と踏みまする。

ト歌ひ了ると、俄に嚴格に威儀をつくろひて

狂　さア〳〵！　清めは濟んだぞよ、濟んだぞよ。此福祿自在のお柄杓さまで救うて取らす。さア〳〵！　おれにくッついてさへ來れば龍宮へ行かるゝ。お告げぢやぞ。疑ふな。疑ふな。

ト むづかしい顏をして睨め廻したが、又忽ち晴々した笑ひ顏になつて

へ龍宮の波の間で、十八小姫が黃金撒く。其黃金何と撒く？……

ト歌ひつゝ、踊りつゝ、柄杓を振り廻しつゝ、飜ち飛ぶが如くに下手へと駈けおりて行く。實阿彌は「それ！あれを留められよ」と侍士らへこなし。侍士二人は猿王と共に狂女の後を追うて下手へ入る。

此以前、狂女が踊り狂ふ間に、實朝は、座右の文卷を引寄せて、硯箱を開き、料紙に歌を書きつくることあり。既に此時はそれを書き了りをり、じつと狂女の後ろ影を見送りながら、認めたる歌を御坐所に示し

實　これを御覽ぜ。

ト渡す。

御　(それを受取りて讀む)「世の中は、鏡に映る影なれやあるにもあらず、無きにもあらず。」……「うしと見るも、樂しと見るも、鏡なす、人の心の、わざならぬかは。」(ト中音に讀み了りて、實朝に) これは？

ト不審の思入。

實　はて、當座の口ずさみぢや。(ト何氣なげにいひながら、實阿彌に) やい、實阿彌、おのしの昨夜の法談が、今やう〳〵少しばかり分りかけたわい。成程、心妄動を離るれば、一切の境界滅し、心妄起すれば、又忽ちに境界生ず。……あの歌を讀んで見い。

和　はゝア。

ト實阿彌階下へ進む。實朝こなしにて歌を實阿彌に見せよと指圖する。綸の浦、御坐所より歌を受取りて實阿彌

和　に讀す。

（受取りて、中音に讀む）「世の中は鏡に映(うつ)る影なれやあるにもあらず、無きにもあらず。」……「うしと見るも、樂しと見るも、鏡なす、人の心のわざならぬかは。」……まことに、これぞ、六塵の境界窮竟(くきやう)無念の御觀念。

ト いひつゝ實朝の面(おもて)を見上げ、思入ありて、又口の中にて歌を讀み返す。此間實朝は、只じつと向うを見てをり獨語のやうに

實　とはいふものゝ（トいひかけて歎息し）別に正氣でゐては……

ト いひかける、其聲の哀しげなのに皆々驚きて

皆　えゝ？

ト 覺えず實朝の顏を見る。實朝氣をかへて

實　狂女めは、をかしい奴ぢやわい！　はゝはゝは はゝ！

ト わざとらしく笑ふ。皆々顏を見合せてよろしく思入。

第三幕

第一場

由比が濱邊

正面（平舞臺）は一面の沙地、今の豆腐川以北から遠く相模灘を見やりたる由比が濱邊の景。中央より上手の奥へかけて、やゝ斜(はす)に、極(ごく)ゆるい勾配(こうばい)の沙の小丘(こをか)。其小丘の向うは、やゝ急勾配に低くなつてゐるらしく、人物が丘を越えると、程なく姿が見えなくなる。隨つて其丘の向うには、やゝ遠く離れて、大きな、幾本かの松が生えてゐるが、幹(みき)も中程から下は見えない。沙の丘の手前は、松の幾本も生えてゐる岨(そば)の裾で見切られ、人物はしばしば此裾と丘との間を往來する。

沙の丘のだら〱低(ひく)になつた波打際には、上手に二艘、又ずつと前（舞臺の中央寄）に更に一艘、漁船(ぎよせん)が引上げてある。其中ずつと前の一艘は、今がた引上げたばかりらしく、漁夫(れうし)甲、乙、丙、三人で、漁具(ぎよぐ)をかたづけたり、取りおろしたりしてゐる。奧の二艘は、すぐ波打際に在る。

正面は、中央から下手へ、ぐつとしやくつて、所謂長汀曲浦式の波打際の景。其波打際のしやくり込んだ部分は下手(舞臺端近く)の藁葺小屋で隠れて見えぬが、下手の奥に、遠く黒く突き出てゐる飯島が崎は其同じ波打際の一部なのである。

大きな磯馴松の蔭に、やゝ斜に上手へ向いて建てられてある右の藁葺小屋は、漁夫の納屋で、前面は入妻形に葺きおろし、其妻下の三角形の部分と奥の側面とだけを古船板で張り、其他は全くの掘立式、柱も貫も丸太を繩で無雜作に縛つて間に合せた明け放し。入口には竹を横たへて古蓆が掛けてあつたのだが、竹がはづれたので蓆がずり落ち、内部がよく見える。内部には、大きな餌籠が三四箇と夥しい太繩と古びた菅笠などがみだりがはしく投込んである。人物は此納屋の後ろをも通れば、其前をも往來する。又向う(揚幕)からも來る。納屋の下手の手前は、上手と同じく、松の生えた畝の裾で見切られてゐる。

時は陰暦八月十六夜。もう月は出てゐる筈なれど、地平線には、斑らに墨を流したやうな亂雲が漂つてゐるのであたりは薄暗い。

漁甲　なアに、不漁だアからつて、かまふことアねえだよ。今夜は大漁祝ひもおんなじだ。待てば甘露の日和ッちふだがふんとだア。早く行つて、お祝ひ酒にありつくべい。

漁乙　初手は二百五十人かゝつたつて、これッぱつちもいごかなかつたッけが、きんによふ、手が變つたら、二百人で以て、ずる／＼といごきやアがつたてのは、不思議ぢやアねえか?

漁丙　そこが將軍さまの御威光だんべいよ。あんにしろ、めでたくお船おろしが濟んだてんで、おらつちにまでお酒を下さるてのは有りがていこんだ。さぞ將軍さまも嬉しかんべい。

漁甲　嬉しかんべい。十幾日といふもの、氣イ揉抜かつしやつた揚句だア。今夜は、あの船の上で、夜通しお月見だッちふが、どうか降らねばいゝがなア。

漁丙　ちつと雨げづいたなア。

漁甲　いんにや、晴れべいよ。

漁乙　漁乙下手の奥を見やりて

もうおッぱじまつたと見えて、どうだ、あの篝火は？

漁丙　まるで祭りのやうだなア。

ト三人は喋舌りながら、漁具の始末をしてゐる。とゝへ向う（揚幕）より、序幕に出た狂女の母、人を尋ねる思入にて、あくせくと早足に出で來り、すぐに納屋前へ來て漁夫らを見て

母親　もし、もうし！　若しか此邊を年の若い女が、らッちくもねえ姿イして、あたけ廻つちやア居らなかつたとかね？……おゝ、にしや五郎又どんだね！　おらんとこの娘を見なさらなかつたかね？

漁甲　おゝ、阿母か？　また娘ッ子に突迯げられたかね？

母　さよでござりやす。（ト泣き聲になりて）きんによふけふは、とりわき劍吞な日でござりやすだから人ォ頼んで、ふん縛つて、納屋へ突込めておきやしたとが、あんとして繩アぶッ切つたとか、ちつとの間に飛び出しやして、ばつたり行ぎがたが知れやしねえでござりやす。濱邊へは、たしかにおりてつたちふでござりやすだけれど、それから先は、だアれも知らねえといはつしやりやす。……（ト泣きながら）とう〳〵……口癖の……龍宮さへい行ぎをつたかも知れやしねえ。……しよんないことになッちまひやした。

トしやくりあげて泣く。

漁甲　そいつア氣の毒なこんだね。けんど、まだ宵のうちだアから、海へ入りさうにすりやア、だれかゞゐて、目つけさうなもんだ。まアそんなに氣イおとさねえがいゝ。どこにかゐべいよ。

漁乙　さうだ〳〵。まア〳〵泣きッさんな、泣きッさんな。氣ちげえてものは、存外小才覺の働くもんだから、容易にや怪我アしねえもんだ。にしに捉まるのがうるせえので、どこかの叢に不伏

って、隠ねてゐるかも知んねえ。

母　さういへア、此間も、木の梢に突登つてゐて、わしらを馬鹿にした事がござりやす。

漁乙　あの三本松あたりにゐるかも知んねえ。どうせ歸り路だ。そけいらを同志に捜して見べい。

漁甲　ぢや阿母、どうしに來さつせい。まだうッ死んだときまッちまッたわけぢやアねえだよ。泣きッさんな〳〵。

ト三人楽ぜりふにて母親を慰めつゝ、先に立ち、漁具を持ちて、丘の上手へと歩む。母親は泣く〳〵、その後に附いて、共に三艘の船の纜を巡りて、丘を登り、向うへ降り、やがて見えずなる。

トしばらく空舞臺。浪の音。

ト上手の奥より、納屋の後ろを通りて、北條義時の郎黨大場の權平太、佐越の次郎、其時代風の一種の覆面を目ばかり殘して、深くかぶり、其上へ烏帽子をかぶり、黒ずんだ色の直垂、袴を着し、腰刀を佩び、うそ〳〵と出て來り、舞臺の中央へ來ると、あたりへこなしあつて

權　まだ見えんやうでござるな。

次　されば。もう來られさうなもんぢやに。

權　（下手の奥を見て）あゝ、あれだ。めざましい篝火だ。甲板にも船側にも夥しい唐燈籠を掛けられたとやら聞いたが、成程、まるで星が降りたやうだ。

ト此時遠く（下手の奥から）嚠喨たる雅樂の音色が聞えはじめる。

ト向う（揚幕）より深見の三郎次郎、同じく覆面に烏帽子黒ずんだ色の直垂、袴、腰刀にて出で來り、一寸此方を透して見て、うなづき、やゝ足早に進みて、小聲にて

深見　御兩所でござるな。

トこれにて、前の二人も透して見て

權　深見どのでござるか？

ト三人よろしく四下へこなしあつて、間近く寄りこぞること。

深　（小聲にて）何事もござらなんだか？

次　いや、何も別に。

深　さて、何もかも手ちがひと相成つて、ほとゞお船

ゝろしも済んだ上は、もはやぺん〳〵としてはをられませんぞ。と申して、迂濶に手を下す時は、忽ちお館のお身の上に係はりまする。それゆゑ、先頃も申した通り……

ト いひかけて次郎に「四下へ氣を附けよ」とこなし。これにて次郎は上手、下手をあちこちと歩きつゝ、見張をする。納屋の中をも覗きて見ることあり。

これは彼の仁の手を借りるに如くことはないと存じ、先夜再び別當院を訪ひ、我々が當推量に聊か輪を掛け、只今のうちに禍ひの根を絶たねときには、どのやうな一大事に及ぶやも圖られぬと、さながら其一大事が既に鼻の先に相迫つてをるかのやうに申して、教唆し、さて、其禍ひの根を除いた手は、取りも直さず、一天下の覇權を掌握する手ぢやと、上手に暗示かしておいたれば、勇を恃み、血氣に逸る禪師の事ゆゑ、おそらくは、今夜のお船遊びなぞを好い機會に

……

ト いひかけて、更に聲をひそめ、耳元に口を寄せて、何事かをさゝやく。此以前、次郎も、見張を了りて、傍近く來てをり、此密話を聞くこと。

次　では……

權　我々兩人は……

深　(何小聲にて)時宜によつては、助太刀をなさい。しかし其身姿では、だれが、どうして、目ざとく認めまいものでもないによつて、……

ト いひかけて思案の思入。此時次郎は納屋の方を見返り

次　丁度あれに好いものがござる。

ト 納屋の方へ進みて、内より蓑笠を二人分取出して來て

幸ひと今宵は雨もよひのやうでもござれば、夜船の漁夫らしく見せかけ……

深　(うなづきて)至極の思ひ附。……が、結城朝光が同伴のことゆゑ、うつかり手は下されませんぞ。(ト更に小聲にて)助太刀とは申せ、成るべくならば、彼の人もろとも……

トいひかけて、あとは耳打。

な。……、でござるによつて、彼の人が手を下さぬうちは、決して……御無用でござるぞ。

トあとは思入とこなしにて呑込ませる。

次、權　心得ましてござる。

ト深見は納屋の前を下手へ、二人は沙の丘を登りて上手の奥へ、蓑笠を手に持ちつゝ、入る。

又暫く空舞臺。浪の音。此間、雅樂は、斷えたり、續いたりしてゐる。

雲がだん／＼動きはじめて、いつの間にか大分高く昇つてゐる月が、時々顔を見せる。

ト納屋の中の大きな餌籠が一箇、おのづところ／＼と前の方へ轉げ出した。

ト見るうちに、其中から例の狂女が、例の通りの嬉しさうな笑ひ顔をして、そろ／＼、雲が這ひ出すやうにして這ひ出す。けふは角髪風に取りあげた額ひ髪も悉く解けてしまひ、金紙烏帽子や脊中の御幣や水干やは、何處へか落して來たらしく、又柄杓も鉦も持つてはをらぬ。狂女は、這ひ出してしまふと、まるで跳ね上るやうに突立つて、にやりと齒を露出して、前後左右を顧りにきよろ／＼と見廻しながら、忽ち飛ぶやうに、間近の漁船の傍へ駈け寄り、つと舷に手を掛けて、ひらり船の中へ躍り込んで、すぐに舳先まで駈けおり、そこに突立つて、じつと海の方をながめた。かと思ふ間もなく、例の陽氣な聲で、左の田舍唄を歌ひはじめる。

〽おらになア逢ひたくば、由比が濱邊の小砂利まじりの荒砂もつて來て……

……

ト此以前、狂女が丁度舷へ手をを掛けた時分に、上手の幟の裾に添って、壺裝束に被衣をかぶつた一人の年若らしい上﨟が、人目を忍ぶ風情で出て來て、最初は下手の奥と向う(揚幕)の方とへばかり目を注いで、トゞ下手奥の方へ行きかけたが、今狂女が歌ひ出したので、忽ち振返り、被衣をかゝげあげて狂女を見た。これは、女に假裝した公曉なのである。懐ろに忍ばせた小さ刀の柄がちらり見える。

ト狂女は、急に身を翻して、舳先から飛びおり

〽脊戸の小窓にばら／＼投げやれ……

ト歌ひながら、其向うの漁船に飛び移り

〽小雨ふるかと……

ト歌ふうちに、ひらり第三の船の舳先をくゞつて、忽ち砂山の橋を渡り

〽出て逢ほぞえ。

ト歌ひつゝ、やがて見えなくなつたが、同時に例のとんきよな笑ひ聲の餘韻だけが、だん〳〵遠くなつて聞える。此以前、公興は、一度は狂女に氣を取られてゐたが、「春戸の小窓に」と歌ひ出した頃には、もう目を又も下手へ轉じて、あちこち見やりながら、再びそろ〳〵と奥の方へ行きかけた。其途端に、狂女の歌ふ聲が遠くなつたので、ふつと見返り、狂女の姿が忽ち見えなくなつたので一寸驚いた思入、懸念げに、つか〳〵と走り戻り、三艘の船の艫を足早に巡つて、砂山を駈け登り、向ふを見おろし、やがて何物かを見附けたらしく、其まゝそこを駈けおりて、これも姿が見えなくなる。

ト向ふ(揚幕)より、侍士二人松炬を持ちて先に立ち、實朝は陳和卿(宋人の服装)及び結城上總の介朝光(四十七歳)とを随へ、尙其後ろには童犬王、猿王附添ひ、出で來り、次の白をいひ〳〵徐かに本舞臺へ來り、一寸立ちどまり、沖の方を詠むること。

陳和　折角のお催しでござるのに、折わるい亂雲で、明月が曇りました。殘り多いことでござる。

實　いや〳〵、仲秋の無月もまた一興ぢや。しかし風が出て來たによつて、今に吹き拂ふであらう。

ト下手の奥を見やり一思入ありて

わざ〳〵造らせたあの船を、徒らに沙上に朽ち果てさせねばならぬかと、殘念に思うたに、まともかくも、水際まではおりたが、いよ〳〵浮ぶか、浮ばぬかは、明日にならねば分らぬ。あゝ、船さへも、世に有りふれた物の方が、心安いのう！

朝光　今日の御模様では、明日は滯りなく、浮びませう。御安心遊ばされませ。

實　どうかさうしたいものぢや。（トいつたが、急に思ひ出したやうに）御臺はじめ實阿彌らが待ちわびてゐるであらう。

ト松炬を持てる侍士へこなし。侍士歩みはじめる。皆々つゞく。やがて主從は納屋の後ろへと進み入つてしまふ。

途端に、公曉、尙かつぎをかぶつたまゝで、再び砂山の頂きへ姿を現はす。半身びしよぬれになつてゐて、頻りに逃げようと踠く狂女をば、其左の小脇に掻い込むやうにして引立てながら、丁度今砂山の上まで登つたのであつたが、ふと實朝主從の後ろ影を認めたらしく、きつと思入。忽ち抱へてゐた狂女を突離し、一さんに砂山を平地へと走りおりた。

けれども、實朝主從は、もう大分遠くへ行つてしまつたらしい。

公曉は「あゝ殘念なことをした!」といふ思入。しばらく躊躇してゐたが、又忽ち決心して、懷ろの小さ刀の目くぎを濕し、再び實朝主從の後を追はんとするかの如く、三四歩、下手の奧を目がけて行きかける。

此以前、狂女は再び砂山のかなたへ駈けおりていつてしまふ。

此時、深見三郎次郎が、又も下手の納屋の前から出で來る。

公曉はちらとそれを見て、急ぎ被衣を深くし、何氣なき態をして最も手前の漁船の舳先の方へ歩み戻り、月を詠めてゐるかのやうに裝ふ。

ト深見も、同時に公曉に目を附けてそろ〳〵同じ方角へと進む。

公曉は、餘儀なく、第二の船の方へ波打際を傳つて行く。途端に砂山の向ふへ先刻の權平太と次郎とが、菅笠姿にて半身を現はす。此時、公曉は、第二の船の舷に添うて、其艫の方へ廻りかけてゐたが、之を見ると、急に身を翻して、元來し蔭へ一さんに走り入つて、忽ちのうちに姿を隱す。

此時、雲が散り盡して、月が冴え渡る。

權平太と次郎とは、つか〳〵と砂山をおりて、深見の傍近く走り寄りて、何事か言はうとする。深見は手早く之を制して、尙も公曉の後ろ影を見送つてゐる。

浪の音。暫く斷絶えてゐた嚠喨たる雅樂の音色が、又も高々と聞えはじめる。

第二場

唐船の甲板

正面（平舞臺上手寄り五間の間）は、唐船の甲板約三分の一以上、すなはち艫寄りの部分だけを見たる心。手前（舞臺端）も、ずつと奥も左右の舷の心にて、一面に堅固な大格子造りの欄干を取り附けあり。ずつと上手には方形の粧飾門とも、異風の花表とも見ゆる巨大なる一種の屏障様の物——所謂媽公——を取附けありて、其附近には笹龍膽の定紋附きたる幕を張り渡し、ずつと下手（約三間の間）には、平甲板より約四尺程高くなりをれる一間半の艫甲板ありて、これにも大格子の欄干は取り附けあり。平甲板よりは左右二ケ所の階子によりて登るやうになりをり、更に其艫甲板より、第二の階子架けられありて更に又約五尺ほども登りたる處に巨大なる艫櫓の聳えをれる體。此艫櫓の平たき、方形の頂きには、胸壁めいた欄干が一面に取附けてある。平甲板より艫甲板に登る左右二ケ所の階子に挾まれて、巨大なる艫帆柱の腰だけが見え、其頂き近くより吊りおろしてあるらしき夥しき綱具には、種々の色彩の唐風の旗に笹龍膽の紋を染め出したるものを幾つともなく結び附けてあり。又其附近には上手同様、笹龍膽の紋附きたる幕を張りて、處々引絞りてあり。

艫帆柱から約一間程上手には、左右（前と奥）の舷に添うて、よき處に、太き圓柱二本、其二本の間にもやゝ細き圓柱二本、それより上手媽公近くまでの間にも、正面の手前に二本、又奥の方に二本同じく太き圓柱を立て、唐風に和様を折衷したる大屋根を設け、蔀格子を釣り、翠簾を捲き上げ、軒下、舷其他便宜の處々に幾つともなく、唐風の美しき金燈籠を吊してあり。人物は、すべて上手媽公の下に張り渡したる幕をくゞり、媽公の中央を出入する。媽公の向うは、又一段低くなりをれる心にて人物は、いつも、幕をくゞると共に半身だけを現はすことになる。階下を上下するのである。

正面の奥は、遙かに相模灘を見やりたる由比が濱邊の景色なのだが、沖の地平線ばかりが見えて、陸は少しも見えず、勿論、波打際などは見えない。十六夜の月は、既に高く昇り、散り雲もないのだが、正面は西の方に當る故、海波が蒼茫と月夜らしく煙つてゐるばかりで、月其物は見えない。星があちこちに燦々してゐて、所謂星月夜の風情がいちじるしい。

嚠喨たる雅樂は、わざと極低調に奏でられ、時々休むこともある。

こゝに平甲板の中央よき處に御座疊が据ゑてあつて、そこに實朝すまひ、其うしろに犬王、猿王、又其少し上手

前寄りに又一つ御座所、其うしろに局日の間、同じく給の濡。實朝の下手、やゝ奥にさがりて實阿彌、其少し下手、前の方に結城朝光、又ずつと前、――實朝と實阿彌との眞中邊――に陳和卿。右一同の下手、圓柱外に侍士二人。侍女甲乙丙三人は、盃盤間に周旋して、今正に宴闌なる體。侍女らは、ずつと前、御臺所よりは上手に當る所にすまふ。

實朝の座右にも、陳和卿の座右にも文臺が据ゑてあり、短册、色紙、硯箱等が載せてある。

朝光は、手に色紙を持ちて、陳和卿が作りたる詩を讀み畢り、御臺所は、短册を手に取りて、實朝の作りたる歌を、今丁度讀まんとしてゐる體。

時刻は、前の場のやゝ一時間程後の心。

御　(短册をながめつゝ)「うつゝとも、夢とも知らぬ世にしあれば、有りとて有りと、賴むべきかは。」

ト中音に讀み了りて、局らと顏を見合せ、感念の思入あつて

まアこれは! こよひの明月を御賞美のお歌かと存じましたに。‥‥往る日のお歌といひ、此お歌といひ‥‥

朝光　トいひかけて、日の間へ短册を渡すこと。朝光、それを取做すやうに

いや、其お歌は、和卿が最前申上げし舊時の作とやらの意をば酌ませられての、當座のおすさみかと存ぜられまする。和卿のは、五十六言、お歌は、只僅かに三十一文字に過ぎませねど、歸する所の趣旨は同じく、結句、文字に疎き私共に取りましては、和歌の方が解し易く、其お歌を承はりて、はじめて詩の眞意をも得會いたしまするとにござりまする。

實　いや／＼。行き着く處は一つであつても、詩と歌とでは、其道中に、いはゞ數里の隔てがある。三十一文字では、迚も絶句ほどの感慨さへも叙べられぬわい。予も久しう此道を嗜好んで見たが、所詮、和歌は、女子か、隱遁者か、大宮人かの假初の玩びぢや。大丈夫の心を慰ける料にはならん。(ト歎息しつゝ)それはさうと、和卿が最

陳

前の作を讀むにつけて、思ひ出すは……「平生生と死と夢と。三者劣優無し」といふ蘇東坡の句ぢや。いかさま、天地をば只一軒の家ぢやとも思うたら、東西南北もなく、故郷も、他國もなく、生くるも、死ぬるも、夢を見るも、、すべて同じとも思はれて、悲しいも嬉しいもないであらう。

お言葉ではござるが、畢竟、詩は志しをいふに過ぎませぬゆゑ、常に悟り盡したやうなことを歌うてをりました蘇軾とても、やはり中年までは、彼の讒譖の恨みや遷謫の悲みをば忘れかねで、兎角酒盃の力を借りて、憂ひをば掃うたらしうござる。所詮、彼れのやうな不羈の大才は、他力に寄縋ることをも厭ひますれば、又自ら欺くにも忍びかねまするゆゑ、身心悉く脱落して全くの超絶境に達しましたるまでは、やはり彼の樂天同樣、始終酒盃に親み「酔うて陶々たり」を歌うてゐたのでござりまする。

賓

あゝ、併しながら、酔ふことの出來た彼れば幸福であつたわい！　予は曾ぞまだ酔ふといふことの味を知らぬ。

ト悵然としたる思入。局らは顔を見合せて、氣の毒げの思入。

日岡

御前の酒を召しあがりませぬのは、御生得でいらせられまする。結句、お身體の爲には、重疊の御儀かと存じまする。

賓

いや、酒ばかりの事ではない。世上には、けふ見たアノ狂女のやうに、喜びに酔うて我を忘れ是非を忘れ、浮れ興じて、此世を送る者もあるのぢや。或ひは又、小兒の戯れ同然の遊びにさへ酔うて、樂しう、面白う暮らしをる者もあるのぢや。

和田

成程、さう仰せられますれば、京師人などの月雪花に浮れ、或ひは管絃、舞樂、或ひは猿樂、

田楽、今様、白拍子、其他、世の藝能の有る限りを興じ玩びまする有様は、一かどの酔態とも相見えまする。

朝　生來武骨なるそれがしの如きは、もとより風雅の道なんどに酔うた覺えとてはござりませねども、其以前、戰場に臨みましては、屢〻敵身方の腥き血汐の臭ひに、恰も酔うたやうな心持に相成つたことがござりまする。あれらは、合戰に酔うたと申さうか？　殺伐に酔うたと申さうか？　げに、上の仰せの如く、酔ふは酒ばかりではござりませぬわい。

實　何にでも、酔ふことの出來る者は幸福ぢや。

陳　所謂三昧に入ると申すのは、物の酔の至極した境ひでござる。

實　いや、話がついむづかしうなつたわい。御臺は嘸退屈なされたであらう。宵とはちがひ、雲が散つて、松間の明月は、また一しほの風情であらう。われらにはおかまひなく、あまり深けぬうちに、濱邊の景色を詠めながら、局らを伴うて、お歸りあれ。われらは、此人々を相手に、今暫らくの間、このまゝ、和漢、今昔の物語がしてゐたい。……和卿も老年のことぢや。遠慮には及ばぬ。心任せに退席しやれ。

ト　これにて御臺所は局らへ思入ありて、實朝に向ひ

御　さやうなれば、おゆるされませ。お先へ退出まする。

日　では、私共も……

江　御臺所さまのお伴をいたしまして……

實　おゝ、往け〳〵。（ト侍士に向ひて）そちたちは警護いたせ。

侍二　はゝア。

ト陳和卿も形を改めて

實　しからば手前も、これにて御免を蒙りまする。

陳　太儀であつた。明日また會はうぞ。

トこれにて、御臺、局、侍女らは上手の幕をかゝげて、馬公の彼方へ降りてゆく。つゞいて陳和卿も入る。侍士二人もつゞいて降りてゆく。

ト實朝は更に少しく寛ぎたる體にて

實　血汐に醉ふと申した朝光の今の一言は、深う予の心に沁みたわい。さういへば、彼の唐土周末の戰亂、漢楚、吳魏蜀の爭覇、南北兩朝の紛爭近くば隋唐の興亡、いづれも皆人間が血に醉うた餘りの狂暴沙汰ぢや。いかさま、醉へばこそ親子骨肉の見さかひもない。恩愛も、尊卑も、道理不道理もない。我國の保元、平治の昔、近くば平家滅亡の跡を思ふにつけても、血に醉うた人間の怖しさ、淺ましさが想ひやらるゝ！　あゝ、いつの世となつたら、此狂癲めいた亂醉が醒め果つることであらう！のう、實阿彌。諸佛の靈妙な敎へも此亂醉を醒ますことが出來ぬか？　八萬何千とやらの有難い經文も、此亂醉を醒ます呪文とはならぬか？　あゝ、人間は、いつまで血に醉はうとするのぢや！

和　殺生を五戒の第一とも立てられました大慈悲の佛門に身を置き、上下萬人の師とも、鑑とも見做されまするアノ南都北嶺の法師らさへ、修羅鬪諍を專らといたしまする今日でござります。彼の栂の尾の老上人は、若し今時の佛法が、まことの佛道であるならば、世に佛法ほどあしい敎へはないと申されたとやら承はりましたが、まことに其通りでござりまする。さらぬだに今の世の凡夫は、其機根日に衰へ、六根常に粗動して、精進觀法に能堪へませねば、迚もむねむねしいアノ天台の敎旨などでは、世を救ふことは思ひも寄りませぬ。彼の黑谷の上人が、空也上人の蹤みに倣うて、他力易行の念佛宗を唱へはじめられたには、深い仔細のあることゝ存じまする。

實　あゝ、せめておのしが信仰する其念佛宗とやらでも、そのまゝ受け納れることが出來たらばなアー　さなくば、祖父や叔父たちや父兄のやうに、血に醉ふことでも出來たならば‥‥

ト いひかけて、じつと向うを見て、獨語のやうに

あゝ、幾たびも機會はあつたに！

ト 過去を追懷するらしく、歎息して

今とてもまだ機會はあるが‥‥

ト これにて、朝光、實阿彌思はず實朝の顏を見る。實朝忽ち氣を變へて

其機會はたび／＼あるが、‥‥いまだ道に入る機緣が熟せぬと見えて、出家しようといふ氣にもなれぬ。‥‥あゝ、つい話が滅入つてしまうた。これからは、また朝光の昔話でも聞かう。父二位どのゝ御行實について、此間聞いたアノ殘りを聞かしてくれ。

ト 此時、上手より侍士一人出で來り

侍　申し上げます。只今尼御臺さまよりのお使者でござりまして、上總の介さまを御急用でお召にござりまする。

朝　なに、私を急にお召にござるとな？

侍　はッ、さやうにござりまする。

朝　心得申した。只今すぐさま參上と御申し下され‥‥御前、憚りながら、お聞かせ遊ばされたやうの儀にござりますれば。

實　何事かは知らぬが、お待ちかねであらう。早う參つたがよい。

朝　御免下されませう。

ト 朝光、侍士と共に去る。實朝、猿王へこなしにて「杯盤を撤せしめよ」と命ずる猿王上手へ入る。やがて侍士二人、猿王と共に入來り、杯盤を撤しつゝ、共に再び上手へ入る。席には實朝、實阿彌、犬王の三人だけ殘る。

實　のう、實阿彌。おのしの父や兄が死んでしまうてからは、おれが、ほとゝ胸襟を開いて語ること

の出來る者は、此鎌倉の營中では、あの朝光の外にはないわい。莊司重忠の爲人は、おれは幼少であつたゆゑ、善うは覺えてはをらんが、恐らく朝光は、其武勇と正直とに於ては、彼れに匹敵し、思慮に於ては、彼れに優り、先君の殊恩を忘れぬ誠忠に至つては、決しておのしの亡父にも劣らぬ者ぢやに、先年の輕擧合期せずしてあの朝光までも敵にしたのは、義盛が一世の不覺であつたのう。返す〴〵も殘念なことをしたのう。二つには、あの三浦の義村の如き、煮え切らぬ不覺人を一味としたのが手ぬかりであつた。……が、それも、これも、先刻いうた通り血に醉ふてとの出來ぬおれの心の罪かも知れぬ。……と思うても、やつぱり其氣にはなれぬわい。

ト歎息の思入。實阿彌は、此述懐の間に、覺えずも齊涙して、平伏してゐたが、此時顔をあげて

かたじけない其お言葉を、草葉の蔭で承はりましたなら、亡き父兄どもが、嘸かし感涙にむせびまするでござりませう。（トいひつゝ涙を拭ひつゝ）成るべくは、刃に衂らず、無辜を傷けず、公明正大なる手段を以て、撥亂反正の大功を成ぜさせられたい御本心を、豫て承はりをりながら、私の意趣を忍びかねて、粗忽に事を起し、お膝元を騒がし、忽ち滅亡を招きましたは、父兄共の自業自得でござりまするのに、彼等死して後は、共に語るに足る者、上總の介どの只一人とまで仰せ下されまする御高恩、有りがた涙に掻暮れまするばかりでござりまする。……しかしながら、昨夜も愚意をし申述べました通り、御出船に先だち、一應は御内意を假の執權陸奥守にお洩し遊ばされては如何にござりませう？二位さま御在世の頃より御三代の今日に亙り、功勞群を抜き、忠勤一日も怠ることなく、思慮

深く、識見高く、學問に於ては、京師にも比類少き程の仁にござりますれば、お爲にならぬと存ぜば、毛頭おとゞめは申すまじく、又無論他言などは仕りますまい。朝光をもお召連れ御内定遊ばしましたからは、いよ／＼何人かに後事をお託し遊ばさるゝが、當然の御儀かと存じまする。

實　はて、昨夜もいうた通り、おれは世を捨てるといはぬまでも、ともかくも此鎌倉をば捨てようといふのぢや。捨てた土地に、言ひ殘す後事も何も有りはせぬわい。……（ト冷然として）あゝ、廣元か！　先刻、おれは醉ふことが出來ぬというたが、あの仁はまた、初めから、醉ふまい／＼と用心して、絶えず酒毒を解する藥を離さぬ男ぢや。譬へを造營に取らば、あゝした仁は、既に地形が出來、棟上げも濟み、いよ／＼間毎の造作、飾り附にかゝつたとなると、無うては叶はぬが、御料の神木をも斫り倒し、千古の靈場をも取毀つて、新規の土木を起さうといふには、役に立つ男でない。敵にも身方にもならぬ男ぢや。鎌倉草創の諸功臣のうち、彼れの始終恙ないのを見ても、大概は分りさうなものぢや。

ト此時、猿王又上手より入來り

猿　はッ。只今、尼御臺さま、お潜行にて、こなたへお渡り遊ばされまするとの、内々のお知らせにござります。

實　なに、母上が？（ト思入あつて）内々のお知らせとあつて見れば（ト實阿彌に向ひ）一同へ申し渡し、とくと心得させ、暫らく席を避けさせておくりやれ。

和　かしこまりました。

實　（犬王に）そちも退れ。……（猿王に）お入りあらば、御案内申せ。

犬、猿　かしこまりました。

ト皆々上手へ入る。

實朝只一人殘りて、默然と思入。例の雅樂が、又も喨々として聞え、浪の音が高い。やがて實朝は、徐かに御座畳を離れて、奥の舷へと歩み、欄干により、無言にて正面の沖を見てゐる。

ト正面の奥が、颯と電光の射したやうに輝いたと見る間もなく、小さい月かと思ふ程の一つの星が、半空を横切つて、矢の走るやうに、下手から上手へ斜に隕落する。

實朝それを見送って

實　あゝ、又星がすべつたわい！

ト此内、尼御臺、古代紫の俗衣を着し、淺黄の裹頭、手に水晶の珠數を掛け、女童を隨へ、猿王に案内せられて上手より登り來る。實朝之を見て、急ぎ席に戻り、うや〳〵しく尼公を上手の御座畳に請じつゝ

尼　(兩手をつきて) これは〳〵、思ひがけませぬお渡り。略儀御免下されませう。此中は、聊か風氣のやうにも聞きましたが、それも早速に本復し、心づくしと聞いた此船の船おろしも、どうやら一わたりは濟んださうで、わらはも蔭ながら喜ばしう思うてをりました。

實　かたじけなう存じまする。

尼　(女童に)用があらば呼ぶ。あちへ。

トこれにて、實朝も猿王へ思入。猿王も女童も、共に會釋して、上手へ入る。

尼　(思入あって) さて、卒爾に訪問れまして、何事かと不審せられましつらうが、餘の儀ではござらぬ。船おろしも略滯りなう濟んだゆゑに、豫て思し立たれたる通り、結城朝光に奉行せさせ、六十餘輩を召連れ、日ならず渡唐せらるゝやに聞き及びましたが、全くの事でござるか？

實　船だに進みますれば、月の中にもと存じまする。此儀は、明日にも改めて御意得まする心得にござりましたに、夜中といひ、わざ〳〵の御光臨、恐れ入りましてござりまする。

尼　さすれば、あれ程くり返し、止めましたをも承引めされず？

實　御意に戻りまするは、憚り多うござりますれど醫王山參詣の儀は、此身一つの爲ではなく、ひとへに源家永代の結緣の爲にござりますれば、まげて御許容下されたうござる。

尼　いや、身一つの爲とならば格別。源家一統の爲にとあらば、名代を差遣はされても濟みさうなもの。（ト少し間を置きて）今、天下泰平のやうなれども、まだ／＼野心を抱くともがら、諸國に少からずして、隙だにあれば、それに乘じて事を擧げんとする當節柄に、輕々しい渡唐沙汰は、わらはつや／＼其意を得ませぬ。これは何か、深い仔細のあることと察しまする。其仔細によつては止めはしませぬ。どうぞそれを聞かせて下され。

實　母上のお言葉なれども、此たびの思ひ立は、全く信仰の外でござりませぬ。

尼　いやのう、此母にお包みあるには及ばぬ。まことの事をいうて下され。

實　はて、何をおかくし申しませうぞ？

尼　（思入あつて）さうおしやれば言ひませうか、（ト少し膝を進めて）こんどの渡唐については、世上一般に、けしからぬ風説をば申し觸らしをりまするぞよ。日頃は思慮分別あるやからさへも、今は半信半疑の有樣。おことは、其事をば、お知りやつてゞござるか？

實　（うなづきて）さ、ほのかには聞き及びましたが、もとより根も葉もなく、たはいもないこと。よもや、母上には、それをば事實とは遊ばしますまい。

尼　さ、わらはゝ信とは思ひませぬ。なれども、此春の行きがゝりこのかた、おことゝ義時との仲たがひは、たが目にも明白。さらぬだに、和田一族の事あつてからは、相州一家は、將軍家と折あひあしと、世上一般に噂の折から、思ひよ

ちぬこんどの催し。人々いよ〳〵不審を抱く處へ、かてゝ加へて（ト聲をひそめて）彼の三首の歌を證據に、京方と謀じ合せて、北條一家を討滅さん陰謀がおはすなんどゝ……

トいひかける。これにて、實朝何事かいはんとする。尼公はそれを止めて

はて、わらはゝ信じませぬぞ。……わらはゝ信ぜねども……専らの風說。……證據が證據ゆゑ、上手に事を捌かぬときは、一大事となりまするぞ。（ト形を改めて）これ、故二位どのは、なにゆゑに屢〻任官を辭しめされたか？……何ゆゑに禁裡とは遠ざかり、攝關のともがらに虛位を擁かせ、名を棄てゝ實を取り、天下一統の基ゐを此鎌倉にて開かれましたぞ？ いふまでもなく、公家政治の頼みがたいのを、とうにお見拔あつたればこそ。これは今までも、幾たびとなう話したこと。よもや、京方の煽動に乘つて、今更逆戻りの公武合體などを思ひ立ちめされうとは思ひませぬ。……なれども……（トいひかけて、思入ありて）どこにか火がなうては、立たぬ煙とも見ゆるアノ三首の歌……

トいひかけるを止めて

實　母上、しばらく。……成程、あの三首の歌は、仙洞御所への、私のお返事には相違なけれど、それは今よりは四年も前、只かたじけなき御內勅に對し奉つて、二心なき由を誓ひ申したまでの事。若し公武の兵を合せて、事を擧げん下心などがありましたなら、和田一族が謀叛の折になんで手を束ねて見てをりませうぞ？ 其お疑ひはお晴し下さりませ。

尼　いや、わらはゝ疑ひませぬ。……が、既にかうした浮說が立ち、人皆疑ひ危ぶむからは、其危ぶみが原となつて、如何なる珍事が起るやも圖りがたく、或ひは又、其珍事をば機會にして、諸

國にも謀叛起り、かてゝ加へて、日頃さうした騷動をば待ちに待つ京方から、不意に大軍が攻め下りでもしようものなら、故二位どのが五十年の間、血の涙、血の汗を絞られた大業も、水の泡同然・・・・

ト いひさして、聲をうるませ

源氏も・・北條も・・・・滅亡は目前。・・・・よしさうまでにはならずとも、内輪の騷動はまぬかれがたく、わらはの心勞は限り知られぬ。・・・・

ト 暫らく言葉を繼ぎかねてゐたが、やがて

わらはの賴みでござる。こんどの渡唐は思ひとまつて下され。

實 母上の仰せながら、それがしに異心があらば兎も角も。氣もない上は、其御心勞には及ばぬ筈。かりに、此浮說の爲に、何事か起るにせい、根なし事であるからは、立所に鎭まりませう。尚御懸念とあらば、明日義時に會うて委曲を盡し疑惑の根を絶たせませう。何卒渡唐の儀は御許容下されませ。

尼 さア、切なる望みぢやといふことを、察しませぬではなけれど・・・・

ト いひさして默つてる。實朝やゝ氣色ばみて

實 すりや母上には、異心のないのを御承知あつても、尚おゆるし下されませぬか？

ト 怨めしげにいふ。

尼 （しづかに）只今は許されませぬ。せめて世繼の出來るまでは。

實 せめて世繼のと仰せあるは、船たびの危さなどをおぼしめされての御懸念か？ 若し然らんには、萬一の場合には、丁度京師よりお召し戻しのアノ公曉をば、跡目に直されても、相濟みませう。・・・母上、なにとぞ此望みだけは、お許し下され。

ト 實朝思ひ入つたる體にて、頭をさげ、兩手をつきて願

む。尼公俯向いて默つてゐる。實朝は感慨を忍びかねたる思入にて、向うを見つめて、獨語のやうに

六十餘州の總追捕使といふのも名ばかり！　天下の將軍といふのも名ばかり！　たまく思ひ立つた渡宋の望みさへも遂げられぬか！

ト慨然たる思入。尼公も慨然として、初めは俯目がちに、極靜かに

尼　其述懐は尤も至極。……おことの心中は、よう察してをりまする。……頼家が自暴自棄のアノ晩年を思ふにつけ、……おことの此頃の心の中を推量せぬではなけれども……一天下の重きを以て任ぜねばならぬ身は――匹夫匹婦の夢にも知らぬ――辛さやわびしさを忍ばねばなりませぬ。……

トいひつゝ徐かに膝を進めて

これ、打明けていやらずとも……母でござる。

トいふや否や、こらへかねて、はらくと落涙して

何の察せいでをりましよぞいの？　おことは、世をあぢきなう思ふの餘り、家をも、母をも、皇國をも振捨てゝ、唐土に身を置いて、餘生を送る所存であらうか？

ト涙聲にていふ。實朝は慨然と俯向いたまゝ、默つてゐる。

將軍の名はあれど、政道の大方は執權の手心任せ、いはゞ飾り物に過ぎぬ境涯。闊達な心から日頃それをあぢきなう思うてゐやるとは、とうに見抜いてはゐるものゝ、こゝが今いうた一天下の重きに任ずる身の勤めぢや。今改めていふ事を、これ、どうぞ、善う聞分けて下され。

トこれにて實朝こらへかねて泣くこと。

成程、あの義時の振舞が、折々目に餘つたこともあらう。身贔屓ゆゑに此母が、庇ふとばかり思ひめされたこともあらう。が、こゝが政道の是非ないところ。……父御のお隱れなされてからは、名をも實をも兼ね具へて、將軍職に任ぜ

ん者の、又とあらう筈なければ、權力いつしか執權の手に移つたるが、……中頃わらはが思うたには、……いつまでも父御の志しを繼ぎ、源氏の血統で此國を治めうとならば、將軍と執權とは、長く此姿で並べ存じ、朝野內外の怨みの的となる事は、すべて執權に掌らせ、爲損じあるも、將軍に累ひの及ばぬやうにと思案を定め、わざと義時が專斷をも大目に見たる其大根は……油斷のならぬ京方の底企をば、……見拔いたからのこと。なれば、義時が我意我儘と見ゆることも、畢竟は國家の爲、又二つにはおことの爲おぢや。こゝの道理を善うわきまへて、どうぞ渡唐をば思ひとまつて下され。

トしみ〴〵といふ。實朝は俯頭を垂れたまゝで、慨然たる思入にて

實　名と實とを能う兼ねぬ不肖の身がくちをしうござりまする！

尼

トいつたきりで、暫くは無言で泣いてゐたが、やがて顏をあげて、

ひとへに源家の血統をば絕すまいための御懸念ならば、どうぞアノ公曉をば代りになされて、それがしには曲げてお暇を下されませ。

ト怨言らしくいふ。これにて尼御臺も顏を上げ、やゝ氣色ばみて

これは異なことをいはるゝ。公曉は旣に出家までさせたるもの。今更何しに還俗させ……

トいひかけて、思入あつて

あれを先頃呼び戻いたのをば、只管わらはの愛着ゆゑおぢやとでも思うてかは知りませぬが、これには仔細のあること。京師に手離しておくときは、いつ、何者に敎唆されて、其手先に使はるゝやも知れぬゆゑおぢや。これも同じく家の爲又おことの爲を思うての事。……

トいひさして、じつと思入あつて

あの義時を只一圖に快からずおぼすのも、畢竟は、胸の底に、さうした僻み心があつて、爲を思うての沙汰をも、身贔屓、依怙贔屓とばかりおぼすからぢや。……これ、これほど事を分けていうても、聞入れてはたもらぬか？　思ひとどまられませぬか？　家よりも、國よりも、一身が大事でござるか？

ト實朝、俯うつむいたまゝで、默つてゐる。尼御臺は、之を見てむつとした思入。儼然となりて

すりや、是非に及ばぬ。國家の大義には易へられませぬ。

ト手強く、きつぱりと言つて、實朝の返辭を俟つ。ト實朝も、――蒼白な――面をあげて、きつと尼御臺の顏を見る。しばらくは、双方じつと沈痛に、目を見合ひたるまゝにて、無言。濤の音が高く聞える。上手では又、雅樂を――低く淋しく――奏しはじめた。

ト尼御臺は、忽ち又はら〱と落涙し、しばらくは物をいひかねてゐたが、やがて漸く自ら制して

如何に天下の爲とはいへ、……いつまで此苦をば受けませうぞ？……此上はわらはも覺悟をきはめまする。……賴家、大姫にも死に別れ、一幡や千壽の淺ましい死目をも見て、つく〲世をあぢきなう思うてをつたに、今またおことにまで見棄てられ、生別れの辛さばかりか、いやましに亂れゆく世を見るかと思へば、……此末いつまで、何を賴みに、浮世まじらひをしませうぞ？　命永ければ恥多く、悔多し。あまり永う生き過ぎました！　もう何もいひませぬ。心任せにしめさるがよい。さらばでござる。南無……彌陀佛！　彌陀佛！

ト淚を拭ひつゝ靜かに珠數をつまぐり、席を立ち、すぐに上手へ行かうとする。

實　あゝ、もし、暫く……母上、ま、暫くお待ち下され。

尼　お止めあるは……

實 ト立ちながら振返りて、靜かに

今いうた事を承引あつてか？

それほどに仰せある上は、‥‥是非に及びませぬ。‥‥思ひとゞまりまする。

トこれにて尼公は徐かに元の席に戻りて、言葉靜かに

尼 それ聞いて安堵しました。善う聞分けて下された。嬉しうござる。禮をいひまする。‥‥

トいつて、實朝の顔をじつと見て

とはいへ、常日頃、唐土（もろこし）の風俗（ふり）をお好（す）きやつてかりそめの器具調度をさへ彼方（かなた）のを用ひめさるゝ程、それほどになづかしがつてゐめされたものを、家國（いへくに）の爲とはいへ、その一つの望みをすら遂げさせぬかと思へば、此胸が切なうござる。

ト涙をぬぐふ。

實 （冷靜に）そのお氣づかひは御無用でござります。何事にも執着（しふちやく）のない身は、かういふ折には心安うござります。

尼 したが、一旦表向きに觸れいだされ、既に船おろし祝ひまでも濟んだものを、只このまゝにもされまいが、その始末はどうしたもの？

實 いや、それも御懸念には及びませぬ。幸ひまだ波打際まで下（お）りたばかり、十分には浮ばぬ船。何としても深みへは出ぬと言ひ觸らし、このまゝ、いつまでも濱邊に棄ておき、朽ちさせませう。

トこれにて、尼御臺はうなづき

尼 では、それも安心。‥‥（ト思入あつて）すれば、明（あ）日（す）又改めて會ひませう。

ト席を立ちかけたが、悄然としてゐる實朝の姿を見て立ちかねて

あゝ、しかし、どうやらおことをば、生埋（いきうめ）にでもするやうな心地（こゝち）がして‥‥

トいひさして、又しばらく落涙の體。實朝は只默然としてゐる。やがて、實朝は座右の[illegible]路を取つて振鳴らす。

ト上手より猿王出て來る。これにて、尼御臺は涙を押拭ひつゝ立つ。

實　御案內。

ト小聲にていふ。猿王心得て先に立ち、上手の幕をかゝげ上げる。尼御臺は改めて實朝へ目禮して、徐かに上手へと進む。實朝は席を離れ、幕ぎはまで送り、頭をさげ手を突き、敬禮しつゝ見送る。尼御臺は幕の內へ入る。猿王も從いて入る。

只ひとり殘りたる實朝は、やがて徐かに顏をあげ、立ちあがり、元の席近くへ戻つたが、座りもせず、立つたまゝで沖の方を詠めてをり、やゝあつて、徐かに下手へと進み、手前の階子を攀ぢて艫甲板に登り、檣帆柱の奥の舷の欄干に身を凭せて、何處を宛ともなしに沖の方を詠めてゐる。

ト上手の幕をかゝげて、和田實阿彌しづかに出て來り、此體を見て、懸念の思入。やがて階子の下まで進みつゝ上を見上げて、中音に

和　御前。……御前。

ト二度呼ぶ。これにて、實朝は欄干に凭れたまゝ、振返りて、しづかに

實　實阿彌か？……あゝ、丁度よかつた。今呼ばうと思うてゐたところぢや。月はよし、和ぎはよし、聊かの波さへ立たず、遙かの沖までが湖水のやうに見ゆる。四年以前、おのしたちと釣舟を浮べつゝ、月を賞したのも、丁度こんな晩であつたのう。こよひも小壺近くまで漕廻つて見たい。小艇をば下させておくりやれ。

和　はッ。かしこまりました。

實　しかし、水夫には及ばぬぞ。おのしとおれと只二人きりで乘るのぢや。

和　はッ。心得ました。

ト一寸不審げの思入あつて、座を立ち、上手へ行かうとする。

實　こりや〳〵。

和　はッ。

ト又すまふ。

實　伶人どもに吩咐けて、萬秋樂を奏させい。

稠　はッ。かしこまりました。

ト實朝は、同じ立身のまゝにて、又沖の方を詠めてゐる。實阿彌は不審の思入にて、徐かに上手へと行きかける。

第三場　小壺の沖中

見渡す限り、前の方一面(平舞臺全部)は小壺の沖中の心。正面に見ゆる陸地(背景)は、小壺の沖中より遙かに由比が濱邊を見やりたる體にて、上手のずつと前寄には、磯馴れひよろ松を幾株となく描きたる飯島が崎が間近く黑々と突き出でゝをり、其の奥、今の豆腐川のあたりの處には、多くの漁家が朧げに見え、篝火處々に燃え、そこに、前の場の唐船の輪郭が——二本の帆柱には夥しく唐風の旗を飜し、無數の唐燈籠を吊したれど——距離遠ければ、黑々と見え、それより更に奥の方は、正面の中央へかけて、鎌倉材木座附近の港口の體にて、「數百艘の舟ども大津の浦の如くに集ひ」、又それよりも奥の方には「千萬字の宅、軒を並べて、大淀のわたりに異ならざる様」其家々の燈火と月の光りとにて、おぼろげながら見え、それより更に下手へかけては、人家は次第に疎らであるらしく見ゆれど、砂濱の廣々としたる體夜目にもいちじるしく、滑川、稻瀬川などの川口も、冴えたる月光にて銀色に光つて見え、尙其下手には稻村が崎が臥したる牛などのやうに突き出で、又其奥には江の島も見え、それより下手には、夜色蒼茫たる相摸灘。風は悉く和ぎ盡して、海面はまるで青疊を敷き連ねたるやう。冴えに冴えたる月は、もう大分西の方へ移り、今はずつと下手の空にて照つてゐる。飯島が崎の岩々には、銀波が靜かに打寄せてゐるのが見える。引汐らしい靜かな浪の音に遠く唐船の上にて奏しつゞくる慈鎭萬秋樂の限りもなく哀愁を帶んだ音色が冠さつて聞える。

時刻は前の場よりは、約一時間も經つた後。

こゝに沖中に、實朝と實阿彌と只二人きりを載せたる小艇が漂つてゐる。更に風がなく、浪が無いので、櫓をも櫂をも抛ちて、自然に漂ふまゝにしてゐたものらしい。が其小艇が、前記の景中に現はれいでた途端は、あはや實朝が舳先に立つて、海中に躍り入らんとした刹那である。實阿彌は駭きあわてゝ、今しも後ろから抱きとめてゐる。

和　こりや何となされまするぞ。あゝ、もし……御前！　御前！　どうなされましたぞ？

と實阿彌は、尚も振拂はうとする實朝をやう〳〵のことで抱きとめ、やつと船中に引きすえて、尚うしろから抱きながら、顔を覗き込みて

もし、お心が狂はせられましたか？　但しは御本性でござりますか？　或ひは世をはかなませられての御生害か？

トまでは一氣に言つたが、怺ちこらへかねて、はら〳〵と落涙し

御尤もでござります！　御無理とは思ひませぬ。お言葉次第で、わたくしも直にお伴をいたしまする。強ちお止め申すのではござりませぬ。只、お覺悟遊ばすに先だち、只一言、お別れのお言葉をば、下しおかれませ。もし！　もし！

ト泣きながらいふ。此間、實朝は惘然として默つてゐたが、此時漸く我に返りたる體にて、しづかに實阿彌を制し

實　もうよい、もうよい。大事ない〳〵。手を離せ。

トこれにて實阿彌は、尚不安さうな思入にて、抱いてゐた手を離し、泣きながらも油斷せず、實朝の樣子を見守つてゐる。實朝は十分冷靜の態度に戻つて

あゝゆるしてくれ。我ながらおぞましい振舞をした。もう決して懸念には及ばん。

靜かに座を改め、とり亂した姿を取りつくろひなどして　歎息しつゝ

船に乘るまでも、乘つてからも、決してこんな氣はなかつたのぢやが、今がたの述懐で、われとわが述懐に感動して、はじめて心の醉ひを覺え、つい女々しうなつてゐた處へ、冴え渡るア丿月の光り！　あの靜かな、奥秘い浪の色！　あゝ、月めがおれを誘ひをつたのぢや。魂ひがふとあこがれ出ようとしたのぢや。……さぞ驚いたであらう。堪忍してくれい。

トこれにて實阿彌はやゝ安心の思入。されど尚惘然とし

和

て頭を垂れてゐる。

これを思ふと、いつぞやのアノ狂女が、月の佳い晩となると、龍宮へ往くというて、ともすれば、浪間へ入らうとするとやら聞いたが、成程無理もないわい！

トこれにて實阿彌は、感慨に堪へかねたる思入にて

御述懐の餘りとは申しながら、狂女によそへさせられての其お言葉は、餘りに勿體なうござります。源家正嫡の將軍家、日本六十餘州の兵馬の頭領とはお名義ばかり。御政道の大事となつては何一つお心の儘にはならず。若しまた强ひて御意通りに遊ばさるれば、いつ、何處から、どんな毒手が下るやも圖られぬお身の上であるのみか、御母公さまへの御孝心から、たつた一つの御今生のお望みをさへも捨てさせられ ま す る。此世をばあぢきなうもおぼしめします筈。しかしながら、狂女は愚痴無智の極み、何一つ

實

辨へがなければこそ、自他をも顚倒し、前後をも忘じまする。御前は聰明叡智にましまし、自他を知らせらるゝことが深いゆゑに、それゆゑお身をも捨て、世をも捨てようと遊ばされまする。彼女と御前とが、どうして一つになりませうぞ？

ト涙を呑みつゝいふ。

（しづかに、冷かに）いや〳〵、生中に智慧があつて自他を知るといふことこそ、人間が身の不幸ぢや。よきにつけ、あしきにつけ、其裏や巣が見えすいて、何事にも、身や心が打込まれぬ。おれなぞは、今の世の不具者ぢや。父祖の志しを繼ぐことも出來ねば、西行の跡も追へず、蓮生が眞似も出來ぬ。酒色に耽らうとすれば、風雅が否み、和歌蹴鞠に忘れようと思うても、大望めが嘲りをる。血に醉ふことの出來ぬ胸には、不仁を敢てする勇氣もなく、生中の分別が邪魔

となつては、佛の道に入ることも叶はぬ。せめても、まだ見ぬ大世界の大自然の中に身を置いてと、天下の周遊を思ひ立つたも、今思へば、これも又一時の氣休め。大といふも、小といふも、つまりは人間の思ひなしぢや。斯うして小艇にちゞこまつて、濱近う見る月も、あの唐船を千萬里の波濤に浮べて、大海原で見る月も、本來の光りには變りのあらう筈もない。もう夙に死んでゐるのぢやと悟つたなら、自ら殺さうとするにも及ばず、未練らしう、さもしらしう味ひ殘した行樂を漁らうとするにも及ばぬ。今のおれのおぞましい振舞は、全くの出來心ぢや。もう決して二度とすることではないわい。

ト落ちついたる調子にていふ。此以前より艇は、波のまにまに、ゆるやかに漂うてゐる。此間、實阿彌は首を垂れ、折々涙を拭うてゐる。

和　(咽泣きながら) 御自身のお爲ではなく、天下萬民の爲をおぼしめされて、一旦はお心を許せられましたなれど、其仙洞御所とても、頼もしからず。さなくも、御母公様との御血緣は、切つても切れず。後ろ楯と遊ばさるゝ頼もし人は、一人もないゆゑ、不世出の御器量も、御大望も、行はせられう便宜もなく、只一時の、勿體もない置物、飾り物となつて、空しう老い朽ちさせられますかと思へば、無念至極にござりまする。せめても、親や兄どもが、輕卒に事を誤らなんだらと思ひ出さぬ日とてはござりませぬわい！

ト泣く。實朝は、いよ〳〵落ち着きたる體にて

實　はて、もう歎くには及ばぬ。只今の發作によつて、おれは却つて此胸が輕うなつた。もう死なうとも思はねば、生きてゐるのを辛いとも、死ぬるを怖ろしいとも思はぬ。しかしながら、此不思議な心境に入つたも、畢竟はおのしといふ心の友があればこそぢや。生前にさへ、おれの

心を知る者は、おのしの外にはないからは、死んだ後に、おれを正しう傳へてくれる者は、尙さら、おのしの外にはあるまい。おのしとおれとは（トいひかけて、俄に涙聲になつて）身は二つぢやが心は一つぢや。

トいひつゝ、實阿彌の手を堅く握りしめる。實阿彌は、何もえいはず、聲を放つて泣く。

此間、艇は、尙浪のまに〳〵、漂うてゐる。

萬秋樂の哀音は尙つゞいてゐる。

長谷寺邊のらしい梵鐘の音が、陸の方から聞えて來る。

ト下手より、二人が乘つてゐる小艇の前へ、一個の女の溺死體が流れて來る。──これは、例の狂女の死骸なのである。衣類は以前のまゝにて、仰向になり、笑ひ顔をしたまゝで、ゆるく靜かに漂うて來る。

實朝は、此間、どこを詠めるともなく、海面を見てゐたが、忽ち之れに目をとゞめ、やがて口早に

實 實阿彌！　實阿彌！

ト呼ぶ。泣き伏してゐた實阿彌は、急ぎ涙を押拭ひながら、

和 はッ。

ト顔をあげる。此時死骸は、すぐ舷の傍を、上手へと流れる。

實 あれを見い。あれは、たしかに、此間の物狂ひぢや。衣類に見覺えがある。水死をしたものと見ゆる。....止めい。早う止めい。

トこれにて實阿彌は、急ぎ櫂を取つて船を進め、既に一間餘も流れ過ぎたる死骸に追ひつきて、櫂にて之れをおさへ、忽ち舷へ引寄せる。

和 成程、仰せの如く、あの狂女めにござります。衣類もあの時のまゝでござります。ともかくも引上げまして、水を吐かせませう。

ト既に死骸に手をかけようとする。實朝止めゝ

實 いや〳〵、まて〳〵。（じつと死骸を見て）とうに事切れたと見ゆるのに、あゝ、さも嬉しさうな此笑み顔　龍宮へ到り着いたとでも思うてゐるのか!?　（ト暫く詠めてゐて）あゝ、迚も助かりさうにもないわい。

和　ではござりまするが、このまゝに押流しますのも、酷いやうに存ぜられます。

實　いや／＼。我に返らせたら、酷いわい。‥‥流してやれ、流してやれ。

トこれにて實阿彌、綱の手をゆるめる。死骸は波のまに／＼上手へと流れつゝ、やがて見えずなる。實朝立身にて、じつと其行くへを見送る。實阿彌もよろしく思入あつて、徐かに櫓を取直す。

淋しく悲しき萬秋樂は尚つゞいてゐる。

月はます／＼冴え渡つてゐる。

唐船の燈籠や篝火は、今は殆んど殘り少なに消えて、船の大きな、眞黒な輪郭が、更に物すごく際だち、さながら一種の巨大な怪鳥か何かのやうに見えてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第四幕

第一場

鎌倉御所中門廊

正面、中央より上手へかけて四間の間（常足の二重）は御所中門脇内侍ひの體にて、上手の奥よりやゝ斜に鍵の手に前へ折れてをり、一間毎に柱を立てたる緣板敷、其内面の周邊には上げ疊。折廻して廣緣附、蔀（上げ格子）は悉く引上げてあり。廣緣前、中央よき處に沓脱の低き臺あり。鍵の手に前へ折れたる部分は、悉く蔀をおろしある故、内部見えず。此内侍ひと直それに接する幅一間の築地との間には、目かくしの袖板塀あり。其下手、直線に二間の中門。其下手は、見える限り、築地。其前の方（下手の舞臺端）は別の間近き築地の一端。ずつと上手の前の方（舞臺端）は廐の建物にて見切られあり。其廐の軒に近く一本の紅梅の老木、今既に三分の花を綻けたり。

時は陰暦正月廿七日。酉の刻（六時）近き頃。

築地の屋根にも、廊の屋根にも、庭にも、梅の枝にも、雪既に多く積り、今尚ちら／＼と降りてをり。庭上こゝ

上手と下手とに庭燎。二重にも燈籠一基。

こゝに二重下手、上げ疊よき處に、關の左衞門の尉政綱又同じ疊のやゝ上手には狩野の七郎光廣、共に烏帽子、直垂にてよろしく住ひ、又廣緣のやゝ上手には武田の五郎信光、鎧姿にて腰を掛け、下手中門際には隨兵二人、左右に分れて地上に胡座し、雜式四人は、おの／＼箒を持ちて、中門の內外より正門へかけての道筋（花道）の雪掃除をしてゐる。

武田　折も折、わるい物が降つてまゐつたと存じてをつたが、それでもどうやら晴りさうでござる。御覽なされ、いつの間にやら、もう二尺ほども積りました。

關　成程。しかし、雪は豐年の瑞兆ぢやと申すからは、これも御祝儀の一つでござらう。

狩野　時に、御拜賀の御劍のお役は、右京兆どのと承はつたに、いまだに御參入がござりませぬな。

關　されば。先刻深見なにがしが參つたのは、多分其儀についてゞござらう。

武　何にせい、思ひの外に、お手間が取れまするな。

關　何か、大江の入道どのが、折入つて言上しめさるることがあるげにござる。最前、例になく、あたふたと參入せられたには、何か仔細がなうては叶ひませぬ。

狩　さういへば、先年も、お上が中納言から左近衛の中將、つゞいて左近衛の大將、それから內大臣と間斷もなく御昇進遊ばされた折も、かやうな違例の御昇進は、故將軍の御遺志にも悖り、又御當家長久のお爲でもないと、御諫爭に及ばれたとか承はる。いよ／＼右大臣とならせられた今日の御拜賀についても、又何かむづかしいことを申し上げらるゝのかも知れませぬ。

關　當今、上の面を冒して、御異見申さるゝ御仁はといへば、右京兆か、あの入道どのか、結城朝光どの位ゐのものでござらう。其結城どのも、けふは如何にも力なげに、後れて參入せられま

した。

狩　共箸でござる。聊かの忌の爲に、御拜賀のお伴に洩れられ、定めし殘念でござらうよ。

ト このうち上手奥より若狹の兵衛の尉忠季、烏帽子、直垂にて出で來り、二重上手の上げ疊に住ふ。

關　まだ御出門には間がありますかな？

若　いや、もはや程もござるまい。

狩　なんでお手間が取れまするな？

若狹　されば でござる。只今、大江の入道どのが不思議の御諫言を申し上げられた爲でござる。

關　して、それはどんなことを？

若　先刻、御前へ罷り出でらるゝや否や、先づ頻りに落涙のせられて、さて申さるゝには、「覺阿成人の後は、いまだ曾て涙を流したる覺え御座なきに、只今尊顏を拜するとやがて、かやうに落涙仕りまするは、只事とは存ぜられませぬ。何卒こよひの御拜賀は、お止まりあらせられたし」と申され、それより上とも、仲章どのとも、押問答數回に及び、「せめても、お束帶の下に腹卷なりとも召させられて、御拜賀ありたし」と申されましたが、それとても、仲章どのが、「古例に背く」とて拒みめされ、入道は、如何にも、本意なげに、口をつぐまれました。

狩　さて〳〵、それは不思議なことでござる。如何さま、あの入道の泣かれたといふことは、ついぞまだ聞いたことがござらぬわい。

若　不思議はそればかりではござらぬ。（ト聲をひそめて）折も折、物も物、こよひのお儀式用の木のお太刀が、何としてか、お柄元からポキリと折れました。早速取換へて差上げられましたものゝ、忌はしい限りでござる。

ト 苦々しげにいふ。皆々眉をひそめる。

いや、まだござる。今朝、秦の公氏どのがお髮あげに參られたところ、上にはお鬢の毛を一筋

關 拔かせられ、「これは形見ぢや」と御意あつて、賜はりましたげな。これは公氏どの自身、眉をひそめての話でござる。

ト三人顏を見合せ

さて〱それは、重ね〱……

いまはしい儀でござるのう！

トこの時、中門内にて、「御出御でござりますぞ！」と呼ぶ。

これにて二重の面々、皆庭上におり立ち、よろしく膝まづきて、出御を俟つ。武田の五郎は、ずつと下手へ廻り、門際の隨兵を後ろに從へて、地上に膝まづきて控へる。雜色四人は、ずつと上手へ廻り、關、狩野、若狹の背後にうづくまる。

ト中門の奥より雜色二人松明を持ちて出る。その後より民部の大輔廣綱、長尾の新六定景、太夫の判官景廉、境の丘衛の尉常季の四人、烏帽子、直垂にて續いて出で、正門への道（花道附際）によろしく居並ぶ。次に又雜色二人松明を捧げて先に立ち、つゞいて老懸の冠りに闕腋の袍を縫し、胡籙を負うたる隨身二人、弓を携へて出で、其後より右大臣實朝（二十八歳）衣冠束帶にて、更に二人の隨身を從へ、伊賀の少將實雅（衣冠束帶）に裾を捧げしめつゝ出る。其後より文章の博士仲章（衣冠束帶）御劍を捧げ、右馬の權の頭賴茂（同上）伯耆の守師藏（同上）つゞき、又其後より大江の廣元入道覺阿、直垂の上へ袈裟を掛け、結城左衛門の尉朝光、烏帽子、直垂にてつゞく。更に其後より秋田城の介景盛、伊豆の左衛門賴定、共に鎧姿にて、隨兵二人を隨へて出で來る。

實朝は、中門を出ると、徐かに花道の方へ二三歩進んだが、ふと上手の紅梅の花に目を留めたる思入にて、立ちどまり、隨身の一人を顧みて、「あの梅を一枝手折らせよ」と聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。これにて隨身の一人上手へと進み、そこにゐる雜色に小聲にて命ずるとあり。雜色の一人立ち上りて、梅の小枝を折取りて渡す。隨身それを受取りて、立戻り、膝まづきて實朝に獻る。此以前、實朝の立ちどまると共に、陪從者はおの〱よろしく居並ぶことあり。廣元入道と朝光とは上手へ廻り關、狩野の膝まづきてゐる處よりは少し下手寄に膝まづきて、出門を見送る心にて、控へてゐる。

ト實朝は、梅の枝を受取りて、暫くそれを詠めてゐたが朝光の方を見て

實 朝光。朝光。

ト呼ぶ、これにて朝光膝を進める。

朝　はッ。

實　先刻もいうた通り、公家の古例がむづかしいので、伴れて行きたうても、伴れて行かれぬ。おことも殘念であらうが、予も何となう殘りをしいわい。何か其代りにと、最前から思うてゐたが、ふと今、此梅を見て一首浮んだ。これをおことに取らすぞ。

朝　はゝア。ありがたく存じ奉りまする。

ト雜色の方を顧みて

たそござる？　お硯箱を。

トいふをとゞめて

實　いや〳〵。筆には及ばぬ。これを。

ト梅の枝を渡す。朝光受け戴きて

朝　はッ。

實　(中音に)いでゝいなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

朝　(同じく中音に)いでゝいなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

ト繰返し了りて、覺えず傍らの廣元入道と顔を見合せて眉をひそめたが、やがて

かたじけなく頂戴仕りまする。

ト平伏する。これにて實朝は、一寸左右へ思入あつて、しづ〳〵と正門(花道)の方へと進む。やはり、以前の順序通りに、眞先に雜色二人、松明を持ちて進み、其次に民部の大輔、長尾の新六、太夫の判官、境の兵衛の尉四人、つゞいて又雜色二人、松明を捧げ、隨身二人、其次に實朝及び隨身、實雅、仲章、其他の衣冠束帶連、其次に鎧姿の者全部——此中に武田の五郎も加はる、——隨兵四人、雜色四人——其の中二人は松明を持つ、——其後につゞきて、顧、狩野、若狹の三人、廣元入道と朝光とに會釋して、附いて入る。

廣元入道と朝光とだけ殘る。

と入道は、徐かに立ち上り、やがて朝光に目禮して、すぐに正門(花道)の方へ行きかける。朝光も同時に立ち上りて

朝　あいや、暫く。……聊か御意得たいとがござる

覺 なに、われらに？

朝 いかにも、（ト四下を見て）なにとぞ暫時。……あれへ

ト二重へこなし。これにて二人とも二重へ上り、朝光は入道を上手へ請ずる。

入道には、只今のお歌を、何とお聴取りなされましたぞ？

覺 （やゝ間を置いて、しづかに）禁忌のお歌とこそ承はりました。

ト憮然としてゐる。

朝 （思入あって）先刻承はつた公氏へのお形見といひそれがしへの只今のお歌といひ、頻りに胸騒ぎがせられまする。それにつき、折入つて承はりたい儀がござりまするが、何と、お洩し下されませうか？

覺 何事かは存ぜぬが、御遠慮なう御申し下され。

朝 餘の儀でもござらぬ。最前、上へ御諫言の折、頻りに御落涙なされたには、何か深い仔細のあることゝ存ぜられる。正八幡、決して他言は仕らぬ。其の仔細、ひそかにお打明け下さるまいか？

覺 あゝ、其儀でござるか？ いやあれは（ト一寸間お置いて）先刻御前にて申した通り、只何となう裏悲しう覺え申したまでの事で、これと申す何等仔細あつてゞはござらぬ。さもなくば、強ひてもお抑留申すべきでござつたが、畢竟は老の思ひ過し、取越苦勞と愧ぢ入り、もだしましてござる。

朝 抑返してお訊ね申すも異なものでござるが、近頃何か（ト思入あって）お聞込の事はござらぬかな？ ほのかに承はる所によれば、二月ばかり前の或夜半、御所内に女姿の怪しき者忍び入り、御寢所間近を徘徊したるを、宿直の者見いだし引捕へんとせし處、飛鳥の如くに逃げ去つたとやら承はりましたが、右は眞實でござりませう

覺　かな? 右につき、何かお思ひ當りの儀はござりませぬかな?

覺　いや、只今承はるのがはじめて。一向に心當(かう)りとてもござらぬが‥‥〔ト思入あつて〕あゝ、それにつけても、こよひの御拜賀、どうか何事もなう、早う相濟めばよいが、心懸りの事でござる。

トこれにて朝光は手持無沙汰の體(てい)。暫くは、双方共に無言。此時上手奥より猿王出で來り

淡　左衞門の尉さま。御臺所のお召にござりまする。

朝　心得申した。

ト覺阿に向ひて

お召でござれば、御免(ごめん)下され。

ト會釋し、猿王に案内せられて、上手へ入る。覺阿一人殘りて、よろしく思入、やゝあつて徐かに席を立たうとする。此時、朝光と入りちがへに、老女日の岡いで來る。

日岡　入道さま、憚りながら、暫時おとゞまり下されませ。

覺　おゝ、お局でござつたか? 何か御用でござるか?

トいひながら、又住ふ。日の岡は下手に住ふ。

日　承はりたい儀がござりまする。〔ト一寸あたりへこなしあつて〕おめでたいお出(で)ましの折も折、かさねがさね忌はしい事共がござりましたゆゑ、御臺所さまには、いといたう御心勞遊ばされてゞござります。結城どのを召させられたも、其儀をお問ひ合せの爲でござりませう。附きまして、私が、折入つて、あなた様に、承はりたいことがござりますが、お聽入れ下されませうか?

覺　と申さるゝは?

日　外ではござりませぬ。最前のお落涙の、御本心が承はりたうござりまする。

覺　〔一寸(ちよつと)間を置いて〕折角のお訊ねなれども、先刻申し

たことの外には‥‥

ト いひさして、默つてゐる。

日　すりや、御仔細とては、あらせられませぬとな？

覺　全く不覺の落涙でござつたのぢや。不思議なこともあるものでござる。

ト 不審げの思入。局は附穗なげに暫く默つてゐたが、ふと何か思ひ出したる思入にて

日　附かぬことを伺ひますが、最近右京兆の御名代として參入せられました深見三郎次郎とか申す仁は、もとは故二品禪室さまのお傍仕へであつたとやら承はりましたが、御存じでございますか？

覺　たしかそのやうにも承はりをる。

日　その深見と申す仁が、頻つて公曉禪師さまに御昵近申すやうに承はり及びましたが、それについて、何事か、お思ひ當りの事などはございませぬか？

覺　成程、さやうな噂も、ほのかに承はりをつたが別にこれぞといふ‥‥（トいひしぶつて）何故それをお訊ねでござるな？

日　なにゆゑと申すこともございませねど‥‥

ト こんどは局の方が答を言ひしぶつてゐる。此時、正門（揚幕）の方より廣元入道の若黨一人急ぎ足にて出で來り、すぐ中門廊の前へ來て、膝まづき

若黨　はツ、申し上げます。お吩咐に隨ひまして‥‥

ト いひかけるのを入道かぶせて

覺　いや、只今退出いたさうと存じてをつたところぢや。何か御用か？

若　いえ、御用ではございませぬが、右京兆さまには、神宮寺前にて上様をお迎へなされましてござりますが、又忽ちお急病とござつて、やはり御劍のお役は、文章の博士さまへお讓りなされましてござりまする。それより上樣は、隨兵衆をば

覺　悉く御門外にお殘し遊ばされて、只今既に御參拜中にござります。

ト これにて覺阿も、局も、共にぎつくり胸にこたへたことがあるらしかつたが、覺阿はやがて氣を變へて、さりげなく

では、もはや程もなく、御下向遊ばされるであらう。せめて途中までお出迎へ。

と獨語のやうに言ひて、局を見返り

御免下され。

ト 靜かに言つて、席を立つ。局は無言にて會釋する。二人おもひ〳〵の思入よろしく。

第二場

備中の阿闍梨の坊

正面の中央、いつもより前へ寄せて、少し斜に、阿闍梨の坊の一室、(間口三間・奥行二間の常足の二重)。一間毎に柱を立て、軒先には釣雪洞、すべて廊下へは折廻して欄干式の板縁。其前面よき處に沓脱石。上手の側面一間だけは襖戸——但し閉ぢてあり——殘り一間は障子。内部は總板敷、其一部に上げ疊。奥に襖。下手の側面は、表門よりほゞ眞正面に當つてゐる心にて、其中央一間は妻戸の前に沓脱石。妻戸の奥、下手へかけて、鍵の手に折れて板縁附の別室——まゐら戸閉切りあり——其下手の行き當りにも妻戸。

ずつと上手の前(舞臺端)には太き立木數株、同じく其奥は庭つゞきの竹籔、家屋に接近した部分は、低き生垣に柴折戸。其奥は小山の裾、杉の立木の梢など間近く見ゆる。ずつと下手(花道附際近く)には、藁屋根の附きたる一間の表門、二枚戸の竹編戸——開け放しあり——左右は建仁寺まがひの竹垣。垣の内、すぐ門の脇に山椿一二輪紅き花を雪間に見せ、併し庇にも、門の屋根にも、竹垣にも、木の枝にも、地上にも雪深く積りたる體。前の場と同日、亥の刻(午前八時)頃。二重よき處に燈籠一基。

こゝに、二重上手上げ疊の上に、備中の阿闍梨勝圓、下手板敷に彌源太兵衛すまひ、談話なかばの體。

彌　いや〳〵、その御懸念には及びますまい。御本

坊へ移らせられましてから、もう二年にもなりまするが、只の一度も荒々しいお振舞などをなされたことはござりませぬ。夜は、大抵夜半近くまでも、源家永代の爲の御祈念とござりまして、お人拂ひにて、御持佛に籠らせられまする。このよひも初夜頃からお籠りでござりました。

阿　其夜毎の御祈念といふことが、われら聊か心懸りに存じをることでござる。これは、極密の事ながら、外ならぬ其許ゆゑ、念の爲に申しておく。

ト　あたりへこなしあつて、小聲にて

二月ほど前の、星月夜の丑三つ頃、さる人、急用あつて、御本坊の裏手にさしかゝつたる處、忽ち向うより、何やら薄黑いものゝ、ふら／＼と進み來るのが見えたので、盜賊などにもやと大いに怖れ、木蔭にちゞこまり、窺ひをると、件の物は近づく。見れば、被衣をかぶり、正しく女。眞夜中に不思議と見るうち、ひらり生垣を躍り越えて、坊の境内に消え失せたとやら。それは丁度、彼の御所内へ怪しい女姿の者が忍び入つたといふ噂のあつた同じ夜の事。萬々あるまじい儀とは存じながら、二ヶ年以前のお振舞を存じをるだけに、ともすれば、取越苦勞がせらるゝでござる。

彌　思ひがけぬお話でござりまする。成程、さうおつしやりますれば、よもやとは存じますものゝ、少々心懸りは、あの深見三郎次郎どのゝ、絶えず參入せらるゝことでござります。あまつさへ參らるゝたびに、何事やら、お人拂ひでの御密談。御存じの如く、あの仁は、御先代二品さまのお傍仕へであらつしやつたゞけに、どうやら氣がゝりでござりまする。

阿　われらも、あの仁をば、かね／＼心がゝりに存じてをつた。……あゝ、折あしい此夜陰雪中の

御拜賀。どうか何事もなければよいが。

ト此途端、向う(揚幕)の方にて物音、けたゝましい大勢の人聲。二人は驚く思入

や、えらう物騒がしいやうぢや！ 何事か起つたのではござるまいかな？

彌 なるほど。(ト聞耳を立てゝ)お宮の方角でございります。見てまゐりませうか？

阿 ちよと往つて、見て來て下され。

彌 心得ました。

ト彌源太兵衛、身支度して、立ち出でんとする。此時向うより、序幕に出た所化、淨念、專念、一さんに走つて出て來り、すぐに門から庭へ駈け入りながら

淨念 大變でござります！ 大變でござります！

專念 將軍家が、不意におかくれなされました！

阿、彌 えッ！

淨 何者かに殺されておしまひなされました！

阿 なに、將軍家が?!

淨 御參拜をおすましなされまして、丁度石段の下までお下向遊ばされますと、不意に大銀杏の陰から、眞白な薄衣をかついだ女姿の者とやらが飛び出して來て、氷のやうな刀で、たつた一打にお首を切落いて、すぐさま何處へか逃げ失せましたげな。

阿 はれやれ！ 取越苦勞が實となつたか！

專 神宮寺の界隈は、人やら、馬やらが、あつちこつちと馳せちがうて、まるで軍場のやうでござります。

彌 あの大勢の隨身がたや隨兵たちも、何のお役に立たなんだか！

淨 隨兵たちは、みんな御門外に控へさせられてをりましたし、隨身たちも、其折には、お傍にはたつた二人、それもうろたへて何の役にも立たず、御劍役の仲章さまも、御一しよに切殺されておしまひなされたとか申します。

阿　御劍役は、右京兆どのゝお役ぢやと聞いたに。

淨　北條さまは、俄の御不例とかで、途中から仲章さまが代つてお勤めなされたとやら聞きました。

阿　なに、俄の御不例？……（ト不審げの思入にて、言ひかけたが）何にせい、かうしてをる場合でない。ともかくも御所へ參つて、とくと御模樣を承はらう。……淨念は支度をして伴をせい。

トいひつゝ奥へ入る。淨念もついて入る。

彌　あゝ、どうかさうでなければよいが！

と心配の思入。此途端、向うより、公曉、白の素絹の下に腹巻をして太刀を佩び、すべて甲斐々々しく打扮ち、袈裟を以て頭部を包み、尚其上に白き被衣をかぶり、右手には血刀を、左手には血の滴る實朝の首をひつさげ、一さんに驅け出で來り、すぐに門内に走り入りて板縁の上へドッカと掛ける。これにて彌源太兵衛と淨念とは大いに驚くこと。

彌　やゝ！　禪師さまには！

トあとを言ひつぎかねてゐる。

公曉　わけは後で言ふ。おそろしく腹が減つた。（淨念に）早う飯を持つて來い。早う！……えゝ、早う持つて來いといふに！

とこれにて淨念あわてゝ立ち上り、下手奥の妻戸口へ入る。

彌　では、いよ／＼あなた様が、將軍家をば！

公　（得意げに）喜んでくれ。多年の宿望をやつと遂げたわ。けふからは、天下はおれのもんぢや。叔父貴ばかりでなく、怨み重なるアノ義時をも、返す刀で、やッつけてくれた。喜んでくれ。

孫　とゝとんでもないことをなされましたなア！

トばかり後をいひかねて泣く。

公　阿呆！　何を泣く？　何をうろたへる？　萬事は深見が心得てをるによつて、氣遣ふことはない。今に爰へ三浦義村の迎ひの者が來る筈ぢや。併し、それまでは、油斷がならん。前後を

見張つてゐてくれ。門を閉めとけ。はて、今に日頃の忠勤に報うてやるわい。

ト此内、專念、飯櫃を持ち來り、椀に强飯を盛らうとしたが、杓子がないので更に立つて奥へ行かうとする。公曉待ちかねたる思入にて、土足のまゝ板敷へ上りて片膝つき、專念を押しのけて、櫃を引寄せ、手をさし入れて强飯を摑みつゝ食ふ。

ト彌源太兵衞は泣きながら

彌　とんでもないことをなされました！ あの深見なぞが、どうしておたよりになりませうぞ？ あの男は北條どのゝ無二の御家來。決してお心をお許し遊ばすなと、くれぐ〳〵も申し上げておいたものを！ それに、只今承はれば、右京兆どのをも返す刀でお討取とおつしやりましたが、先刻同宿たちの知らせによれば、北條どのには、途中から俄の退出、御劍の役は、急に仲章どのと振變つたとやら申しますぞよ。

公　なに、仲章と？‥‥さういへばアノ後ろ姿が‥

ト何か思ひ當ることがあるらしく、さては人違ひであつたかと、殘念がる思入。

此時、備中の阿闍梨、緋の衣に金襴の袈裟を懸けて、淨念をつれ、しづかに正面の襖を開きて出で來り、よろしく思入あつて、公曉の下手にすまひ

阿　過ぎ去つたる事は、今更申せばとて、せんない儀でござる。所詮は、何事も御宿業でござる。とは申せ、只今あれにて承はれば、程なくこれへ三浦の義村どのゝお迎ひが參る、云々との仰せ。なりや、こんどのお企は、かねて義村どのと、お打合せあつての儀でござるか？ 彼の人は、しかと御同心申してござるか？

公　（尙强飯を食ひながら）いや、義村とは、まだ曾て直接には打合せたことはないが、かねぐ〳〵駒若の緣故もあるによつて、深見三郎次郎が懇ろな肝煎。義村がおれに心を傾けをることは明白ぢや。かやうに本望を遂げた上は、もはや源家の正嫡たるべき者は、おれの外にあらう筈はないによ

つて、必ず迎へに來るに相違ない。……(專念に)白湯を持て。

ト專念急ぎ下手の奥へ入る。

阿 いや、それならば、決して御安心は成りませぬぞ。底意の圖りがたいアノ深見三郎次郎、御父上、二品さまの御舊臣といふを口實に、無二のお身方らしうもてなし申せど、もと〳〵右京兆の腹心、うかと御信用あらば危うござる。但し三浦の義村どのは、御幼時のお傅でもあり、駒若どのゝ父御なれば——深見が申すやうでないまでも——よもお爲あしうは計らひますまい。併し、かう申すうちも心元ない。ま、ともかくも此山越えに、彼の人の邸までお越しなされ。さなきときは、お身の上が危うござる。さゝ、お支度めされ、お支度めされ。

ト此言葉のまだ終らぬうちに、向うより駒若、髮を亂し裳らか、怪我をした體にて、一さんに駈け來り、すぐ門内に入りて膝まづき

駒 只今、御本坊へ、先月深見の代人として參候いたしました佐越の次郎と申す者、手の者大勢ひきつれ、物の具に身を固め、手々に得物をたづさへて亂入いたしましたゆゑ、何事かと訊ねますると、眞直にお行くへをば白狀せよと申し、無二無三に奥へ踏込み、支へようとする私共をばさん〳〵に打擲いたし、天井をも床板をも引破り、打毀し、御緣の下までも探しまはり、狼藉を極めをりまする。程なくこちらへも參るかも知れませぬ。早う父が方へお逃げなされませ。

公 なに、アノ佐越の次郎が?!

ト案外だといふ思入。

彌 さてこそ、阿闍梨さまのお先見にちがひませぬ。こゝにござりましてはお心元なうござりまする。ともかくも裏山越しに、三浦どのゝお邸

阿　まで、さ、早うお落ちなされませ。駒若どのを先達にして（ト浮と專とに向ひ）おのしら二人も、途中のお警護をせい。それ、早うお支度めされ。

ト これに公曉思入あつて

公　あれほど誓言をした三郎次郎が、今更變がへをしようとも思はれんが、只今の話のやうでは安心は出來ん。ともかくも、義村方まで立退くことにしよう。……あゝ、それにつけても、義時めを討洩いたのが無念ぢやわい。……阿闍梨、おさらばござる。

トいひもあへず、實朝の首をひつさげて、忽ち地上におり立ち、一寸駒若らへこなしあつて、つか〳〵と裏手生垣の方へ進む。駒若及び專、浮つゞく。やがて柴折戸を押開き、三人は代る〳〵伏してゐる雪折竹を押分け〳〵忽ち見えずなる。これを見送つて彌源太は、やつと胸を撫でおろし、やゝ安心の思入。阿闍梨も歎息して

阿　あゝあ、つい近ごろ、天台座主が、今の世の有様をば批判せられて、「何を思ひ企つるにも、道理といふものを、つや〳〵知らぬげの世の中」と申されたとやら傳へ聞いたが、あゝあ、さても〳〵淺ましい人心ではあるわい！……ちつとでも遠くお逃し申したい。彌源太どの、それ、表の門の戸を。

トこれにて彌源太兵衞急ぎ門口へと進みて、扉を閉めようとする。此の途端、向うより深見三郎次郎、鎧姿、長卷を携へ、同じく鎧姿の大場の權平太と共に、松明持つたる兵二人を先導させ、大勢の兵をひき隨へて、早足に出で來り、今丁度門を閉めようとする處へ駈け附け、彌源太兵衞を突きのけて、會釋もなく門内へ込み入る。

彌　あ、これ、もうし！　理不盡な！　こりや何となされまする？……や！　こなたは深見どのではござりませぬか？

ト止めようとするを深見長卷の柄にて押しのけながら

深　公曉禪師はいづこに御座ある？……えゝ、のかつせい。妨げめさるな。（ト佛中の阿闍梨に向ひ）速か

阿　に禪師にお會はせ下され。いや、禪師には、爰許にはお見えさせられぬ。おそらく雪の下の御本坊に‥‥

トいはせも果てず

源　おかくしあるは御無用でござる。餘人の手に掛け申すまいため、それがし急ぎ罷り向うてござる。生中にお隱しあつてはお爲にならぬ。‥‥おゝ。あちらこちらに、血汐の滴り！　裏手へかけて夥しい足跡！　察するところ、山越しに三浦どの方へ落ち行かれたかも知れませぬぞ。大場との、こゝは身共が引受け申す。其許は裏手へお廻りなされ。

大場　心得ました。

ト大場は兵の半以上をつれて、すぐに裏手へ馳け向はうとする。彌源太兵衞あわてゝ我知らず立塞がらうとするを、大場主從は突きのけ、突き倒して、忽ち裏手籔蔭へ出てゝ姿を消す。彌源太兵衞は、こけつ轉びつ其あとを追うて入る。

此内に深見は、殘兵三人ほどをひきゐて二重へあがらうとする。阿闍梨之を止めて

阿　あいや、公曉禪師に、如何樣のお科でござらうとも、當社別當の後見たるわれらが坊へ、土足のまゝにて亂入せらるゝは、無禮でござらう。

深　はてさて、恐れ多くも將軍家を弑し奉つたる大逆罪の公曉禪師、生中にお庇ひあるに於ては、同罪はまぬかれませぬぞ。それがしはお爲を存じて罷り向うたのでござる。何事もそれがしにお任せあれ。そこをお退きなされ。はて、お退きなされといふに。

ト深見は手荒く阿闍梨を押しのけて、兵士と共に奥に踏入る。

此途端、裏手籔蔭より以前の淨念、額際に創を負ひ、衣も處々は破られ、息を切つて馳け出で來り、椽端近く走り入り

淨　阿闍梨さま！　阿闍梨さま！　無念でござります！　くちをしうござりまする！

トそのまゝそこに突伏して泣く。

阿　えッ！　今の追手の爲に、捕はれとならせられたか？

靜　そこどころぢやござりませぬ。お社の裏山つゞきを八九町ほども行かせられますると、ぱつたり出逢ひました三浦どのゝ郎黨衆、長尾の新六雜賀の次郎ら、二十餘人。さてはお迎ひか、やれ、先づよかつたと思ひの外、矢庭に禪師さまをおつ取り圍んで、無二無三に切つてかゝりました。禪師さまは、必死とお働きでござりましたし、私共も一生懸命に支へましたが、無念やとう／＼禪師さまには、雜賀と長尾とに組伏せられなされて、御落命にござりまする！

ト泣く。

阿　なに、御落命！　はゝはア！

ト歎き歎く。此内、彌源太兵衞も、下手より、力なげに泣く／＼、よろめき／＼戻り來り、沓脱のかなたに跪まづきて泣いてゐる。

此以前、深見三郎太郎、兵と共に下手奥の妻戸より出で板縁を傳うて戻り來り、此知らせを聞きつゝ、しづかに阿闍梨の上手に廻り

深　あゝ、せめてもお命ほどは、お助け申したいと存じてをつたに、はてさて、殘念なことをいたした！……阿闍梨はじめ人々のお歎きなさるゝも、ことわりではござるが、かやうに成り行くも、畢竟は、前將軍家の御時以來、多年わだかまつたる御宿業の致す所で、餘儀もないことでござる。

阿　（頻りに歎息して、獨語のやうに）あゝ、何事も、今の世は、おのが心の牽く方へおしあてゝの判斷。まことに、慈圓大僧正の申された通り、今は道理といふものゝ無い世の中か！　あゝ、是非もないことぢや！

ト歎息の思入。

[illegible] (泣きながら)将軍家にお世継のお子さまのないばかりか、前の二品さまのお血統まで、此やうに絶え果てゝしまうた上は、(ト歎息して)源氏のお行末は、どうなることやら！ お三代引續いて繁昌した鎌倉も、これからは、どうなることやら！

深 あいや、たとひ源氏の御血統は絶ゆるとも、北條どの御座ある限りは、鎌倉の幕府は大磐石の礎石同然。心安うお思ひなされ。

ト此時、裏手より、大場の權平太、以前の兵と共に、どや〱戻り來り

大 深見どの、公曉禪師は……

トいひかけるをおさへて

深 委細は既に承はつた。此上は早速引上げ、此事を鎌倉へ[illegible]いたさう。…先づお越しなさ[illegible]

ト大場へこなし。これにて權平太は會釋して、兵と共に下手へと退む。深見は人々へ一寸こなしあつて、しづかに兵と共に地上へおり立つ。阿闍梨は二重に、御源太兵衛と所化とは、尚地上(平舞臺)に居附のまゝにて愁のこなし。

* * * * * *

幕

(禁無斷興行)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅[illegible]貳錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　に送金の場合は[illegible]定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東[illegible]町局と指定あれば途中盜取まるる虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料）
一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年五月廿九日印刷納本
大正六年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木[illegible]三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話四下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可　中央公論六月號（第三十二年第六號）